

博士論文

論文題目 ドイツ語反使役動詞の語彙意味論的研究
(A lexical semantic analysis of anticausative verbs in German)

氏 名 黒子 葉子

目次

第 1 章	序論	1
	1.1. 本研究の対象と目的	1
	1.2. 反使役の定義	5
	1.3. 論文の構成	9
第 2 章	ドイツ語反使役動詞の形態的特徴とその分布	10
	2.1. 完了の助動詞選択	10
	2.2. RA と IA のレキシコンにおける分布の傾向	13
	2.3. ドイツ語反使役動詞の形態的特徴	15
	2.4. RIA 動詞	18
	2.5. 結語	22
第 3 章	先行研究における反使役動詞の理論的考察	23
	3.1. 使役交替における派生関係の議論	23
	3.1.1. 派生的アプローチ I—使役化説	24
	3.1.2. 派生的アプローチ II—反使役化説	24
	3.1.2.1. Levin and Rappaport Hovav (1995) の分析	24
	3.1.2.2. Reinhart (2002) の分析	26
	3.2. Alexiadou et al. (2006) の非派生的アプローチ	28
	3.2.1. 派生的アプローチへの反論	28
	3.2.1.1. 派生形態	28
	3.2.1.2. 動詞制限と選択制限	29
	3.2.2. 非派生的アプローチ	32
	3.2.2.1. 前置詞句による修飾	32
	3.2.2.2. 動詞制限と選択制限の言語間の差異	38
	3.3. Alexiadou et al. (2006) の問題点	45
	3.3.1. 動詞の Root	46
	3.3.2. 前置詞句の認可と内的使役の非対格動詞	48
	3.4. 結語	51

第 4 章	ドイツ語反使役動詞への意味的アプローチ	53
4.1.	先行研究における IA と RA の意味的説明	53
4.1.1.	動詞の語彙的アスペクト	53
4.1.2.	自由与格の解釈	63
4.2.	使役主の存在	70
4.2.1.	前置詞句・副詞句の認可	70
4.2.2.	日本語の被害使役	74
4.2.3.	自然に展開する状態変化	80
4.3.	結語	89
第 5 章	ドイツ語反使役動詞の意味的相違に関する代案	90
5.1.	RA と IA の具体例	90
5.2.	対象物の本質的变化	94
5.3.	ドイツ語反使役動詞の再検討	103
5.3.1.	RA と IA の比較	104
5.3.1.1.	破壊の動詞	104
5.3.1.2.	焼失、炭化の動詞	106
5.3.1.3.	液体に関する動詞	108
5.3.1.4.	位置変化の動詞	110
5.3.1.5.	形状変化の動詞	112
5.3.1.6.	問題となる動詞	113
5.3.2.	形容詞・名詞派生動詞と <i>ab</i> -動詞	118
5.3.2.1.	形容詞派生動詞	118
5.3.2.2.	名詞派生動詞	121
5.3.2.3.	接頭辞 <i>ab</i> -を伴う動詞	124
5.3.3.	自然条件を原因とする反使役動詞	126
5.3.4.	RIA 動詞	131
5.3.5.	自由与格の解釈	137
5.4.	結語	143

第 6 章	ドイツ語反使役動詞の意味表示.....	144
6.1.	再帰動詞の分析	144
6.1.1.	Kaufmann (2003)一再帰における制御関係の逸脱	144
6.1.1.1.	他動詞と交替する再帰動詞の 4 つの解釈	144
6.1.1.2.	方法論的前提	146
6.1.1.3.	ドイツ語の再帰動詞の分析	148
6.1.1.4.	反使役の解釈における再帰代名詞の機能	153
6.1.2.	Koontz-Garboden (2009) の再帰化分析	154
6.1.3.	<i>sich</i> による再帰化	160
6.1.4.	使役主の不完全指定と対象物の同一性	164
6.2.	日本語の反使役動詞との比較	168
6.2.1.	日本語の使役交替の類型と反使役化	168
6.2.2.	先行研究における日本語反使役動詞の考察	171
6.2.3.	日本語とドイツ語の反使役動詞	175
6.2.4.	反使役の意味構造と完了形のアスペクト解釈	180
6.3.	結語	188
第 7 章	結論	189
7.1.	反使役研究の意義	189
7.2.	各章のまとめ	190
7.3.	今後の課題と展望	191
参考文献	194
巻末資料	ドイツ語反使役動詞リスト	200
	1. IA.....	200
	2. RA.....	208

Abbreviations

NOM	nominative	CAUS	causative
GEN	genitive	ANTIC	anticausative
DAT	dative	PASS	passive
ACC	accusative	ACT	active
LOC	locative	NACT	non-active
REFL	reflexive	PRES	present tense
PART	particle	PAST	past tense
CONJ	conjunctive mood		

第1章 序論

1.1. 本研究の対象と目的

反使役 (anticausative) は、近年の意味論研究、統語論研究、類型論研究において注目を浴びているトピックである。反使役とは、文字通り、使役 (causative) に反するもの、あるいは使役に対置するものという意味である。より具体的には、「使役的に引き起こされたある物体の状態変化という事象から、使役主の存在を隠して、その状態変化がおのずから生じたように表す」と定義される。例えば、「花瓶を割る」という使役事象が問題となる場合、状態変化を意図的に引き起こす人間や、状態変化の原因となる自然現象（例えば突風や地震）など、なんらかの使役主 (causer) が直接的に介入すると解釈されるが、それに対して、「花瓶が割れる」という反使役事象が問題となる場合には、そのような使役主が明示されない。このように、反使役事象は、使役事象に対して、コインの裏表のような関係にある。実際の言語表現を観察すると、例えば英語では、(1a) のような使役事象も、(1b) のような反使役事象も、同じ *break* という動詞によって表すことができ、状態変化の対象物 (theme) は、項構造上、使役事象においては目的語になり、反使役事象においては主語になる。このような使役と反使役にまつわる項の交替を使役交替 (causative alternation) と呼ぶ。(Smith 1970, Levin and Rappaport Hovav 1995)

- | | |
|-----------------------------|----------------------|
| (1) a. John broke the vase. | <i>causative</i> |
| b. The vase broke. | <i>anticausative</i> |

使役交替に関しては、以下の2点を中心に議論がなされてきた。1つ目は、交替する使役動詞と反使役動詞にどのような意味構造を設定するかであり、2つ目は、それらの中の派生的関係を認めるかどうかである。派生の操作を仮定する場合には、使役動詞と反使役動詞のどちらを派生形とみなすのか、そして、文法のどのレベルで派生が起こるのかという問いが、これまで多くの研究で追究されてきた。

さらに近年、より包括的な理論的説明を求めて、英語中心の言語研究のみならず、諸言語を比較分析する類型論的研究の分野においても、反使役がしばしば取り上げられている。その基盤となっているのは Haspelmath (1993) の論考である。彼は、上記の交替に現れる形態的特徴に注目し、次のような

類型論的分類を行っている。彼の説明によれば、単一の動詞が使役にも反使役にも用いられる英語や現代ギリシア語の (2) のような例以外にも、(3) のように、反使役(これは動詞の範疇としてはほぼ自動詞に当たる)が基本で、使役(すなわち他動詞)が何らかの形態素を伴って派生される例や、(4) のように、使役が基本となって、反使役が形態的な派生を受ける例¹も存在する。さらには、(5) のように、はっきりとした派生の方向を形態的に定義するのは困難であり、ひとつの語幹から使役と反使役が同時に派生されると考えられる例もある。(1.2 参照)

(2) a. English:	<i>break</i>	
b. Modern Greek:	<i>svíno</i>	1. 'go out' 2. 'extinguish'
(3) a. Georgian:	<i>duγ-s</i>	'cook' (<i>intr.</i>)
	<i>a-duγ-ebs</i>	'cook' (<i>tr.</i>)
b. French:	<i>fonder</i>	'melt' (<i>intr.</i>)
	<i>faire fondre</i>	'melt' (<i>tr.</i>)
c. Arabic:	<i>darasa</i>	'learn'
	<i>darrasa</i>	'teach'
(4) a. Russian:	<i>katat' -sja</i>	'roll' (<i>intr.</i>)
	<i>katat'</i>	'roll' (<i>tr.</i>)
b. Lezgian:	<i>xkaž xun</i>	'rise'
	<i>xkažun</i>	'raise'
c. Hindi-Urdu:	<i>khul-naa</i>	'open' (<i>intr.</i>)
	<i>khol-naa</i>	'open' (<i>tr.</i>)
(5) a. Japanese:	<i>atum-ar-u</i>	'gather' (<i>intr.</i>)
	<i>atum-e-ru</i>	'gather' (<i>tr.</i>)
b. Hindi-Urdu:	<i>šuruu honaa</i>	'begin' (<i>intr.</i>)
	<i>šuruu karnaa</i>	'begin' (<i>tr.</i>)
c. Lithuanian:	<i>lūžti</i>	'break' (<i>intr.</i>)
	<i>laužti</i>	'break' (<i>tr.</i>)

Haspelmath (1993: 91-92)

¹ ただし、(3c) や (4c) のように、語幹修飾 (stem modification) によって使役・反使役を派生する場合、基本となる語幹と修飾された語幹の区別が難しいため、必ずしも派生の方向が明確に区別できない。(Haspelmath 1993: 97)

このように、反使役という意味的カテゴリーは、言語によってその形態的実現が大きく異なっている。しかも、ひとつの言語の内部でも、反使役の形態素にさまざまな種類のものが確認されることがある。例えば日本語では、(5a) のような *-ar* 接尾辞による反使役化以外にも、(6) のような *-e* 接尾辞による反使役化が存在する (6.2 参照)。このような複雑な形態的特性が、反使役の統一した理論的説明を一層困難にしているように思われる。

- (6) Japanese: *war-u* ‘break’ (*tr.*)
 war-e-ru ‘break’ (*intr.*)

本論文で分析の対象とするドイツ語でも、反使役を表す動詞に2種類のタイプがあることが、これまでの研究を通してよく知られている (cf. Wunderlich 1993, Bierwisch 1996, 大矢 1997, 2008, Steinbach 2002, Kaufmann 2004, Schäfer 2008)。

まず1つ目は、再帰動詞である。例えば、*öffnen* ‘open’ という動詞は、(7a) のように単独で使われる場合は使役的状态変化を表すが、(7b) のように再帰代名詞 *sich* を伴うと、反使役的状态変化を表す。

- (7) a. Hans öffnete die Tür. *causative*
 Hans opened the door
 ‘Hans opened the door.’
 b. Die Tür öffnete sich. *reflexive anticausative = RA*
 the door opened REFL
 ‘The door opened.’

次に、2つ目の動詞グループとして、自動詞が挙げられる。例えば、*zerbrechen* ‘break’ という動詞は、(8b) のように、再帰代名詞のような特別な形態素を伴うことなく、反使役化することができる。

- (8) a. Hans zerbrach die Vase. *causative*
 Hans broke the vase
 ‘Hans broke the vase.’
 b. Die Vase zerbrach. *intransitive anticausative = IA*
 the vase broke
 ‘The vase broke.’

先行研究では、Schäfer (2008) が、この 2 種類の反使役動詞を取り上げ、(7b) のタイプを reflexively marked anticausative、(8b) のタイプを unmarked anticausative と呼んでいるが、この用語はいささか冗長であるように感じられるため、本論文では Schäfer の用語を使わず、単純に、(7b) のタイプを reflexive anticausative (RA) と呼び、(8b) のタイプを intransitive anticausative (IA) と呼ぶことにしたい。

ドイツ語の使役動詞が交替するとき、その反使役形は通常 RA か IA のいずれかの形態として実現される。つまり、上に挙げた *öffnen* ‘open’ という動詞の場合、反使役化が起こると再帰動詞が使われ、自動詞は使われない。² また、*zerbrechen* ‘break’ という動詞の場合も、反使役化されると自動詞が使われ、再帰動詞が使われることはない。このような事情を考慮に入れると、動詞の表す意味に従い、反使役化の表現としてどちらのオプションを選択するかが語彙ごとに指定されていると想定するのが自然であろう。それでは、その際に問題となる意味論的要因とは何であろうか。先行研究では、この点に関していくつかの提案がなされているが、未だに統一した見解は存在しない。そこで、本論文では、「対象物の本質的变化」という観点から、この 2 種類の反使役動詞を説明することを試みる (cf. Aoki 2005, 2007, 2010, 2011)。そして、この意味的特徴が現れる理由を、語彙意味論の枠組から考察する。

² 実際のところ、*öffnen* ‘open’ には自動詞形も存在する。例えば Duden Deutsches Universalwörterbuch には、再帰動詞の用例 *das Fenster öffnete sich durch den Luftzug* ‘the window opened through the breeze’ 以外にも、自動詞の用例として、*die Tür öffnet und schließt automatisch* ‘the door opens and closes automatically’ という文が記載されている。ただし、この例文から明らかであるように、再帰動詞ではなく自動詞の *öffnen* が典型的に使われるのは、自動ドアなど内部に動力を備えていると考えられるときである。つまり、この場合、対象物であるドアは外部からの働きかけを受けて状態変化を一方向的に被るのではなく、自らその変化を生み出していると捉えられるため、通常の反使役動詞とは意味的に大きく異なっている。また、2.1 で述べるように、反使役動詞としての自動詞は完了形を作るときに助動詞 *sein* ‘be’ を選択するという特徴を持つ。それに対し、上で挙げた自動詞の *öffnen* の例では、完了の助動詞として *sein* ではなく *haben* ‘have’ が選択される。(*die Tür hat automatisch geöffnet und geschlossen* ‘the door opened and closed automatically’) このような意味においても、自動詞の *öffnen* は反使役動詞の範疇から除外すべきであると思われる。

1.2. 反使役の定義

「反使役」という術語は、多くの研究においてさまざまに定義され使用されているため、この論考を始めるにあたり、まずはこの概念を詳細に検討したい。Haspelmath (1987) によれば、「反使役」の術語を最初に用いたのは、Nedjalkov & Sil'nickij (1969) である。彼らは、レニングラード学派の類型論研究の立場から使役交替の現象を形態的に分類しようと試みている。Haspelmath (1987: 8) の説明に基づき、以下に Nedjalkov & Sil'nickij (1969) と英語翻訳版の Nedjalkov & Silnitsky (1973) の「反使役」の定義に関する重要箇所を引用する。

§1. The subject of this paper is the *typology of the causative opposition* $V_i : V_j$, where V_i designates the constant sj (i.e., some state), and V_j designates csj (i.e., a state, but one which has already been caused). The verbs V_i are non-causatives, and the verbs V_j are their causatives. V_i and V_j are connected by a semantic derivation relation: V_j is “formed” from V_i by adding meaning c .

§2. V_i and V_j form various types of *formal oppositions*, of which the following are the most important.

§2.1. *Directed or derivational oppositions*. Here one of the members of the opposition is formally derived from the other, which is demonstrated by the fact that this member of the opposition has an additional derivational morpheme... From the point of view of the direction of the derivation, two subtypes can be discerned.

§2.1.1. The member of the opposition that is causative in meaning is formally marked by means of a *causative* morpheme, i.e., $V_i \rightarrow V_j \dots$

§2.1.2. The member of the opposition that is non-causative in meaning is formally marked by means of an *anticausative* morpheme, i.e., $V_i \leftarrow V_j \dots$

§10. The causative member of an opposition which is formally marked by means of a *causative affix* will be said to be either a *morphological* or a *lexical causative*.

The non-causative member of an opposition which is formally marked by means of an *anticausative* affix will be said to be an *anticausative*.

この記述から明らかであるように、Nedjalkov & Sil'nickij の「反使役」の定義は、意味論と形態論の両方に基づいている。彼らは、上に引用した§1 で $V_i : V_j$ という使役的対立関係を仮定し、 V_i を「非使役」(non-causative)、 V_j を「使役」(causative) と意味的に定義づけている。さらに§2 で、この使役的対立関係のうち派生形態素 (derivational morpheme) の付加されたものを

取り上げ、Vi から Vj への派生に現れる形態素を「使役形態素」(causative morpheme)、Vj から Vi への派生に現れる形態素を「反使役形態素」(anticausative morpheme) と呼んでいる。そして最後に§10で、使役形態素を伴った Vj を「使役」(causative) と呼び、反使役形態素を伴った Vi を「反使役」(anticausative) と呼んでいる。したがって、彼らの「反使役」の概念は、意味論的定義を前提としながらも、そのうちで明確な派生形態素が現れるものに範囲が限定されている。つまり、彼らの定義に依拠すれば、英語の自動詞の *break* や *open* は、意味的には「非使役」であるものの、特別な形態素が付加されていないため、「反使役」の範疇からは除外される。

1.1 で紹介した Haspelmath (1987, 1993) による使役交替の類型論的分類も、Nedjalkov & Sil'nickij (1969) と同様に、動詞接辞の形態を基準にしている。彼は、使役交替には形態的に3つの異なるパターンがあるとし、それらを「方向づけられていない交替」(non-directed alternation)、「使役的な交替」(causative alternation)、「反使役的な交替」(anticausative alternation) と名付けている。「方向づけられていない交替」とは、(9) の英語の *break* のように、単一の動詞が使役と反使役の用法を兼ねる例や、(10) の日本語の *atum-e-ru* / *atum-ar-u* のように、使役動詞と反使役動詞のどちらにも派生形態素が付加される例を指す。「使役的な交替」とは、(11) のフランス語の *faire fondre* のように、反使役動詞に使役形態素が付加され使役動詞が派生されるパターンである。反対に、「反使役的な交替」とは、(12) のロシア語の *katat' -sja* のように、使役動詞に反使役形態素が付加され反使役動詞が派生されるパターンである。

(9) English:	<i>break</i>	
(10) Japanese:	<i>atum-ar-u</i>	‘gather’ (intr.)
	<i>atum-e-ru</i>	‘gather’ (tr.)
(11) French:	<i>fonder</i>	‘melt’ (intr.)
	<i>faire fondre</i>	‘melt’ (tr.)
(12) Russian:	<i>katat' -sja</i>	‘roll’ (intr.)
	<i>katat'</i>	‘roll’ (tr.)

ここで、Haspelmath (1987, 1993) の「反使役」の術語も、厳密に形態論に基づく概念であると言えることができる。すなわち、彼が「反使役」と呼ぶのは、(12) のロシア語の *katat' -sja* のように、明確な反使役の派生形態素が現れるものに限定されている。そのような意味において、彼の「反使役」の定義は、上で見た Nedjalkov & Sil'nickij (1969) の定義に類似している。

このように「反使役」という概念は、本来的には形態論の立場から提出され使用されてきたものであるが、最近の使役交替研究においてこの術語が使われる場合には、純粹に形態を問題とするのではなく、むしろ意味に重きが置かれていることが多い。すなわち、「反使役」は形態論のカテゴリーではなく、意味論のカテゴリーであるとする立場である (Alexiadou & Anagnostopoulou 2004, Steinbach 2004, Alexiadou et al. 2006, Kalluli 2006, Schäfer 2008)。例えば、Schäfer (2008: 1) は次のような注釈を付けている。

Note that I use the term ‘anticausative’ in a different way than Haspelmath (1993). I call all types of intransitive change-of-state verbs that have a causative counterpart ‘anticausatives’, irrespectively of whether such an intransitive verb comes with or without special morphological marking.

つまり、Schäfer (2008) は、派生形態素が付加されているか否かに依らず、使役他動詞のペアを持つ状態変化自動詞のすべてのタイプ(ドイツ語の再帰動詞等も含む)を「反使役」と呼んでいる。本論文も、意味的カテゴリーとしての「反使役」を分析の対象とし、ドイツ語の RA と IA を同一の次元で比較することにしたい。

ところで、「反使役」と並んで先行研究で頻繁に使われている用語に、「起動」(inchoative)が挙げられる。先に示した使役交替(causative alternation)は、しばしば他動性交替(transitivity alternation)や、使役起動交替(causative inchoative alternation)とも呼ばれ、使役表現とペアになる(13a)のような例が起動を表すと説明されてきた。

(13) a. The window broke.

b. Mary broke the window.

例えば、Alexiadou and Anagnostopoulou (2004: 116) は、(13)の例に関して、次のように述べている。

As is well known, across languages several verbs, depending on their semantic type, enter in transitivity alternations (...). The intransitive / inchoative or anticausative counterpart of the alternation qualifies as an unaccusative predicate. (下線は筆者による)

ここで、*inchoative* が *anticausative* と言い換えられていることからわかるように、「起動」と「反使役」は、使役交替を論じる際に、ほぼ同義として扱われてきた。しかも、Haspelmath (1987: 10) が示唆しているように、現代言語学を牽引するアメリカにおいては、「反使役」よりもむしろ「起動」のほうが好まれて使われてきたように思われる。

それにもかかわらず本論文で「起動」ではなく「反使役」を使うのは、「起動」という用語に本来は異なる意味があるためである。ドイツ語の言語学辞典 *Lexikon der Sprachwissenschaft* (Bußmann hrsg. 2002) によれば、「起動」(Inchoativ) はラテン語の *inchoāre* に由来する語で、元来、「始まる」という意味を表す。ラテン語では、*-sc-* という起動接中辞 (*inchoatives Infix*) を動詞に付加することによって、ある動作や状態の始まりを示すことが可能である。例えば、*florere* ‘to flower’ という動詞に *-sc-* を付加すると、*florescere* ‘to start flowering’ となる。ドイツ語には、このような「起動」を表す接中辞は存在しないが、その代わりに、*erblühen* ‘blossom’ や *verwelken* ‘wither’ のような動詞の例では、動作や状態の開始を表す接頭辞の *er-* や *ver-* が付加されているとされ、この種の動詞の語彙的アスペクト (Aktionsart) のカテゴリーとして、「起動」(Inchoativ) という用語が使われてきた。また、*gilben – gelb werden* ‘become yellow’ や *welken – welk werden* ‘become withered’ のように adjective + *werden* ‘become’ の構文で書き換えられる形容詞派生自動詞も、上記の辞書では「起動」を表すものとして扱われている。

英語における「起動」(*inchoative*) の定義については、Haspelmath (1987: 9) が詳しい。Haspelmath の説明によると、最初にこの用語を導入したのは Lakoff (1970) であるが、彼が「起動」と呼んでいるのは、*thicken* のような形容詞派生動詞のみである。英語の *thicken* にせよ、上述のドイツ語の *gilben* や *welken* にせよ、描写されているのは単なる「状態の始まり」というよりも、むしろ「ある状態への移行」である。

このように、「起動」の用法が拡大するなかで、現在、「反使役」との境界が不明瞭になってきていると考えられるが、「起動」の本来的な意味や用法との混同を避けるためにも、本論文では「反使役」の術語を用いる。

1.3. 論文の構成

本論文は、内容的に、反使役動詞全般の理論的考察と、ドイツ語反使役動詞の用例の分析のふたつから構成される。

まず、第2章では、分析の前提として、ドイツ語の反使役動詞である RA と IA がどのような形態的特性を持つかを概観する。そして、反使役動詞の特殊なタイプとして、RA と IA の用法を兼ね備えているもの (RIA 動詞) を紹介する。第3章では、先行研究において提案されてきた使役交替に対するふたつのアプローチについて解説する。そのアプローチとは、使役交替を派生的関係として分析する「派生的アプローチ」と、派生関係を想定しない「非派生的アプローチ」である。両者の分析を詳しく比較した後に、非派生的アプローチの問題点を指摘する。続いて、第4章では、ドイツ語の反使役動詞の意味的特性を考察する。先行研究においては、ドイツ語の RA と IA の間にどのような意味的相違が認められるかが議論されており、そこで関連するトピックとして、語彙的アスペクト、自由与格の解釈、前置詞句・副詞句の認可などが取り上げられてきた。とりわけ、使役主の観点から RA と IA を意味的に区別することができるという説が有力とみなされてきた。これに対し、RA と IA には意味的な相違を設定することができないという立場を取る研究もある。そこで、両者の主張を詳細に確認し、その分析の妥当性について考察する。第5章では、ドイツ語の RA と IA の間には意味的な相違が想定できるという立場から、「対象物の本質的变化」という意味的原理を提案する。そして、この原理が、反使役に付随するいくつかの言語現象と矛盾しないことを示す。第6章では、語彙意味論の立場から、ドイツ語の反使役動詞に対して有効な意味表示を設定することを試みる。その際に、ドイツ語の使役交替を使役から反使役への派生と捉え、RA と IA に異なる派生のプロセスを想定することが適切であると主張する。最後に、第7章で、本論文の結論と今後の展望を述べる。

第2章 ドイツ語反使役動詞の形態的特徴とその分布

本章ではドイツ語の反使役動詞を形態的観点から概観する。2.1では、RAとIAの具体例を挙げ、完了の助動詞選択における違いを確認する。次に2.2では、RAとIAのレキシコンにおける分布上の差を指摘する。続いて2.3では、「ドイツ語のRAとIAを決定する際に形容詞派生や名詞派生や接頭辞の付加のような形態的要因は影響力を持たない」というSchäfer (2008)の観察を取り上げる。最後に2.4では、RAとIAの用法を併せ持つ特殊な用法の動詞(RIA)を紹介する。

2.1. 完了の助動詞選択

第1章に示したように、ドイツ語の反使役動詞は、その形態的特徴に基づいて2つのクラスに分類される。1つ目は再帰代名詞*sich*が必ず付加されるRAであり(cf. (1b)-(3b))、2つ目は*sich*が決して付加されないIAである(cf. (4b)-(6b))。

(1) a. Hans verändert die Temperatur.

Hans changes the temperature

‘Hans changes the temperature.’

b. Die Temperatur verändert sich.

the temperature changes REFL

‘The temperature changes.’

(2) a. Hans öffnete die Tür.

Hans opened the door

‘Hans opened the door.’

b. Die Tür öffnete sich.

the door opened REFL

‘The door opened.’

(3) a. Der Tankwart entzündete das Benzin.

the attendant ignited the petrol

‘The attendant ignited the petrol.’

b. Das Benzin entzündete sich.

the petrol ignited REFL

‘The petrol ignited.’

(4) a. Hans schmilzt die Schokolade.

Hans melts the chocolate

‘Hans melts the chocolate.’

b. Die Schokolade schmilzt.

the chocolate melts

‘The chocolate melts.’

(5) a. Hans zerbrach die Vase.

Hans broke the vase

‘Hans broke the vase.’

b. Die Vase zerbrach.

the vase broke

‘The vase broke.’

(6) a. Der Wind zerriss das Segel.

the wind tore the sail

‘The wind tore the sail.’

b. Das Segel zerriss.

the sail tore

‘The sail tore.’

Schäfer (2008: 29-30)

それぞれのクラスに属する代表的な語彙は (7) と (8) の通りである。³

- (7) RA: *auflösen* ‘dissolve’, *aufrichten* ‘straighten up’, *ausbreiten* ‘spread’, *ausdehnen* ‘expand’, *entfalten* ‘develop’, *erhöhen* ‘raise’, *festigen* ‘consolidate’, *füllen* ‘fill’, *öffnen* ‘open’, *röten* ‘redden’, *schließen* ‘close’, *spalten* ‘split’, *verändern* ‘alter’, *verbessern* ‘improve’, *verbreiten* ‘spread’, *verdoppeln* ‘double’, *vergrößern* ‘enlarge’, *verlängern* ‘lengthen’, *verringern* ‘decrease’, *verschieben* ‘shift’, *verstärken* ‘strengthen’
- (8) IA: *abbrechen* ‘break off’, *austrocknen* ‘dry out’, *ein-/zerreißen* ‘tear’, *heilen* ‘heal’, *reifen* ‘ripen’, *schmelzen* ‘melt’, *trocknen* ‘dry’, *umstürzen* ‘overturn’, *verbrennen* ‘burn’, *zerbrechen* ‘break into pieces’, *zerknittern* ‘crumple’, *zersplittern* ‘splinter’

³ 包括的な動詞のリストは巻末資料を参照のこと。

ドイツ語の RA と IA には完了の助動詞選択に違いがあることがよく知られている。すなわち、(7) に示した RA では、完了の助動詞として *haben* ‘have’ が用いられ、(8) に示した IA では、*sein* ‘be’ が用いられる (Schäfer 2008: 33)。

(9) a. Die Neuigkeit hat sich schnell verbreitet. RA

the news has REFL quickly spread

‘The news spread quickly.’

b. Der Schnee ist geschmolzen. IA

the snow is melted

‘The snow melted.’

ところで、*kochen* ‘boil’, *abnehmen* ‘decrease’, *zunehmen* ‘increase’ のような自動詞は、一見反使役を表しているようにも思われるが、(10) のように完了時制で助動詞 *sein* ‘be’ ではなく *haben* ‘have’ を選択するという点で、(8) の IA とは振る舞いが異なる。

(10) a. Das Wasser hat gekocht.

the water has boiled

‘The water boiled.’

b. Das Fieber hat abgenommen.

the fever has decreased

‘The fever decreased.’

c. Die Zahl der Studenten hat zugenommen.

the number of the students has increased

‘The number of the students increased.’

また、助動詞 *haben* を選択する自動詞は、対象物が外部からの働きかけを受け一方的に状態変化を被るのではなく、対象物が自らその変化を生み出すという事態を描写すると思われる。例えば、動詞 *öffnen* ‘open’ や *schließen* ‘close’ には (11) のような自動詞としての用法も備わっているが、この場合、主語として典型的に生起するのは、自動ドアのような内部に動力を備えたものである。つまり、(11) は非能格動詞 (unergative verb) としての用例であると考えられる。

(11) Die Tür hat automatisch geöffnet und geschlossen.

the door has automatically opened and closed

‘The door opened and closed automatically.’

このような意味において、(10) や (11) のような自動詞は、状態変化を表す通常の IA のグループから除外すべきであると考えられる。⁴

2.2. RA と IA のレキシコンにおける分布の傾向

次に、ドイツ語の RA と IA のレキシコンにおける分布上の傾向を確認する。大矢 (1997, 2008) や Schäfer (2008) の研究でも指摘されている通り、ドイツ語の RA と IA の数を単純に比較すると、RA が圧倒的に多いとすることができる。Schäfer (2008) は自らデータベースを作成し、RA と IA に分類された動詞を数え上げているが、彼の調査によれば、RA の数は 170、IA の数は 80 ほどだという。また、筆者が Duden Universalwörterbuch を手掛かりに独自に調査したところ、RA が 230 例、IA が 70 例程度確認された (cf. 5.1)。

ドイツ語と系統的に近いオランダ語と比較してみても、RA の割合については大きな差が見られる。例えば、ドイツ語では RA が用いられる (12) のような事態も、オランダ語では (13) のように IA によって表現され、オランダ語の再帰代名詞 *zich* が付加されることはないという (大矢 2008: 126)。このように、オランダ語ではほとんどの反使役動詞が IA の形態で実現され、ごくわずかな例にのみ再帰代名詞 *zich* が付加される。

(12) a. Sein Haar kräuselte sich.

his hair frizzed REFL

‘His hair frizzed.’

b. Die Zustände verbesserten sich.

the situations improved REFL

‘The situations improved.’

c. Die Sonne verdüsterte sich.

the sun darkened REFL

‘The sun darkened.’

⁴ この種の自動詞の意味的特徴については、第 5 章において取り上げる。

(13) a. Zijn haar krulde (*zich).

his hair frizzed REFL

‘His hair frizzed.’

b. De toestanden verbeterden (*zich).

the situations improved REFL

‘The situations improved.’

c. De zon verduisterde (*zich).

the sun darkened REFL

‘The sun darkened.’

大矢 (2008: 126)

これと関連して、Schäfer (2008: 31) は、ドイツ語とオランダ語における反使役動詞のデフォルトタイプが異なると述べている。例えば、ドイツ語では *sich digitalisieren* ‘digitalize’ や *sich html-isieren* ‘html-ize’ のように、新しく作られた他動詞が反使役的に用いられるとき、再帰代名詞を伴うのが一般的であるが、オランダ語では、*finlandiseren* ‘finlandize’ や *resocialiseren* ‘resocialize’ のように、再帰代名詞を伴わない自動詞として実現されるという (cf. (14b)-(15b))。

(14) a. Gorbatsjov tracht Roemenië te finlandiseren.

Gorbachev tries Rumania to finlandize

‘Gorbachev tries to finlandize Rumania.’

b. Roemenië finlandiseert (*zich).

Rumania finlandize REFL

‘Rumania finlandize.’

(15) a. De regering besloot de delinquenten te resocialiseren.

the government decided the delinquents to resocialize

‘The government decided to resocialize the delinquents.’

b. De delinquenten resocialiseren (*zich).

The delinquents resocialize REFL

‘The delinquents resocialize.’

Fagan (1992: 175)

2.3. ドイツ語反使役動詞の形態的特徴

Schäfer (2008) は、ドイツ語の RA と IA を形態的観点から特徴づける可能性を探っている。彼の分析は、形容詞派生動詞、名詞派生動詞、接頭辞付き動詞の3点に要約することができる。

まず、形容詞派生動詞 (deadjetival verb) に注目してドイツ語の反使役表現を観察すると、それらは RA の形態で用いられる傾向にあるとすることができる。例えば、(16) の *erwärmen* ‘warm up’ や *aufhellen* ‘brighten up’ のような動詞は、それぞれ *warm* ‘warm’ や *hell* ‘bright’ といった形容詞を基礎としているが、これらの動詞が反使役的に使われる際には、RA の形態が選択される。

(16) a. Die Luft erwärmt sich langsam.

the air warms-up REFL gradually

‘The air warms up gradually.’

b. Der Himmel hellt sich auf.

the sky brightens REFL up

‘The sky brightens up.’

このような RA の形態を取る形容詞派生動詞は用例が非常に多く、Schäfer (2008) のデータベースでは、RA に分類された動詞の約半分が形容詞派生動詞であったという。彼は以下のような動詞を挙げている。

(17) deadjetival RA: *anreichern* ‘enrich’, *aufhellen* ‘brighten’, *erhärten* ‘harden’,
erwärmen ‘warm’, *vereinfachen* ‘simplify’

Schäfer (2008: 31)

また、筆者のデータベースにおいても、(18) のような多くの形容詞派生動詞が RA に分類されることが確認された。

(18) deadjetival RA: *ausweiten* ‘expand’, *bereinigen* ‘clear up’, *beruhigen* ‘calm down’, *beschleunigen* ‘speed up’, *bessern* ‘improve’, *bestärken* ‘confirm’, *einigen* ‘unite’, *erhellen* ‘light up’, *erhöhen* ‘raise’, *erneuern* ‘renew’, *erweitern* ‘expand’, *festigen* ‘strengthen’, *glätten* ‘smooth’, *intensivieren* ‘intensify’, *klären* ‘clear’, *kräuseln* ‘frizz’, *leeren* ‘empty’, *lockern* ‘loosen’, *mehren* ‘increase’, *mildern* ‘moderate’, *nähern* ‘approach’, *röten* ‘redden’,

runden ‘round’, *schärfen* ‘sharpen’, *stabilisieren* ‘stabilize’, *verbessern* ‘improve’, *verbreiten* ‘spread’, *verdichten* ‘thicken’, *verdicken* ‘thicken’, *verdunkeln* ‘darken’, *verdüstern* ‘darken’, *verengen* ‘narrow’, *verfeinern* ‘refine’, *verfestigen* ‘harden’, *verfinstern* ‘darken’, *vergrößern* ‘expand’, *verkleinern* ‘decrease’, *verkürzen* ‘reduce’, *verlängern* ‘lengthen’, *verlangsamen* ‘slow down’, *vermehrten* ‘increase’, *vermindern* ‘decrease’, *verschärfen* ‘intensify’, *verschlechtern* ‘make worse’, *verschlimmern* ‘make worse’, *verstärken* ‘strengthen’, *verteuern* ‘make more expensive’, *vertiefen* ‘deepen’, *vervollständigen* ‘complete’, *verwirklichen* ‘realize’, *weiten* ‘widen’

ここで、「形容詞派生の反使役動詞はすべて RA の形態を取り、IA の形態を取らない」という仮定が成り立つとすれば、ドイツ語の反使役動詞の形態を形容詞派生という観点から区別することが可能となるだろう。しかし、実際には、この仮説は成り立たない。というのも、数としては少ないものの、(19) のような形容詞派生の IA も存在するためである。例えば、形容詞 *trocken* ‘dry’ と *stumpf* ‘blunt’ をそれぞれ基礎とする動詞 *austrocknen* ‘dry up’ と *abstumpfen* ‘blunt’ の場合、その反使役用法には再帰代名詞 *sich* が現れない (cf. (20))。

(19) deadjectival IA: *abstumpfen* ‘blunt’, *austrocknen* ‘sear’, *einweichen* ‘soak’,
ermüden ‘tire’, *trocknen* ‘dry’, *verdummen* ‘stupefy’

Schäfer (2008: 31)

(20) a. Der Fluss trocknet aus.

the river dries up

‘The river dries up.’

b. Die Schneide stumpft ab.

the cutting-edge blunts PART

‘The cutting edge blunts.’

さらに、(19) の動詞の他にも、治癒を表す動詞 (cf. (21a))、衰弱、病的変化を表す動詞 (cf. (21b))、軟化・硬化を表す動詞 (cf. (21c))、発酵を表す動詞 (cf. (21d)) において、形容詞派生の IA が観察される。⁵

⁵ 動詞 *erhärten* ‘harden’ は、(17) において Schäfer (2008: 31) が RA として分類していることから分かるように、RA としての用法と IA としての用法を兼ね備えた動詞である。このタイプの動詞については、2.4 と 5.3.4 を参照のこと。

(21) deadjectival IA:

- a. *ausheilen* ‘heal up’, *heilen* ‘heal’
- b. *erschlaffen* ‘weaken’, *verweichlichen* ‘weaken’
- c. *erhärten* ‘harden’, *erweichen* ‘soften’
- d. *säuern* ‘pickle’

したがって、傾向としては形容詞派生の RA が圧倒的に多いが、形容詞派生であるかどうかを基準にして、ドイツ語の反使役の形態を予測することは不可能である。

続いて、第 2 の形態的要因として、名詞派生動詞 (denominal verb) を取り上げる。Schäfer (2008) は、形容詞派生動詞と同様に、名詞派生動詞もドイツ語において RA と IA の両方の形態で現れることを指摘している。

(22) denominal RA: *abbauen* ‘decompose’, *deformieren* ‘deform’, *erhitzen* ‘heat’,
färben ‘color’, *formieren* ‘form up’

(23) denominal IA: *verwässern* ‘dilute’, *verdrecken* ‘get/make dirty’, *zersplittern*
‘splinter’, *verdampfen* ‘vaporize’, *überfluten* ‘flood’

Schäfer (2008: 31)

また、筆者のデータベースにおいても、以下のような名詞派生動詞が RA と IA にそれぞれ確認された。

(24) denominal RA: *beschränken* ‘restrict’, *einkapseln* ‘encapsulate’, *entblättern*
‘shed its leaves’, *entfärben* ‘fade’, *enträtseln* ‘decipher’, *entschleiern*
‘uncover’, *gliedern* ‘structure’, *kreuzen* ‘cross’, *kringeln* ‘curl’, *locken* ‘curl’,
reimen ‘rhyme’, *ringeln* ‘curl’, *spalten* ‘split’, *teilen* ‘divide’, *vererben*
‘transmit’, *verfärben* ‘change color’, *verfilzen* ‘felt’, *verflechten* ‘interweave’,
verformen ‘distort’, *verkettten* ‘become interlinked’, *verknotten* ‘knot’,
verkrampfen ‘become cramped’, *verschleiern* ‘cover’, *vertagen* ‘adjourn’,
verwandeln ‘change’, *wandeln* ‘change’, *wellen* ‘wave’, *zerspalten* ‘split up’,
zerteilen ‘divide into pieces’

(25) denominal IA: *einknicken* ‘bend and snap’, *gelatinieren* ‘gelatinize’, *tauen*
‘melt’, *umknicken* ‘bend and snap’, *verdunsten* ‘evaporate’, *verkohlen* ‘burn
to charcoal’, *versteinern* ‘fossilize’, *zerbröckeln* ‘crumble’, *zerfasern* ‘fray’,
zerfransen ‘fray’, *zerkrümmeln* ‘crumble up’

つまり、形容詞派生と同様に、名詞派生もドイツ語の反使役動詞の形態を予測する基準にはなり得ない。

最後に、Schäfer (2008: 31) は、接頭辞を付加した場合にも、RA と IA の間に有意な差は現れないと述べている。さらに、接頭辞（分離・非分離の両方を含む）の種類によっても、RA と IA の出現を予測することはできないという。例として彼は、*ab-* ‘off, away’ という接頭辞を持つ反使役動詞が RA と IA の両方に存在することを示している。

(26) RA with prefix *ab-* : *abbauen* ‘decompose’, *ablagern* ‘deposit’, *ablösen* ‘peel off’, *abschwächen* ‘lessen’

(27) IA with prefix *ab-* : *abbrechen* ‘break off’, *abbrennen* ‘burn off’, *abbröckeln* ‘drop off’, *abtauen* ‘defrost’

Schäfer (2008: 31-32)

以上の Schäfer (2008) の観察をまとめると、形容詞派生、名詞派生、接頭辞の付加のいずれの要因も、ドイツ語の反使役の形態を決定する際に影響を与えないとすることができる。

2.4. RIA 動詞

さて、ドイツ語の反使役動詞が RA と IA というふたつの異なる形態として実現されることはすでに指摘した通りであるが、実際の用例を詳しく観察すると、反使役表現として RA と IA の両方の形態を兼ね備えた動詞が存在することが分かる。このタイプの動詞の場合、RA の形態を取るか IA の形態を取るかについては任意 (optional) である。先行研究では、Schäfer (2008) がこれを class C の動詞と呼んでいるが、本論文では、便宜上 reflexive-intransitive anticausative (RIA) と呼ぶことにしたい。Schäfer (2008: 32) は、この動詞について、以下のように述べている。

The first observation about this class of verbs is that it is quite restricted in German. I was able to find only a very small number of optional verbs. The next thing to notice is that the notion ‘optional’ is relative subjective; it is in fact the case that individual speakers often accept only one version of a specific verb in this list or at least prefer one version. This makes it actually difficult to identify verbs of class C.

上の記述によれば、ドイツ語の RIA 動詞については、その数が極めて限られており、また、RA の形態を取るのか IA の形態を取るのかについて任意であると言っても、その判断は主観的なものであり、話者による差も大きいという。そこで Schäfer (2008) は、IDS (Institut für Deutsche Sprache) の COSMAS-II コーパス (Korpus der geschriebenen Sprache) に基づく統計を取ることによって、このクラスの動詞の特徴を捉えようと試みている。その結果をまとめたものが (28) である。

(28) Schäfer (2008: 33) によるドイツ語 RIA 動詞の統計

	Anticausative	+sich	-sich	%	Duden
1. abkühlen (to cool)	349	147	202	42/58	±sich
2. verwischen (to blur)	244	143	101	59/41	+sich
3. abflachen (to flatten)	313	102	211	33/67	±sich
4. kumulieren (to cumulate)	119	80	39	67/33	+sich
5. ausdünnen (to thin out)	35	10	25	29/71	-sich
6. verstopfen (to congest)	55	14	41	25/75	-sich
7. bräunen (to get brown)	32	8	24	25/75	±sich
8. verklumpen(to agglutinate)	85	19	66	22/78	-sich
9. verkanten (to cant)	44	35	9	80/20	±sich
10. verkrümmen (to curve)	5	4	1	80/20	±sich
11. verdicken (to thicken)	57	47	10	82/18	±sich
12. härten (to harden)	23	3	20	13/87	±sich
13. entfachen (to ignite)	64	57	7	89/11	only tr.
14. verhärten (to harden)	346	324	22	94/6	±sich
15. verbiegen (to bend)	54	51	2	94/6	+sich
16. entflammen (to ignite)	100	5	95	5/95	±sich
17. ausfransen (to fray)	62	2	60	3/97	±sich

彼は、自身の反使役動詞のデータベースから RA と IA の形態を取りうるものを抜き出し、それぞれの動詞について、上記のコーパスを用い、反使役的用法の例を数え上げている。さらに、その際に再帰代名詞 *sich* を伴うか否かを確認し、そのパーセンテージを算出している。(28) のパーセンテージの欄を見ると分かるように、RIA 動詞の場合、*sich* の出現が任意と言っても、その度合いは個々の動詞によって大きく異なる。また、彼は、Duden の辞書においてそれぞれの動詞が RA と IA のどちらのタイプとして記載されているかを調査し、それを ±*sich* の形で表に記している。Duden の説明は、彼の

統計と必ずしも適合していないが、Duden において RA か IA のいずれかの形態のみが記されている動詞 (*verwischen* ‘blur’, *kumulieren* ‘cumulate’, *ausdünnen* ‘thin out’, *verstopfen* ‘congest’, *verklumpen* ‘agglutinate’, *verbiegen* ‘bend’) については、コーパスの用例においても、その形態で用いられるものが圧倒的に多かったという。

そもそも、RIA 動詞については、辞書に±*sich* の形で記載されていても、実際に RA と IA の用法を兼ね備えているかについては、議論の余地がある。というのも、ドイツ語の場合、RA に対応する他動詞の状態受動と、IA の現在完了が、同じ *sein* ‘be’ + 過去分詞の構文になるためである。すなわち、ドイツ語では、RA は現在完了時制を作るときに *haben* ‘have’ を、IA は *sein* ‘be’ を助動詞として選択するが (cf. (29a), (29b))、RA に対応する他動詞を状態受動にしたとき、再帰代名詞 *sich* は当然ながら統語上実現されず、助動詞としては *sein* ‘be’ が用いられる (cf. (29c))。それゆえ、*sein* ‘be’ + 過去分詞の構文が現れた場合に、それが IA の事態の完了を表しているのか、RA に対応する他動詞の受動的な状態を表しているのかに関して、判断が曖昧になることがある。そこで、Schäfer (2008: 34) は、「明らかに事態の完了のコンテクストで使われているときに限定して、この種の例文を IA に分類した」と述べている。

(29) a. Die Tür hat sich geöffnet.

the door has REFL opened

‘The door has opened.’

b. Die Vase ist zerbrochen.

the vase is broken

‘The vase has broken.’

c. Die Tür ist geöffnet.

the door is opened

‘The door is opened.’

さて、RIA 動詞のうち代表的なものは、(28) の先頭にある *abkühlen* ‘cool’ である。この動詞は、(30) のように非人称代名詞 *es* ‘it’ を主語に取り、天候動詞 (weather verb) として使われることがある。ただし、このとき、完了の助動詞としては *haben* ‘have’ が現れるため、IA とみなすことはできない。つまり、この天候動詞としての *abkühlen* の用法は非能格 (unergative) であり、反使役動詞としての *abkühlen* からは区別されなくてはならない。(Schäfer 2008: 34)

(30) Über Nacht hat es merklich abgekühlt.

during night has it noticeably down-cooled

‘Over night, it cooled down noticeably.’

その他の *abkühlen* の用例について、Schäfer (2008: 34-35) は、変化の対象がどのような種類のものであるかを調査し、それぞれの出現頻度を数え上げている。それを表にまとめたものが (31)-(34) である。

(31) 自然物が変化の対象となる場合

	<i>Temperatur</i> ‘temperature’	<i>Wasser</i> ‘water’	<i>Boden/Erde</i> ‘ground/soil’	<i>Luft</i> ‘air’	overall
+sich	3	4	3	11	21
-sich	10	13	3	9	35

(32) 感情が変化の対象となる場合

	<i>Emotionen</i> ‘emotions’	<i>(erhitzte) Gemüter</i> ‘heated minds’	overall
+sich	3	34	42
-sich	37	6	43

(33) 経済が変化の対象となる場合

	<i>Wirtschaft</i> ‘economy’	<i>Konjunktur</i> ‘business cycle’	overall
+sich	6	36	42
-sich	1	6	7

(34) 核燃料などが変化の対象となる場合

	<i>Atombrennstoff</i> ‘atomic fuel’
+sich	1
-sich	14

Schäfer (2008: 34-35)

例文の総数が少ないため、これらの表から有意な傾向を読み取るのは難しいが、(33) にあるように、経済活動が問題となるコンテキストで *abkühlen* が用いられると、RA の形態が好まれることがわかる。また、(34) のように *Atombrennstoff* ‘atomic fuel’, *Brennelemente* ‘fuel elements’, *Castor* ‘cask for storage and transport of radioactive material’ など、核燃料が変化の対象となる

ときには、明らかに IA の形態が好まれるという結果となっている。この違いは何に由来するのであろうか。

Schäfer (2008) はこのような傾向が生じる要因についてはこれ以上考察しておらず、今後の研究の課題とすると述べるに留まっているが、⁶ RIA 動詞の例だけでなく、RA や IA の例にも共通する意味的な違いを想定することが可能であるように思われる。この点を、本論文では第 5 章で再び取り上げ検討することにしたい。

2.5. 結語

本章では、ドイツ語の反使役動詞に RA と IA のふたつの形態があり、完了時制において、RA は助動詞として *haben* ‘have’ を選択し、IA は *sein* ‘be’ を選択することを確認した。また、RA と IA を数的に比較すると、ドイツ語では RA のほうが圧倒的に多く、新語を作る生産性も備えているのに対して、IA の数は比較的限られていることを見た。さらに、Schäfer (2008) は、ドイツ語の反使役動詞を形容詞派生、名詞派生、接頭辞の付加という観点で観察しているが、いずれの要因も RA と IA の形態を決定する役割を果たさないと結論付けていた。最後に、RA と IA の用法を兼ね備えた RIA 動詞を取り上げ、Schäfer (2008) のコーパスに基づく調査を紹介した。

⁶ “I leave it for future research to further investigate such tendencies.” (Schäfer 2008: 35)

第3章 先行研究における反使役動詞の理論的考察

本章では、先行研究において、ドイツ語に限らず反使役動詞全般に関してどのような理論的考察がなされてきたのかを概観し、その問題点について論じる。

これまで、主に語彙意味論の分野で、反使役動詞へのいくつかのアプローチが提案されてきた。その際に議論の中心となっていたのは、使役と反使役のペアに派生関係を認めるか否か、すなわち、使役交替という現象に厳密に派生的なアプローチを想定するか否かである。英語学の領域では、使役と反使役が派生的に関連付けられているとみなす考え方が主流であるが、使役と反使役のどちらが基本でどちらが派生であるのか、また文法のどのレベルで派生が成立するのかについては、研究者の間で意見が分かれている。

本章ではまず 3.1 で派生関係についての議論をまとめる。その後、3.2 で Alexiadou et al. (2006) の分析を観察する。彼女らは、ドイツ語、英語、現代ギリシア語の反使役動詞の振る舞いに基づき、独自の理論を展開して派生的アプローチを批判している。最後に 3.3 で彼女らの反論の妥当性について考察する。

3.1. 使役交替における派生関係の議論

使役交替を考察する際にしばしば取り上げられるのは、英語の次のような例である。ここで動詞 *V* は他動詞（使役）と自動詞（反使役）のどちらの用法にも現れ、他動詞用法は概ね「*V*-自動詞の事態を引き起こす」(cause to *V*-intransitive) ことを表す。また、使役用法の目的語と反使役用法の主語は、同一の主題役割 (thematic role) を担う。

- (1) a. Pat broke the window.
b. The window broke.
- (2) a. Antonia opened the door.
b. The door opened.
- (3) a. Tracy sank the ship.
b. The ship sank.

Levin and Rappaport Hovav (1995)

このような意味において、使役交替はしばしば非対格性 (unaccusativity) の議論のなかで、この仮説の正当性を示す証拠のひとつとして扱われてきた。例えば Levin and Rappaport Hovav (1995: 80) は、反使役用法の自動詞を非対格 (unaccusative) と仮定し、その主語を深層構造の目的語と考えることによって、使役交替に関与する動詞の項の主題役割上の関係を捉えることができると述べている。

3.1.1. 派生的アプローチ I—使役化説

非対格性の研究においては当初、非対格動詞は基本的な語彙記載項目 (lexical entry) とみなされていた。また、使役交替が起こる場合には、非対格動詞である反使役自動詞から使役他動詞が派生されるという考え方が一般的であった。この考え方を使役化説 (causativization view) と呼ぶ。この説は、統語論の立場だけでなく、意味論の立場で使役交替を分析する際にも支持された。例えば、Dowty (1979) の研究では、非対格動詞の *break* は **BROKEN** のような抽象的状态を表す形容詞に **Become** という演算子 (operator) を適用することで構成され (cf. (4a))、この非対格動詞に **Cause** の演算子を適用することによって、使役他動詞の *break* が派生されると想定されている (cf. (4b))。

- (4) a. *break*_{inch} : λx [**Become BROKEN** (x)]
 b. *break*_{caus} : $\lambda y \lambda x$ [$\exists P$ [**P** (x) **Cause Become BROKEN** (y)]]

3.1.2. 派生的アプローチ II—反使役化説

3.1.2.1. Levin and Rappaport Hovav (1995) の分析

その後、90年代になると、使役交替を使役から反使役への派生とみなす考え方が有力視されるようになった。この説を「反使役化説」(anti-causativization view) と呼ぶことにしたい。代表的な研究のひとつに Levin and Rappaport Hovav (1995) が挙げられる。彼女らは (5)-(6) のように使役交替を図式化している。(5) は英語の使役他動詞の *break*、(6) は反使役自動詞の *break* の語彙意味表示 (lexical semantic representation: LSR) および項構造 (argument structure) への写像関係である。(6) に示されている通り、反使役自動詞は語彙意味表示のレベルにおいて、使役他動詞と同様に、使役構造を持つとしている。さらに、ある条件下で脱他動詞化 (detransitivization) とい

う操作が適用され、項構造のレベルで内項だけを持つ非対格動詞として実現されるという。脱他動詞化とは、使役主の項 x を項構造へ投射することを妨げる操作のことである。この操作を彼女らは語彙的束縛 (lexical binding) と呼び、(6) の図式のなかで、語彙的束縛を受けた項を \emptyset で表している。(Levin and Rappaport Hovav 1995: 108)

(5) Transitive *break*

LSR		[[x DO-SOMETHING] CAUSE [y BECOME <i>BROKEN</i>]]
Linking rules	↓	↓
Argument Structure	x	< y >

(6) Intransitive *break*

LSR		[[x DO-SOMETHING] CAUSE [y BECOME <i>BROKEN</i>]]
	↓	
Lexical binding	\emptyset	
Linking rules		↓
Argument structure		< y >

Levin and Rappaport Hovav (1995) が反使役化説を主張する根拠となっているのは (7) のような例である。英語の *break* という動詞の場合、使役用法の目的語と反使役用法の主語の選択制限 (selectional restriction) が完全に一致せず、使役用法のほうがより多くの種類の目的語を容認する。つまり、「人が約束や契約や世界記録を破る」ことはできるが、「約束や契約や世界記録が自ら破れる」ということは成り立たないという。また、*break* に限らず、このような選択制限の不一致は頻繁に観察される現象であると彼女らは指摘している (cf. (8)-(10))。したがって、派生の方向として反使役を基本とする立場では、存在しない反使役から存在する使役を派生させることになるため、理論的な矛盾が生じると彼女らは主張している。

(7) a. He broke {his promise / the contract / the world record}.

b. *{His promise / The contract / The world record} broke.

(8) a. This book will open your mind.

b. *Your mind will open from this book.

- (9) a. The waiter cleared the table.
 b. *The table cleared.
- (10) a. The dressmaker lengthened the skirt.
 b. *The skirt lengthened.

3.1.2.2. Reinhart (2002) の分析

同じく使役交替の反使役化説 (anticausativization view) を支持する研究に Reinhart (2002) がある。彼女も動詞の選択制限の問題を取り上げ、次のような観察を示している。(11) の他動詞 *feed*, *walk*, *eat*, *shave*, *dress* は、いずれも外項に動作主 (agent) のみを選択し、道具 (instrument) や原因 (cause) を容認しない。例えば (11a) の動詞 *feed* は、動作主 *the father* を主語に取ることはできるが、道具 *the spoon* や原因 *hunger* となじまない。それに対して、同じ他動詞に分類される *open* の場合には、(12) のように、動作主 *Max* のみならず、道具 *the key* や原因 *the storm* も外項として認可される。また (13) の動詞 *redden*, *break*, *melt*, *develop*, *enlarge* も、*open* と同様に広い範囲の選択制限を持つ。

- (11) a. {The father / *the spoon / *hunger} fed the baby.
 b. {Max / *the leash / *hunger} walked the dog to his plate.
 c. {The baby / *the spoon / *hunger} ate the soup.
 d. {Lucie / ??The razor / *the heat} shaved Max.
 e. {Lucie / *the snow / *the desire to feel warm} dressed Max.
- (12) a. Max opened the window (in order to enter).
 b. The key opened the window (*in order to be used).
 c. The storm opened the window (*in order to destroy us).
- (13) a. {The painter / the brush / autumn} reddened the leaves.
 b. {Max / the storm / the stone} broke the window.
 c. {Max / the heat / the candle} melted the ice.
 d. {Max / exercises / bicycles} developed his muscles.
 e. {Max / the storm / the hammer} enlarged the hole in the roof.

Reinhart (2002: 230)

ここで彼女は、*open* のような動詞を主題役割の選択 (動作主・道具・原因) に応じて3つの異なる語彙記載項目に登録するという従来の考え方を斥け、次のような提案をしている。まず、使役に関して言えば、動作主 (agent) と

原因 (cause) の主題役割にはオーバーラップする部分がある。つまり、ある状態変化の動作主となるものは、その変化に対する原因でもありうる。そこで、このふたつが値を共有する素性を $[\pm c]$ として表示する。この c は **cause change** の略である。さらに、動作主と原因を区別する素性として $[\pm m]$ を導入する。 m とは **mental state** の略であり、参加者の心的性質に関わるものである。この2種類の素性の値のコンビネーションによって、主題役割の4つのクラスターが (14) のように定義されるという。

- (14) a. $[\pm c \pm m]$: agent
 b. $[-c \pm m]$: experiencer
 c. $[\pm c -m]$: instrument, cause
 d. $[-c -m]$: theme, patient

この素性の値に基づいて (11) から (13) の動詞の選択制限の問題は解決できると Reinhart (2002) は述べている。つまり、(11) に挙げた動詞 *feed*, *eat* などは、外項の主題役割として $[\pm c \pm m]$ を選択するのに対し、(12) の *open* や (13) の *break* などは、 $[\pm c]$ を選択するという。ここでは $[m]$ の値が設定されていないため、(12) と (13) の動詞は、外項の主題役割として動作主 $[\pm c \pm m]$ 以外にも、道具や原因 $[\pm c -m]$ を容認することになる。

さらに、Reinhart (2002) は、このような枠組を用いて使役交替の現象を説明しようと試みている。彼女もまた、使役交替を使役から反使役への派生として捉えているが、基礎となる使役他動詞は $[\pm c]$ の外項を選択するものでなくてはならないと規定している。つまり、動作主だけでなく道具や原因も外項として選択しうる (12) や (13) のような他動詞である。なぜなら、 $[\pm c \pm m]$ の外項を選択する (11) のような他動詞の場合、決して反使役用法が成り立たないからである (cf. Levin and Rappaport Hovav 1995: 105)。さらに彼女は、(15) の虚辞化 (expletivization) と呼ばれる操作を提案しており、この操作が $[\pm c]$ の外項を選択する使役他動詞の項目に適用されるとき、 $[\pm c]$ の外項が削除され、結果として1項の反使役自動詞の項目が生じると主張している。

- (15) Expletivization: Reduction of an external $[\pm c]$ role
 a. $V_{acc}(\theta_{1[\pm c]}, \theta_2) \rightarrow R_e(V)(\theta_2)$
 b. $R_e(V)(\theta_2) \rightarrow V(\theta_2)$

例えば他動詞 *open* から自動詞 *open* が派生される過程は、彼女の枠組では、(16) のように示される。

- (16) a. *open* acc ([+c], [-c, -m]) → Re (*open*) ([-c, -m])
b. Re (*open*) ([-c, -m]) → *open* ([-c, -m])

3.2. Alexiadou et al. (2006) の非派生的アプローチ

3.2.1. 派生的アプローチへの反論

上述の派生的アプローチに対して、Alexiadou et al. (2006) は批判的な立場を取っている。Levin and Rappaport Hovav (1995) や Reinhart (2002) は、英語の使役交替を分析の対象としているが、単なる個別言語の記述というよりも、理論的にはもちろん普遍性のあるものを追求している。それにもかかわらず、これらの派生的アプローチではすべての言語の使役交替の現象を統一的に扱うことができないというのが、Alexiadou et al. (2006) の主張である。

3.2.1.1. 派生形態

まず Alexiadou et al. (2006: 191) が取り上げているのは、使役交替に現れる接辞の形態である。第1章で紹介した Haspelmath (1993) の観察の通り、使役交替に現れる形態には、通言語的に様々なバリエーションが認められる。例えば、ロシア語では (17) のように反使役に特別なマーキングが付加されることがある。ここで、形態的により複雑であるものが派生形であるとすれば、(17) では当然ながら使役から反使役への派生を想定する必要がある。それゆえ、この例は使役化説 (causativization view) にとって問題となるという。

(17) Anticausative Marking:

Russian:	<i>katat'-sja</i>	'roll' (<i>intr.</i>)
	<i>katat'</i>	'roll' (<i>tr.</i>)

同様に、使役に特別なマーキングが付加されるグルジア語の (18) のような動詞に対しては、反使役から使役への派生を想定するのが妥当であるため、反使役化説 (anticausativization view) は説得力を持たないという。

(18) Causative Marking:

Georgian:	<i>duγ-s</i>	‘cook’ (<i>intr.</i>)
	<i>a-duγ-ebs</i>	‘cook’ (<i>tr.</i>)

さらに、Alexiadou et al. (2006: 191) は、言語によっては (19) のように使役交替に派生の方向を想定することが難しい場合があることを指摘し、使役化説と反使役化説のどちらも完全な説明力を持たないと述べている。

(19) Non-directed Alternations:

a. Japanese:	<i>atum-aru</i>	‘gather’ (<i>intr.</i>)
	<i>atum-eru</i>	‘gather’ (<i>tr.</i>)
b. Russian:	<i>goret’</i>	‘burn’ (<i>intr.</i>)
	<i>žeč</i>	‘burn’ (<i>tr.</i>)
c. English:	<i>open</i>	(<i>intr.</i>)
	<i>open</i>	(<i>tr.</i>)

3.2.1.2. 動詞制限と選択制限

続いて Alexiadou et al. (2006) が派生的アプローチへの反論として取り上げているのは、動詞制限 (*verbal restriction*) と選択制限 (*selectional restriction*) である。彼女らは、Levin and Rappaport Hovav (1995: 103) が反使役の派生に関して以下のような一般化を行っていることを確認している。

(20) The transitive verbs that cannot form anticausatives restrict their subjects to *agents*, or *agents* and *instruments* and disallow *causes*.

すなわち、反使役を作ることのできない他動詞は、その主語として動作主のみ、あるいは動作主と道具を選択し、原因を認可しないものであるという。「原因」 (*cause*) とは、具体的には、天候などの自然現象や温度の変化などを指す。例えば *cut* という他動詞では、(21a) のような動作主 *the baker* や道具 *the knife* は主語として容認されるが、(21b) のような原因 *the lightning* は容認されない。したがって、この動詞は (21c) のように反使役形として用いられることはない。一方、*break* という他動詞では、(22a) のように動作主 *the vandals* も道具 *the rock* も原因 *the storm* も主語位置に現れうる。よって、*break* は反使役として用いられるという。

- (21) a. {The baker / the knife} cut the bread.
 b. *The lightning cut the clothesline.
 c. *The bread cut.
- (22) a. {The vandals / the rocks / the storm} broke the window.
 b. The window broke.

また、他動詞 *break* が「約束」や「契約」や「世界記録」などを目的語に取るとき、その反使役形が成り立たないという (23) の例も、上の一般化に適っている。(23) では、他動詞の主語として動作主のみが選択され、道具や原因は認可されない。つまり、「ある道具や自然現象が約束 / 契約 / 世界記録を破る」という出来事は成立しない。したがって、この用法では他動詞 *break* の外項の選択制限が厳格であるため、反使役が派生されないといえることができる。

- (23) a. He broke {his promise / the contract / the world record}.
 b. *{His promise / The contract / The world record} broke.

さて、ここまでの Levin and Rappaport Hovav (1995) の論述には何ら矛盾はないと思われるが、Alexiadou et al. (2006: 193) は、(24) や (25) のような例を取り上げ、反使役化説には問題があると述べている。これらの例から分かるように、状態変化を表す非対格自動詞 *bloom*, *blossom*, *flower*, *decay* には、対応する使役他動詞がそもそも存在しない。つまり、原因はおろか、動作主さえも使役表現の主語となることがない。そこで、Levin and Rappaport Hovav (1995) が非対格動詞を使役他動詞からの派生であると主張するのであれば、(24) や (25) は実際には存在しない使役他動詞を基礎とすることになるため、矛盾が生じると Alexiadou et al. (2006) は述べている。

- (24) a. The cactus {bloomed / blossomed / flowered} early.
 b. *The gardener {bloomed / blossomed / flowered} the cactus early.
 c. *The warm weather {bloomed / blossomed / flowered} the cactus.
- (25) a. The logs decayed.
 b. *The rangers decayed the logs.
 c. *The bad weather decayed the logs.

Levin and Rappaport Hovav (1995: 97)

この Alexiadou et al. (2006) の批判に関して、Levin and Rappaport Hovav (1995) の立場が不明瞭であると思われるため、ここで彼女らの考えを簡単に補足しておきたい。Levin and Rappaport Hovav (1995) は、非対格性の考察の中で、英語の自動詞を非対格動詞 (unaccusative verb) と非能格動詞 (unergative verb) の2種類に分けている。非能格動詞とは、*laugh, play, speak* のようないわゆる活動動詞 (activity verb) であり、主語には動作主 (agent) が現れる。このタイプの動詞は、対応する他動詞表現を持たず、使役交替に関与しない。

- (26) a. The children played.
b. *The teacher played the children.
(cf. The teacher made the children play.)

一方、*break* や *open* のような自動詞は非対格動詞に属するとされ、先に観察した通り、使役交替に関与する。Chierchia (1989) は、非能格動詞はもともと1価動詞であるが、非対格動詞は2価の使役動詞からの派生によって生じると述べており、Levin and Rappaport Hovav (1995) も基本的にこの考えを踏襲しているが、彼女らの自動詞分類というのは実際にはもう少し複雑である。すなわち、Levin and Rappaport Hovav (1995) は、意味的な観点から、内的使役 (internal cause) と外的使役 (external cause) の区別を採用している。内的使役と外的使役の違いとは、簡単に言うと、ある事象の成立に際して外部からその事象に直接的に働きかけるものが存在するか否かである。(26a) のような非能格動詞は、内的使役の代表例とされている。というのも、*laugh, play, speak* などの動詞によって描写される出来事は、外的な働きかけとは無関係に、個体の内部に備わっている力によって引き起こされるためである。それに対して、*break* や *open* などの交替する非対格動詞によって表される出来事 (状態変化) には、外的な働きかけが関与しうするため、これらの動詞は外的使役として特徴づけられるという。そして、この内的使役と外的使役の動詞を語彙意味論的に表示するならば、それぞれ (27a) と (27b) のようになるという。

- (27) a. [x PREDICATE]
b. [[x DO-SOMETHING] CAUSE [y BECOME STATE]]
Levin and Rappaport Hovav (1995: 94)

ここで、先ほど批判の対象となった (24) と (25) の *bloom, blossom, flower, decay* などの動詞に話を戻したい。Levin and Rappaport Hovav (1995: 97) は、これらの動詞を内的使役の状態変化動詞であると認定している。例えば、花が咲いたり枯れたりするとき、その変化の原動力は花という個体の内部にあるとみなされる。つまり、この場合、状態変化が個体固有の属性によって展開すると考えられるため、非対格動詞でありながら、内的使役の事象として特徴づけられるという。この動詞に対してどのような語彙意味表示を設定するのかについては、Levin and Rappaport Hovav (1995) は明言していないが、(存在しない) 使役他動詞から派生によって作られるのではなく、(27a) のような内的使役の独立した意味表示を初めから持つとされているのではないかと推測される。したがって、もしこの推測が正しければ、Alexiadou et al. (2006: 193) の反論はそもそも適切でないと言ふべきであろう。

3.2.2. 非派生的アプローチ

3.2.2.1. 前置詞句による修飾

以上のような派生的アプローチへの批判を踏まえて、Alexiadou et al. (2006) はさらに具体的な現象の観察を行っている。初めに彼女らが行っているのは、英語の反使役動詞と共起する前置詞句の種類である。

まず、議論の前提として、Alexiadou et al. (2006) は、英語の使役動詞が外項として動作主 (agent)、原因 (cause)、道具 (instrument) のいずれの主題役割も選択しうることを指摘している。また、道具を表す項は、(29b) のように、*with-PP* によって動作主主語の文にも導入されうる。さらに、英語の使役動詞の外項には、使役的事象 (causing event) と呼ばれるものが現れることがある。具体的には、(30a) の *Will's banging* が使役的事象に当たる。この主題役割も、(30b) のような動作主主語の文に *by-PP* によって明示することが可能である。

(28) {John / The earthquake} broke the vase.

(29) a. A stone broke the window.

b. I broke the window with a stone.

(30) a. Will's banging shattered the window.

b. I cooled the soup by lowering the temperature.

また、英語の受動態では、上で挙げたすべての主題役割が *by-PP* や *with-PP* によって表されうる。

(31) The window was broken {by John / by the storm / with a stone}.

(32) The window was shattered by Will's banging.

ここで、英語の反使役動詞に目を向けると、(33) のように、*by itself* のような句は問題なく出現すると言うことができる。しかし、上記の受動態とは違い、動作主、道具、原因、使役的事象の主題役割を持つ項を *by-PP* や *with-PP* で示すことはできない (cf. (34) - (35))。

(33) The plate broke by itself.

(34) *The window broke {by John / with a stone}.

(35) a. *The window broke by the storm.

b. *The window shattered by Will's banging.

ただし、原因と使役的事象の主題役割に限れば、前置詞 *from* を伴った形で反使役動詞の文に導入することが可能である (cf. (36))。一方、動作主や道具の主題役割を持つ項は、*from-PP* を伴っても、反使役動詞と共起しない (cf. (37))。

(36) a. The window {cracked / broke} from the pressure.

b. The window {cracked / broke} from the explosion.

(37) *The door opened {from Mary / from the key}.

このように、一概に外項や外的使役と言っても、それが具体的に動作主・道具であるのか原因・使役的事象であるのかによって、*from-PP* としての実現可能性が異なる。Alexiadou et al. (2006: 195) は、(36) のような *from-PP* の現れる反使役の例が派生的アプローチにとって問題になると述べている。この論点について以下で詳しく検討する。

まず、Levin and Rappaport Hovav (1995) は、先述の語彙的束縛という操作によって反使役が使役から派生されると仮定していたが、それに付随して、受動態と反使役の違いを次のように説明している。彼女らの考えでは、受動態も反使役も外項位置の束縛という操作によって使役他動詞から派生されるが、その操作の適用されるレベルは異なる。すなわち、受動態の場合、動詞の語彙統語表示 (lexical syntactic representation) 、つまり項構造のレベル

において、外項位置の束縛が起こると考えられる (cf. Grimshaw 1990)。それに対して、反使役の場合、(38) のように、語彙意味表示 (lexical semantic representation) のレベルで外項の束縛を受ける。このレベルの違いが *by*-PP の共起可能性に関わるというのが、彼女らの基本的な考えである。

(38) Intransitive *break*

LSR	[[<i>x</i> DO-SOMETHING] CAUSE [<i>y</i> BECOME <i>BROKEN</i>]]
	↓
Lexical binding	∅
Linking rules	↓
Argument structure	< <i>y</i> >

したがって、受動態では、束縛された外項が統語上は直接表示されないものの項構造上は存在しているため、(39) のような *by*-PP が認可されるが、反使役では、束縛された外項が項構造にリンクされないため、(40) のような *by*-PP が決して認可されないという。

- (39) a. The ship was sunk by Bill.
 b. The window was broken by Pat.
- (40) a. *The ship sank by Bill.
 b. *The window broke by Pat.

このような Levin and Rappaport Hovav (1995) の枠組に対して、Alexiadou et al. (2006: 195) は、要約すれば以下のような批判を展開している。反使役においては、確かに (40) にある通り *by*-PP は認可されないが、(36) のように *from*-PP が認可される例は存在する。それゆえ、必ずしも語彙意味表示のレベルで一概に外項が束縛され反使役が派生されるとは言えないのではないかということである。さらに、Alexiadou et al. (2006: 195-197) は、英語に限らずドイツ語でも同様の前置詞句による修飾の問題が観察されると述べている。

まず前提として、ドイツ語では、動作主は前置詞 *von* と、道具は *mit* と、原因や使役的事象は *durch* と結び付く。使役動詞の場合、これらの主題役割を持つ外項はすべて主語位置に現れうる。例えば、(41) では、動作主 *Hans*、原因 *der Erdstoß* ‘the earth tremor’ が、(42a) では、使役的事象 *das Rauchen von Zigaretten* ‘the smoking of cigarettes’ が、(43a) では、道具 *die Medizin* ‘the medicine’ が、それぞれ主語として実現されている。また、使役的事象や道

具を表す外項は、*durch-PP* や *mit-PP* の形で動作主主語と共起することができる (cf. (42b), (43b))。

(41) {Hans / Der Erdstoß} zerbrach die Vase.

Hans / the earth-tremor broke the vase

‘Hans / the earth tremor broke the vase.’

(42) a. Das Rauchen von Zigaretten verschlechtert die Luftqualität im Raum.

the smoking of cigarettes worsens the air-quality in-the room

‘Smoking cigarettes worsens the air quality in the room.’

b. Peter verschlechtert die Luftqualität im Raum durch das Rauchen

Peter worsens the air-quality in-the room through the smoking

von Zigaretten.

of cigarettes

‘Peter worsens the air quality in the room by smoking cigarettes.’

(43) a. Die Medizin heilt den Patienten.

the medicine cures the patient

‘The medicine cures the patient.’

b. Der Arzt heilt den Patienten mit der Medizin.

the doctor cures the patient with the medicine

‘The doctor cures the patient with the medicine.’

また、受動態では、これらの主題役割はすべて *PP* として実現可能である。

(44) Die Vase wurde {von Peter / durch den Erdstoß / mit dem Hammer}

the vase was by Peter through the earth-tremor with the hammer

zerbrochen.

broken

‘The vase was broken by Peter / by the earth tremor / with the hammer.’

(45) Die Luftqualität im Raum wird durch das Rauchen von Zigaretten

the air-quality in-the room is through the smoking of cigarettes

verschlechtert.

worsened

‘The air quality in the room is worsened by the smoking of cigarettes.’

一方、反使役では、IA と RA という形式の違いとは無関係に、動作主の *von*-PP や道具の *mit*-PP は一律に排除され (cf. (46))、原因や使役的事象の *durch*-PP は一律に認可される (cf. (47), (48))。したがって、ドイツ語においても、反使役における (47) や (48) のような *durch*-PP の認可が Levin and Rappaport Hovav (1995) の派生的アプローチにとって問題になると Alexiadou et al. (2006) は考えている。

(46) a. Die Vase zerbrach {*von Peter / *mit dem Hammer}.

the vase broke by Peter with the hammer

‘The vase broke {*by Peter / *with the hammer}.’

b. Die Tür öffnete sich {*von Peter / *mit dem Schlüssel}.

the door opened REFL by Peter with the hammer

‘The door opened {*by Peter / *with the hammer}.’

(47) a. Die Vase zerbrach durch ein Erdbeben.

the vase broke through an earthquake

‘The vase broke through an earthquake.’

b. Die Tür öffnete sich durch einen Windstoß.

the door opened REFL through a blast-of-wind

‘The door opened through a blast of wind.’

(48) Die Luftqualität im Raum verschlechtert sich durch das Rauchen

the air-quality in-the room worsened REFL through the smoking

von Zigaretten massiv.

of cigarettes severely

‘The air quality in the room worsened through the smoking of cigarettes severely.’

ここで、本当に Alexiadou et al. (2006) の主張する通り、英語の *from*-PP やドイツ語の *durch*-PP の出現が反使役動詞の語彙意味表示上での外項の束縛を否定する根拠になりうるのかについて考えてみたい。初めに、ドイツ語に関して言えば、原因を表す *durch*-PP は、対応する使役他動詞を持たない *zerfallen* ‘collapse’, *zerplatzen* ‘burst’, *verfaulen* ‘rot’ などの非対格動詞とも整合する (大矢 2008: 221)。

(49) a. Das Kartenhaus zerfiel durch den Wind.

the cards house collapsed through the wind

‘The card house collapsed through the wind.’

b. Das Ballon zerplatzte durch den Überdruck.

the balloon burst through the excess pressure

‘The balloon burst through the excess pressure.’

c. Der Apfel verfaulte durch die Feuchtigkeit.

the apple rotted through the moisture

‘The apple rotted through the moisture.’

先述の通り、これらの非対格動詞は、Levin and Rappaport Hovav (1995) の考えでは、意味的に内的使役として特徴づけられる。つまり、トランプの家の崩壊や風船の破裂やリンゴの腐敗という出来事は、その個体固有の属性に従って展開すると考えられる。したがって、彼女らの枠組では、(49) の動詞は外項を含む使役他動詞の語彙意味表示を基盤としそこから派生されるのではなく、初めから内的使役の独立した表示を持つものと考えられる (cf. (27a))。そして、(49) のような例に *durch-PP* が生起することから、この前置詞句は語彙意味構造や項構造上の外項の存在とは無関係に出現すると想定される。

さらに、Alexiadou et al. (2006) は、原因 (cause) 項はドイツ語において専ら *durch-PP* で表されるとしていたが、実際にはこの項は *von-PP* と結び付くこともある。例えば、Schäfer (2008: 53) は Härtl (2003) の研究に依拠して、次のような受動文を示している。ここでは、動作主の *Peter* だけでなく状態変化の原因となる *Wind* も *von-PP* で表されている。

(50) Das Segel wurde {von Peter / vom Wind} zerrissen.

the sail was by Peter / by-the wind torn

‘The sail was torn {by Peter / by the wind}.’

(51) Die Tür wurde {von Peter / vom Wind} geöffnet.

the door was by Peter / by-the wind opened

‘The door was opened {by Peter / by the wind}.’

ただし、この *von-PP* は原因項を選択する場合であっても反使役動詞となじまないことを Schäfer (2008: 54) は指摘している。例えば、(52) の反使役動詞 *zerreißen* ‘tear’ と *sich öffnen* ‘open’ では、IA と RA という形態的な違いと無関係に、*von-PP* が一律に認可されない。

(52) a. Das Segel zerriss {*von Peter / *vom Wind}.

the sail tore by Peter / by-the wind

‘The sail tore {*by Peter / *by the wind}.’

b. Die Tür öffnete sich {*von Peter / *vom Wind}.

the door opened REFL by Peter / by-the wind

‘The door opened {*by Peter / *by the wind}.’

したがって、ドイツ語で項構造上の非明示的な外項を統語構造上に実現させる機能を持つのは *von-PP* であり、*durch-PP* ではないと考えられる。そして、(52) でこの前置詞句が生起しないということは、反使役動詞においては、やはり項構造より前のレベルで外項が束縛されていると解釈できるのではないだろうか。よって、原因項を選択する *durch-PP* が反使役動詞と共起するからといって、それが Levin and Rappaport Hovav (1995) の派生的アプローチに対する強力な反論となることはないように思われる。さらに、ドイツ語の *durch-PP* と同様に、英語の *from-PP* も、語彙意味構造や項構造の外項の存在とは無関係であると考えられる。なぜなら、*from-PP* によって原因や使役的事象が表されるとき、この前置詞句は (53) のような動詞とも共起するからである。よって、これらの前置詞句の生起を根拠として派生的アプローチを批判することは妥当でないと言いうことができるだろう。

(53) a. She is tired {from overwork / from running up the slope}.

b. She became deaf from the explosion.

3.2.2.2. 動詞制限と選択制限の言語間の差異

続いて、Alexiadou et al. (2006) は、英語やドイツ語とは異なる振る舞いを示す言語として、現代ギリシア語の反使役動詞を取り上げている。彼女らの説明によれば、ギリシア語では英語やドイツ語で観察されないような反使役の表現が成立するという。

初めに、ギリシア語の反使役の特徴について簡単に確認しておきたい。Alexiadou et al. (2006: 197) によれば、ギリシア語の場合、受動態では動詞に非能動 (non-active; NACT) の形態が付加される。以下はすべて受動態の例である。

- (54) a. *Ta mallia mu stegnothikan {apo tin komotria / me to pistolaki}*.
 the hair my dried-NACT by the hairdresser / with the hair-dryer
 ‘My hair was dried {by the hairdresser / with the hair dryer}.’
- b. [?]**Ta ruxa stegnothikan {apo ton ilio / me ton ilio}*.
 the clothes dried-NACT by the sun / with the sun
[?]*‘The clothes were dried by the sun.’
- c. [?]**Ta ruxa stegnothikan me toaploma ston ilio*.
 the clothes dried-NACT with the hanging-up under the sun
[?]*‘The clothes were dried by hanging them up under the sun.’

ここで、主題役割と前置詞句の関係について見てみると、(54a) の受動態では、動作主項 *apo tin komotria* ‘by the hairdresser’ や道具項 *me to pistolaki* ‘with the hair dryer’ が PP として現れていることがわかる。しかし、(54b) にあるように、原因項の *apo ton ilio* ‘by the sun’ や *me ton ilio* ‘with the sun’ は、PP として実現されない。また、(54c) に示されている通り、*me toaploma ston ilio* ‘by hanging them up under the sun’ のような使役的事象も、PP として明示することができない。したがって、ギリシア語の受動態では、動作主と道具の主題役割を持つ項を PP として示すことはできるが、原因と使役的事象の項を PP で表すことはできないとすることができる。

一方、反使役には、形態的に異なる 2 種類のタイプが確認される (cf. Schäfer 2008: 129)。すなわち、能動 (active; ACT) の形態が付加されるものと、非能動の形態が付加されるものである。そして、このような形態上の違いとは無関係に、ギリシア語の反使役は一貫して動作主の PP を容認せず、道具、原因、使役的事象の PP を容認すると、Alexiadou et al. (2006) は述べている。具体的には、以下の (55)-(58) の例はすべて反使役を表すと言われているが、(55) のように、動作主項の *apo tin komotria* ‘by the hairdresser’ や *apo tin ipalilo* ‘by the employee’ は PP として容認されない。これに対し、(56) の *me to pistolaki* ‘with the hair dryer’ や *me to psalidi* ‘with the scissors’ のような道具項、(57) の *apo / me ton ilio* ‘by / with the sun’ や *apo / me tin pirkagia* ‘by / with the fire’ のような原因項、および (58) の *me to aploma ston ilio* ‘with the hanging up under the sun’ や *me tin afksisi tis igrasias* ‘with the rising of the humidity’ のような使役的事象の項は、いずれも PP として実現されるという。

- (55) a. *Ta mallia mu stegnosan apo tin komotria.
 the hair my dried-ACT by the hairdresser
 *‘My hair dried by the hairdresser.’
- b. (*) To hirografo katastrafike apo tin ipalilo.
 the manuscript destroyed-NACT by the employee
 (*)‘The manuscript destroyed by the employee.’
- (56) a. Ta mallia mu stegnosan me to pistolaki.
 the hair my dried-ACT with the hair-dryer
 ‘My hair dried with the hair dryer.’
- b. To pani skistike me to psalidi.
 the cloth tore-NACT with the scissors
 ‘The clothes tore with the scissors.’
- (57) a. Ta ruxa stegnosan {apo / me} ton ilio.
 the clothes dried-ACT by / with the sun
 ‘The clothes dried by the sun.’
- b. To hirografo katastrafike {apo / me} tin pirkagia.
 the manuscript destroyed-NACT by / with the fire
 ‘The manuscript got destroyed by the fire.’
- (58) a. Ta ruxa stegnosan me to aploma ston ilio.
 the clothes dried-ACT with the hanging-up under the sun
 ‘The clothes dried with the hanging up under the sun.’
- b. Me tin afksisi tis igrasias to hirografo katastrafike.
 with the rising the humidity-GEN the manuscript destroyed-NACT
 ‘The manuscript got destroyed with the rising of the humidity.’

ここで Alexiadou et al. (2006: 200) は、英語やドイツ語では *destroy* や *kill* のような動詞を反使役化できないことを指摘している。つまり、(59a) の使役動詞 *destroy* に対応する反使役の表現は成立しない。同様に、(60a) の使役動詞 *kill* の反使役形も非文法的であると判断される。

- (59) a. {John / the fire / the bomb} destroyed the manuscript.
 b. *The manuscript destroyed.
- (60) a. {John / the fire / the bomb} killed Mary.
 b. *Mary killed.

これらの言語とは対照的に、ギリシア語では、*destroy* や *kill* に意味的に対応する使役動詞を反使役化することが可能であるという。具体的には、(61b) と (62b) のような例である。

(61) a. {O Petros / i fotia / i vomva} katestrepse to paketo.

Peter / the fire / the bomb destroyed the package

‘{Peter / the fire / the bomb} destroyed the package.’

b. To paketo katastrafike {apo / me} tin fotia.

the package destroyed-NACT by / with the fire

‘The package destroyed {by / with} the fire.’

(62) a. {O Petros / o sismos / i vomva} skotose ti Maria.

Peter / the earthquake / the bomb killed the Mary

‘{Peter / the earthquake / the bomb} killed Mary.’

b. I Maria skotothike {apo / me} ton sismo.

the Mary killed-NACT by / with the earthquake

‘Mary killed {by / with} the earthquake.’

(61b) と (62b) では、動詞に非能動 (NACT) の形態が付加されているが、原因の主題役割を持つ項が PP で共起しうるため、これらの例は受動態ではなく反使役のカテゴリーに属するというのが、Alexiadou et al. (2006) の考えである (cf. (54))。

さらに、3.2.1.2 でも既出の通り、英語やドイツ語では、反使役動詞 *break* の主語として *promise*, *contract*, *world record* などの名詞が容認されないが (cf. (63)-(64))、ギリシア語では、このような主語が *break* に意味的に対応する反使役動詞の形式に適合するという (cf. (65))。

(63) a. He broke {his promise / the contract / the world record}.

b. *{His promise / the contract / the world record} broke.

(64) a. Er brach {sein Versprechen / den Weltrekord}.

he broke his promise / the world record

‘He broke {his promise/ the world record}.’

b. *{Sein Versprechen / der Weltrekord} brach.

his promise the world record broke

*‘{His promise / the world record} broke.’

(65) a. O athlitis espase {to simvolaio / to pagkosmio record}.

the athlete broke the contract / the world record

‘The athlete broke {the contract / the world record}.’

b. {To simvolaio / to pagkosmio record} espase.

the contract / the world record broke-ACT

‘{The contract / the world record} broke.’

Alexiadou et al. (2006: 200) は、Levin and Rappaport Hovav (1995) らの派生的アプローチでは上記の (61b), (62b) および (65b) の例の出現を予測することができないと述べている。そして、代案として、彼女らは新たな枠組みを提案している。その基本となっているのは、状態変化動詞を統語的に Voice と CAUS の構成素に分解 (decompose) するという考えである。すなわち、Alexiadou et al. (2006) によれば、すべての状態変化動詞は (66) のような構造を持つとされる。

(66) [Voice [CAUS [Root]]]

ここで CAUS は、使役事象と動詞の Root で表示された対象物の結果状態を使役的關係で結ぶという働きを担っている。Voice は外項を導く要素であり、動作主性 (agentivity) や様態 (manner) に関する素性を有している。具体的には、動作主的な Voice である Voice [+AG] が存在するときには、外項として動作主 (と道具) が認可され、非動作主的な Voice である Voice [-AG] が存在するときには、原因が認可されるという。

(67) a. Voice [+AG] : agent, (instrument)

b. Voice [-AG] : cause

Voice の主要部が能動 (active) である場合には、それに導かれる主題役割はその指定部 (specifier) に実現される。Voice 主要部が受動 (passive) である場合には、主題役割は非明示的 (implicit) であるとしている。

先に観察した反使役動詞の通言語的な差異は、この Voice の扱いの違いに基づく Alexiadou et al. (2006: 202) は論じている。つまり、反使役では、Voice は完全に欠落していてもよいし、Voice [-AG] として実現されてもよいという。具体的には、英語やドイツ語のような言語は (68a) のように、ギリシア語のような言語は (68b) のように特徴づけられる。すなわち、受動態において Voice が [-AG] として実現されうるという英語やドイツ語では、

反使役に Voice が生じてはならないのに対し、受動態で Voice が必ず [+AG] として実現されると想定されるギリシア語のような言語では、反使役に Voice [-AG] が生じてよいとの主張である。

- (68) a. In languages where the Voice [-AG] head is possible in passives, anticausatives must appear without Voice.
 b. In a language where the passive is necessarily agentive, the Voice [-AG] head is free to be used in an anticausative interpretation.

Alexiadou et al. (2006: 202)

この関係をまとめると (69) のようになる。

(69)

	English, German	Greek
Passive	[+AG] or [-AG]	[+AG]
Anticausative	No Voice	No Voice or [-AG]

Alexiadou et al. (2006) は、使役交替の方向に特別な指定はなく、使役と反使役のどちらも他方からの派生によって作られるわけではないと仮定している。そのような意味において、彼女らの反使役分析は、非派生的アプローチと特徴づけられる。

さらに Alexiadou et al. (2006: 202) は、(66) の動詞の Root が、その百科辞典的な意味によって、(70) のような 4 つの異なるクラスに分類されると述べている。

- (70) √ agentive (*murder, assassinate*)
 √ internally caused (*blossom, wilt*)
 √ externally caused (*destroy, kill*)
 √ cause unspecified (*break, open*)

そして、それぞれの Root は、(71) のような形で CAUS や Voice と結び付くという (cf. Schäfer 2008: 147)。

- (71) a. *murder*: (Voice [+AG] (CAUS ($\sqrt{\text{agentive}} + \text{DP}_{\text{theme}}$)))
 b. *blossom*: (CAUS ($\sqrt{\text{internally caused}} + \text{DP}_{\text{theme}}$))
 c. *destroy*: (Voice [+AG] (CAUS ($\sqrt{\text{externally caused}} + \text{DP}_{\text{theme}}$)))
 c'. *destroy*: (Voice [-AG] (CAUS ($\sqrt{\text{externally caused}} + \text{DP}_{\text{theme}}$)))
 d. *break_{caus}*: (Voice [-AG] (CAUS ($\sqrt{\text{cause unspecified}} + \text{DP}_{\text{theme}}$)))
 d'. *break_{antica}*: (CAUS ($\sqrt{\text{cause unspecified}} + \text{DP}_{\text{theme}}$))

ここでまず注目すべきは、(71b) の *blossom* や *wilt* のような内的使役 (*internally caused*) の非対格動詞である。Alexiadou et al. (2006: 203) は、これらの述語にも、構造的に CAUS が存在すると考えている (ただし、外項を導入する Voice はここでは現れない)。CAUS を想定する根拠となっているのは、(72) のような *from-PP* の生起である。彼女らは、このような原因を項に取る PP は、状態変化の間接的な使役主 (*indirect causer*) を表すと想定し、(72) のような非対格動詞も *causative* と特徴づけられると主張している。

(72) The flowers wilted from the heat.

また、上の (71c) では、外的使役 (*externally caused*) の *destroy* や *kill* のような述語の表示が 2 種類あるが、これは、先に示した言語間の違いを反映していると Alexiadou et al. (2006: 203) は述べている。つまり、英語やドイツ語など多くの言語では、このタイプの動詞から反使役を作ることができないが、ギリシア語ではそれが許される。そこで彼女らは、外的使役の Root が Voice [+AG] としか結び付かない場合 (英語、ドイツ語) と、Voice [-AG] と結び付く場合 (ギリシア語) の 2 つを想定しているわけである。そして、最後に (71d) の *break* や *open* のような動詞では、使役のタイプに指定がなく、外項とともに現れることも (cf. (71d)), 外項なしに現れることも可能であるという (cf. (71d')). このように、Alexiadou et al. (2006: 203) は、Voice [-AG] の有無によって、使役動詞と反使役動詞を意味構造上区別することを提案している。

3.3. Alexiadou et al. (2006) の問題点

ここまで Alexiadou et al. (2006) の非派生的アプローチを詳しく見てきたが、彼女らの分析には問題がないわけではないように思われる。確かに、彼女らの言う通り、単一のアプローチで多言語の使役交替現象を矛盾なく説明しようとするには限界がある。Levin and Rappaport Hovav (1995) や Reinhart (2002) の派生的アプローチに基づいて、形態的特徴が原則的に出現しない英語のような言語の使役交替を分析するのであればよいが、他の言語では何らかの形態的なマーキングが現れるのが普通であるため、通言語的な視野でより説得力のある分析を目指すためには、これらのアプローチに何らかの修正を加えることが必要であろう。ただし、使役交替における派生関係までも否定するのは適切でないように思われる。例えば、3.2.1.1 で見たように、Alexiadou et al. (2006: 191) は派生的アプローチへの反論として、(73) のような日本語の *atum-aru* と *atum-eru* ‘gather’ のペアを取り上げ、反使役形にも使役形にも接辞が付加されているため、派生の方向を認定できないとしていた。しかし、6.2.1 で後述するように、実際にはこのタイプの動詞も歴史的に観察して使役から反使役への派生として分析するのが、日本語学の分野では一般的である (西尾 1954)。

(73) Japanese:	<i>atum-aru</i>	‘gather’ (<i>intr.</i>)
	<i>atum-eru</i>	‘gather’ (<i>tr.</i>)

また、Alexiadou et al. (2006) が Levin and Rappaport Hovav (1995) らの派生的アプローチに異議を唱えるもうひとつの根拠となっていたのは、(74)-(75) のようにギリシア語の *destroy* や *kill* などの動詞が反使役化されるという観察であったが、これらの動詞が本当に反使役のステイタスを持つものとして分析されるのかについては、疑念の余地があるように思われる。

(74) a. {O Petros / i fotia / i vomva} katestrepse to paketo.

Peter / the fire / the bomb destroyed the parcel

‘{Peter / the fire / the bomb} destroyed the parcel.’

b. To paketo katastrafike {apo / me} tin fotia.

the parcel destroyed-NACT by / with the fire

‘The parcel destroyed {by / with} the fire.’

(75) a. {O Petros / o sismos / i vomva} skotose ti Maria.

Peter / the earthquake / the bomb killed the Mary

‘{Peter / the earthquake / the bomb} killed Mary.’

b. I Maria skotothike {apo / me} ton sismo.

the Mary killed-NACT {by / with} the earthquake

‘Mary killed {by / with} the earthquake.’

実際に Alexiadou et al. (2006: 205) は、(76) のように、このタイプの動詞が *by itself* 句と共起しないことを確認している。通常の反使役動詞であれば、この句と問題なく適合するはずである。

(76) To paketo katastrafike (*apo mono tu).

the parcel destroyed-NACT by alone its

*‘The parcel destroyed by itself.’

また、(74b) と (75b) の動詞には、受動態と同様に非能動 (non-active; NACT) の接辞が付加されていることにも注目したい。つまり、このタイプの特異な反使役は、受動との親和性を示しており、純粋な反使役とは一線を画すると考えたほうがよいのではないだろうか。もしそうであれば、変則的な反使役の表現を取り上げて派生的アプローチを否定するのは、少々不適切であるという印象が拭えない。

以下、Alexiadou et al. (2006) の分析の更なる問題点を具体的に指摘する。

3.3.1. 動詞の Root

Alexiadou et al. (2006: 202) は、動詞の百科辞典的な意味から、以下のよう
な 4 つの Root が設定できるとしていた。

(77) √ agentive (murder, assassinate)

√ internally caused (blossom, wilt)

√ externally caused (destroy, kill)

√ cause unspecified (break, open)

ここで彼女らは、Levin and Rappaport Hovav (1995) の論考に基づいて、外的使役 (externally caused) と内的使役 (internally caused) の概念を Root の分類に援用しているが、まず注意したいのは、全く同一の意味で使っているわけ

ではないということである。Levin and Rappaport Hovav (1995) は、使役交替が起こるための前提条件として、外的使役という概念を定義づけていた。具体的には、Levin and Rappaport Hovav (1995: 92) は、以下のように述べている。

(...) externally caused verbs by their very nature imply the existence of an ‘external cause’ with immediate control over bringing about the eventuality described by the verb: an agent, an instrument, a natural force, or a circumstance. Thus, consider the verb *break*. Something breaks because of the existence of an external cause; something does not break solely because of its own properties (although it is true that an entity must have certain properties in order for it to be breakable).

つまり、*break* のような動詞で表される出来事は、その生起を外的使役が直接コントロールすると考えられるという。この外的使役というのは、具体的には動作主、道具、自然現象（原因）、状況（使役的事象）を指している。このような意味的特性を持つ自動詞が対応する他動詞から先述の語彙的束縛という操作によって派生されるというのが、Levin and Rappaport Hovav (1995) の基本的な考え方である。

これに対して、Alexiadou et al. (2006) の仮定する (77) の Root に基づくと、このような意味的特性を持つ動詞は、 $\sqrt{\text{externally caused}}$ ではなく、 $\sqrt{\text{cause unspecified}}$ として分類されることが明らかである。 $\sqrt{\text{cause unspecified}}$ とは、*break* や *open* のような通常の使役交替動詞において、外項の主題役割（動作主、道具、原因、使役的事象）がある特定のものに限定されないという点を強調して設定された Root である。そして、Alexiadou et al. (2006) の仮定する $\sqrt{\text{externally caused}}$ とは、Levin and Rappaport Hovav (1995) の本来の概念とは異なり、*break* や *open* のような動詞ではなく、*destroy* や *kill* のような動詞に適用される Root である。

しかし、ここで疑問に思うのは、果たして Alexiadou et al. (2006) の想定する (77) の 4 つの Root が動詞の意味に基づいて明確に分類できるものであるのかということである。参考として、以下の文章を示しておきたい。これは、Alexiadou et al. (2006) の著者の一人である Schäfer がその枠組みについて詳述している箇所である (Schäfer 2008: 142)。

Alexiadou et al. (2006) proposes that Roots fall into different classes depending on their encyclopedic semantics. Following the terminology in Levin and Rappaport Hovav (1995), Roots that form verbs that necessarily select for an agent as subject are called ‘agentive’, Roots that form verbs that leave the external argument unrestricted but, nevertheless, do not form anticausatives are called ‘externally caused’, Roots that form verbs which undergo the causative alternation are called ‘cause unspecified’, and Roots that form verbs which can only form inchoatives / anticausatives but not causatives are called ‘internally caused’. (下線は筆者による)

ここでも、動詞はその百科辞典的な意味に基づいて 4 つの Root に分類されると仮定されているにもかかわらず、実際の Root の定義では、その統語的実現のあり方が言及されている。つまり、√externally caused の動詞は反使役を形成しないとか、√cause unspecified の動詞は使役交替を受けるとかいった具合である。このような定義では、本来、動詞の Root がその統語的実現の基礎となるはずであるのに、統語的な振る舞いを見なければ動詞の Root が決定できないという矛盾に陥ってしまうと考えられる。⁷

3.3.2. 前置詞句の認可と内的使役の非対格動詞

最後に、前置詞句の認可の現象を再び取り上げる。Alexiadou et al. (2006) は、受動と反使役における英語、ドイツ語、ギリシア語の前置詞句の出現を観察していた。その観察は (78) のようにまとめられる。この表から分かるように、ギリシア語の受動では、英語やドイツ語とは異なり、原因や使役的事象の *apo-/me-PP* が認可されない。また、ギリシア語の反使役では、英語やドイツ語とは異なり、この PP が認可される（英語やドイツ語では *by-PP* や *von-PP* の形ではなく、*from-PP* や *durch-PP* の形で原因や使役的事象が認可される）。

⁷ この問題点については、Schäfer (2008: 145) でも次のように言及されている。
“One could argue that the distinction between ‘cause-unspecified’ and ‘externally caused’ is only a description of the facts. Both verb classes take agents or causes as subjects, but only the former class of verbs allows anticausative formation. To call those verbs that do not form anticausatives ‘externally caused’ sounds circular. That is, it could be argued that while we started to derive the syntactic behavior of verbs from the encyclopedic semantics of the Root involved we end at a semantic categorization of the Roots which seems to be driven by the syntactic behavior of the verbs.”

(78) 英語、ドイツ語、ギリシア語の前置詞句の認可

	English	German	Greek
Passive	<i>by</i> -PP (agent) <i>with</i> -PP (instrument) <i>by</i> -PP (cause) <i>by</i> -PP (caus. event)	<i>von</i> -PP (agent) <i>mit</i> -PP (instrument) <i>durch</i> -PP (cause) <i>durch</i> -PP (caus. event)	<i>apo</i> -PP (agent) <i>me</i> -PP (instrument)
			*<i>apo</i>-/<i>me</i>-PP (cause) *<i>apo</i>-/<i>me</i>-PP (caus. event)
Anticausative	*<i>by</i>-PP (agent) *<i>with</i>-PP (instrument) *<i>by</i>-PP (cause) *<i>by</i>-PP (caus. event)	*<i>von</i>-PP (agent) *<i>mit</i>-PP (instrument) *<i>von</i>-PP (cause)	*<i>apo</i>-PP (agent)
	<i>from</i> -PP (cause) <i>from</i> -PP (caus. event)	<i>durch</i> -PP (cause) <i>durch</i> -PP (caus. event)	<i>me</i> -PP (instrument) <i>apo</i>-/<i>me</i>-PP (cause) <i>apo</i>-/<i>me</i>-PP (caus. event)

このような言語間の違いを説明するために、Alexiadou et al. (2006) が (79) のような Voice のタイプを想定していることは、すでに 3.2.2.2 で確認した通りである。彼女らの説明では、[+AG] は動作主と道具を外項に認可し、[-AG] は原因を外項に認可する要素ということであった。

(79)	English, German	Greek
Passive	[+AG] or [-AG]	[+AG]
Anticausative	No Voice	No Voice or [-AG]

しかし、ここで根本的な疑問が生じる。英語やドイツ語の反使役に Voice が存在しないのであれば、*from*-PP や *durch*-PP を認可しているものは一体何であろうか。彼女たちが *from*-PP や *durch*-PP も外項であると仮定するのであれば、当然ながらこれらの前置詞句を認可する要素が必要となるだろう。

この疑問に答えるように、Alexiadou et al. (2006: 204) は論考の終わりに、Voice 以外にも前置詞句を認可する要素があると付け加えている。それは、

彼女らの考えによれば、CAUS であるという。具体的には、(80) にまとめた通り、受動の Voice [+AG] は動作主と道具の PP を認可し、受動の Voice [-AG] は原因を項に取る *by*-PP と *von*-PP を認可し、さらに CAUS は *from*-, *durch*-, *apo-/me*-PP を認可すると想定されている。*from*-, *durch*-, *apo-/me*-PP は、CAUS が存在するときのみ、原因としての解釈を受け、CAUS が存在しない場合（名詞句など）には、時や場所や起点など他の解釈になるという。

- (80) a. passive Voice [+AG]: agent and instrument PPs
 b. passive Voice [-AG]: cause *by*-PPs in English, cause *von*-PPs in German
 c. CAUS: causative *from*-, *durch*-, *apo*-, and *me*-PPs

よって、反使役動詞では (81b) のように CAUS が存在すると仮定されているため、これらの前置詞句は原因として解釈されるという。

- (81) a. *break*_{caus}: (Voice [-AG] (CAUS ($\sqrt{\text{cause unspecified + DP}_{\text{theme}}}$)))
 b. *break*_{antic}: (CAUS ($\sqrt{\text{cause unspecified + DP}_{\text{theme}}}$))

ただし、この *from*-PP を認可する CAUS を想定することによって、内的使役 (*internally caused*) の非対格動詞の記述が不自然なものになってしまうことを指摘しておきたい。3.2.2.2 で観察した通り、Alexiadou et al. (2006: 203) は、*blossom* や *wilt* のような状態変化の動因が個体内部にあると考えられる動詞に対しても、(82) のように CAUS の含まれる構造を仮定していた。

- (82) *blossom*: (CAUS ($\sqrt{\text{internally caused + DP}_{\text{theme}}}$))

つまり、このタイプの動詞は、*internally caused* の Root を持つにもかかわらず *causative* であるとされている。これは直感的に考えて矛盾してはいないだろうか。内的使役の場合、外部からの働きかけとは無関係に状態変化が成立するはずである。

彼女らがこのような構造を想定するに至った経緯は次の通りである。3.2.2.1 でも確認した通り、Levin and Rappaport Hovav (1995) は、動作主を項に取る *by*-PP が英語の受動態には現れるが反使役には現れないというよく知られた観察を、外項の束縛が起こるレベルの違いと捉えていた。つまり、受動態では外項の束縛が項構造のレベルで生じるのに対し、反使役では語彙意味表示のレベルで生じるため、この場合、束縛された外項が項構造にリンクされず、*by*-PP が認可されないと説明していた。それに対して、Alexiadou

et al. (2006) は、反使役に *by*-PP は共起しないが *from*-PP は共起するため (cf. (83))、Levin and Rappaport Hovav の分析は説得的ではないと述べていた。

- (83) a. The window {cracked / broke} from the pressure.
b. The window {cracked / broke} from the explosion.

ただし、この反論が有効でないことは、(84) のような例から明らかである。つまり、内的使役の非対格動詞にも *from*-PP が出現可能であることから、この前置詞句は *by*-PP とは異なり項構造上の外項の存在を前提としていないと考えるのが自然である。

- (84) The flowers wilted from the heat.

しかし Alexiadou et al. (2006) は、*from*-PP に *by*-PP と同様の機能を認めるという姿勢を崩さなかったため、*break* のような反使役動詞と同様に、(84) のような内的使役の非対格動詞に対しても、使役構造を仮定する必要性が生じたのだと考えられる。⁸ したがって、Alexiadou et al. (2006) の非対格動詞に関する論述は、英語の *from*-PP を *by*-PP と同等に扱ったという点において、適切でないように思われる。

3.4. 結語

この章では、先行研究において反使役がどのように分析されてきたのかを概観した。反使役動詞の分析には、大きく分けて、派生関係を想定する派生的アプローチと、派生関係を想定しない非派生的アプローチがある。前者の代表として Levin and Rappaport Hovav (1995) を、後者の代表として Alexiadou et al. (2006) を取り上げ、それぞれの主張を検討した。Alexiadou et al. (2006) が批判する通り、Levin and Rappaport Hovav (1995) の派生的アプローチによってすべての言語の使役交替を一律に説明することは不可能であろう。ただし、この章で示したように、派生的アプローチ自体は決して完全に否定されるべきものではなく、分析対象の言語における使役交替の振る

⁸ より詳しく言えば、彼女らの枠組では、(84) のような非対格動詞に出現する *from*-PP を認可する主要部として、可能性としては Voice と CAUS のふたつが挙げられるが、上述の通り Voice は外項を導入する要素であるので、対応する使役他動詞を持たない *wilt* のような内的使役の非対格動詞に Voice を想定することができない。そこで、その代わりに CAUS という主要部を仮定し、これが (84) の *from*-PP を認可すると説明せざるを得なかったのではないかと推測される。

舞いに合わせて、より綿密な分析を目指すことが必要となってくるように思われる。そのような試みの一例として、次章以降では、ドイツ語の使役交替の現象を分析し説明することを目指したい。

第4章 ドイツ語反使役動詞への意味的アプローチ

本章では、先行研究においてドイツ語の反使役動詞の意味的特性がどのように検討されてきたのかを確認する。これまで使役交替を分析する際の主要な論点となってきたのは、ドイツ語の RA と IA の間に有効な意味的相違が認定できるかどうかである。ドイツ語と同様に RA と IA の区別があるイタリア語とフランス語については、動詞の語彙的アスペクトという観点から研究がなされている (Folli 2002, Labelle 1992)。4.1 ではまずその分析を確認し、その後で、同様の説明がドイツ語の反使役動詞には当てはまらないという Schäfer (2008) の論考を取り上げる。さらに、ドイツ語の反使役動詞研究では、自由与格の解釈の違いがしばしば議論されており、その際に、外的な使役主を意味的に含意するか否かという要因が RA と IA の形式的な違いに影響を与えているという仮説が提出されている (McIntyre 2006)。4.2 では、この論点に注目し、Schäfer (2008) と大矢 (2008) による分析を順に確認する。

4.1. 先行研究における IA と RA の意味的説明

4.1.1. 動詞の語彙的アスペクト

第2章で見たように、ドイツ語では反使役動詞が自動詞の形態を取るもの (IA) と再帰動詞の形態を取るもの (RA) に大別されるが、これはもちろんドイツ語だけに特殊なパターンではない。これと同様の区別がいくつかのヨーロッパ言語でも報告されている。

例えば、イタリア語の反使役動詞は、ドイツ語と同様に、形態的に3つのクラスに分類される。すなわち、RA と IA と RIA である。RA は、イタリア語の再帰接辞 (reflexive clitic) である *si* が必ず付加される (1b) のような動詞である。IA は、*si* が決して付加されない (2b) のような動詞である。RIA は、*si* が任意で付加される (3b) のような動詞である。(Folli 2002)

(1) a. Gianni ha chiuso la finestra.

John has closed the window

‘John closed the window.’

b. La finestra *(si) è chiusa.

the window REFL is closed

‘The window closed.’

(2) a. Gianni ha diminuito la temperatura.

John has decreased the temperature

‘John decreased the temperature.’

b. La temperatura (*si) è diminuita.

the temperature REFL is decreased

‘The temperature decreased.’

(3) a. Maria ha fuso il cioccolato.

Mary has melted the chocolate

‘Mary melted the chocolate.’

b. Il cioccolato (si) è fuso.

the chocolate REFL is melted

‘The chocolate melted’

この3つのクラスに属する語彙には、次のようなものがある。(Folli 2002)

(4) RA: *rompere* ‘break’, *alterare* ‘alter’, *svegliare* ‘wake up’, *aprire* ‘open’,
chiudere ‘close’, *estendere* ‘extend’, *sbriciolare* ‘crumble’, *dividere* ‘divide’,
sfilacciare ‘fray’

(5) IA: *diminuire* ‘decrease’, *aumentare* ‘increase’, *invecchiare* ‘age’, *cambiare*
‘change’, *allungare* ‘lengthen’, *guarire* ‘heal’, *migliorare* ‘improve’,
affondare ‘sink’, *bollire* ‘boil’

(6) RIA: *fondere* ‘melt’, *cuocere* ‘cook’, *raffreddare* ‘cool’, *riscaldare* ‘heat’,
asciugare ‘dry’, *congelare* ‘freeze’, *bruciare* ‘burn’, *sgonfiare* ‘deflate’,
ingrandire ‘enlarge’

また、フランス語の反使役動詞にも、同様の3分類が確認できる。フランス語の反使役動詞は、(7)のような再帰接辞の *se* が義務的に付加される RA、(8)のような *se* が決して付加されない IA、(9)のような *se* の付加が任意である RIA に区別される。(Labelle 1992)

(7) L’image *(s’) agrandit.

the picture REFL becomes-wider

‘The picture is becoming wider.’

(8) La neige (*se) fond.

the snow REFL melts

‘The snow is melting.’

(9) La vase (se) casse.

the vase REFL breaks

‘The vase breaks.’

これらのクラスに属する動詞の例は、以下の通りである。(Labelle 1992: 376-377)

(10) RA: *agrandir* ‘become bigger’, *allegger* ‘become lighter’, *améliorer* ‘improve’, *calcifier* ‘calcify’, *civilizer* ‘civilize’, *couvrir* ‘become covered’, *rabougrir* ‘shriveled up’, *assécher* ‘dry out’, *engourdir* ‘numb’

(11) IA: *cuire* ‘cook’, *durcir* ‘harden’, *éclater* ‘burst’, *fonder* ‘melt’, *grandir* ‘grow’, *grossir* ‘grow bigger’, *maigrir* ‘grow thinner’, *moisir* ‘mould’, *pourrir* ‘rot’, *sécher* ‘dry’, *vieillir* ‘age’

(12) RIA: *gonfler* ‘inflate’, *élargir* ‘widen’, *épaissir* ‘thicken’, *noircir* ‘blacken’, *rougir* ‘redden’, *refroidir* ‘cool’, *ramollir* ‘soften’, *caraméliser* ‘caramelize’

これら 2 言語の反使役動詞の形態には、動詞アスペクトの意味上の違いが影響を与えていると、先行研究において主張されている (Labelle 1992, Folli 2002)。具体的には、動詞の有界性 (telicity) の違いである。以下でこの論点を詳しく取り上げる。

イタリア語の反使役動詞に関しては、Folli (2002) が副詞句との共起によるテストに基づいて、アスペクト的な分類を行っている。まず、(13) のようなイタリア語の RA は、事態の終結点を指す *in X adverbial* と共起するとされている。また、このタイプの動詞は、(14) のように結果状態を否定する句が接続されると、容認度が落ちるといふ。このような振る舞いを根拠として、Folli (2002) は RA を有界的 (telic) であると判定している。

(13) La finestra si è chiusa in un secondo.

the window REFL is closed in one second

‘The window closed in one second.’

(14) [?]La finestra si è chiusa, ma non è chiusa.

the window REFL is closed but not is closed

[?]‘The window closed, but it is not closed.’

これに対して、イタリア語の IA は、非有界的 (atelic) な振る舞いを見せるという。例えば、IA は (15) のような事態が進行する期間を示す *for X*

adverbial とも、(16) のような最終的な結果状態へ到達したことを否定する句とも結び付く。したがって、イタリア語の IA はいわゆる *degree achievement* (Dowty 1979) を表すと、Folli (2002) は述べている。

(15) *La temperatura è diminuita per un'ora.*

the temperature is decreased for one hour

'The temperature decreased for one hour.'

(16) *La temperatura è diminuita, ma non è diminuita completamente.*

the temperature is decreased but not is decreased completely.

'The temperature decreased, but is not completely reduced.'

最後に、イタリア語の RIA では、再帰接辞 *si* が現れるか否かによって、テストの結果が異なるという。(17a) のように *si* が付加されていない反使役動詞の例には、*in X adverbial* も *for X adverbial* も共起できる。すなわち、この場合、事態が有界的か非有界的かについての解釈が曖昧である。ただし、(17b) のように、*si* が付加されている反使役動詞の例には、*for X adverbial* が共起できず、事態が有界的であるという解釈しか成り立たない。

(17) a. *Il cioccolato è fuso {per pochi secondi / in pochi secondi}.*

the chocolate is melted for few seconds / in few seconds

b. *Il cioccolato si è fuso {*per pochi secondi / in pochi secondi}.*

the chocolate REFL is melted for few seconds / in few seconds

'The chocolate melted {for a few seconds / in a few seconds}.'

さらに、RIA 動詞では、結果状態の成立を否定する句との共起に関しても、*si* を伴うか否かによって、異なる結果が生じることが報告されている。(18a) のように *si* を伴わない例では、この種の句を加えても文法的な文になるが、(18b) のように *si* を伴う例では、不自然な文と判断されるという。

(18) a. *La casa è bruciata (per un'ora), ma non è bruciata.*

the house is burned (for one hour), but not is burned

'The house burned (for one hour), but is not burnt.'

b. **La casa si è bruciata, ma non è bruciata.*

the house REFL is burned but not is burned

*'The house burned, but is not burnt.'

このように、イタリア語の RIA は、再帰接辞 *si* とともに使われるときには、アスペクト解釈が曖昧になるが、*si* を伴わないときには、IA のような **degree achievement** の解釈となると Folli (2002) は主張している。この観察を表にまとめると、以下の通りである。

(19) Folli (2002) のアスペクト分類

	+ telic	+ telic	+ / - telic	- telic
+ si	RA	RIA ₁		
- si			RIA ₂	IA

次に、フランス語の反使役動詞に関する Labelle (1992) の研究を確認する。彼女はまず、イタリア語とフランス語の反使役動詞の振る舞いの違いが完了の助動詞選択に見られると述べている。つまり、イタリア語では、再帰接辞を伴う反使役動詞 (RA) も、再帰接辞を伴わない反使役動詞 (IA) も、*essere* ‘be’ を完了の助動詞に選択するが、フランス語では、再帰接辞を伴う反使役動詞 (RA) のみが *être* ‘be’ を選択し、再帰接辞を伴わない反使役動詞 (IA) は *avoir* ‘have’ を選択するという。このような完了の助動詞選択のパターンを根拠として、Labelle (1992) は、イタリア語の反使役動詞はすべて非対格 (unaccusative) であるが、フランス語の反使役動詞は、再帰接辞を伴う RA のみが非対格であり、再帰接辞を伴わない IA は非能格 (unergative) であるという考えを示している。

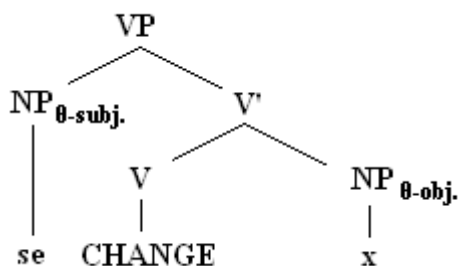
(20) Labelle (1992) の主張

Italian	RA: unaccusative	IA: unaccusative
French	RA: unaccusative	IA: unergative

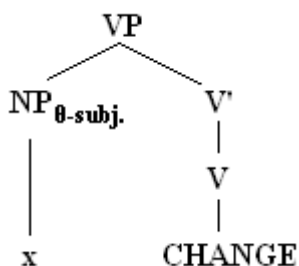
Labelle (1992) は、フランス語の反使役動詞に対し、(21) のような異なる統語構造を想定している。さらに、この統語構造上の違いに付随して、アスペクト解釈における違いが生じると述べている。すなわち、彼女は、フランス語の RA の場合、(21a) のように、唯一の項が目的語位置にあるという非対格の統語構造を基礎とするため、出来事の最終状態ないし最終結果に焦点が置かれるのに対し、IA の場合、(21b) のように、統語上唯一の項が外項位置にあるという非能格の構造を基礎とするため、出来事の経過に焦点が置かれると論じている。⁹

⁹ ただし、Schäfer (2008: 22) が指摘しているように、Labelle の主張は RA と IA のアスペクト上の違いを厳密に動詞の有界性・非有界性と結びつけるものではない。つ

(21) a. unaccusative



b. unergative



Labelle (1992: 396) は、RA と IA のアスペクト解釈の違いを示すために、次のようなテストを用いている。初めに挙げられるのは、*mettre quelque chose à ...* ‘put something on / up to ...’ という表現を埋め込むことができるかどうかである。この表現は出来事の開始の時点に焦点を置くとされている。動詞 *caraméliser* ‘caramelize’ は、(22) のように IA と RA の両用法を備えているため、RIA に分類されるが、この動詞に上のテストを適用すると、(23) のように IA のコンテキストでのみ適切な文として判断される。

(22) a. Le sucre caramélise.

the sugar caramelize

b. Le sucre se caramélise.

the sugar REFL caramelize

‘The sugar is turning into caramel.’

(23) a. Le cuisinier a mis le sucre à caraméliser.

the cook has put the sugar to caramelize

b. *Le cuisinier a mis le sucre à se caraméliser.

the cook has put the sugar to REFL caramelize

‘The cook put the sugar on to caramelize.’

まり、フランス語の反使役動詞にアスペクト解釈の違いがあると Labelle (1992) が考えているとしても、それは Folli (2002) のイタリア語反使役動詞の一般化のような強い主張とは異なる。

Labelle (1992: 396-397) によれば、RA の場合、「対象物が最終状態に移行する」ところに特別な関心と強調が向けられており、このアスペクト的な解釈が、*mettre quelque chose à* という表現と矛盾するという。一方、IA の場合、アスペクト上そのような強調が存在しないため、*mettre quelque chose à* が認可されうるという。さらに、Labelle (1992) はいくつかのテストを試みているが、これらはいずれもフランス語の RA と IA をはっきりと区別するものではない。例えば、*in X adverbial* によるテストでは、このふたつの形態上のカテゴリーを矛盾なく区別することができない。ただし、フランス語においては、RA と IA の違い自体が実はそれほど明確なものではなく、IA として用いられるのが一般的である動詞であっても、コンテクストによっては RA として使われることがあるという。例えば、IA の *durcir* ‘harden’ と *cuire* ‘cook’ は、再帰接辞 *se* なしで用いられるのが普通であり、とりわけ、(24b) や (26b) のように、*for X adverbial* が文中に現れる場合には、再帰接辞 *se* は絶対に付加されないが、最終状態に焦点を置く *in X adverbial* が現れる場合には、例外的に *se* が付加されうるという (cf. (25b), (27b))。

(24) a. Le ciment a durci pendant 3 heures.

the cement has hardened during 3 hours

b. *²Le ciment s’est durci pendant 3 heures.

the cement REFL is hardened during 3 hours

‘The cement has hardened for 3 hours.’

(25) a. Les joints de caoutchouc durcissaient en quelques années.

the joints of caoutchouc hardened in few years

b. Les joints de caoutchouc se durcissaient en quelques années.

the joints of caoutchouc REFL hardened in few years

‘The rubber joints were hardening in a few years.’

(26) a. Le poulet a cuit pendant 3 heures.

the chicken has cooked for 3 hours

b. *Le poulet s’est cuit pendant 3 heures.

the chicken REFL is cooked for 3 hours

‘The chicken cooked for 3 hours.’

(27) a. Le poulet a cuit en très exactement 30 minutes.

the chicken has cooked in very exactly 30 minutes

b. ³Le poulet s’est cuit en très exactement 30 minutes.

the chicken REFL is cooked in very exactly 30 minutes

‘The chicken cooked / got cooked in exactly 30 minutes.’

このように、Labelle (1992) は、フランス語の反使役動詞においては、最終状態に焦点が置かれているか否かという意味的要因に基づいて、再帰接辞の生起の可否が決定されると主張している。¹⁰

さて、反使役動詞が同じように RA, IA, RIA に3分類されるドイツ語においても、同様の動詞の語彙的アスペクトによる説明が当てはまるだろうか。Schäfer (2008) は、この点に関して懐疑的な立場を取っている。ここで、Schäfer (2008) の説明に基づきながら、ドイツ語反使役動詞の形態的特性とアスペクト解釈との相関関係について考察する。まず、(28) の RIA の *abkühlen* ‘cool’ を見てみよう。この動詞は、Schäfer (2008) によれば、RA の用法でも IA の用法でも、*degree achievement* の振る舞いを示すという。

(28) a. Das Wasser kühlt sich ab.

b. Das Wasser kühlt ab.

the water cools REFL down

‘The water cools down.’

(29) a. Das Wasser kühlte sich eine Stunde lang ab.

b. Das Wasser kühlte eine Stunde lang ab.

the water cooled REFL one hour long down

‘The water cooled down for an hour.’

(30) a. Das Wasser kühlte sich in einer Stunde ab.

b. Das Wasser kühlte in einer Stunde ab.

the water cooled REFL in one hour down

‘The water cooled down in one hour.’

(31) a. Das Wasser kühlte sich auf unter 10 Grad ab.

b. Das Wasser kühlte auf unter 10 Grad ab.

the water cooled REFL at under 10 degree down

‘The water cooled down to less than ten degrees.’

(32) a. Das Wasser kühlte sich ab, wurde aber nicht wirklich kalt.

b. Das Wasser kühlte ab, wurde aber nicht wirklich kalt.

the water cooled REFL down became but not really cold

‘The water cooled down but did not become really cold.’

Schäfer (2008: 37)

¹⁰ ただし、それは単に一定の傾向を捉えているだけであって、すべてのフランス語話者の見解が一致するわけではないと Schäfer (2008: 24) は述べている。

すなわち、どちらの用法も、(29) のような *for X adverbial* や、(30) のような *in X adverbial* によって修飾することができる、(31) のような状態変化の具体的な限界点を設定することができる。また、(32) のように、どちらの用法も状態変化の完結を否定する句と共起できる。それゆえ、*abkühlen* の場合、再帰代名詞 *sich* の出現が反使役動詞のアスペクト解釈に影響を与えることはない (Schäfer (2008: 37) は述べている。¹¹ また、同じことがドイツ語の RA の動詞にも当てはまるという。RA のグループには、*aufrichten* ‘straighten up’ のように、必ず有界的アスペクトを表す動詞も存在するが (cf. (34))、それ以外にも、*verbreiten* ‘spread’ のように、有界的アスペクトと非有界的アスペクトの両方を表しうる動詞、すなわち *degree achievement* の動詞も確認することができる (cf. (36), (37))。

(33) a. Die Pflanze richtet sich auf.

b. *Die Pflanze richtet auf.

the plant straightens REFL up

‘The plant straightens itself up.’

(34) a. Die Pflanze richtete sich in wenigen Augenblicken auf.

the plant straightened REFL in few moments up

‘The plant straightened itself up within a few moments.’

b. *Die Pflanze richtete sich eine Zeit lang auf.

the plant straightened REFL a time long up

*‘The plant straightened itself up for some time.’

(35) a. Das Gerücht verbreitet sich.

the rumour spreads REFL

b. *Das Gerücht verbreitet.

the rumour spreads

‘The rumour spreads.’

(36) a. Das Gerücht verbreitete sich jahrelang.

the rumour spread REFL years-long

‘The rumour spread for years.’

b. Das Gerücht verbreitete sich in kürzester Zeit.

The rumour spread REFL in shortest time

‘The rumour spread in a very short time.’

¹¹ ただし、6.2.4 で述べるように、*abkühlen* ‘cool’ のような RIA 動詞の場合、現在時制や過去時制では、*sich* の出現によるアスペクトの違いが観察されないが、完了時制では、その違いが現れると考えられる。

(37) Das Gerücht verbreitete sich (jahrelang), aber es war nicht wirklich weit
the rumour spread REFL years-long but it was not really wide
verbreitet.

spread

‘The rumour spread for years but it was not really spread far.’

Schäfer (2008: 37-38)

さらに、IAにおいても、同様の振る舞いが観察されると Schäfer (2008: 38) は述べている。ドイツ語の IA には、*umstürzen* ‘fall over’ のように有界的な解釈しか許さないものもあるが (cf. (39), (40))、*austrocknen* ‘dry up’ のような例では、有界的な解釈と並んで、非有界的な解釈も可能であるという (cf. (42), (43))。

(38) a. *Die Leiter stürzt sich um.

b. Die Leiter stürzt um.

the ladder falls REFL over

‘The ladder falls over.’

(39) a. Die Leiter stürzte in wenigen Augenblicken um.

the ladder fell in few moments over

‘The ladder fell over in a few moments.’

b. *Die Leiter stürzte {minutenlang / sekundenlang} um.

the ladder fell minutes-long / seconds-long over

*‘The ladder fell over {for minutes / for seconds}.’

(40) *Die Leiter stürzte um aber sie war nicht (vollständig) umgestürzt.

the ladder fell over but she was not (completely) over-fallen

*‘The ladder fell over but it was not (completely) fallen over.’

(41) *Der See trocknet sich aus.

Der See trocknet aus.

the lake dries REFL up

‘The lake dries up.’

(42) a. Der See trocknete jahrelang aus.

the lake dried years-long up

‘The lake dried up for years.’

b. Der See trocknete in kürzester Zeit aus.

the lake dried in shortest time up

‘The lake dried up in shortest time.’

(43) Der See trocknete seit Jahren aus, aber er war nicht (vollständig)

the lake dried for years up but he was not completely
ausgetrocknet.

up-dried

‘The lake dried up for years but it was not (completely) dried up.’

Schäfer (2008: 38-39)

したがって、ドイツ語の反使役動詞は、イタリア語やフランス語において提案されているような語彙的アスペクトの違いでは説明できないと Schäfer (2008: 39) は結論付けている。

4.1.2. 自由与格の解釈

ドイツ語の反使役動詞が「有界的 / 非有界的な事態」というアスペクトの観点から説明できないとすれば、他にどのような原理を想定することができるだろうか。Schäfer (2008) は、いわゆる自由与格 (*free dative*) の解釈を手掛かりに、RA と IA を意味的に説明する可能性を探っている。まず、(44) の非対格動詞 (*unaccusative verb*) の例を見てみよう。この例には、与格の DP である *ihm* ‘him’ が現れている。この与格 DP は、動詞が直接支配する項ではないため、自由与格と呼ばれる。¹²

(44) a. Das Kartenhaus zerfiel ihm.

The-NOM house of cards fell (apart) him-DAT

b. Ihm ist der Ballon zerplatzt.

him-DAT is the-NOM balloon burst

Schäfer (2008: 43)

同様に、(45) のような IA にも自由与格が現れうる。

(45) a. Die Vase zerbrach dem Hans.

the-NOM vase broke the-DAT Hans

b. Dem Mann ist das Segel zerrissen.

the-DAT man is the sail torn

Schäfer (2008: 42)

¹² この与格は人間を表すものでなければならない。

(44) の非対格動詞でも (45) の IA でも、自由与格に関してふたつの異なる解釈が可能であることがよく知られている (Wegener 1985, Härtl 2003, McIntyre 2006)。1つ目は、与格 DP を文中で表されている出来事の benefactor ないし malefactor として解釈するというものである。例えば、(45a) では、「花瓶が割れ、そのことによってハンスが何らかの（否定的な、あるいは肯定的な）影響を受けた」という内容が表される。与格 DP が受ける影響が否定的であるか肯定的であるかは、問題となる状態変化がどのような性質を持つかによって決まる。つまり、コンテクストや我々の世界知識に基づいて判断される。Schäfer (2008) はこの解釈を「影響読み」(affectedness reading) と呼んでいる。(46) のように、状態変化の原因 *weil der Sturm das Fenster aufdrückte* ‘because the storm forced the window open’ が文中で示されているときには、この解釈のみが可能となる。

(46) Die Vase zerbrach dem Hans, weil der Sturm das Fenster aufdrückte.
 the vase broke the-DAT Hans because the storm the window open-pressed
 ‘The vase broke because the storm forced the window open and Hans is the malefactor of this.’

Schäfer (2008: 43)

自由与格の 2 つ目の解釈は、「非意図的使役主読み」(unintentional causer reading) と呼ばれるものである。この場合、与格 DP は状態変化を非意図的に引き起こす人間として解釈される。(47a) のように、文中に *versehentlich* ‘by mistake, unintentionally’ の類の副詞句が現れたり、(48) のように、使役主の行為をさらに描写する節が付加されたりすると、この 2 つ目の解釈のみが成り立つ。また、*absichtlich* ‘intentionally’ のような副詞が現れると、この解釈は不可能となる (cf. (47b))。

(47) a. Dem Hans zerbrach versehentlich die Vase.
 the-DAT Hans broke unintentionally the vase
 ‘The vase broke and Hans caused this unintentionally.’
 b. *Dem Hans zerbrach absichtlich die Vase.
 the-DAT Hans broke intentionally the vase
 *‘The vase broke and Hans caused this on purpose.’

(48) Dem Hans zerbrach die Vase, weil er sie zu fest auf dem Boden aufsetzte.
 the-DAT Hans broke the vase because he it too heavily on the floor put
 ‘The vase broke and Hans caused this unintentionally because he put it on the floor too heavily.’

Schäfer (2008: 44)

非対格動詞や IA 以外の例を見てみると、使役的状态変化や受動的状態変化が表される (49) のような文では、影響読みだけが可能である。

(49) a. Maria zerbrach dem Hans die Vase.
 Maria broke the-DAT Hans the vase
 ‘Maria broke the vase and Hans is the malefactor of this.’

b. Dem Hans wurde (von Maria) die Vase zerbrochen.
 the-DAT Hans was (by Maria) the vase broken
 ‘The vase was broken (by Maria) and Hans is the malefactor of this.’

Schäfer (2008: 43)

次に RA を観察すると、この場合も自由与格は現れうるが、解釈としては影響読みだけが可能で、非意図的使役主読みは許されないという。

(50) a. Der Maria öffnete sich die Tür.
 the-DAT Maria opened REFL the door
 ‘The door opened and Maria was affected by this.’

*‘Maria unintentionally caused the door to open.’

b. Das Essen kühlte sich ihm ab.
 the meal cooled REFL him-DAT down
 ‘The food cooled down and he was affected by this.’

*‘He unintentionally caused the food to cool down.’

c. Mir hat sich der Wecker verstellt.
 me-DAT has REFL the alarm-clock shifted
 ‘The alarm clock shifted and I was affected by this.’

*‘I unintentionally caused the alarm clock to shift.’

d. Der Menschheit verändert sich das Klima.
 the-DAT mankind changed REFL the climate
 ‘The climate changed and the mankind was affected by this.’

*‘The mankind unintentionally caused the climate to change.’

e. Mir hat sich der Bohrer {verkantet / verbogen}.

me-DAT has REFL the borer canted / bended

‘The borer {canted / bended} and I was affected by this.’

*‘I unintentionally caused the borer to {cant / bend}.’

Schäfer (2008: 45)

さらに、(51) のように *versehentlich* ‘unintentionally’ や *aus Versehen* ‘by mistake’ のような副詞句を自由与格の現れる RA に付加すると、完全に非文法的な文と判断される。すなわち、(47a) で見た通り、この種の副詞句によって与格の影響読みがブロックされる。さらに RA の場合、何らかの理由で非意図的使役主読みが成り立たないため、自由与格に対して可能な解釈が存在しないことになる。

(51) a. Der Maria öffnete sich die Tür aus Versehen.

the-DAT Maria opened REFL the door by mistake

#‘The door opened unintentionally and Maria was affected by this.’

*‘Maria unintentionally caused the door to open’

b. Mir hat sich aus Versehen der Wecker verstellt.

me-DAT has REFL by mistake the alarm-clock shifted

#‘The alarm clock shifted unintentionally and I was affected by this.’

*‘I unintentionally caused the alarm clock to shift.’

c. Der Menschheit veränderte sich aus Versehen das Klima.

the-DAT mankind changed REFL by mistake the climate

#‘The climate changed unintentionally and the mankind was affected by this.’

*‘The mankind unintentionally caused the climate to change.’

d. Dem Tankwart entzündete sich aus Versehen das Benzin.

the-DAT attendant ignited REFL by mistake the petrol

#‘The petrol ignited unintentionally and the attendant was affected by this.’

*‘The attendant unintentionally caused the petrol to ignite.’

e. Mir hat sich aus Versehen der Bohrer {verkantet / verbogen}.

me-DAT has REFL by mistake the borer canted / bended

#‘The borer {canted / bended} and I was affected by this.’

*‘I unintentionally caused the borer to {cant / bend}.’

Schäfer (2008: 46-47)

また RIA の動詞の場合、RA と IA のどちらを使うかは、話者によって判断が異なるが (cf. 2.4)、この両方を利用可能だとする話者に自由与格の解釈を問うと、期待通り IA では影響読みと非意図的使役主読みが現れたのに対して、RA では影響読みだけが現れたという。

(52) a. Das Badewasser ist ihm (versehentlich) abgekühlt.

the bath water is him-DAT (by mistake) cooled-down

b. Das Badewasser hat sich ihm (*versehentlich) abgekühlt.

the bath water has REFL him-DAT (by mistake) cooled-down

(53) a. Dem Indianer sind (versehentlich) die Spuren verwischt.

the-DAT Indian are (by mistake) the traces blurred

b. Dem Indianer haben sich (*versehentlich) die Spuren verwischt.

the-DAT Indian have REFL (by mistake) the traces blurred

Schäfer (2008: 48)

したがって Schäfer (2008: 48) の観察に基づけば、RA と IA の自由与格解釈の違いは形式に基づく確固としたものであり、IA のみが非意図的使役主の解釈を許すということになる。それでは、この解釈の違いは、一体どのように根拠づけられるのであろうか。

ここで、Schäfer (2008) は、McIntyre (2006: 204) による与格解釈に関する仮説を取り上げている。この仮説を以下に引用する。

... a causer role for a dative is ruled out if the clause contains another causer (agent), since a single event cannot have two causers ...

McIntyre (2006) によれば、ひとつの事象に含まれる使役主はひとりだけであるという。そして、もしある事象にすでに使役主の項が存在している場合、与格は（非意図的な）使役主として解釈され得ないという。(49) でも見た通り、反使役動詞を使役動詞や受動構文として用いたときに、与格の非意図的使役主読みがブロックされるが (cf. (54b), (54c), (55b), (55c))、この現象は、McIntyre の仮説に適っている。つまり、これらの構文では、すでに外的な使役主が明示されているため、与格を 2 つ目の独立した使役主と解釈することはできないと考えられる。

- (54) a. Die Vase zerbrach dem Hans (aus Versehen).
 the vase broke the.DAT Hans (by mistake).
 ‘Hans was affected by the vase breaking.’
 ‘Hans unintentionally caused the vase to break.’
- b. Maria zerbrach dem Hans die Vase.
 Maria broke the.DAT Hans the vase
 ‘Hans is affected by Maria breaking the vase.’
 *‘Hans is a causer ...’
- c. Dem Hans wurde die Vase zerbrochen.
 the.DAT Hans was the vase broken
 ‘Hans is affected by the vase being broken.’
 *‘Hans is a causer ...’
- (55) a. Der Maria öffnete sich die Tür (*aus Versehen).
 the.DAT Maria opened REFL the door by mistake
 ‘The door opened unintentionally and Maria was affected by this.’
 *‘Maria unintentionally caused the door to open.’
- b. Maria öffnete dem Hans die Tür.
 Maria opened the.DAT Hans the door
 ‘Hans is affected by Maria opening the door.’
 *‘Hans is a causer ...’
- c. Die Tür wurde dem Hans geöffnet.
 the door was the.DAT Hans opened
 ‘Hans is affected by the door being opened.’
 *‘Hans is a causer ...’

Schäfer (2008: 49-50)

さらに、反使役動詞の場合、(54a) のように、IA だけが与格の使役主読みを認可し、(55a) のように、RA はその読みを認可しないが、この観察は、上記の McIntyre の仮説に従えば、「RA にはすでに使役主の項が存在しているが、IA には存在しない」と説明される。言い換えれば、「RA は使役構造を基盤とするのに対し、IA は使役構造を基盤としない」ということである。Schäfer (2008: 50) は、この考えを以下のようにまとめている（ただし後にこの仮説は破棄される）。

(56) Hypothesis: (to be rejected)

- i. Marked anticausatives [i.e. RA] are (to some extent) semantically causative, i.e., they have a causative meaning component which is not present in unmarked anticausatives [i.e. IA].
- ii. This causative meaning component is related to the presence of the reflexive pronoun. The reflexive pronoun is the (relic of the) external argument of a transitive change-of- state predicate.
- iii. This causative meaning component blocks the causer interpretation of a free dative in the sense of principle above.

([]内は筆者による註である)

このようにドイツ語の RA と IA の間に使役主の観点で意味的な違いを想定するという考えは、実際にこれまでいくつかの研究で検討されており (Haider 1985, 大矢 1997)、ドイツ語の反使役動詞研究においては、一般的なアプローチとされてきた。しかし、最近の研究では、使役主や外項という観点から RA と IA の意味的な違いを論じるのは適切ではないという主張もなされている (Schäfer 2008, 大矢 2008)。例えば大矢 (2008: 119) は、RA の場合でも、自由与格に非意図的使役主の解釈を与えることは可能だとして、以下のような例を挙げている。

- (57) a. Der Pullover hat sich dem Hans versehentlich beim Waschen verzogen.
the pullover has REFL the-DAT Hans by mistake in washing distorted
'Hans unintentionally caused the pullover to go out of shape in washing.'
- b. Der Pullover hat sich ihm versehentlich verfärbt.
the pullover has REFL him-DAT by mistake changed color
'He unintentionally caused the pullover to change color.'

(57a) は、「ハンスは (阻止できたにもかかわらず) 誤ってセーターの形を崩してしまった」という意味であり、(57b) は「彼は (阻止できたにもかかわらず) 誤ってセーターの色を染めてしまった」という意味である。これらの例に基づき、大矢 (2008) は、非意図的使役主読みと RA の形式は完全に相互排他的ではなく、この与格の解釈をもととして、RA と IA の意味上の相違や構造上の相違を論じることは妥当ではないと述べている。また、Schäfer (2008: 52) も、外項の存在を示すとされるいくつかのテストをドイツ語の反使役動詞に適用し、その結果として、RA と IA の間には、統語構造であれ、意味構造であれ、概念構造であれ、言語的な表示のレベルにおい

て、使役の意味要素に関する違いは存在しないと述べている。次節では、使役主の存在に焦点を当て、Schäfer (2008) と大矢 (2008) の論述を詳しく検討する。

4.2. 使役主の存在

先述の通り、Schäfer (2008) は、ドイツ語の RA と IA の間には使役の意味要素という観点において違いがないという立場を取っている。そして、その論述のなかで、Härtl (2003) と Pylkkänen (2008) のテストを援用している。

4.2.1.1 と 4.2.1.2 で、その詳細を確認する。

4.2.1. 前置詞句・副詞句の認可

Härtl (2003) は、ドイツ語の IA には使役の意味要素が存在しないという立場から、いくつかのテストをこのタイプの動詞に対して実施している。Schäfer (2008) はこの Härtl (2003) のテストを用い、IA だけでなく RA にも適用することで、IA と RA が本当に使役の意味要素という観点で異なるのかを検討している。そして、その結果として、IA と RA は等しく使役主の存在を否定する結果を示すと述べている。

まず1つ目のテストは、*von* ‘by’ 句の認可である。第3章でも示した通り、この前置詞句は、ドイツ語において非明示的な外項を統語構造に実現させる機能を持つ。例えば、以下の受動構文において、*von* 句は *Peter* のような動作主 (agent) や *Wind* ‘wind’ のような状態変化の原因 (cause) を明示することが可能である。

(58) Das Segel wurde {von Peter / vom Wind} zerrissen.

the sail was by Peter / by-the wind torn

‘The sail was torn {by Peter / by the wind}.’

(59) Die Tür wurde {von Peter / vom Wind} geöffnet.

the door was by Peter / by-the wind opened

‘The door was opened {by Peter / by the wind}.’

Schäfer (2008: 53)

一方、反使役動詞では、IA においても RA においても、この *von* 句が認可されない。

- (60) a. Das Segel zerriss {*von Peter / *vom Wind}.
 the sail tore by Peter / by-the wind
- b. Die Tür öffnete sich {*von Peter / *vom Wind}.
 the door opened REFL by Peter / by-the wind

Schäfer (2008: 54)

2 つ目のテストは、動作主的な意味を表す副詞 *absichtlich* ‘on purpose’, *leichtsinnigerweise* ‘carelessly’, *gerne* ‘willingly’ や目的句 *um ... zu Infinitiv* ‘in order to’ の認可である。受動構文では、この種の副詞や目的句が認可される。

- (61) a. Das Segel wurde {absichtlich / leichtsinnigerweise / gerne} zerrissen.
 the sail was on purpose / carelessly / willingly torn
 ‘The sail was torn {on purpose / carelessly / willingly}.’
- b. Das Benzin wurde {absichtlich / leichtsinnigerweise / gerne} entzündet.
 the petrol was on purpose / carelessly / willingly ignited
 ‘The petrol was ignited {on purpose / carelessly / willingly}.’
- (62) a. Das Schiff wurde versenkt, um die Versicherung zu kassieren.
 the ship was sunk in-order the insurance to collect
 ‘The ship was sunk in order to collect the insurance.’
- b. Das Benzin wurde entzündet, um die Feinde abzuhalten.
 the petrol was ignited in-order the enemies to-keep-away
 ‘The petrol was ignited in order to keep the enemies away.’

Schäfer (2008: 54)

一方、反使役動詞は、IA の場合も RA の場合も、これらの副詞や目的句と両立しない。

- (63) a. Das Segel zerriss {*absichtlich / *unachtsam / *gerne}.
 the sail tore on purpose / carelessly / willingly
- b. Das Benzin entzündete sich {*absichtlich / *unachtsam / *gerne}.
 the petrol ignited REFL on purpose / carelessly / willingly
- (64) a. Das Schiff versank {*um die Versicherung zu kassieren}.
 the ship sank in-order the insurance to collect
- b. Das Benzin entzündete sich {*um die Feinde abzuhalten}.
 the petrol ignited REFL in-order the enemies to-keep-away

Schäfer (2008: 54)

3 つ目のテストは、使役主の存在に焦点を当てる文を接続できるかである。例えば、(65b) と (65c) の文においては、状態変化の成立に関与する使役主に焦点が当てられている。(65b) の例では、意志を持った動作主 (agent) が、(65c) の例では、自然現象などの原因 (cause) が、この使役主に当たる。そして、これらの後続文が不適格だと判断されるのは、先行する (65a) の IA において、使役主が全く談話上に導入されていないためであるという。同様に、(66) の RA でも、後続文による使役主の焦点化が不可能である。

(65) a. Der Teller zerbrach.

the plate broke

b. ?? Aber es war nicht Peter, sondern Maria.

but it was not Peter but Maria

c. ?? Aber es war nicht das Erdbeben, sondern der Wind.

but it was not the earthquake but the wind

(66) a. Das Benzin entzündete sich.

the petrol caught-fire REFL

b. ?? Aber es war nicht Peter, sondern Maria.

but it was not Peter but Maria

c. ?? Aber es war kein Blitz, sondern die Sonneneinstrahlung.

but it was not-a lightning but the sun

Schäfer (2008: 55-56)

一方、同じテストを受動文に対して行なうと、(67) のように、後続文の容認度が上がるという。それは、受動文が非明示的な外項を有していて、それにより使役の意味要素が談話上に導入されうるためだと Schäfer (2008) は説明している。

(67) a. Der Teller wurde zerbrochen.

the plate was broken

b. Aber es war nicht Peter, sondern Maria.

but it was not Peter but Maria

c. Aber es war nicht das Erdbeben, sondern der Wind.

but it was not the earthquake but the wind

Schäfer (2008: 56)

以上のような観察に基づき、Schäfer (2008) は、ドイツ語の反使役動詞である IA と RA には、使役の意味要素が存在しないと判断している。ただし、これらのテストが本当に十分な根拠を持っているのかに関しては、疑問が残る。まず、*von* 句の認可について言えば、これは受動と反使役の項構造上の違いに基づいている。それゆえ、反使役動詞の場合 *von* 句の出現が認可されないからといって、意味構造のレベルにおいても使役の意味要素を持たないという証拠にはなり得ないと思われる。また、動作主的副詞や目的句の認可についても、Schäfer (2008: 54) 自身が指摘している通り、全く問題のないテストとみなすことができない。なぜなら、このテストは、外項のうちでも意志を持って行為をする動作主のみに関わるためである。例えば、(68) のような人間以外の自然現象などが状態変化の使役主になるとき、他動詞構文が用いられているので、当然意味構造上は使役の意味要素が含まれるはずであるが、テストはその事実を反した結果となる。

(68) a. Der Sturm versenkte { *absichtlich / *versehentlich } das Schiff.

the storm sank on purpose / unintentionally the ship

‘The storm sank the ship { *on purpose / *unintentionally }.’

b. Der Sturm versenkte das Schiff { *um die Versicherung zu betrügen }.

the storm sank the ship in-order the insurance to trick

‘The storm sank the ship { *in order to trick the insurance }.’

さらに、使役主の存在に焦点を当てる文を接続するテストに関しても、この結果が本当に意味構造上の違いに基づいているのかは疑問である。(65)-(66)の後続文は、非常に不完全な形になっており、これが適格であると聞き手が判断するためには、主語 *es* ‘it’ の内容を自ら補足しなくてはならない。つまり、談話において *es* で指示し得る対象が提示されていない以上、聞き手は (69b) や (70b) のような形で、この不完全な後続文の情報を補わなくてはならない。聞き手がこの解釈を自然に行うことができるかどうか、後続文の容認度に影響を与えているわけであるが、この作業は、動詞の意味構造のレベルとは基本的に無関係であるように思われる。つまり、反使役動詞の意味構造に使役の意味要素が存在することを即座に否定する証拠とはならないと考えられる。

(69) a. Der Teller zerbrach.

the plate broke

b. Aber es war nicht Peter, sondern Maria, der/die den Teller zerbrach.

but it was not Peter but Maria who the plate broke

(70) a. Der Teller wurde zerbrochen.

the plate was broken

b. Aber es war nicht Peter, sondern Maria, der/die den Teller zerbrach.

but it was not Peter but Maria who the plate broke

4.2.1.2. 日本語の被害使役

Schäfer (2008) は、Härtl (2003) のテストに続き、Pylkkänen (2008) の意味構造における CAUSE の取り扱いに関する論考を参照している。Pylkkänen (2008) は、フィンランド語や日本語のようないくつかの言語においては、使役述語であっても外項を伴わないものが例外的に存在するとし、それを使役的非対格 (causative unaccusative) と呼んでいる。Schäfer (2008) は、Pylkkänen (2008) が使役的非対格を認定する際に用いたテストをドイツ語の IA と RA に当てはめ、ドイツ語反使役動詞の意味構造について考察している。

Pylkkänen (2008: 89) によれば、日本語において使役的非対格に当たるのは、いわゆる被害使役 (adversity causative) である。例えば、(71) の「太郎が息子を死なせた」の文では、語彙的使役 (lexical causative) の解釈の他に、「息子の死に太郎が何らかの影響を持っている」という被害使役の解釈も可能である。Pylkkänen (2008: 90) は、この文を (72) のように受動態にしたときに、語彙的使役の解釈は成り立つが、被害使役の解釈は成り立たないとしている。そして、この振る舞いを根拠に、語彙的使役の解釈では主格の「太郎」が外項であるのに対して、被害使役の解釈では外項に当たらないと主張している。

(71) Taroo-ga musuko-o sin-ase-ta.

Taro-NOM son-ACC die-CAUS-PAST

i. 'Taro caused his son to die.' (lexical causative)

ii. 'Taro's son died on him.' (adversity causative)

(72) Musuko-ga sin-ase-rare-ta.
 son-NOM die-CAUS-PASS-PAST

- i. 'The son was caused to die.'
- ii. *'Somebody's son died on them.'

Pylkkänen (2008: 90)

さて、被害使役としばしば対比される構文に、被害受身 (*adversity passive*) がある。(73) の被害受身の「太郎が息子に死なれた」では、「太郎が息子の死によって何らかの影響を受けている」という意味が表される。

(73) Taroo-ga musuko-ni sin-are-ta.
 Taro-NOM son-DAT die-PASS-PAST

'Taro's son died on him.' (*adversity passive*)

Pylkkänen (2008: 91)

被害使役と被害受身を比較すると、(74) のように、被害使役の場合は *ni-yotte* 'by' を用いた使役事象の修飾が可能であるが、被害受身の場合は不可能であるという。これを根拠として、Pylkkänen (2008: 91) は、被害使役には使役事象が存在するのに対し、被害受身は使役構造を持たないと述べている。

(74) a. Taroo-ga sensoo ni-yotte musuko-o sin-ase-ta.
 Taro-NOM war by son-ACC die-CAUS-PAST

'Taro's son was caused to die on him by the war.'

b. *Taroo-ga sensoo ni-yotte musuko-ni sin-are-ta.
 Taro-NOM war by son-DAT die-PASS-PAST

'Taro's son died on him by the war.'

Pylkkänen (2008: 91)

さらに、Pylkkänen (2008: 94) は、*katte-ni* 'by itself, on one's own' という表現による修飾可能性について考察している。彼女の説明によると、(75) のような被害使役は、この句と共起しないが、(76) のような被害受身と (77) のような非対格動詞は、この句と共起できるという。彼女の考えでは、(75) の被害使役と *katte-ni* 句がなじまないのは、被害使役が何らかの使役の意味を含んでおり、*without a cause* という意味を表す *katte-ni* 句と矛盾するためであるという。

- (75) ?? Taroo-ga musuko-o katte-ni korob-ase-ta.
 Taro-NOM son-ACC by-self fall down-CAUS-PAST

‘Something caused Taro’s son to fall down on him all by himself’

- (76) Taroo-ga musuko-ni katte-ni korob-are-ta.
 Taro-NOM son-DAT by-self fall down-PASS-PAST

‘Taro’s son fell down on him all by himself.’

- (77) Taroo-ga katte-ni koron-da.
 Taro-NOM by-self fall down-PAST

‘Taro fell down all by himself.’

Pylkkänen (2008: 94-95)

以上のような使役事象の存在を確かめる Pylkkänen (2008) のテストを Schäfer (2008) はドイツ語反使役動詞に適用し、その振る舞いを観察している。まず、(75) の例における *katte-ni* の不適格性を根拠として、Schäfer (2008) はドイツ語の *von selbst* ‘by itself’ や *von allein* ‘by alone’ の出現について調べている。結果として、これらの前置詞句は IA とも RA とも両立可能である。すなわち、Pylkkänen (2008) の観察を敷衍すると、ドイツ語の IA も RA も、使役の意味を持たないことが示唆されるという。

- (78) a. Der Teller zerbrach {von selbst / von allein}.

the plate broke by self by alone

- b. Die Geige verstimmte sich {von selbst / von allein}.

the violin got-out-of-tune REFL by self by alone

Schäfer (2008: 64)

さらに、日本語の (74) の *ni-yotte* 句のテストに依拠して、ドイツ語の反使役動詞に *von* ‘by’ 句を付加した場合、(79) のように、IA も RA も非文法的な文を形成する (cf. (60))。よって、Pylkkänen の分析に従えば、IA も RA も使役の意味を含まないという。

- (79) a. *Die Vase zerbrach vom Erdbeben.

the vase broke by-the earthquake

- b. *Die Tür öffnete sich vom Windstoß.

the door opened REFL by-the gust of wind

Schäfer (2008: 65)

ただし、ドイツ語の前置詞 *von* は、典型的には動作主 (agent) と結び付くものであり、人間ではない原因 (cause) や使役的事象 (causing event) と結び付く前置詞は *durch* ‘through’ である。そこで、この前置詞 *durch* を用いてもう一度テストを行うと、(80) のように、今度は IA とも RA とも矛盾しないという結果が得られる。つまり、ここでは、IA と RA は使役の意味を含むことが示唆されるという。

(80) a. Die Tür öffnete sich durch einen Windstoß.

the door opened REFL through a gust of wind

‘The door opened from a gust of wind.’

b. Die Säure verdünnte sich durch den Regen.

the acid diluted REFL through the rain

‘The acid diluted from the rain.’

c. Das Stroh entzündete sich durch einen Blitzschlag.

the straw caught-fire REFL through a lightning

‘The straw caught fire from a lightning.’

(81) a. Die Vase zerbrach durch ein Erdbeben.

the vase broke through an earthquake

‘The vase broke from an earthquake.’

b. Das Segel zerriss durch den Sturm.

the sail tore apart through the storm

‘The sail tore from the storm.’

c. Die Gletscher schmolzen durch die Klimaerwärmung.

the glacier melted through the climate warming

‘The glacier melted from the global warming.’

Schäfer (2008: 65-66)

このように、ドイツ語の反使役動詞は、IA と RA という形式の違いとは無関係に一貫した振る舞いを示すが、使役の意味要素の有無に関しては、肯定を示すテスト (*durch* 句の出現) と否定を示すテスト (*von selbst* と *von* 句の出現) があり、矛盾した結果となると Schäfer (2008: 66) は述べている。

ここで、Pylkkänen (2008) の日本語被害使役分析に戻り、Schäfer (2008) がドイツ語の反使役動詞に適用しているテストが本当に使役の意味要素の存在を判別するものとして有効であるかを考えてみたい。Pylkkänen (2008) の主張は、日本語の被害使役が、外項を持たないにもかかわらず、使役の意味要素を含んでいるというものであった。まず、被害使役に外項が存在しない

ということの論拠となっていたのは、(82) のような使役文を受動化した例において、被害使役の解釈が成り立たないという観察である。

- (82) Musuko-ga sin-ase-rare-ta. (=72)
 son-NOM die-CAUS-PASS-PAST
 i. ‘The son was caused to die.’
 ii. *‘Somebody’s son died on them.’

しかし、筆者には、このふたつの解釈の差がはっきりとは感じられない。例えば、「太郎の息子は（長い間窮乏に喘ぎ、その結果として）太郎に死なせられたのだ」のような文においては、語彙的使役でなく被害使役の解釈も成り立つように思われる。つまり、息子の死という事象に太郎が直接的に関与したのではなく、あくまでそれに対する影響ないし責任を持っているという解釈である。よって、(82) のような例に基づいて被害使役の外項の欠如を論じるのは適切ではない可能性がある。

次に、Pylkkänen (2008) は、*ni-yotte* を用いた使役事象の修飾可能性を検討し、使役事象が被害使役には存在するのに対して、被害受身には存在しないと述べているが、この例に関しても、Pylkkänen が主張するほど明確には容認度の差を認めることができないと思われる。

- (83) a. Taroo-ga sensoo ni-yotte musuko-o sin-ase-ta. (=74)
 Taro-NOM war by son-ACC die-CAUS-PAST
 ‘Taro’s son was caused to die on him by the war.’
 b. *Taroo-ga sensoo ni-yotte musuko-ni sin-are-ta.
 Taro-NOM war by son-DAT die-PASS-PAST
 ‘Taro’s son died on him by the war.’

被害受身に *ni-yotte* の句を付加した「太郎が戦争によって / 空襲によって / 貧困によって息子に死なれた」という文は、筆者にとって非文法的であるとは感じられない。そもそも *ni-yotte* は「手段、依拠、原因、理由」を表すため、英語の *by* と完全に同義とは言えず、必ずしも使役事象の存在を前提としていないのではないかと考えられる。使役事象を含まない「死ぬ」のような非対格動詞が、「太郎の息子は戦争によって / 貧困によって / 空襲によって死んだ」のように、*ni-yotte* 句で修飾可能であることから、そのことが裏付けられると思われる。したがって、*ni-yotte* 句の付加が使役事象の存在を示すテストになるかどうかには議論の余地があり、このテストに依拠し

で行われた Schäfer (2008) のドイツ語 *von* および *durch* 前置詞句の付加 (cf. (79)-(81)) についても、その根拠が問い直されなくてはならないと考えられる。

最後に、Pylkkänen (2008) は、被害使役に何らかの使役の意味が含まれることの証拠の 1 つとして、*katte-ni* 句が被害使役には現れないが、被害受身と非対格動詞には現れるという観察を示していた。

(84) ?? Taroo-ga musuko-o katte-ni korob-ase-ta. (=75)

Taro-NOM son-ACC by-self fall down-CAUS-PAST

‘Something caused Taro’s son to fall down on him all by himself’

(85) Taroo-ga musuko-ni katte-ni korob-are-ta. (=76)

Taro-NOM son-DAT by-self fall down-PASS-PAST

‘Taro’s son fell down on him all by himself.’

(86) Taroo-ga katte-ni koron-da. (=77)

Taro-NOM by-self fall down-PAST

‘Taro fell down all by himself.’

ここで、(84) のような被害使役において *katte-ni* 句がブロックされるのは、以下の理由によると考えられる。そもそも被害使役というのは、主格名詞句がある事象の生起に対して何らかの関係を持っている場合に使われる形式である。例えば、ある親が重い病を患った子供をたくさんの病院に連れて行き、いろいろな治療を受けさせたが、その甲斐もむなしく子供が亡くなったというときに、「子供を死なせた」という表現が用いられる。この例では、もちろん親は子供の死を積極的に望み働きかけたのではなく、その逆であり、結果として子供を救うことができなかった責任や負い目というものを感じていることが含意されている。この表現に、「勝手に子供を死なせた」のような形で *katte-ni* 句を挿入すると、親の負っている責任を解消してしまうかのような、矛盾した意味内容になるため、容認度が著しく下がるのだと考えられる。一方、被害受身は、事象の生起に主格名詞句が何の関係も持っていないとしても、それによって不利益を被っているという解釈さえ成り立てば使うことができる形式であるため、*katte-ni* 句と共起しうるのだと思われる。(78) で見たように、Schäfer (2008) はこのテストを援用して、*von selbst* 句の生起という観点からドイツ語反使役動詞における使役の意味要素の存在を確かめようとしているが、そもそも日本語の被害使役・被害受身構文とドイツ語の反使役動詞は全く異なる性質を持つものであり、Pylkkänen (2008) の分析をこのような形でドイツ語に当てはめることが適切であるかについては疑

問が残る。また、日本語の *katte-ni* 句は (87) のような他動詞構文においても何の問題もなく生起することができるので、使役事象の存在と *katte-ni* 句の出現は、相反するものではないと考えられる。

- (87) a. Musuko-ga katte-ni watasi-no hon-o moy-asi-ta.
 son-NOM by-self my book ACC burn-CAUS-PAST
- b. Musuko-ga katte-ni watasi-no himitu-o bar-asi-ta.
 son-NOM by-self my secret-ACC spill-CAUS-PAST

以上のように、Schäfer (2008) は、自由与格による IA と RA の解釈の違いをもとに、これらの形式間に使役主の観点で意味的な違いがあるという仮説を立てているが、最終的にはそれを破棄して、IA と RA の間には使役の意味に関する違いはないと主張している。ただし、前節および本節で指摘したように、Schäfer (2008) がこの結論に至る過程で依拠しているテストは、十分に信用に値するとは考えにくい。

4.2.2. 自然に展開する状態変化

大矢 (2008) はドイツ語の IA と RA を比較し、その意味的な違いを考察している。そして、結論として、このふたつの形式間に明確な意味的区別を認定することはできないと述べている。本節では彼の分析を詳しく検討する。

初めに、大矢 (2008) は、ドイツ語反使役動詞のうち RA に属するものとして、(88) のような動詞を挙げている。また、(89) のように、IA を意味的に大きく 6 つのグループに分類している。

- (88) *leeren* ‘empty’, *aufklären* ‘clear up’, *falten* ‘wrinkle’, *glätten* ‘smooth’,
erhellen ‘light up’, *verdunkeln* ‘darken’, *vergrößern* ‘enlarge’, *verkleinern*
‘reduce’, *stabilisieren* ‘stabilize’, *schließen* ‘close’, *abnutzen* ‘use out’,
ändern ‘change’, *aufheitern* ‘brighten’, *ausdehnen* ‘expand’, *blähen* ‘bilow’,
beleben ‘revive’, *bewegen* ‘move’, *bräunen* ‘tan’, *erhitzen* ‘heat up’,
erhöhen ‘rise’, *färben* ‘change color’

- (89) a. *abstumpfen* ‘become dull / lose its edge’, *abweichen* ‘soften and come off’, *bleichen* ‘bleach’, *dörren* ‘dry’, *ermüden* ‘tire’, *gären* ‘ferment’, *heilen* ‘heal’, *quellen* ‘swell’, *reifen* ‘ripen’, *schmelzen* ‘melt’, *tauen* ‘thaw’, *trocknen* ‘dry’, *verderben* ‘spoil / go bad’, *verdunsten* ‘evaporate’, *verschmutzen* ‘get dirty’, *verbrennen* ‘burn up’, *verwehen* ‘drift away’, *abschmelzen* ‘melt away’, *abtauen* ‘thaw’, *abtrocknen* ‘dry up’, *aufweichen* ‘soften’, *ausbleichen* ‘bleach’, *ausheilen* ‘heal up’, *austrocknen* ‘dry up’
- b. *braten* ‘roast’, *kochen* ‘cook’, *backen* ‘bake’, *schmoren* ‘braise’, *sieden* ‘boil’
- c. *brechen* ‘break’, *reißen* ‘tear’, *knicken* ‘snap’, *zersplittern* ‘splinter / shatter’, *zuschlagen* ‘slam’, *abbrechen* ‘break off’, *abreißen* ‘break off’, *aufreißen* ‘tear’, *durchbrechen* ‘break into two’, *durchreißen* ‘tear’, *einreißen* ‘tear’, *losbrechen* ‘break off’, *zerbrechen* ‘break into pieces’
- d. *kullern* ‘roll’, *fahren* ‘drive’, *fliegen* ‘fly’, *kippen* ‘tip over’, *rollen* ‘roll’, *segeln* ‘sail’
- e. *anfangen* ‘begin’, *beginnen* ‘begin’, *starten* ‘start’
- f. *ersticken* ‘suffocate’, *wechseln* ‘change’

大矢 (2008: 107)

大矢 (2008: 106) の説明に基づけば、(89) の IA の意味的な下位分類には以下のようなものがある。まず、(89a) は、「(熱、湿度などの条件が整っていれば) 自然に展開する状態変化を表す動詞」である。(89b) は「調理関係の出来事を表す動詞」、(89c) は「瞬間的な出来事を表す動詞」、(89d) は「主語の移動を表す動詞」、(89e) は「出来事の開始を表す動詞」である。最後に、(89f) は、「上の分類のどれにも該当しないと思われる動詞」である。

まず、大矢 (2008) の分析対象には、本論文で IA として認定している動詞以外のものも含まれていることを指摘しておきたい。まず、(89b) の煮炊きの動詞であるが、この例はすべて完了の助動詞として *haben* ‘have’ を選択する。2.1 で見たように、Schäfer (2008: 33) は、ドイツ語の IA の特徴として、完了の助動詞に *sein* ‘be’ を選択することを挙げていた。この助動詞選択は、動詞のアスペク的な意味と関連している。つまり、(89b) の *kochen* ‘boil’ のような *haben* を選択する煮炊きの動詞は、ある特定の状態への到達というより、沸騰などのプロセスの進行を表すと考えられる。Levin and Rappaport Hovav (1995) の術語で言えば、内的使役 (internally caused) の非能格動詞である。それゆえ、このタイプの動詞は、状態変化を表す通常の

IAとは意味的に異なる可能性がある。さらに、(89d)の動詞は、位置の変化を表す移動動詞であるが、主語位置には、位置変化の対象となる物体だけでなく、人間や動物も現れる (cf. (90))。この場合、もちろん人間や動物は、位置の変化を一方的に被るのではなく、能動的に移動する主体であると考えられる。また、(90a)のように人間・動物以外の物体が主語となるときにも、動力を内部に備えた飛行機のような乗り物が表されるため、主体的な移動として捉えられる。

(90) a. Das Flugzeug fliegt nach Paris.

the airplane flies to Paris

‘The airplane flies to Paris.’

b. Ich fliege mit dem Flugzeug nach Paris.

I fly with the airplane to Paris

‘I fly to Paris by plane.’

c. Die Schwalben fliegen heute tief.

the swallows fly today low

‘The swallows fly low today.’

また、このタイプの移動動詞では、使役他動詞と自動詞の意味的な対応関係が成立するのかわからない。例えば、*fahren* ‘drive’ の場合、(91a)のような使役的働きかけの結果として (91b) のような事態が生じるとは見なしにくく、むしろ、使役的事象から独立して自動詞的事象が成り立つように思われる。このような意味においても、この種の移動動詞は通常の IA から区別されるべきであると考えられる。

(91) a. Wir fahren das Auto.

we drive the car

‘We drive the car.’

b. Das Auto fährt.

the car drives

‘The car drives.’

続いて、(89e)の動詞であるが、このグループには *anfangen* ‘begin’, *beginnen* ‘begin’, *starten* ‘start’ のような「事象の開始」を表すもの以外にも、*aufhören* ‘stop’, *enden* ‘end’, *stoppen* ‘stop’ などの「事象の終了」を表すものも含まれる。このグループの動詞も、完了の助動詞において一貫して *haben* ‘have’ を

選択するため、(89b) の煮炊きの動詞同様に、通常の IA から区別されなくてはならないだろう。最後に、(89f) の動詞 *ersticken* ‘suffocate, choke’ と *wechseln* ‘change’ は、上のどのグループにも属しないとされている。まず、*ersticken* から考えてみると、確かに (92b) のように対応する使役他動詞が存在し、また、完了の助動詞として *sein* を選択するため、この動詞を IA のグループから除外する理由はないだろう。この動詞は、おそらく大矢 (2008) の分類では、(89a) の「条件が整えば自然に展開する状態変化」のひとつであると考えられる。

(92) a. Neugeborene können an Brot ersticken.

newborns can on bread choke

‘Newborn babies can choke on bread.’

b. Brot kann Neugeborene ersticken.

bread can newborns choke

‘Bread can choke newborn babies.’

次に、*wechseln* であるが、この自動詞にはふたつの用法がある。1 つ目は、「(天気などが) 変化する」という意味を表すものである (cf. (93a))。この例では、完了の助動詞に *haben* が使われるため、通常の IA ではなく、非能格動詞の一種と考えられる。2 つ目の用法は、「(場所、ポスト、所属などを) 変える」という意味を表すものである。この場合、(93b) にあるように、完了の助動詞に *sein* が使われる。ここでは、「(広い意味での) 位置の移動」が問題になっているため、先ほど見た (89d) の移動動詞とよく似ている。また、主語位置に動作主が現れるため、(93b) の例も移動動詞と同様に通常の IA から区別される。

(93) a. Das Wetter hat schnell gewechselt.

the weather has quickly changed

‘The weather changed quickly.’

b. Der Justizminister ist ins Auswärtige Amt gewechselt.

the Minister of Justice is into-the Foreign Office changed

‘The Minister of Justice moved to the Foreign Office.’

したがって、大矢 (2008) の (89) の分類のうち、状態変化を表す通常の IA と認定することができるのは、最も用例の多い (89a) の「(熱・湿度などの条件が整っていれば) 自然に展開する状態変化」と、(89c) の「瞬間的な状

態変化」の動詞であると考えられる。これらの動詞を以下に再掲する。

- (94) 自然に展開する状態変化 : *abstumpfen* ‘become dull / lose its edge’, *abweichen* ‘soften and come off’, *bleichen* ‘bleach’, *dörren* ‘dry’, *ermüden* ‘tire’, *gären* ‘ferment’, *heilen* ‘heal’, *quellen* ‘swell’, *reifen* ‘ripen’, *schmelzen* ‘melt’, *tauen* ‘thaw’, *trocknen* ‘dry’, *verderben* ‘spoil / go bad’, *verdunsten* ‘evaporate’, *verschmutzen* ‘get dirty’, *verbrennen* ‘burn up’, *verwehen* ‘drift away’, *abschmelzen* ‘melt away’, *abtauen* ‘thaw’, *abtrocknen* ‘dry up’, *aufweichen* ‘soften’, *ausbleichen* ‘bleach’, *ausheilen* ‘heal up’, *austrocknen* ‘dry up’
- (95) 瞬間的な状態変化 : *brechen* ‘break’, *reißen* ‘tear’, *knicken* ‘snap’, *zersplittern* ‘splinter / shatter’, *zuschlagen* ‘slam’, *abbrechen* ‘break off’, *abreißen* ‘break off’, *aufreißen* ‘tear’, *durchbrechen* ‘break into two’, *durchreißen* ‘tear’, *einreißen* ‘tear’, *losbrechen* ‘break off’, *zerbrechen* ‘break into pieces’

大矢 (2008) は、(94) の「(熱・湿度などの条件が整っていれば) 自然に展開する状態変化」という意味的原理を取り上げ、この原理を他の IA の動詞にも一般に適用できるかどうかを考察している。この原理がすべての IA の用例を説明するほど強力なものであれば、IA を RA から意味的に区別することが可能になるためである。しかし、結果として、大矢 (2008) はこの原理によって IA を特徴づけることはできないと述べている。なぜなら、温度や湿度などの自然条件を原因として生起する事象は、IA に限らず、RA によっても表現されるためである

(96) a. Die Blätter bräunen sich im Herbst.

the leaves become brown REFL in-the autumn

‘The leaves become brown in autumn.’

b. Mein Haar kräuselt sich bei Feuchtigkeit.

my hair frizzes REFL in moisture.

‘My hair frizzes (up) in moisture.’

c. Nach dem Sonnenbrand schälte sich die Haut auf seinem Rücken.

after the sunburn peeled REFL the skin on his back.

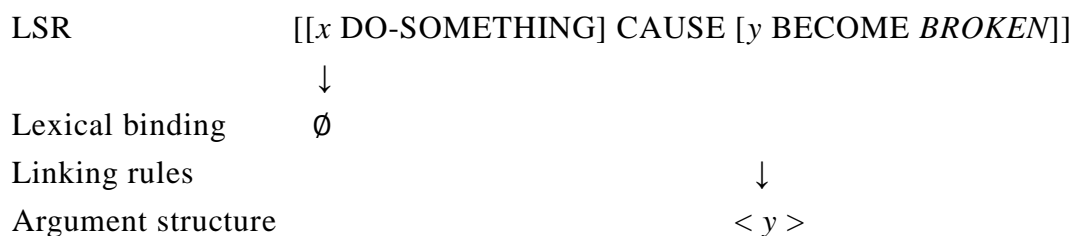
‘After the sunburn the skin peeled on his back.’

大矢 (2008: 109)

例えば、(96a) のように秋に木の葉が色づく場合、ドイツ語では RA の *sich bräunen* ‘become brown’ が用いられるが、ここでは、気温の変化が条件となって葉の色の変化が生じる。また、(96b) のように髪の毛が湿気で縮れるときにも、(96c) のように日焼けで背中が剥けるときにも、RA によって事態が描写されるが、ここでも、状態変化の原因となるのは、湿度や日光などの自然条件である。それゆえ、彼は「自然条件により生起する出来事がすべて自動詞で表されるという一般化は成立しない」と結論付けている。

そこで、大矢 (2008) は、もうひとつの意味的分析の可能性として、ドイツ語の反使役動詞を使役主の観点から意味的に特徴づけるという試みを検討している。そして、その際に、ドイツ語の *von selbst* ‘by itself’ 句と *durch* ‘through’ 句の生起について考察している。初めに、*von selbst* の生起に関連して、彼は Levin and Rappaport Hovav (1995) の英語の反使役分析を引用し (cf. 3.1)、英語の *by itself* の生起が意味構造上に外的使役が含まれる証拠とされていることを確認している。つまり、Levin and Rappaport Hovav (1995) の分析では、反使役動詞は意味上 (97) のような使役構造を持つと仮定されており、その根拠として、(98) のように *by itself* が反使役動詞に生起することが取り上げられている。

(97) Intransitive *break*



- (98) a. The plate broke by itself.
 b. The door opened by itself.

Levin and Rappaport Hovav (1995: 88)

ここで注意したいのは、英語の *by itself* に意味的に対応するドイツ語の *von selbst* の生起が、いくつかの研究においては、使役の意味が存在することの証拠ではなく、存在しないことの証拠とされている点である。例えば、4.2.1 で取り上げた Schäfer (2008) の研究では、*von selbst* が反使役動詞には生起するのに対し、受動態には生起しないことを観察していた (cf. (99)-(100))。そして、Schäfer (2008) はこの観察を根拠として、受動態には使役の意味が含まれるが、反使役動詞には使役の意味が含まれないと述べていた。

- (99) a. Der Teller zerbrach von selbst.
 the plate broke by self
 ‘The plate broke by itself.’
- b. Die Geige verstimmte sich von selbst.
 the violin got-out-of-tune REFL by self
 ‘The violin got out of tune by itself.’
- (100) a. *Der Teller wurde von selbst zerbrochen.
 the plate was by self broken
 ‘The plate was broken by itself.’
- b. *Die Geige wurde von selbst verstimmt.
 the violin was by self put-out-of-tune
 ‘The violin was put out of tune by itself.’

Schäfer (2008: 56)

また、Schäfer (2008) が依拠する Pylkkänen (2008) の研究においても、日本語の被害使役に *katte-ni* ‘by itself’ が出現しないことから、この構文には使役の意味要素が含まれていると論じられていた。しかし、前節でも確認した通り、このテストが本当に使役事象の存在を示すものとして機能するかは疑わしい。

- (101) ?? Taroo-ga musuko-o katte-ni korob-ase-ta. (=₇₅)
 Taro-NOM son-ACC by-self fall down-CAUS-PAST
 ‘Something caused Taro’s son to fall down on him all by himself’

さらに、大矢 (2008: 116) は、ドイツ語の *von selbst* が対応する使役他動詞を持たない非対格動詞の *zerfallen* ‘collapse’ や *zerplatzen* ‘burst’ とともに共起することを指摘している。つまり、*von selbst* 句の出現と使役交替の現象は本来的には無関係であるという。

- (102) a. Das Kartenhaus zerfiel von selbst.
 the cards-house collapsed by itself
- b. *Der Wind zerfiel das Kartenhaus.
 the wind collapsed the cards-house

(103) a. Der Ballon zerplatzte von selbst.

the balloon burst by itself

b. *Dieter zerplatzte den Ballon.

Dieter burst the balloon

続いて、大矢 (2008: 121) は、先行研究において原因を表す *durch* 句が出現する際に、動詞に使役の意味が含まれると主張されてきたことを指摘している。例えば、Kaufmann (2004: 74) は、RA の *sich senken* ‘lower’, *sich röten* ‘redden’, *sich öffnen* ‘open’ と、ほぼ同じ意味を表す非対格動詞 *senken* ‘sink’, *erröten* ‘redden’, *aufgehen* ‘go open’ をそれぞれ比較し、後者の非対格動詞は、原因を表す前置詞句と若干ながら整合しないと述べている。

(104) a. Der Stahlträger senkte sich durch das Gewicht.

the steel-girder lowered REFL through the weight

b. ? Der Stahlträger sank durch das Gewicht.

the steel-girder sank through the weight

(105) a. Das Wasser rötete sich durch das Blut.

the water reddened REFL through the blood

b. ? Sie errötete durch die Beleidigung.

sie reddened through the insult

(106) a. Die Tür öffnete sich durch den Wind.

the door opened REFL through the wind

b. ? Die Tür ging durch den Wind auf.

the door went through the wind open

Kaufmann (2004: 74)

これに対して、大矢 (2008: 121) は、原因を表す *durch* 句が自動詞と全く整合しないわけではないと述べ、(107) のような IA や (108) のような非対格動詞においても *durch* 句が出現しうることを示している。

(107) a. Der Raum kühlte durch die Klimaanlage ab.

the room cooled through the air conditioner down

b. Der Boden verhärtete durch die Trockenheit.

the ground hardened through the dryness

- (108) a. Das Kartenhaus zerfiel durch den Wind.
 the cards house collapsed through the wind
- b. Das Ballon zerplatzte durch den Überdruck.
 the balloon burst through the excess-pressure
- c. Der Apfel verfaulte durch die Feuchtigkeit.
 the apple rotted through the moisture

したがって、大矢 (2008: 121) は、これまで動詞の使役構造の存在を裏付ける証拠とみなされてきたテストは、どれも十分に信頼に値するとは考えられないと述べている。そして結論として、ドイツ語の RA と IA に異なる意味構造を想定する明確な根拠は見出せず、RA と IA に使役の意味を含まない (109) のような同一の意味構造を付与することが妥当であるとしている。

(109) [x BECOME AT-STATE]

大矢 (2008: 122)

以上の大矢 (2008) の分析は重要な指摘を含んでいる。まず、上で見た *von selbst* 句や前置詞 *durch* 句のテストが、動詞の意味構造における使役主の存在を示すものではないという点である。また、IA と RA を意味的に分類した場合に、瞬間的な出来事を表す動詞が IA のみに属するという点も注目し値する (cf. (89c))。ただし、IA と RA の両形式間に明確な意味上の違いが存在しないという結論に関しては、筆者は異なる考えを持っている。確かに、「条件が整っていれば自然に展開する状態変化」という意味的原理が、IA だけでなく RA にも当てはまることは納得できる。さらに、前置詞句等によるテストが機能しない場合があるという指摘も妥当であろう。しかし、そのことと、結論として IA と RA の間に意味上の違いを想定しないということの間には、飛躍があると思われる。彼自身が、動詞の意味的なグループによって、ある程度反使役動詞の形態的実現が予測できることを示していたことも、別の論点を予感させはしないだろうか。筆者はこの点を次の章でさらに追及していきたいと考えている。

4.3. 結語

この章では、先行研究におけるドイツ語の反使役動詞の取り扱いを観察した。ドイツ語には、反使役動詞の形式として、再帰動詞で実現される RA と、自動詞で実現される IA が存在し、さらに、両形式を併せ持つ *abkühlen* ‘cool’ のような RIA 動詞も、比較的少数ではあるが見出される。この RA と IA の形式間に意味的な違いが存在するかどうかは先行研究において検討されてきたが、未だに有効な説明は提案されていないと考えられる。Schäfer (2008) が主張しているように、イタリア語やフランス語の反使役動詞に想定されている動詞の語彙的アスペクトに基づく一般化、すなわち「RA で表される事象は有界的 (telic) であり、IA で表される事象は非有界的 (atelic) である」という観点では、ドイツ語の反使役動詞を適切に捉えられない。また、Schäfer (2008) や大矢 (2008) は、ドイツ語反使役動詞の形式上の違いを意味論の側面から説明することは不可能だという立場を取っているが、この主張の根拠となるテストや論述の方法にはいくつかの問題があることを示した。さらに、先行研究では、自由与格が出現する際に、RA と IA では原則的には解釈の違いが生じると指摘されている (McIntyre 2006, Schäfer 2008, 大矢 2008)。このような傾向が確認される以上、RA と IA の間には、やはり意味的な相違があると考えるのが自然ではないだろうか。以上の観察を踏まえて、次章では、ドイツ語の RA と IA を別の観点から意味的に特徴づけることを試みる。

第5章 ドイツ語反使役動詞の意味的相違に関する代案

5.1. RA と IA の具体例

第2章および第4章で観察したように、ドイツ語の反使役動詞は、再帰代名詞を伴う RA と再帰代名詞を伴わない IA に区別される。まず RA と IA の具体例を示しておく。¹³ IA には、以下のような瞬間的状态変化を表す動詞のグループが確認される。その多くが、「割れる」、「ちぎれる」、「折れる」、「破れる」のような破壊を表す動詞である。

- (1) a. 破壊: *abbrechen* ‘break off’, *ausreißen* ‘tear out’, *brechen* ‘break’, *durchbrechen* ‘break in the middle’, *durchreißen* ‘tear in half’, *einknicken* ‘snap’, *einreißen* ‘break down’, *einstürzen* ‘collapse’, *entzweibrechen* ‘shatter’, *losbrechen* ‘break off’, *niederbrechen* ‘break down’, *reißen* ‘tear’, *umbrechen* ‘break down’, *umknicken* ‘snap’, *zerbrechen* ‘break into pieces’, *zerbröckeln* ‘crumble’, *zerkrümeln* ‘crumble’, *zerreißen* ‘tear apart’, *zersplittern* ‘shatter’
- b. その他の瞬間的状态変化: *ersticken* ‘suffocate’, *umschlagen* ‘capsize’, *umstürzen* ‘overturn’, *verstopfen* ‘choke up’, *zuklappen* ‘close with a snap’, *zuknallen* ‘slam shut’

また、IA には、以下のような非瞬間的状态変化を表す動詞も存在する。

- (2) a. 乾燥: *ausdörren* ‘dry up’, *austrocknen* ‘desiccate’, *dörren* ‘dehydrate’, *trocknen* ‘dry’, *verbrennen* ‘sear’
- b. 焼失、炭化: *ausbrennen* ‘burn out’, *niederbrennen* ‘burn down’, *verbrennen* ‘burn’, *verkochen* ‘boil to a pulp’, *verkohlen* ‘char’, *zerkochen* ‘cook to a pulp’
- c. 解凍、融合: *schmelzen* ‘melt’, *tauen* ‘thaw’, *verschmelzen* ‘merge’, *zerschmelzen* ‘melt’
- d. 凍結: *einfrieren* ‘freeze’
- e. 蒸発: *verdampfen* ‘vaporize’, *verdunsten* ‘evaporate’, *verkochen* ‘boil away’

¹³ Duden Deutsches Universalwörterbuch における意味の記述と具体例は巻末資料を参照のこと。

- f. 他の物体、物質への変化: *denaturieren* ‘denature’, *gelatinieren* ‘gelatinize’, *sintern* ‘sinter’, *verbrennen* ‘burn’, *versteinern* ‘fossilize’
- g. 腐敗、発酵、カビ: *beschlagen* ‘mold’, *säuern* ‘sour’, *umschlagen* ‘turn sour’, *verderben* ‘decay’
- h. 治癒: *ausheilen* ‘heal up’, *heilen* ‘heal’
- i. 衰弱、疲労、痴呆、病的変化: *ermüden* ‘fatigue’, *erschlaffen* ‘slacken’, *verdummen* ‘become stultified’, *verkrüppeln* ‘cripple’, *verweichlichen* ‘render, effeminate’
- j. 軟化、硬化: *erhärten* ‘harden’, *erweichen* ‘soften’
- k. 汚染: *verdrecken* ‘get dirty’, *verrußen* ‘soot’
- l. 粗暴化、墮落: *pervertieren* ‘pervert’, *verrohen* ‘brutalize’
- m. 磨滅: *zerfasern* ‘fray out’, *zerfransen* ‘fray’, *zerschleifen* ‘wear out’
- n. 濃縮: *eindicken* ‘condense’
- o. 熟成: *reifen* ‘ripen’

一方、再帰代名詞 *sich* を伴って実現される RA の半数以上を占めるのは、(3) のような、「大きさ、量、速度、温度、強度、濃度、密度、明度、時間、性質」などの抽象的次元における状態変化を表す動詞である。

- (3) a. 大きさ、長さ、高さ、深さ、広がり、距離: *ausdehnen* ‘expand’, *ausweiten*, ‘expand’, *dehnen* ‘expand’, *erweitern* ‘extend’, *längen* ‘lengthen’, *nähern* ‘near’, *verbreiten* ‘spread’, *verengen* ‘narrow’, *vergrößern* ‘enlarge’, *verkleinern* ‘make / get smaller’, *verkürzen* ‘shorten’, *verlängern* ‘lengthen’, *vertiefen* ‘deepen’, *weiten* ‘widen’
- b. 数量、速度、値の増減: *abbauen* ‘reduce’, *beschleunigen* ‘accelerate’, *entwerten* ‘devalue’, *erhöhen* ‘increase’, *ermäßigen* ‘abate’, *häufen* ‘accumulate’, *heben* ‘lift’, *kumulieren* ‘cumulate’, *mehren* ‘increase’, *mindern* ‘lessen’, *reduzieren* ‘reduce’, *steigern* ‘increase’, *summieren* ‘mount up’, *verdoppeln* ‘double’, *verdreifachen* ‘triple’, *verhundertfachen* ‘increase a hundredfold’, *verkleinern* ‘reduce’, *verknappen* ‘run short’, *verlangsamen* ‘decelerate’, *vermehrten* ‘increase’, *vermindern* ‘lessen’, *verringern* ‘decrease’, *verteuern* ‘increase in price’, *vervielfachen* ‘multiply’, *vervielfältigen* ‘multiply’
- c. 温度: *erhitzen* ‘heat’, *erwärmen* ‘warm up’
- d. 強度、濃度、密度: *bestärken* ‘strengthen’, *festigen* ‘consolidate’, *intensivieren* ‘intensify’, *lichten* ‘thin out’, *konsolidieren* ‘consolidate’,

- potenzieren* ‘potentiate’, *stabilisieren* ‘stabilize’, *verdichten* ‘condense’,
verfestigen ‘solidify’, *verstärken* ‘strengthen’, *vertiefen* ‘intensify’
- e. 緊張、弛緩: *beruhigen* ‘calm down’, *entspannen* ‘relax’, *glätten* ‘smooth down’, *lockern* ‘loosen’, *mildern* ‘abate’
- f. 明度、色: *entfärben* ‘decolorize’, *erhellen* ‘brighten’, *erleuchten* ‘light’, *röten* ‘redden’, *verdunkeln* ‘darken’, *verdüstern* ‘dim’, *verfärben* ‘change color’, *verfinstern* ‘darken’
- g. 時間、期日の延長: *ausdehnen* ‘extend’, *dehnen* ‘extend’, *hinausziehen* ‘draw out’, *verlängern* ‘extend’, *verschieben* ‘delay’, *vertagen* ‘adjourn’, *verzögern* ‘delay’
- h. 性質: *beleben* ‘vitalize’, *bereinigen* ‘clean up’, *bessern* ‘better’, *erneuern* ‘renew’, *klären* ‘clear up’, *komplizieren* ‘complicate’, *normalisieren* ‘normalize’, *optimieren* ‘optimize’, *sanieren* ‘clean up’, *verbessern* ‘improve’, *verfeinern* ‘refine’, *verklären* ‘idealize’, *verschärfen* ‘intensify’, *verschlechtern* ‘worsen’, *verschlimmern* ‘worsen’, *verstetigen* ‘stabilize’, *vervollständigen* ‘complete’, *zuspitzen* ‘intensify’
- i. 伝染、伝播、発展: *entfalten* ‘develop’, *entwickeln* ‘develop’, *mitteilen* ‘transfer’, *übertragen* ‘transfer’, *umkehren* ‘go into reverse’, *vererben* ‘inherit’, *weiterentwickeln* ‘develop further’
- j. 構造化: *formieren* ‘form’, *gliedern* ‘structure’, *organisieren* ‘organize’, *regeln* ‘adjust’, *reimen* ‘rhyme’, *strukturieren* ‘structure’
- k. 出現、成就: *ausdrücken* ‘express’, *ausprägen* ‘take shape’, *äußern* ‘express’, *aussprechen* ‘utter’, *bilden* ‘form’, *darbieten* ‘present’, *entschleiern* ‘unveil’, *erfüllen* ‘fulfill’, *gestalten* ‘develop’, *herausschälen* ‘crystallize’, *manifestieren* ‘manifest’, *markieren* ‘mark’, *verwirklichen* ‘realize’
- l. 差異、区分: *differenzieren* ‘diversify’, *unterscheiden* ‘differ’
- m. 均衡: *ausgleichen* ‘compensate’, *ergänzen* ‘add’
- n. 論理概念: *beschränken* ‘restrict’, *bestätigen* ‘confirm’, *bestimmen* ‘define’, *erhärten* ‘confirm’, *enträtseln* ‘solve’, *herausstellen* ‘turn out’, *klären* ‘clear’, *symbolisieren* ‘symbolize’

もちろん、上記の抽象的状态変化のみならず、RAによって具体的、物理的状态変化が表されることもある。以下がその例である。

- (4) a. 開閉: *entfalten* ‘unfold’, *öffnen* ‘open’, *schließen* ‘close’
- b. 形状の変化: *ballen* ‘ball’, *biegen* ‘bend’, *brechen* ‘refract’, *deformieren* ‘deform’, *einbiegen* ‘dent’, *falten* ‘wrinkle’, *kräuseln* ‘curl’, *krausen* ‘wrinkle’, *kreuzen* ‘cross’, *kringeln* ‘curl’, *locken* ‘curl’, *ringeln* ‘twine’, *rollen* ‘roll’, *runden* ‘curve’, *runzeln* ‘wrinkle’, *schlingen* ‘loop’, *stapeln* ‘accumulate’, *sträuben* ‘bristle’, *türmen* ‘pile up’, *umbilden* ‘reshape’, *umlegen* ‘go down’, *verbiegen* ‘bend’, *verdicken* ‘thicken’, *verfilzen* ‘felt’, *verfitzen* ‘tangle’, *verflechten* ‘intertwine’, *verformen* ‘deform’, *verknotten* ‘knot’, *verwickeln* ‘tangle’, *verwirren* ‘tangle’, *verwischen* ‘blur’, *verziehen* ‘go out of square, distort’, *wellen* ‘wave’
- c. 結合、集合: *einigen* ‘unite’, *fügen* ‘insert’, *mischen* ‘mix’, *rekrutieren* ‘recruit’, *sammeln* ‘gather’, *scharen* ‘troop together’, *verketteten* ‘chain up’, *zusammenballen* ‘agglomerate’, *zusammenfügen* ‘assemble’
- d. 分裂、分解、分散、溶解: *abbauen* ‘decompose’, *auflösen* ‘dissolve’, *spalten* ‘split’, *teilen* ‘split’, *verteilen* ‘scatter’, *zerspalten* ‘split’, *zerteilen* ‘dissipate’, *zersetzen* ‘decompose’, *zerstreuen* ‘scatter’
- e. 分離: *auflösen* ‘unwind’, *aushaken* ‘unhook’, *aushängen* ‘unhook’, *entblättern* ‘defoliate’, *entwirren* ‘unravel’, *schälen* ‘peel off’
- f. 化学的变化: *herauskristallisieren* ‘crystallize out’, *verflüchtigen* ‘evaporate’
- g. 内容物、人口の増減: *beleben* ‘populate’, *bevölkern* ‘populate’, *entleeren* ‘empty’, *entvölkern* ‘depopulate’, *füllen* ‘fill’, *leeren* ‘empty’
- h. 表情、筋肉の変化: *kontrahieren* ‘contract’, *spannen* ‘tense’, *straffen* ‘tighten’, *verklären* ‘clear’, *verkrampfen* ‘cramp’, *verzerren* ‘distort’, *verziehen* ‘distort’
- i. スイッチの切り替え: *auslösen* ‘trigger’, *ausschalten* ‘turn off’, *einschalten* ‘turn on’
- j. 雲霧: *beziehen* ‘cloud’, *umwölken* ‘cloud over’, *umziehen* ‘cloud’, *verschleiern* ‘veil, fog’
- k. 変身、変化: *verändern* ‘change’, *verwandeln* ‘change’, *wandeln* ‘change’
- l. 不調: *verstimmen* ‘go out of tune’, *verwirren* ‘tangle’

さらに、対象物の位置変化や移動を表す RA の例も見出される。

- (5) 位置変化: *bewegen* ‘move’, *drehen* ‘spin’, *heben* ‘lift’, *neigen* ‘incline’, *rühren* ‘stir’, *regen* ‘stir’, *senken* ‘decline’, *setzen* ‘settle’, *verlagern* ‘relocate, move’, *verschieben* ‘shift’, *wälzen* ‘roll’, *zurückbewegen* ‘move back’, *zurückdrehen* ‘roll back’, *zurückschieben* ‘slide back’

このような IA と RA の形式の使い分けには、意味的にある一定の傾向が確認できると思われる。筆者は、この傾向を「対象物の本質的变化」という観点から一般化することを提案してきた (Aoki 2005, 2007, 2010, 2011)。次節では、この意味的原理を詳しく検討する。また、その後で、第 2 章と第 4 章で課題として残った RIA と自由与格の解釈に関する反使役動詞の振る舞いが、この一般化と矛盾しないことを示す。

5.2. 対象物の本質的变化

ドイツ語の IA と RA の意味的な違いを考察するにあたり、初めに IA を取り上げ検討する。先述の通り、IA には破壊を表す動詞のグループが存在する。例として (6a), (7a), (8a), (9a) を挙げる。それぞれ、b のような対応する他動詞を持ち、再帰代名詞を伴わずに使役交替に関与する IA である。¹⁴

- (6) a. Die Vase zerbrach.

the vase broke
‘The vase broke.’

- b. Das Mädchen zerbrach die Vase.

the girl broke the vase
‘The girl broke the vase.’

- (7) a. Das Seil zerriss.

the rope tore
‘The rope tore.’

¹⁴ ただし、(9) の *zersplittern* ‘shatter’ に関しては、他動詞形を容認しない話者も存在する。筆者のインフォーマントの判断では、この動詞は何か壊れやすいものを落とした場合に生じる結果のみを描写するもので、対象物への積極的な働きかけに焦点を当てることはできないという。それゆえ、使役事象を表現する際には、(9b) の他動詞による語彙的使役を用いるよりも、*Der Junge ließ den Teller zersplittern* や *Der Junge zerschlug den Teller in Splitter* のような迂言的使役を用いるほうが適切であるという。

- b. Der Mann zerriss das Seil.
 the man tore the rope
 ‘The man tore the rope.’
- (8) a. Die Messerspitze brach ab.
 the top of the knife broke off
 ‘The top of the knife broke off.’
- b. Er brach die Messerspitze ab.
 he broke the top of the knife off
 ‘He broke off the top of the knife.’
- (9) a. Der Teller zersplitterte.
 the plate shattered
 ‘The plate shattered.’
- b. ²Der Junge zersplitterte den Teller.
 the boy shattered the plate
 ‘The boy shattered the plate.’

これらはすべて「割れる」「ちぎれる」「折れる」「砕ける」のような、ある一瞬において生じる状態変化を描写するものであるが、さらに特徴づけるならば、一瞬で対象物の本来的な機能まで変えてしまうほどの重大な状態変化を表す動詞であると言えることができる。例えば、花瓶は一度粉々に割れてしまえば、もう花瓶として使用することができない。このことは、(10a) のように、*es ist nicht als ... verwendbar* ‘it is not usable as ...’ という表現が付加可能であることから確認される。(10b) から (10d) についても同様である。つまり、これらの動詞は、「対象物の本来的な機能の喪失」を含意していると考えられる。¹⁵

¹⁵ ここに挙げた IA はいずれも本来的な機能の「喪失」と結び付いているが、例えば、*reifen* ‘ripen’ のような IA は、対象物の本来的な機能の「喪失」ではなく「獲得」を表すのではないかと思われる。具体的には、*Die Äpfel reiften* (リンゴの実が熟した) のような事態においては、リンゴは熟して初めて果実として食用となるということができる。ただし、この自動詞 *reifen* に対応する他動詞表現 *Die Sonne reifte die Äpfel* (太陽がリンゴの実を熟させた) は、インフォーマントの判断では、古めかしく詩的な表現として響くということも付け加えておきたい。また、このような「獲得」を表す IA 動詞は比較的少数であると考えられるが、他にも *Beton erhärtete an der Luft* (コンクリートが空気に触れて固まった) のような例を挙げることができる。この場合にも、コンクリートは固まって初めて建築用材としての本質的な機能を獲得すると考えることができる。

(10) a. Die Vase zerbrach und sie ist nicht als Vase verwendbar.

the vase broke and it is not as vase usable

‘The vase broke and it is not usable as vase.’

b. Das Seil zerriss und es ist nicht als Seil verwendbar.

the rope tore and it is not as rope usable

‘The rope tore and it is not usable as rope’

c. Die Messerspitze brach ab und sie ist nicht als Messer verwendbar.

the top of the knife broke off and it is not as knife usable

‘The top of the knife broke off and it is not usable as knife.’

d. Der Teller zersplitterte und er ist nicht als Teller verwendbar.

the dish shattered and it is not as dish usable

‘The dish shattered and it is not usable as dish.’

さらに、IA の動詞の中には、対象物が本来的な機能を失うというだけでなく、その物理的な存在までも喪失することを表すものが存在する。例として (11a), (12a), (13a), (14a) のような動詞が挙げられる。

(11) a. Der Schnee schmolz.

the snow melted

‘The snow melted.’

b. Die Sonne schmolz den Schnee.

the sun melted the snow

‘The sun melted the snow.’

(12) a. Die Wunde heilte.

the wound cured

‘The wound cured.’

b. Der Arzt heilte die Wunde.

the doctor cured the wound

‘The doctor cured the wound.’

(13) a. Die Bücher verbrannten.

the books burned

‘The books burned.’

b. Der Student verbrannte die Bücher.

the student burned the books

‘The student burned the books.’

(14) a. Alle Quellen trockneten aus.

all springs dried up

‘All springs dried up.’

b. Die anhaltende Dürre trocknete alle Quellen aus.

the persistent drought dried all springs up

‘The persistent drought dried up all springs.’

例えば、(11a) のように雪が解けるとき、それは水となって流れて消えてしまうことが含意される。その裏付けとして、この文には、(15a) のように *es ist verschwunden* ‘it disappeared’ という表現を付加することが可能である。(15b) から (15d) についても同様である。

(15) a. Der Schnee schmolz und er ist verschwunden.

the snow melted and it is disappeared

‘The snow melted and disappeared.’

b. Die Wunde heilte und sie ist verschwunden.

the wound cured and it is disappeared

‘The wound cured and disappeared.’

c. [?]Die Bücher verbrannten und sie sind verschwunden.

the books burned and they are disappeared

‘The books burned and disappeared.’

d. Alle Quellen trockneten aus und sie sind verschwunden.

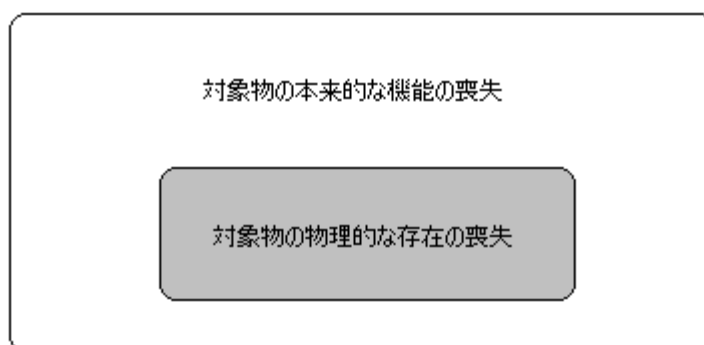
all springs dried up and they are disappeared

‘All springs dried up and disappeared.’

このように、上記の IA 動詞は共通して、対象物の本質的属性に重大な変化が生じることを表していると考えられる。これを本論文では「対象物の本質的变化」と呼ぶ。この中核を成すのが、(11a), (12a), (13a), (14a) のような「物理的な存在の喪失」の意味であり、さらに、より大きな範囲をカバーする概念として、(6a), (7a), (8a), (9a) のような「本来的な機能の喪失」¹⁶ を位置づけることができると思われる。これを図示すれば、(16) の通りである。

¹⁶ ただし、脚注 15 にも示した通り、「対象物の本来的な機能」に関しては、「機能の喪失」だけでなく、例としては少数であるが、「機能の獲得」も含まれる可能性がある。

(16) 対象物の本質的变化



以上のような意味的特徴を示す IA とは異なり、再帰代名詞 *sich* を伴う RA は、対象物の本質に関わるような重大な状態変化を描写しないと考えられる。例えば、ドアや門などが開閉するとき、(17a) や (18a) のように RA が使われるが、この場合、対象物はこの種の状態変化によって本質的な影響を受けない。すなわち、ドアが開くというのは、ドアの本来の用途に適った変化であり、一度開いたドアを元の状態に戻すことも可能であるため、ドア自体の本質的な属性には変化が生じないと認識される。門が閉じる場合も同様である。

(17) a. Die Tür öffnete sich.

the door opened REFL

‘The door opened.’

b. Die Frau öffnete die Tür.

the woman opened the door

‘The woman opened the door.’

(18) a. Das Tor schloss sich.

the gate closed REFL

‘The gate closed.’

b. Der Hüter schloss das Tor.

the gatekeeper closed the gate

‘The gatekeeper closed the gate.’

この意味的な違いを反映するように、IA には付加可能であった *es ist nicht als ... verwendbar* ‘it is not usable as ...’ や *es ist verschwunden* ‘it disappeared’ の表現を付加すると、これらの文は意味を成さない。

(19) a. Die Tür öffnete sich

the door opened REFL

und {*sie ist nicht als Tür verwendbar / *sie ist verschwunden}.

and it is not as door usable it is disappeared

‘The door opened and {*it is not usable as door / *it disappeared}.’

b. Das Tor schloss sich

the gate closed REFL

und {*es ist nicht als Tor verwendbar / *es ist verschwunden}.

and it is not as gate usable it is disappeared

‘The gate closed and {*it is not usable as gate / *it disappeared}.’

さらに、RA の具体例を見ていくと、(20a) では「ガラスが水でいっぱいになった」という事態が表現されているが、この RA もまた、対象物の本質的な変化を含意しない。というのも、ガラスには液体を注ぐのが普通であり、液体で満たしたからといって、ガラス自体は全く影響を受けないためである。また、(21a) のように、空が夕日で赤くなっても、それは単に光線による一時的な視覚的变化に過ぎず、それによって空が変質するわけではない。

(20) a. Das Glas füllte sich mit Wasser.

the glass filled REFL with water

‘The glass filled with water.’

b. Er füllte das Glas mit Wasser.

he filled the glass with water

‘He filled the glass with water.’

(21) a. Der Himmel rötete sich.

the sky reddened REFL

‘The sky reddened.’

b. Die Abendsonne rötete den Himmel.

the evening sun reddened the sky

‘The evening sun reddened the sky.’

そして、当然ながら、これらの RA の例にも、*es ist nicht als ... verwendbar* ‘it is not usable as ... ’ や *es ist verschwunden* ‘it disappeared’ のような表現は結び付かない。

(22) a. Das Glas füllte sich mit Wasser

the glass filled REFL with water

und { *es ist nicht als Glas verwendbar / *es ist verschwunden }.

and it is not as glass usable it is disappeared

‘The glass filled with water and { *it is not usable as glass / *it disappeared }.’

b. Der Himmel rötete sich

the sky reddened REFL

und { *er ist nicht als Himmel verwendbar / *er ist verschwunden }.

and it is not as sky usable it is disappeared

‘The sky reddened and { *it is not usable as sky / *it disappeared }.’

また、前節でも指摘したように、RA のグループは、抽象的な次元での状態変化を表す動詞を非常に多く含んでいる。これらはそもそも抽象的变化であるため、対象物が本質的な影響を被ると認識することができない。例えば、(23a) のように兵力が増しても、軍隊そのものが変化するわけではなく、(24a) のように旅行の行き先が変更されても、旅行は旅行に変わりなく、(25a) のように車の速度が増しても、速度という概念自体に変化は生じない。よって、これらの抽象的状态変化もまた、上述の意味的原理に従っていると考えられる。

(23) a. Die Truppen verstärkten sich.

the troops strengthened REFL

‘The troops strengthened.’

b. Der General verstärkte die Truppen.

the general strengthened the troops

‘The general strengthened the troops.’

(24) a. Unsere Reise dehnte sich bis nach Bonn aus.

our trip expanded REFL until to Bonn PART

‘Our trip expanded to Bonn.’

b. Wir dehnten unsere Reise bis nach Bonn aus.

we expanded our trip until to Bonn PART

‘We expanded our trip to Bonn.’

(25) a. Die Geschwindigkeit erhöhte sich.

the speed increased REFL

‘The speed increased.’

b. Der Chauffeur erhöhte die Geschwindigkeit.

the driver increased the speed

‘The driver increased the speed.’

そして、当然予測される通り、これらの RA の例に *es ist nicht als ... verwendbar* ‘it is not usable as ...’ や *es ist verschwunden* ‘it disappeared’ のような表現を付加すると、奇妙な文として判断される。

(26) a. Die Truppen verstärkten sich

the troops strengthened REFL

und { *sie sind nicht als Truppen verwendbar / *sie sind verschwunden }.

and they are not as troops usable they are disappeared

‘The troops strengthened and { *they are not usable as troops / *they disappeared }’

b. Unsere Reise dehnte sich bis nach Bonn aus

our trip expanded REFL until to Bonn PART

und { *sie ist nicht als Reise verwendbar / *sie ist verschwunden }.

and it is not as trip usable it is disappeared

‘Our trip expanded to Bonn and { *it is not usable as trip / *it disappeared }.’

c. Die Geschwindigkeit erhöhte sich

the speed increased REFL

und { *sie ist nicht als Geschwindigkeit verwendbar /

and it is not as speed usable /

*sie ist verschwunden }.

it is disappeared

‘The speed increased and { *it is not usable as speed / *it disappeared }.’

以上の観察から、ドイツ語の IA と RA には以下のような意味的な違いが想定されうる。(Aoki 2005, 2007, 2010, 2011)

(27) a. ドイツ語の IA は対象物の本質的变化(対象物の物理的な存在の喪失、あるいは本来的な機能の喪失)を表す。

b. ドイツ語の RA は、対象物の本質的变化を表さない。

この原理によって 5.1 に示したドイツ語反使役動詞がどの程度カバーされるのかを、次節でさらに検討する。

その分析に移る前に一点補足しておきたいのだが、上記の「対象物の本質的变化」という原理は、「状態変化の（不）可逆性」という意味内容と密接に結びついている。つまり、IA においては、対象物が本質的に変化することが表されるため、その際に生じる状態変化は不可逆的であることが多い。例えば、花瓶が割れる (*die Vase zerbricht*) 場合、その割れた状態は永続し、元の状態に戻ることはない。一方、RA においては、対象物が本質的な影響を受けないことが表されるため、その状態変化は可逆的であるのが一般的である。例えば、ドアが開く (*die Tür öffnet sich*) 場合、その開いた状態は容易に元の閉じた状態に回復させることができる。そこで、「対象物の本質的变化」ではなく、「状態変化の（不）可逆性」という観点から、IA と RA を区別するほうが適切ではないかと考えることもできるだろう。しかし、実際には、「状態変化の（不）可逆性」という原理では、いくつかの例における反使役動詞の形態的な実現を説明することができない。

ひとつ例を挙げると、ドイツ語では (28a) の「砂糖がコーヒーに溶ける」という事態は、IA ではなく RA の *sich auflösen* ‘dissolve’ で描写される。ここで、RA を可逆的な状態変化を表す形式として定義するのであれば、この動詞は明らかに反例となるだろう。なぜなら、液体に何らかの固体が溶けるとき、その状態は永続し、もう元には戻せないからである。

(28) a. Der Zucker löste sich im Kaffee auf.

the sugar dissolved REFL in-the coffee PART

‘The sugar dissolved in the coffee.’

b. Der Vater löste den Zucker im Kaffee auf.

the father dissolved the sugar in-the coffee PART

‘The father dissolved the sugar in the coffee.’

同様に、(29a) の RA の *sich spalten* ‘split’ では「木材がふたつに割れる」という出来事が描写されているが、ここでも物理的な分裂が問題になっているので、木材を前の状態に回復させることができない。

(29) a. Das Holz spaltete sich.

the wood split REFL

‘The wood split.’

b. Er spaltete das Holz.

he split the wood

‘He split the wood.’

一方、これらの *sich auflösen* ‘dissolve’ や *sich spalten* ‘split’ の例に対しても、「対象物の本質的变化」という観点は有効であると思われる。(28a) では、砂糖は液体に溶けた状態でも砂糖そのものとして認識される。つまり、砂糖の本来の用途は、溶かして調味することであるため、溶けた砂糖もその本質的な属性を保っていると考えられる。また、(29a) の木材は、薪や建築資材として加工されるのが普通であり、ふたつに割ったとしても、木材として認識されるため、その本質的な属性には変化がないとすることができる。¹⁷

このように、RA と IA を特徴づける原理となるのは「対象物の本質的变化」であると推測される。そして、「状態変化の（不）可逆性」という意味要素は、この原理から付随的に生じる含意であり、すべての反使役動詞を説明するだけの効力を持たないと考えられる。

5.3. ドイツ語反使役動詞の再検討

引き続き、「対象物の本質的变化」という一般化の妥当性を検討する。初めに 5.3.1 では、RA と IA の具体例を取り上げ、その用例を分析する。続いて、5.3.2 では、第 2 章で紹介した Schäfer (2008) の形態的分類（形容詞派生、名詞派生、接頭辞付き動詞）を取り上げ、意味的に再分析する。さらに、5.3.3 では、第 4 章で「自然条件が原因となる反使役動詞」と呼ばれていた用例について考察する。5.3.4 では、RA と IA の両方の形態で用いられる RIA 動詞を観察する。最後に、5.3.5 で、自由与格の解釈について論じる。

¹⁷ 実際には、RA 動詞 *sich spalten* ‘split’ は、(29a) の *Das Holz spaltete sich*（木材がふたつに割れた）のような物理的な分裂よりも、*Die Partei spaltete sich*（党が分裂した）のような抽象的な分裂を表す場合に用いられることのほうが多いように思われる。この例においても、分裂した党はふたつの党になるだけであり、党であることに変わりがないと考えられるため、動詞 *sich spalten* が RA の形態を取ることが上述のテーゼによって説明可能である。

5.3.1. RA と IA の比較

本節では、5.1 に示したドイツ語反使役動詞の意味的下位分類に基づき、代表的な動詞グループを取り上げ、RA と IA を比較する。そして、その際に、「対象物の本質的变化」という一般化によって、どの程度この形態的な違いが捉えられるのかを考察する。

5.3.1.1. 破壊の動詞

ドイツ語の IA には、破壊を表す動詞が多いことを 5.1 で述べた。具体的には (30) のような動詞が挙げられる。

- (30) IA: *abbrechen* ‘break off’, *ausreißen* ‘tear out’, *brechen* ‘break’, *durchbrechen* ‘break in the middle’, *durchreißen* ‘tear in half’, *einknicken* ‘snap’, *einreißen* ‘break down’, *einstürzen* ‘collapse’, *entzweibrechen* ‘shatter’, *losbrechen* ‘break off’, *niederbrechen* ‘break down’, *reißen* ‘tear’, *umbrechen* ‘break down’, *umknicken* ‘snap’, *zerbrechen* ‘break into pieces’, *zerbröckeln* ‘crumble’, *zerkrümeln* ‘crumble’, *zerreißen* ‘tear apart’, *zersplittern* ‘shatter’

先述の通り、これらの破壊の動詞は、状態変化によって対象物が本来の機能を失うという意味を表す。例えば、(31) のように椅子の足が折れたり、建物が崩れ落ちたり、陶器や皿が割れたり、マッチ棒が折れたりするとき、いずれの物体も元の正常な状態に戻すことができないことがわかる。

- (31) a. Das Stuhlbein brach ab.

the chair leg broke off

‘The chair leg broke off.’

- b. Das Haus stürzte ein.

the house collapsed PART

‘The house collapsed.’

- c. Das Porzellan brach entzwei.

the porcelain broke in two

‘The porcelain shattered.’

d. Der Teller fiel auf die Erde und zerbrach.

the dish fell on the ground and broke

‘The dish fell on the ground and broke into pieces.’

e. Das Streichholz knickte um.

the matchstick snapped PART

‘The matchstick snapped’

同様に、「枝が雪の重みで折れる」という事態も、(32a) のように IA の *brechen* ‘break’ という動詞を用いて表される。もちろん、この場合に、枝は人間が使用する道具とは見なされないが、樹木の一部として養分を運ぶ働きをしていると考えられるため、枝が幹から分離すると、枝はその機能を失うと認識される。これに対して、「枝が雪の重みでたわむ」という事態は、(32b) のように、RA の *sich biegen* ‘bend’ で表される。このときには、枝が本体の樹木から分離せずに、その一部としてとどまっていることが明らかである。つまり、折れる場合とは異なり、たわんだ枝には本質的な変化が生じないと考えられる。

(32) a. Der Zweig brach unter der Schneelast.

the branch broke under the load of snow

‘The branch broke under the load of snow.’

b. Der Zweig bog sich unter der Schneelast.

the branch bent REFL under the load of snow

‘The branch bent under the load of snow.’

また、動詞 *brechen* ‘break’ には、(32a) のような破壊の用法の他にも、「光の屈折、音の反響、波形の変化」という用法がある。Duden Deutsches Universalwörterbuch には、*auf etw. auftreffen u. in eine andere Richtung abgelenkt od. zurückgetrieben werden*（何かに衝突し他の方向へ向けられる、あるいは押し戻される）と記述されている。この用例では、(32a) の「枝が折れる」という事態とは異なり、対象物そのものが大きく変化することは含意されない。つまり、屈折しても光は光であり、音は音である。形が変わっても、波は波に違いない。そして、実際に、屈折の意味で *brechen* が用いられるときには、(33a) や (33b) のように、再帰代名詞 *sich* が出現する。

(33) a. Brandung bricht sich an den Felsen.

wave breaks REFL at the bluffs

‘Wave refracts at the bluffs.’

b. Der Schall bricht sich am Gewölbe.

the sound breaks REFL at-the vault

‘The sound refracts at the vault.’

したがって、これらの例における再帰代名詞 *sich* の出現には、意味的に対象物の同一性が保たれているか否かが基準となっていると考えられる。このような観点において、(32) と (33) の例も、「対象物の本質的变化」という一般化に適合していると言うことができるだろう。

5.3.1.2. 焼失、炭化の動詞

ドイツ語の IA には、瞬間的な破壊の動詞のみならず、ある程度の時間幅を持って進行する非瞬間的な状態変化動詞も存在する。そして、その多くは、対象物が他の物質・物体に変化することを表すものである。例として、*ausbrennen* ‘burn out’, *niederbrennen* ‘burn down’, *verbrennen* ‘burn’, *verkohlen* ‘char’ などの焼失、炭化の動詞が挙げられる。

(34) a. Die Wohnung brannte völlig aus.

the apartment burned entirely out

‘The apartment burned out entirely.’

b. Die Kerze ist niedergebrannt.

the candle is down burned

‘The candle burned down.’

c. Der Kuchen ist im Ofen verbrannt.

the cake is in-the oven burned

‘The cake burned in the oven’

d. Das Holz ist verkohlt.

the wood is charred

‘The wood charred.’

(34) に示した通り、これらの動詞が用いられ、住居が焼けてなくなったり、蠟燭が焼け落ちたり、ケーキが焦げたり、木材が炭化するといった事態が描写されるときには、対象物の本来的な機能が失われることが明らかである。

さらに、この機能の喪失に伴って、対象物が炭や灰などの物体、物質に変わることが含意される。例えば、(34d) の *verkohlen* ‘char’ という動詞は、名詞 *Kohle* ‘coal’ からの派生形であり、文字通り *Kohle* へと変化するという意味を表す。また、*verbrennen* ‘burn’ のような動詞には、(35) の *zu Asche* ‘to ashes’ のような、変化後の物質を示す句を付加することができる。

(35) Die Dokumente sind zu Asche verbrannt.

the documents are to ash burned

‘The documents burned to ashes.’

同様に、(36) の IA 動詞 *verkochen* ‘boil to a pulp’ と *zerkochen* ‘cook to a pulp’ にも、状態変化後の物質を示す句 *zu Mus* ‘to mush’ や *zu Brei* ‘to mush’ を付加することができる。つまり、ここでは、リンゴやジャガイモが煮えて、どろどろのムースや粥に変化することが描写されている。

(36) a. Die Äpfel sind zu Mus verkocht.

the apples are to mush cooked

‘The apples cooked to mush.’

b. Die Kartoffeln sind zu Brei zerkocht.

The potatos are to mush cooked

‘The potatos cooked to mush.’

また、(37) の化学的状態変化を表す IA 動詞 *verbrennen* ‘burn’ と *gelatinieren* ‘gelatinize’ にも、*zu Kohlensäure und Wasser* ‘to carbonic acid and water’ や *zum Gel* ‘to the gel’ のような句が出現しうる。つまり、(37) では、炭水化物が体内で燃焼して炭酸と水に変わるとか、溶液がゲルに変わるといった変化が描写されている。よって、これらの IA 動詞も対象物の本質的な変化を前提としていると考えられる。

(37) a. Kohlehydrate verbrennen im Körper zu Kohlensäure und Wasser.

carbohydrates burn in-the body to carbonic acid and water

‘Carbonhydrates burn to carbonic acid and water in the body.’

b. Die Lösung ist zum Gel gelatiniert.

the solution is to-the gel gelatinized

‘The solution gelatinized to the gel.’

5.3.1.3. 液体に関する動詞

次に、液体に関する変化を表すものとして、解凍、凍結、蒸発、気化の動詞を順に取り上げる。

初めに、解凍の動詞として *schmelzen* ‘melt’ と *tauen* ‘thaw’ を挙げる。これらは、(38) のように IA の形態で用いられる。この動詞によって典型的に表されるのは、雪や氷が解けるという事態である。5.2 でも述べたように、このとき、雪や氷のような固体は水となって流れ消えてしまうため、その本性を維持しているとは捉えられない。

(38) a. Der Schnee ist an der Sonne geschmolzen.

the snow is at the sun melted

‘The snow melted at the sun.’

b. Der Schnee ist von den Dächern getaut.

The snow is from the roofs thawed

‘The snow thawed off from the roofs.’

また、(38) の解凍の動詞は固体から液体への変化に関わるものであるが、これと反対の関係、すなわち液体から固体への変化を描写するのは、*einfrieren* ‘freeze’ のような凍結の動詞である。この動詞もまた、(39) のように IA の形態で実現される。辞書によれば、この自動詞にはふたつの用法がある。1 つ目は *zu Eis werden* (氷になる) という意味を表すもの (cf. (39a))、2 つ目は *durch Frosteinwirkung unbenutzbar, unbrauchbar werden* (寒気の影響で使用不可能になる) という意味を表すものである (cf. (39b))。

(39) a. Das Wasser in der Leitung ist eingefroren.

the water in the pipe is freezed

‘The water in the pipe freezed.’

b. Die Wasserleitung ist eingefroren.

the water pipe is freezed

‘The water pipe freezed.’

(38) に示した *schmelzen* ‘melt’ や *tauen* ‘thaw’ と類似して、(39a) の *einfrieren* ‘freeze’ に関しても、水が氷という別の物体に変わるため、もはや飲用水として機能しなくなると想定される。また、(39b) の用法では、水道管が凍結すると水が流れなくなるため、水道管としての本来の機能が失われることが

示唆される。したがって、この動詞の形態的実現に関しても、「対象物の本質的变化」の一般化から説明が可能であるように思われる。さらに、この IA 動詞は、比喩的な意味で、(40) のようにコンピューターが突然動作を停止し、フリーズ状態になるときにも使われる。このときにもやはり、コンピューターが通常の使用状態から逸脱することが表される。

(40) Mein PC ist eingefroren.

my PC is freezed

‘My PC freezed.’

さて、ここまで液体の変化として解凍と凍結を見てきたが、もうひとつの液体の状態変化として、蒸発を挙げることができる。5.1 でも示した通り、蒸発の動詞 *verdampfen* ‘vaporize’, *verdunsten* ‘evaporate’, *verkochen* ‘boil away’ は、いずれも IA の形態で用いられ、水が蒸気となって消失することを表す。

(41) a. Das Wasser ist verdampft.

the water is vaporized

‘The water vaporized.’

b. Das Wasser im Topf ist verdunstet.

the water in-the pot is evaporated

‘The water in the pot evaporated.’

c. Das ganze Wasser ist verkocht.

the whole water is boiled away

‘All the water evaporated.’

ただし、同じような気化の動詞でも、ドイツ語には *sich verflüchtigen* ‘evaporate’ のように、RA の形態を取るものもある。Duden Deutsches Universalwörterbuch には、この RA 動詞の意味として、*in gasförmigen Zustand übergehen* (気化した状態に移行する) と書かれている。この動詞が用いられるのは、例えば、香水に含まれるアルコールが気化するときである。

(42) Alkohol aus Parfüm verflüchtigt sich.

alcohol from perfume evaporates REFL

‘Alcohol from perfume evaporates.’

(41) の蒸発の動詞とは異なり、この例に関しては、気化したアルコールも依然として空気中にアルコールとして存在すると見なされるのではないかと推測される。つまり、アルコールは気化しても、その属性（化学的組成）を保っているという捉え方である。この *sich verflüchtigen* という動詞が化学の専門用語として辞書に記載されていることから、この推測が裏付けられるように思われる。また、インターネットの化学術語の解説サイトには、(42) の用例について、以下のような注釈がある。¹⁸

(43) Alkohol aus Parfüm verflüchtigt sich. Dazu ein Beispiel: Zu Alkohol in flüssigem Zustand gehört immer etwas Alkohol als Gas in der Umgebung. Beweis dafür ist, dass man Alkohol riechen kann. Man kann Alkohol umso besser riechen, je wärmer es ist. Je höher die Temperatur steigt, desto mehr Alkoholgas bildet sich also. Wenn der gesamte Alkohol in Gas umgewandelt ist, hat sich der Alkohol verflüchtigt.

この記述によれば、アルコールが液体の状態であるときにも、周囲には気化したアルコールが少量存在していて、嗅覚でその存在を確認することができるという。また、温めれば温めるほど、アルコールは気化し、その匂いが強くなるという。そして、全てのアルコールが気体に変化したときに、*der Alkohol hat sich verflüchtigt*（アルコールが気化した）という表現が用いられるのだと説明されている。したがって、気化したアルコールも、アルコールとして認識されると考えられ、他の RA と同様に、動詞 *sich verflüchtigen* もまた対象物の本質的属性の維持を表すと言うことができるだろう。

5.3.1.4. 位置変化の動詞

使役交替の論考においては、状態変化動詞のみならず、位置変化動詞がしばしば議論の対象とされてきた。その際に典型的に取り上げられてきたのは、動詞 *rollen* ‘roll’ である。

(44) a. Der Würfel rollt.

the dice rolls

‘The dice rolls.’

¹⁸ http://www.halbmikrotechnik.de/service/methode/chemie/meth_fluessig/siedetemperatur/sieden.htm

b. Die Räder rollen.

the wheels roll

‘The wheels roll.’

上の例では、サイコロや車輪が回転するという対象物の空間的な位置変化が問題となっている。(44) から分かるように、この場合、再帰代名詞 *sich* は出現しない。この用法を IA と見なすならば、明らかにこれは「対象物の本質的变化」という想定への反例となるだろう。なぜなら、サイコロや車輪が回転しようとも、それ自体は全く変化しないと考えられるためである。例えば、これらの文は、通常 of IA には付加可能であるはずの *es ist nicht als ... verwendbar* ‘it is not usable as ...’ や *es ist verschwunden* ‘it disappeared’ のような表現と相容れない。

(45) a. Der Würfel rollte

the dice rolled

und { *er ist nicht als Würfel verwendbar / *er ist verschwunden }.

and it is not as dice usable it is disappeared

‘The dice rolled and { *it is not usable as dice / *it disappeared }.’

b. Die Räder rollten

the wheels rolled

und { *sie sind nicht als Räder verwendbar / *sie sind verschwunden }.

and they are not as wheels usable they are disappeared

‘The wheels rolled and { *they are not usable as wheels / *they disappeared }.’

この *rollen* の例をどう取り扱うべきかについては今後の課題としたいが、少なくとも現時点において言えることは、(44) のような IA の形態を取る位置変化動詞は、ドイツ語において例外的とみなされる可能性があるということである。つまり、主体的に移動する人間ではなく、そのような能力を持たない物体が主語となって何らかの位置変化が表されるとき、多くの場合には、(46) のような RA が用いられる。

(46) RA: *bewegen* ‘move’, *drehen* ‘turn’, *heben* ‘lift’, *neigen* ‘incline’, *rühren* ‘stir’, *regen* ‘stir’, *senken* ‘decline’, *setzen* ‘settle’, *verlagern* ‘relocate, move’, *verschieben* ‘shift’, *wälzen* ‘roll’, *zurückbewegen* ‘move back’, *zurückdrehen* ‘roll back’, *zurückschieben* ‘slide back’

例えば、車輪が回転するとき、(47) のように、RA の *sich drehen* ‘turn’ が使われる。そして、これまで見てきた RA 動詞と同じく、(47) の RA も対象物の本質的属性の変化を含意しないと考えられる。すなわち、車輪が回転しても、車輪の本来的な機能は失われず、物理的にも消滅しない。

(47) Die Räder drehten sich.

the wheels turned REFL

‘The wheels turned.’

また、位置変化の意味からは少し外れるが、動詞 *rollen* ‘roll’ は、(44) のような IA だけでなく、RA としての用法も備えている。このときに表される意味は、「紙や布などに形状の変化が生じ、その端や縁が丸くなる」というものである。例えば、写真の縁などが丸まるという事態は、(48) のように RA の *sich rollen* で描写される。この例から明らかであるように、丸まるという変化が生じてても、写真という物体そのものに大きな影響があると見なされない。したがって、この RA 動詞の用例も、「対象物の本質的变化」という原理から説明可能である。

(48) Das Bild rollte sich.

the picture rolled REFL

‘The picture rolled.’

5.3.1.5. 形状変化の動詞

前節で動詞 *rollen* ‘roll’ の RA の用法を指摘したが、5.1 にも示したように、RA のグループには他にも (49) のような形状変化の動詞が多数確認される。これらはすべて、対象物に皺や歪みといった変化が生じることを表す。

(49) RA: *ballen* ‘ball’, *biegen* ‘bend’, *deformieren* ‘deform’, *einbiegen* ‘dent’, *falten* ‘wrinkle’, *kräuseln* ‘curl’, *krausen* ‘wrinkle’, *kreuzen* ‘cross’, *kringeln* ‘curl’, *locken* ‘curl’, *ringeln* ‘twine’, *runden* ‘curve’, *runzeln* ‘wrinkle’, *schlingen* ‘loop’, *stapeln* ‘accumulate’, *sträuben* ‘bristle’, *türmen* ‘pile up’, *umbilden* ‘reshape’, *umlegen* ‘go down’, *verbiegen* ‘bend’, *verdicken* ‘thicken’, *verfilzen* ‘felt’, *verfitzen* ‘tangle’, *verflechten* ‘intertwine’, *verformen* ‘deform’, *verknotten* ‘knot’, *verwickeln* ‘tangle’, *verwirren* ‘tangle’, *verwischen* ‘blur’, *verziehen* ‘go out of square, distort’, *wellen* ‘wave’

具体例として、(50) を挙げるができる。木が風でたわむ、海が風で波立つ、鉋屑が丸まる、蔦が巻き付く、絨毯に皺が寄るなど、これらはいずれも一時的な形状の変化を述べているに過ぎず、主語名詞句で表されている物体を質的に大きく変えるような深刻な変化が起こるとは想定されない。つまり、対象物はその本質的属性を保っていると考えられる。

(50) a. Die Bäume bogen sich im Wind.

the trees bent REFL in-the wind

‘The trees bent in the wind.’

b. Die See kräuselte sich im Wind.

the sea rippled REFL in-the wind

‘The sea rippled in the wind.’

c. Die Hobelspäne kringelten sich.

the shavings curled REFL

‘The shavings curled.’

d. Efeu schlang sich um den Baumstamm.

ivy wrapped REFL around the tree trunk

‘Ivy wrapped around the tree trunk.’

e. Der Teppich wellte sich.

the carpet waved REFL

‘The carpet curled.’

このような形状変化の動詞が RA に多数分布し、*zerbrechen* ‘break into pieces’, *zerreißen* ‘tear apart’, *zersplittern* ‘shatter’ のような対象物の完全なる破壊を表す動詞が IA に多数確認されることは、非常に対照的である。ここでも、このふたつの動詞グループの形態的相違を説明するためには、「対象物の本質的变化」という観点が有効であるように思われる。

5.3.1.6. 問題となる動詞

最後に、「対象物の本質的变化」という一般化が当てはまらないと思われる反使役動詞の例を指摘する。

初めに反例として挙げるができるのは、動詞 *zuklappen* ‘close with a snap’ と *zuknallen* ‘slam shut’ である。これは、(51) のように、蓋や窓などが音を立てて閉まる様子を描写する際に用いられる。Duden Deutsches Universalwörterbuch には、*zuklappen* の意味として、*sich mit klappendem*

Geräusch schließen (ボタンという音とともに閉まる) という記載があり、*zuknallen* の意味として、*geräuschvoll ins Schloss fallen; sich schließen* (大きな音を立てて閉まる) という記載がある。このとき、対象物の本来の用途から逸脱しない変化が問題となっていることが明らかである。しかし、予想に反して、これらの動詞の反使役用法には、再帰代名詞 *sich* が出現しない。

(51) a. Der Deckel ist zugeklappt.

the lid is shut snapped

‘The lid closed with a snap.’

b. Bei dem Luftzug ist das Fenster zugeknallt.

in the air draft is the window shut slammed

‘The window slammed shut with the draft.’

ところで、この動詞 *zuklappen* ‘close with a snap’ と *zuknallen* ‘slam shut’ は、基礎動詞 *klappen* ‘clap’ および *knallen* ‘bang’ と、分離接頭辞 *zu* ‘shut’ から成る複合動詞である。基礎動詞の *klappen* と *knallen* は、単独で使われるときには、いずれも音の放出を表す。例として、(52a) の「郵便受けの蓋がボタンと音を立てる」と (52b) の「ドアがバンと音を立てる」という文を挙げる。

(52) a. Der Briefkastendeckel klappt.

the letter box lid claps

‘The lid of the letter box claps.’

b. Die Tür knallt.

The door bangs

‘The door bangs.’

(52) の自動詞は、音が発生するというイベントを描写しており、対象物の状態変化に焦点を当てるものではない。¹⁹ つまり、(52) の *klappen* ‘clap’ や *knallen* ‘bang’ は、音の放出に伴って、郵便受けやドアなどの対象物に何らかの結果状態が生じることを表しているわけではない。その証拠として、

¹⁹ ただし、動詞 *knallen* ‘bang’ には、単なる音の放出を表す用法以外にも、*mit einem Knall zerspringen, platzen* (バンという音を立てて割れる、破裂する) という意味もあり、この用法においては、対象物の状態変化が描写される。例として、*Der Luftballon, ein Reifen ist geknallt* (風船、タイヤがバンと音を立てて破裂した) のような文が挙げられる。このとき、完了の助動詞には、*haben* ‘have’ でなく *sein* ‘be’ が選択されることにも注意されたい。

(52) の動詞はいずれも完了の助動詞として *sein* ‘be’ ではなく *haben* ‘haben’ を選択する。

(53) a. Der Briefkastendeckel hat geklappt.

the letter box lid has clapped

‘The lid of the letter box clapped.’

b. Die Tür hat geknallt.

the door has banged

‘The door banged.’

ただし、これらの音の放出を表す基礎動詞に分離接頭辞 *zu* ‘shut’ を付加した場合には、音の放出というイベントの結果として、対象物が *zu* という状態に置かれるという状態変化の意味が表される。また、(51) にも示した通り、この複合動詞 *zuklappen* ‘close with a snap’ と *zuknallen* ‘slam shut’ は、完了の助動詞として *sein* ‘be’ を選択する。この音放出動詞を基礎とする複合動詞の意味に関して、本章で提案したテーゼでは十分な説明を与えることができない。

また、音放出動詞以外にも、(54) のような乾燥を表す動詞の一部において、類似した問題が観察される。

(54) 乾燥を表す IA: *ausdörren* ‘dry up’, *austrocknen* ‘desiccate’, *dörren* ‘dehydrate’, *trocknen* ‘dry’, *verbrennen* ‘sear’

上記の動詞はすべて IA として実現される。(55) の例文からも明らかであるように、動詞 *austrocknen* ‘desiccate’, *verbrennen* ‘sear’, *dörren* ‘dehydrate’, *ausdörren* ‘dry up’ は、日照りや乾燥によって川が干上がったたり、植生が干からびるといような、対象物を根絶させるほどの強い状態変化を表す。つまり、上記の 4 つの IA は、「対象物の本質的变化」の原理に従っていると考えられる。

(55) a. Der Fluss ist ausgetrocknet.

The river is dried up

‘The river dried up.’

b. Die Vegetation ist von der glühenden Hitze verbrannt.

the vegetation is by the blazing heat seared

‘The vegetation seared in the blazing heat.’

ただし、(54) に示した *trocknen* ‘dry’ という動詞の場合には、対象物の根絶や消滅は含意されず、(56) のように、洗濯物などの濡れた状態のものから単に水分がなくなるという意味が表される。

(56) Die Wäsche ist an der Luft getrocknet.

the laundry is at the air dried

‘The laundry dried at the air.’

この (56) の例に対して、「洗濯物 (*Wäsche*) は乾いたらもう洗濯物でない」と言うことも不可能ではないかもしれないが、シャツや布巾などが主語となるとときには、それらが乾燥によって本質的な変化を被ると説明することには違和感がある。つまり、自動詞 *trocknen* ‘dry’ には、「対象物の本質的変化」という一般化が当てはまらない可能性がある。そして、この意味的な逸脱と関連して、自動詞 *trocknen* は、完了の助動詞として、*sein* ‘be’ だけでなく *haben* ‘have’ も選択しうるという特徴を持つ (cf. (57))。一方、*trocknen* を除く乾燥の IA 動詞 *austrocknen* ‘desiccate’, *verbrennen* ‘sear’, *dörren* ‘dehydrate’, *ausdörren* ‘dry up’ は、完了時制で助動詞 *sein* ‘be’ としか結び付かない (cf. (55))。

(57) Die aufgehängten Netze {sind / haben} schon getrocknet

the hung nets are have already dried

‘The suspended nets dried already.’

さらに、(58) のような腐敗、発酵の IA 動詞の一部も、同様の問題を孕んでいる。

(58) 腐敗、発酵を表す IA: *beschlagen* ‘mold’, *säuern* ‘sour’, *umschlagen* ‘turn sour’, *verderben* ‘decay’

まず、(58) に挙げた動詞のうち、*beschlagen* ‘mold’, *umschlagen* ‘turn sour’, *verderben* ‘decay’ では、完了の助動詞に *sein* ‘be’ のみが選択される。

(59) a. Die Wurst ist schon beschlagen.

the sausage is already molded

‘The sausage molded already.’

b. Der Wein ist umgeschlagen.

the wine is gone off

‘The wine turned sour.’

c. Das Fleisch ist verdorben.

the meat is decayed

‘The meat decayed.’

(59) では、食品が腐ったり劣化して駄目になるという事態が描写されている。例えば、Duden Deutsches Universalwörterbuch では、(59b) の文に、*der Wein ist trüb geworden u. hat einen schlechten Geruch u. Geschmack angenommen* (ワインが濁って酷い匂いや味がする) という解説が加えられている。また、(59c) の文の意味として、(*bes. von Lebensmitteln*) *durch längeres Aufbewahrtwerden schlecht, unbrauchbar werden* (特に食料品について、長く保存しすぎて悪くなり、使用不可能になる) と書かれている。したがって、これらの IA は、いずれも対象物の食品としての本来の機能が失われることを含意するため、「対象物の本質的変化」という観点から問題なく捉えられると考えられる。これに対して、(58) に挙げた動詞のひとつである *säuern* ‘sour’ は、*durch Gärung sauer werden* (発酵の作用によって酸っぱくなる) という類似した意味を表すものの、完了時制で助動詞として *sein* ‘be’ だけでなく *haben* ‘have’ も選択しうるという特徴を持つ。

(60) Der Kohl {ist / hat} schon gesäuert.

the cabbage is has already soured

‘The cabbage soured already.’

この (60) の「キャベツが酸っぱくなった」という文に対しては、「キャベツが酸敗し食用として適さなくなっている」という解釈も可能であるが、一方で、「発酵して酸味を帯びているだけであって、キャベツ自体に何の変化もない」と捉えることも可能であろう。つまり、後者の解釈では、「対象物の本質的変化」というテーゼは説得力を持たないと考えられる。²⁰

²⁰ ただし、脚注 15 でも述べたように、ドイツ語の IA は、本来的な機能の「喪失」だけでなく、「獲得」を含意する可能性がある。例えば、*Die Äpfel reiften* (リンゴの実が熟した) のような IA である。この *Der Kohl säuerte* (キャベツが酸っぱくなっ

以上観察してきたように、破壊の動詞、焼失、炭化の動詞、液体に関する動詞、位置変化の動詞、形状変化の動詞など、反使役動詞の代表的なグループにおいて、RA と IA の使い分けに「対象物の本質的变化」という観点が概ね有効であると考えられる。ただし、音放出動詞からの派生形である *zuklappen* ‘close with a snap’ や *zuknallen* ‘slam shut’、完了の助動詞として *sein* ‘be’ のみならず *haben* ‘have’ を選択しうる自動詞 *trocknen* ‘dry’ や *säuern* ‘sour’ に対しては、この一般化が妥当ではない可能性がある。

5.3.2. 形容詞・名詞派生動詞と *ab*-動詞

2.3 で見たように、Schäfer (2008) は自身の分析の中で、形容詞派生、名詞派生、接頭辞付加といった形態的特徴がドイツ語反使役動詞の使い分けに影響を及ぼす可能性について考察しているが、結論として、これらの形態的要因はいずれも反使役動詞を特徴づけるのに十分ではないと述べていた。本節では、彼の観察を順にもう一度振り返り、それぞれの動詞グループを意味的に再検討する。

5.3.2.1. 形容詞派生動詞

Schäfer (2008: 31) は、初めに形容詞派生動詞を取り上げ、このタイプの動詞は RA の形態を取ることが多いと指摘していた。Schäfer (2008) のデータベースでは、RA にリストされたもののうち約半分が形容詞派生動詞であるが、IA の動詞のうちで形容詞派生のものは 20 パーセント以下に過ぎないということであった。ただし、これは単に傾向の話であり、形容詞派生であるかどうかを基準としてドイツ語の反使役の形態を予測することはできないと彼は述べていた。Schäfer (2008: 31) が挙げている具体例は次の通りである。

た) という例も同様に、ザワークラウトのような発酵食品としてのキャベツが酸味を帯びて初めてその食品としての本来的な機能を獲得したと捉えることもできるように思われる。そして、この推測が正しければ、(60) の IA は筆者の提案するテーゼの反例とはならないだろう。

- (61) a. deadjectival RA: *anreichern* ‘enrich’, *aufhellen* ‘brighten’, *erhärten* ‘harden’, *erwärmen* ‘warm’, *vereinfachen* ‘simplify’
 b. deadjectival IA: *abstumpfen* ‘blunt’, *austrocknen* ‘sear’, *einweichen* ‘soak’,
ermüden ‘tire’, *trocknen* ‘dry’, *verdummen* ‘stupefy’

Schäfer (2008: 31)

さらに、2.3 にも示したように、(61) の動詞以外にも、「質、量、濃度、明度、速度、価格、大きさ」などの抽象的次元における状態変化を表す形容詞派生動詞は、RA によって表現される傾向にある。

- (62) deadjectival RA: *ausweiten* ‘expand’, *bereinigen* ‘clear up’, *beruhigen* ‘calm down’, *beschleunigen* ‘speed up’, *bessern* ‘improve’, *bestärken* ‘confirm’, *einigen* ‘unite’, *erhellen* ‘light up’, *erhöhen* ‘raise’, *erneuern* ‘renew’, *erweitern* ‘expand’, *festigen* ‘strengthen’, *glätten* ‘smooth’, *intensivieren* ‘intensify’, *klären* ‘clear’, *kräuseln* ‘frizz’, *leeren* ‘empty’, *lockern* ‘loosen’, *mehren* ‘increase’, *mildern* ‘moderate’, *nähern* ‘approach’, *röten* ‘redden’, *runden* ‘round’, *schärfen* ‘sharpen’, *stabilisieren* ‘stabilize’, *verbessern* ‘improve’, *verbreiten* ‘spread’, *verdichten* ‘thicken’, *verdicken* ‘thicken’, *verdunkeln* ‘darken’, *verdüstern* ‘darken’, *verengen* ‘narrow’, *verfeinern* ‘refine’, *verfestigen* ‘harden’, *verfinstern* ‘darken’, *vergrößern* ‘expand’, *verkleinern* ‘decrease’, *verkürzen* ‘reduce’, *verlängern* ‘lengthen’, *verlangsamen* ‘slow down’, *vermehrten* ‘increase’, *vermindern* ‘decrease’, *verschärfen* ‘intensify’, *verschlechtern* ‘make worse’, *verschlimmern* ‘make worse’, *verstärken* ‘strengthen’, *verteuern* ‘make more expensive’, *vertiefen* ‘deepen’, *vervollständigen* ‘complete’, *verwirklichen* ‘realize’, *weiten* ‘widen’

さて、このような分布上の大きな偏りが生じるのは、「対象物の本質的变化」という意味的原理と関係するのではないかと思われる。例えば、(62) の「質、量、濃度、明度、速度、価格、大きさ」などの抽象的次元での状態変化は、ひとつのスケール上の変化であり、両極の間で揺れ動こうとも、それによって対象物が絶対的な影響を被ることはないと考えられる。具体的には、(63) のように空気が温まったり、空が明るくなったり、健康状態が悪化したり、事故の件数が増えたりするとき、その表現にいずれも RA が用いられる。この場合に、状態変化を被る対象物がその本質的属性を失うという解釈が成り立たないことは明らかである。したがって、このような理由によって、形容

詞派生動詞に RA が数多く観察されるのではないかと推測される。

(63) a. Die Luft erwärmte sich langsam.

the air warmed-up REFL gradually

‘The air warmed up gradually.’

b. Der Himmel hellte sich auf.

the sky brightened REFL up

‘The sky brightened up.’

c. Ihr Gesundheitszustand verschlechterte sich plötzlich.

her state-of-health worsened REFL suddenly

‘Her state of health worsened suddenly.’

d. Die Zahl der Unfälle vermehrte sich jedes Jahr.

the number of-the accidents increased REFL every year

‘The number of the accidents increased every year.’

ただし、もちろん形容詞派生という形態的特徴を持つ動詞であっても、対象物の本質的属性が変わることが含意される場合には、RA でなく IA が選択されると考えられる。

(64) a. Der Stahl ermüdete.

the steel fatigued

‘The steel fatigued.’

b. Die Schneide stumpfte ab.

the cutting edge blunted PART

‘The cutting edge blunted.’

c. Ihre Tuberkulose heilte vollständig aus.

her tuberculosis healed completely up

‘Her tuberculosis healed up completely.’

例えば、(64) の形容詞派生動詞は、いずれも IA として実現される。(64a) の *ermüden* ‘tire, fatigue’ という動詞は、しばしば工学用語として用いられ、「(金属などが)疲労する」という意味を表す。Duden Deutsches Universalwörterbuch には、*durch Dauerbelastung seine Spannung, Härte verlieren* (連続的な負荷によってその応力や硬度を失う) と説明されている。ここで、金属に外力が繰り返し加わり脆くなると、もはや金属としての強度を持たなくなるため、その本来的機能を失うと言うことができる。同様に、(64b) の動詞 *abstumpfen*

‘blunt, deaden’ は、「(鋭利な部分が) 磨滅する」という意味を持つが、この例でも、刃物が切れなくなって、使い物にならなくなるという変化が描写されている。また、(64c) の *ausheilen* ‘heal up’ は、「(病気や怪我が) 全治する」という意味であるが、例えば結核が全治したときには、その病気がすでに消滅していることが含意される。以上の観察から、形容詞派生の反使役動詞に関しても、「対象物の本質的变化」の一般化に基づく説明が可能であるように思われる。

5.3.2.2. 名詞派生動詞

続いて、Schäfer (2008: 31) は、(65) のような名詞派生動詞を提示していた。彼は、名詞派生動詞も RA と IA の両方の形態を取ることが確認されるため、名詞派生を基準としてドイツ語の反使役動詞を一般化することはできないと述べていた。

- (65) a. denominal RA: *abbauen* ‘decompose’, *deformieren* ‘deform’, *erhitzen* ‘heat’, *färben* ‘color’, *formieren* ‘form up’
 b. denominal IA: *verwässern* ‘dilute’, *verdrecken* ‘get/make dirty’, *zersplittern* ‘splinter’, *verdampfen* ‘vaporize’, *überfluten* ‘flood’
 Schäfer (2008: 31)

また、2.3 でも指摘したように、ドイツ語では上記の動詞以外にも、多くの名詞派生動詞が RA と IA のグループに確認される。

- (66) denominal RA: *beschränken* ‘restrict’, *einkapseln* ‘encapsulate’, *entblättern* ‘shed its leaves’, *entfärben* ‘fade’, *enträtseln* ‘decipher’, *entschleiern* ‘uncover’, *gliedern* ‘structure’, *kreuzen* ‘cross’, *kringeln* ‘curl’, *locken* ‘curl’, *reimen* ‘rhyme’, *ringeln* ‘curl’, *spalten* ‘split’, *teilen* ‘divide’, *vererben* ‘transmit’, *verfärben* ‘change color’, *verfilzen* ‘felt’, *verflechten* ‘interweave’, *verformen* ‘distort’, *verkettten* ‘become interlinked’, *verknotten* ‘knot’, *verkrampfen* ‘become cramped’, *verschleiern* ‘cover’, *vertagen* ‘adjourn’, *verwandeln* ‘change’, *wandeln* ‘change’, *wellen* ‘wave’, *zerspalten* ‘split up’, *zerteilen* ‘divide into pieces’

(67) denominal IA: *einknicken* ‘bend and snap’, *gelatinieren* ‘gelatinize’, *tauen* ‘melt’, *umknicken* ‘bend and snap’, *verdunsten* ‘evaporate’, *verkohlen* ‘burn to charcoal’, *versteinern* ‘fossilize’, *zerbröckeln* ‘crumble’, *zerfasern* ‘fray’, *zerfransen* ‘fray’, *zerkrümmeln* ‘crumble up’

さて、このタイプの動詞に関しても、「対象物の本質的变化」という原理が有効であると考えられる。例えば、(68) に示した動詞 *erhitzen* ‘heat’ や *färben* ‘color’ は、RA として用いられる。ここでは、油が熱くなるとか、秋に樹木の葉が色づくといった事態が表されているが、いずれも対象物の本質的属性とは無関係の変化であることが読み取れる。すなわち、調理中などに油の温度が上がっても、油自体は全く変質しない。また、木の葉が紅葉しても、葉であることには変わりがない。

(68) a. Das Öl erhitzte sich.

the oil heated REFL

‘The oil heated.’

b. Im Herbst färbten sich die Blätter.

in-the autumn changed-color REFL the leaves

‘The leaves changed color in autumn.’

さらに、(69) のような RA の例においても、対象物に本質的变化が生じないことが分かる。つまり、顔面が蒼白になっても、顔自体に重大な変化はなく、欺瞞が顕わになっても、欺瞞であることには変わりない。病気が子供に遺伝しても、病気そのものは全く変化しない。筋肉が引きつっても、その状態は一時的にしか持続せず、筋肉そのものに大きな影響を与えないとすることができる。

(69) a. Sein Gesicht entfärbte sich.

his face faded REFL

‘His face turned pale.’

b. Nur langsam entschleierte sich der ungeheure Betrug.

only slowly unveiled REFL the enormous fraud

‘The enormous fraud unveiled only slowly.’

c. Diese Krankheit hat sich vom Vater auf den Sohn vererbt.

this disease has REF from-the father to the son inherited

‘This disease was inherited from the father to the son.’

d. Die Muskeln verkrampften sich.

the muscles cramped REFL

‘The muscles became cramped.’

これに対して、(70) の名詞派生動詞 *überfluten* ‘flood’, *verwässern* ‘dilute’, *verdampfen* ‘vaporize’, *zersplittern* ‘splinter’ は IA として用いられるが、ここでは、対象物の本質にまで影響を及ぼす変化が含意されていると考えられる。すなわち、豪雨などで水浸しになった地下室は、貯蔵庫として使い物にならず、氷が解けて水っぽくなったウイスキーは、味気なくなっている。水が蒸発するとき、その水は消えてなくなっている。そして、皿が粉々に砕けるときの、その皿はもう食器として使うことができない。

(70) a. Die Keller überfluteten.

the cellars flooded

‘The cellars flooded.’

b. Durch Eiswürfel verwässerte der Whisky.

by ice cubes tasted watery the whisky

‘The whisky tasted watery with ice cubes.’

c. Das Wasser ist verdampft.

the water is vaporized

‘The water vaporized.’

d. Der Teller ist zersplittert.

the plate is shattered

‘The plate shattered.’

また、(71) の名詞派生動詞もすべて IA として用いられるが、これらの例も対象物の本質的な変化を含意すると言うことができる。つまり、植物の茎が風でぽきっと折れたら、それは植物の本体から分離していて、茎としての機能を失っている。壁がぼろぼろと崩れるときには、もう空間の仕切りとして役に立たなくなることが読み取れる。ズボンがほつれたり擦り切れたりしてぼろぼろになると、もはや着用には耐えられない。ビスケットのような焼き菓子が輸送中に粉々に砕けてしまうと、商品としての価値を失うと考えられる。

- (71) a. Die Halme sind im Wind eingeknickt.
 the stems are in-the wind snapped
 ‘The stems snapped in the wind.’
- b. Die Mauer ist zerbröckelt.
 the wall is crumbled away
 The wall crumbled away.
- c. Die Hose ist zerfranst.
 the trouser is frayed out
 ‘The trousers frayed out.’
- d. Das Gebäck ist beim Versand zerkrümelt.
 the biscuit is during-the shipping broken into crumbs
 ‘The biscuits broke into crumbs during shipping.’

したがって、形容詞派生動詞と同様に、名詞派生の反使役動詞にも、「対象物の本質的変化」の一般化が当てはまると考えられるだろう。

5.3.2.3. 接頭辞 *ab-*を伴う動詞

最後に、Schäfer (2008) は、*ab-* ‘off, away’ という接頭辞を伴う反使役動詞を取り上げ、このタイプの動詞も RA と IA の両方の形態を取り得ることを指摘していた。

- (72) a. RA with prefix *ab-* : *abbauen* ‘decompose’, *ablagern* ‘deposit’, *ablösen* ‘peel off’, *abschwächen* ‘lessen’
- b. IA with prefix *ab-* : *abbrechen* ‘break off’, *abbrennen* ‘burn off’, *abbröckeln* ‘drop off’, *abtauen* ‘defrost’

Schäfer (2008: 32)

例えば、*ablösen* ‘peel off’ と *abbröckeln* ‘crumble away’ という動詞は、どちらも何らかの物体の分離を表すが、前者は RA の形態を取り、後者は IA の形態を取る。RA の *ablösen* は、(73a) のように足の裏の皮が剥けるときなどに用いられ、IA の *abbröckeln* は、(73b) のように漆喰が壁からぼろぼろと剥がれ落ちるときなどに用いられる。

(73) a. Bei neuen Schuhen löst sich die Sohle ab.

in new shoes peels REFL the sole off

‘The sole peels off in new shoes.’

b. Von den Wänden bröckelt der Verputz ab.

from the walls crumbles the plaster away

‘The plaster crumbles away from the walls.’

これらの例に対しても、本質的な変化という観点から意味的な相違を確認することができると思われる。つまり、皮が剥けるくらいでは、足自体に大きな影響がないのに対して、漆喰がぼろぼろ落ちてしまったら、それはもう塗壁材としての役割を果たさないことが読み取れる。

また、(74) の *ablagern* ‘deposit’ と *abschwächen* ‘lessen’ という動詞は、どちらも RA として実現される。これらの例では、何らかの物質が体内の結合組織に蓄積するとか、騒音が弱まるといった事態が描写されている。つまり、これらはいずれも一時的な量的変化を問題としており、対象物の属性を大きく変える事態とは見なされない。

(74) a. Der Stoff lagerte sich im Bindegewebe ab.

the substance deposited REFL in-the connective tissue PART

‘The substance deposited in the connective tissue.’

b. Der Lärm schwächte sich ab.

the noise lessened REFL PART

‘The noise lessened.’

これに対して、(75) の動詞 *abbrechen* ‘break off’, *abtauen* ‘melt off’, *abbrennen* ‘burn off’ は、いずれも IA として実現される。ここでは、木の太枝が折れるとか、氷が解け去るとか、建物が焼け落ちるといった事態が表されている。つまり、(75) では対象物の根本的な破壊・消失が描写されており、対象物の本質にまで影響が及んでいると考えられる。

(75) a. Der Ast brach ab.

the branch broke off

‘The branch broke off.’

b. Das Eis taute ab.

the ice melted off

‘The ice melted off.’

c. Die Gebäude sind abgebrannt.

the buildings are burnt-off

‘The buildings burnt off.’

以上のように、対象物の本質的变化という観点での意味的な違いが、形容詞派生動詞、名詞派生動詞、接頭辞 *ab-* を伴う動詞のグループにおいても、RA と IA の形式の違いと結び付いていると考えることができるだろう。

5.3.3. 自然条件を原因とする反使役動詞

次に、4.2.3 で紹介した「自然条件を原因とする反使役動詞」について考察したい。大矢 (2008) は、ドイツ語の IA のグループに (76) のような「温度や湿度や熱などの自然条件を原因として生起する事象」を表す動詞が多数存在することを指摘し、この観点から IA と RA を意味的に区別する可能性を検討していた。しかし、(77) のような反使役動詞が、RA であるにもかかわらず、IA と同じくこの原理を満たすことから、やはり IA と RA の間には意味的な相違が認められないと述べていた。

(76) IA: *abstumpfen* ‘become dull / lose its edge’, *abweichen* ‘soften and come off’, *bleichen* ‘bleach’, *dörren* ‘dry’, *ermüden* ‘tire’, *gären* ‘ferment’, *heilen* ‘heal’, *quellen* ‘swell’, *reifen* ‘ripen’, *schmelzen* ‘melt’, *tauen* ‘thaw’, *trocknen* ‘dry’, *verderben* ‘spoil / go bad’, *verdunsten* ‘evaporate’, *verschmutzen* ‘get dirty’, *verbrennen* ‘burn up’, *verwehen* ‘drift away’, *abschmelzen* ‘melt away’, *abtauen* ‘thaw’, *abtrocknen* ‘dry up’, *aufweichen* ‘soften’, *ausbleichen* ‘bleach’, *ausheilen* ‘heal up’, *austrocknen* ‘dry up’

(77) a. Die Blätter bräunen sich im Herbst.

the leaves become brown REFL in-the autumn

‘The leaves become brown in autumn.’

b. Mein Haar kräuselt sich bei Feuchtigkeit.

my hair frizzes REFL in moisture.

‘My hair frizzes (up) in moisture.’

c. Nach dem Sonnenbrand schälte sich die Haut auf seinem Rücken.

after the sunburn peeled REFL the skin on his back.

‘After the sunburn the skin peeled on his back.’

大矢 (2008: 109)

具体的には、(77a) では「秋に木の葉が茶色く色づく」という事態が描写されているが、このとき、気候が状態変化の原因となっていることが明らかである。同様に、(77b) の「髪の毛が湿気で縮れる」や (77c) の「日焼けで背中の皮が剥ける」という事態では、湿度や太陽光が対象物に働きかけた結果として、状態変化が生じると考えられる。したがって、「温度や湿度や熱などの自然条件を原因とする」という観点は、確かに IA だけでなく、RA にも当てはまると言うことができる。

ただし、これまで観察してきたように、(77) のような RA が、(76) のような IA と意味的に完全に同一であるというわけではなく、対象物の本質的变化を含意しないという点においては、IA と異なると推測される。具体的には、(77a) の色の変化を表す動詞の例では、色づいた葉も葉であることに違いない。また、(77b) の形状の変化を表す動詞においても、湿気で縮れた頭髮はまた容易に元の状態に戻るので、本質的には何の影響も受けていない。さらに、対象物の分離を表す (77c) の動詞においても、日焼けによって皮膚の表層が一部剥がれ落ちるに過ぎず、この状態変化の結果として、肌そのものが保護膜としての本来の機能を失うとは考えられない。このように、(77) の RA も、「対象物の本質的变化」という一般化と矛盾しないと思われる。

ところで、(77) の動詞以外にも、自然条件が原因となると認識される RA は存在する。代表的な例として、色彩や光の変化など、視覚的な状態変化を表す動詞を挙げておく。

(78) RA: *röten* ‘redden’, (*ver-*)*färben* ‘change color’, *erhellen* ‘brighten’, *aufheitern* ‘clear up’, *aufhellen* ‘lighten’, *verdüstern* ‘darken’, *verdunkeln* ‘darken’, *verfinstern* ‘darken’

この種の視覚的变化は、当然ながら光による刺激を目で受けることによって知覚されるため、状態変化の使役主となるのは、光源としての太陽が典型的であり、その変化の対象は、天空であることが多い。実際に、辞書におけるこれらの動詞の記述では、初めに *der Himmel* ‘the sky’ を主語とする例文が現れる。(79) から暗示されるように、空の色や明るさは一日の間に刻々と変わりうるものであり、視覚的な変化が生じたからといって、空自体が変質するわけではない。

- (79) a. Der Himmel rötete sich.
 the sky reddened REFL
 ‘The sky reddened.’
- b. Der Himmel färbt sich rötlich.
 the sky changes-color REFL reddish
 ‘The sky changes color reddish.’
- c. Der Himmel erhellt sich.
 the sky brightens REFL
 ‘The sky brightens.’
- d. Der Himmel hat sich am Vormittag aufgeheitert.
 the sky has REFL in-the morning brightened-up
 ‘The sky brightened up in the morning.’
- e. Der Himmel hatte sich am Horizont etwas aufgehellt.
 the sky had REFL on-the horizon a little lightened
 ‘The sky had lightened a little on the horizon.’
- f. Der Himmel verdüsterte sich.
 the sky darkened REFL
 ‘The sky darkened.’
- g. Der Himmel verdunkelte sich.
 the sky darkened REFL
 ‘The sky darkened.’
- h. Der Himmel hatte sich verfinstert.
 the sky had REFL darkened
 ‘The sky had darkened.’

また、上記の色彩変化の動詞は、変化の主体として、空以外にも人間の顔や肌や表情を選択することがある。例えば、(80)のように、顔が赤くなったり、明るくなったり、暗くなったりする場合である。ここでも、反使役動詞の形式としてはRAが選択される。それは、表情の変化が顔自体に本質的な影響を与えるような重大な変化として捉えられないためであると考えられる。

- (80) a. Ihre Haut begann sich zu röten.
her skin began REFL to redden
‘Her skin began to redden.’
- b. Sein Gesicht verfärbte sich vor Ärger.
his face turned-red REFL with anger
‘His face turned red with anger.’
- c. Sein Gesicht erhellte sich.
his face brightened REFL
‘His face brightened.’
- d. Sein Gesicht hatte sich aufgeheitert.
his face had REFL brightened-up
‘His face had brightened up.’
- e. Ihre Miene hellte sich auf.
her expression brightened REFL up
‘Her expression brightened up.’
- f. Seine Miene / Sein Gesicht hat sich verdüstert.
his expression / his face has REFL darkened
‘His expression / his face darkened.’
- g. Ihre Mienen / Ihre Gesichter verdunkelten sich.
their expressions / their faces darkened REFL
‘Their expressions / their faces darkened.’
- h. Ihr Gesicht verfinsterte sich.
her face darkened REFL
‘Her face darkened.’

さらに、(77a) でも見たように、樹木が紅葉するという状態変化も、次のような RA によって描写される。

- (81) Die Blätter {bräunen / (ver-)färben} sich im Herbst.
the leaves become brown change color REFL in-the autumn
‘The leaves {become brown / change color} in autumn.’

秋になって葉が色づくのは、樹木の生態として毎年起こる自然な変化であるため、葉の紅葉に伴って植物そのものに大きな変化があるとは認識されない。これに対して、(82) のように、異常な暑さや極度の乾燥など、不測の条件下で植物が枯れたり干からびたりするときには、その植物がもう再生しない

ことが含意される。そして、当然予期される通り、このような出来事を描写する際には IA が選択され、再帰代名詞が生起することはない。²¹

(82) a. Bei sehr großer Hitze welken die Blätter tagsüber

in very intense heat wilt the leaves during the day

aufgrund der Temperatur, nicht wegen Wassermangel.

because of the temperature, not because of lack of water

‘In very intense heat the leaves wilt during a day, not because of the lack of water, but because of the temperature.’

b. Bei der Hitze sind die Pflanzen vertrocknet.

in the heat are the plants dried up

‘The plants dried up in the heat.’

c. In dem trockenen Sommer sind viele Bäume verdorrt.

in the dry summer are many trees withered (and died)

‘Many trees withered (and died) in the dry summer.’

d. Das Korn auf den Feldern ist gedörnt.

the grain on the fields is dried up

‘The grain on the fields dried up.’

最後に、色彩変化の動詞の一用法として、*sich färben* ‘change color’ が頭髮の色の変化を表す例を示しておきたい。Johann Wolfgang von Goethe (1749-1832) の連詩 *Weissagungen des Bakis* (1798) のなかに、以下のような一節がある。

²¹ ただし、厳密に言えば、動詞 *bräunen* ‘become brown’ は、RA 以外にも IA の用法を備えていると考えられる。例えば、DUDEEN Deutsches Universalwörterbuch のこの動詞の項目には、*Meine Haut hat sich schnell gebräunt* (私の肌はすぐに茶色く日焼けした) のような RA 以外にも、*Die Gans bräunt gleichmäßig* (ガチョウがむらなく茶色く焼ける) のような IA も記載されている。また、同様にオーブンで加熱して調理するコンテキストにおいて、*Das Brot bräunt sich* (パンが茶色く焼ける) のような RA の表現も可能であるという。このように IA と RA の用法が混在しているのは、対象物の本質が変化するかどうかに関して、2通りの判断が可能であるためではないだろうか。つまり、肌が日焼けする場合には肌自体に大きな変化がないことが明らかであるため、RA が使われるが、オーブンで食べ物を焼くときには、美味しく焼く色がついて初めてその料理として成立するという捉え方と、焼く前からその料理自体は何も変わっていないという捉え方の両方が可能であるように思われる。そして前者の捉え方では IA が、後者の捉え方では RA が用いられるのではないかと推測される。

(83) *Zweimal färbt sich das Haar; zuerst aus dem Blondem ins Braune,*
 twice changes color REFL the hair first from the blonde to-the brown
bis das Braune sodann silbergediegen sich zeigt.
 until the brown then solid silver REFL shows
 ‘The hair changes its color twice, first from blonde to brown, until the brown hair becomes solid silver.’

人間の毛髪は一生の間で二度色が変化し、初めはブロンドで、それが茶色になり、やがては灰色になるという詩である。この詩では、RA の *sich färben* が用いられているが、このとき、頭髪の色が様々に変化しようとも、頭髪であることには変わりがないので、その本質的属性は維持されていると考えられる。したがって、このような観点から (83) の例に再帰代名詞が出現する理由も説明できると思われる。

5.3.4. RIA 動詞

2.4 で紹介した Schäfer (2008: 32) の調査でも指摘されていたように、イタリア語やフランス語などの言語と比べて数は限られているが、ドイツ語にも反使役として RA と IA の両方の形態を取りうる動詞、すなわち RIA 動詞が存在する。Schäfer (2008) の説明によれば、RIA 動詞において RA と IA のどちらの形態を選択するかは話者の主観で決められ、またこの判断は必ずしも一貫せず、話者による差も大きいということであった。さて、RIA 動詞のうちで最も出現頻度が高いものは、動詞 *abkühlen* ‘cool down’ である。例として (84) を挙げる。ここでは、同じ *Herd* ‘oven’ という名詞が RA の主語としても IA の主語としても現れ、どちらの例でも「オーブンの温度が下がる」という事態が描写されている。したがって、RA と IA の間に意味的な違いを想定する立場においては、このような動詞の存在が当然問題になるだろう。

(84) a. *Der Herd kühlt sich ab.*
 the oven cools REFL down
 b. *Der Herd kühlt ab.*
 the oven cools down
 ‘The oven cools down.’

それでは、果たして、*abkühlen* ‘cool down’ のような RIA 動詞には、意味的な一般化が全く当てはまらないと考えるべきであろうか。この問いに答える

ために、まずは *abkühlen* の具体的な用法を詳しく観察する。²²

2.4 にも示したように、Schäfer (2008: 32) は、この動詞の用例をコーパスから収集し、RA と IA の使用回数を次のような表にまとめていた。+*sich* が RA、-*sich* が IA の用例である。

(85) 自然物が変化の対象となる場合

	<i>Temperatur</i> 'temperature'	<i>Wasser</i> 'water'	<i>Boden/Erde</i> 'ground/soil'	<i>Luft</i> 'air'	overall
+sich	3	4	3	11	21
-sich	10	13	3	9	35

(86) 感情が変化の対象となる場合

	<i>Emotionen</i> 'emotions'	<i>(erhitzte) Gemüter</i> 'heated minds'	overall
+sich	3	34	42
-sich	37	6	43

(87) 経済が変化の対象となる場合

	<i>Wirtschaft</i> 'economy'	<i>Konjunktur</i> 'business cycle'	overall
+sich	6	36	42
-sich	1	6	7

(88) 核燃料などが変化の対象となる場合

	<i>Atombrennstoff</i> 'atomic fuel'
+sich	1
-sich	14

Schäfer (2008: 34-35)

2.4 でも指摘したように、例文の総数が少ないため、上の表からはっきりとした用法間の違いを読み取るのは難しいが、ある一定の傾向を確認することは可能である。例えば、(86) のように、感情的な変化を表す場合、通常は IA が使われる。ただし、*erhitzte Gemüter* 'heated minds' などが主語となるときには、RA が好まれる。また、(87) のように、経済活動が問題となるコン

²² RIA 動詞の意味的分析については、筆者の修士論文 (青木 2005) も参照されたい。この研究では、第 2 章で、ドイツ語の大規模コーパスからの用例に基づき、再帰代名詞 *sich* の出現する文脈について詳しく論じている。

テキストでは、明らかに RA が優先的に用いられる。さらに、(88) のように、*Atombrennstoff* ‘atomic fuel’, *Brennelemente* ‘fuel elements’, *Castor* ‘cask for storage and transport of radioactive material’ といった核燃料の類が変化の対象となるときには、IA の形態が優先される。Schäfer (2008) は、この差が何に由来するのかについては考察していなかったが、私見では、ここでも「対象物の本質的变化」の原理が有効であるように思われる。

初めに、感情が変化の対象となる場合であるが、主語に *Gefühle* ‘feelings’ が現れる (89a) と (89b) の文では IA が用いられており、*erhitzte Gemüter* ‘heated minds’ が現れる (89c) の文では RA が用いられている。この分布は、(86) の Schäfer (2008) の観察と合致している。

(89) a. **Vielleicht hatte er nur leidenschaftliche Gefühle und die kühlen ab**

perhaps had he only passionate feelings and they cool down
mit der Zeit.
with the time

‘Perhaps he had only passionate feelings and they cool down in course of time.’

b. **Die Gefühle zu meinem Freund kühlen mehr und mehr ab.**

the feelings to my boyfriend cool more and more down
‘The feelings to my boyfriend cool down more and more.’

c. **In der Pause kühlten sich die erhitzten Gemüter wieder ab.**

in the break cooled REFL the heated / exited minds again down
‘The heated / exited minds cooled down again in the break.’

(89a) と (89b) の IA で描写されているのは、恋愛感情が冷め切って、結果としてその感情が消えてなくなるという事態である。一方、(89c) の RA では、議論などで興奮してヒートアップした人々が問題になっている（ドイツ語の *Gemüter* という複数名詞は、英語の *minds* と同様に、心情そのものというより、心情を持った人間を表すことに注意されたい）。そして、その人たちが休憩をとる間に少し落ち着いたという状況が描かれている。つまり、(89a) や (89b) の IA とは異なり、(89c) の RA の例では、人間が感情的に興奮したり落ち着いたたりしたところで本質的には何も変化しないことが読み取れる。

次に、経済的なコンテキストで *abkühlen* が用いられるときには、(87) の Schäfer (2008) の観察通り、RA の形式が選択されることが圧倒的に多い。これは、(90) の例文からも明らかのように、経済や景気が冷え込んでも、その変化が本質的なものであるとは捉え難いためであろう。すなわち、経済

活動の冷え込みというのは、通常、一時的な変化に過ぎず、また景気が回復することも十分に想定できる。また、経済という抽象概念がこれらの変化によって本質的に影響を受けるということはありません。

(90) a. **Chinas Wirtschaft kühlt sich ab.**

China's economy cools REFL down

'China's economy cools down.'

b. **Wirtschaftswachstum der USA kühlt sich wieder ab.**

economic growth of-the USA cools REFL again down

'Economic growth of the USA cools down again.'

c. **Schweizer Konjunktur kühlt sich deutlich ab.**

Swiss business cycle cools REFL obviously down

'Swiss business cycle cools down obviously.'

最後に、核燃料の類が変化の主体となる時、IA の形式が選択されることが圧倒的に多いことを Schäfer (2008) は指摘しているが、これは、核反応が停止して燃料の温度が下がると、発電に利用できなくなると認識されるためであろう。つまり、冷温状態になると、核燃料がその本来の機能を果たさなくなるため、対象物に本質的な変化が生じていると捉えられる。(91) の新聞記事からの例文では、*Reaktor* 'reactor' が主語となっているが、ここでもやはり IA が使われている。

(91) **Nach der Abschaltung kühlt ein Reaktor zwar ab, aber die Restwärme**

after the switch-off cools a reactor indeed down but the waste heat

könnte noch immer für eine Kernschmelze reichen.

could still for a meltdown suffice

'After the switch-off, a reactor cools down indeed but the waste heat could still suffice for a meltdown.'

(*Frankfurter Allgemeine*, 14.03.2011)

以上のように、反使役動詞 *abkühlen* 'cool down' に関しても、「対象物の本質的な変化」という一般化から、分布のある一定の傾向を捉えることが可能である。さらに、*abkühlen* だけではなく、(92) に挙げた RIA 動詞についても、上記の一般化から、RA と IA の使い分けを説明できると考えられる。

(92) RIA: *verhärten* ‘harden’, *verflachen* ‘flatten’, *versteinern* ‘fossilize, stiffen’

まず、*verhärten* ‘harden’ は、*hart* ‘hard’ な状態になるという意味を表す動詞であるが、以下のような文脈で、RA としての用法と IA としての用法をそれぞれ確認することができる。

(93) a. In den Tarifverhandlungen haben sich die Fronten verhärtet.

in the pay negotiations have REFL the fronts hardened

‘The positions of the opposing parties became entrenched in the pay negotiations.’

b. Der Boden ist durch langen Weidebetrieb verhärtet.

the soil is through long grazing hardened

‘The soil hardened because of long grazing.’

(93a) の RA の例は、賃金交渉を行う中で、労使双方に態度の硬化が生じたという意味であるが、このような人間の心情的な態度は、状況に従って変化するものであり、それによって人間が自らの性質を大きく変えるほどの影響を受けるとは考えられない。一方、(93b) の IA の例は、土地が固くなったという意味である。同じ土地で長い間放牧を行うと、動物が繰り返し踏みつけることによって、土壌が硬化する。そして、その結果として、草が生育しにくくなり、牧草地として機能しなくなることが含意されている。

続いて、動詞 *verflachen* ‘flatten’ は、*flach* ‘flat’ な状態になるという変化を描写するものである。この動詞の用例でも、文脈によって再帰代名詞の出現に違いが見られる。

(94) a. Warum ist der Baikalsee trotz stetiger Zufuhr von Schlamm- und

why is the Lake Baikal in spite of constant inflow of mud- and

Erdmassen nicht längst verflacht und verlandet?

dirt mass not long before flattened and silted up

‘Why didn’t the Lake Baikal flatten and silt up long before in spite of constant inflow of mud and dirt mass?’

b. Eine sinkende Durchschnittskurve verflacht sich oder steigt wieder an.

a sinking average curve flattens REFL or rises again PART

‘A sinking average curve flattens or rises again.’

(*Züricher Tagesanzeiger*, 17.03.1998)

- c. Und weil heutige Politiker kaum mehr in der Lage sind, solche
 and because contemporary politicians hardly any more capable are such
 Überlegungen im Original zu lesen, verflacht sich auch ihr Denken.
 considerations in-the original to read flattens REFL also their thought
 ‘And because contemporary politicians are hardly any more capable of reading such
 considerations in the original, their thought also flattens.’
 (*Die Presse*, 10.05.1997)

(94a) のように、泥や土が湖に流入して湖が陸地化し平らになるという文脈では、この動詞は IA として実現される。また、(94b) のように、座標上の曲線が変化して平らになるという文脈や、(94c) のように、人間の思考が浅薄になるという文脈では、RA として実現される。この用法の差も、対象物の本質的变化という観点に求めることができるだろう。つまり、一度陸地化して平らになった湖は、もはや湖であると認識できないのに対し、曲線が一時的に平らになったり思考が浅くなったりするのは、抽象的な変化であるため、それによって曲線や思考が本質的に変化すると言うのは奇妙である。

最後に、*versteinern* ‘fossilize, stiffen’ という動詞には、「化石化する」という意味と「(表情などが) 強張る」という意味がある。そして、(95a) のように、植物や生物が数千年の間に変化して化石になるときは、IA の形態が選択されるが、(95b) のように、人間の表情などが強張るときには、RA の形態が選択される。これは、化石化した植物はもう本質的に変化していることが明らかであるが、強張った表情は容易に前の状態に戻すことができ、本質的には何も変わらないことが含意されるためであろう。

- (95) a. Das Holz ist im Laufe der Jahrtausende versteinert.
 the wood is in-the course of-the thousands of years fossilized
 ‘The wood fossilized in the course of thousands of years.’
 b. Sein Gesichtsausdruck versteinerte sich schlagartig.
 his facial expression stiffend REFL suddenly
 ‘His facial expression stiffened suddenly.’

また、ギリシア神話で有名な女怪メドゥーサには、その姿を一目でも見た者が石に変わってしまうという伝承がある。このようなコンテキストにおいて、上記の反使役動詞 *versteinern* が使われるときには、人間が文字通り *Stein* ‘stone’ という異なる物体に変わり、その本性を維持できないことが読み取れるため、IA の形式が選択されると推測される。そして、実際に、このギ

リシア神話のドイツ語版²³ を参照すると、この箇所が以下のように IA の形態で翻訳されていることが分かる。つまり、ここでも「対象物の本質的变化」の一般化が有効であると考えられる。

- (96) Medusa sah so schrecklich aus, dass jeder, der sie erblickte,
 Medusa looked so terrible PART that everyone who her saw
 vor Angst versteinerte.
 with fear turned to stone
 ‘Medusa looked so terrible that everyone who saw her turned to stone with fear.’

5.3.5. 自由与格の解釈

4.1.2 で既出の通り、Schäfer (2008) は、ドイツ語の反使役動詞に自由与格 (free dative) が出現するとき、反使役動詞の形態が IA であるのか RA であるのかによって、与格の解釈に違いが生じると述べていた。具体的には、IA において、自由与格に影響読み (affectedness reading) と非意図的使役主読み (unintentional causer reading) の両方を与えることが可能であるのに対して、RA では、影響読みのみが可能で、非意図的使役主読みは成り立たないということであった。この関係を表にまとめれば、(97) のようになる。

(97)	affectedness reading	unintentional causer reading
IA	+	+
RA	+	-

例えば、(98a) の IA の文は、「花瓶が割れたことでハンスが何らかの影響を受けた」と解釈することも、「ハンスが意図せずに花瓶が割れるという事態を引き起こした」と解釈することも可能である。一方、(98b) の RA の文は、「ドアが開くことでマリアが何らかの影響を受けた」と解釈され、「マリアが意図せずドアが開くという事態を引き起こした」という解釈は不適格と判断される。

²³ Inkiow, Dimiter (2001), *Orpheus, Sisyphos & Co: Griechische Sagen*. Stuttgart, Wien: Gabriel Verlag.

- (98) a. Die Vase zerbrach dem Hans.
 the vase broke the-DAT Hans
- b. Der Maria öffnete sich die Tür.
 the-DAT Maria opened REFL the door

McIntyre (2006) は、「ひとつの事象に含まれる使役主はひとりだけである」という原則に基づき、上のような解釈の差を、使役主がすでに存在しているか否かの違いとして説明していた。つまり、RA にはすでに使役主の項が存在しているため、新たに追加された自由与格に使役主の解釈を与えることが不可能であるが、IA には使役主の項がもともと存在しないため、自由与格に使役主の解釈を与えることができるという考えである。ただし、Schäfer (2008) は、外項の存在を示すテストをドイツ語の反使役動詞に対して実施すると、RA と IA の振る舞いに差が見られないことから、使役主の存在という観点でこのふたつの形式を意味的に区別することはできないという立場を取っていた。また、大矢 (2008: 119) は、McIntyre (2006) の自由与格に関する分析は十分でないとして、以下のような例を示していた。ここでは RA が用いられているが、(98b) とは異なり、自由与格に非意図的使役主の解釈を与えることが可能であるという。

- (99) a. Der Pullover hat sich dem Hans versehentlich beim Waschen verzogen.
 the pullover has REFL the-DAT Hans by mistake in washing distorted
 ‘Hans unintentionally caused the pullover to go out of shape in washing.’
- b. Der Pullover hat sich ihm versehentlich verfärbt.
 the pullover has REFL him-DAT by mistake changed color
 ‘He unintentionally caused the pullover to change color.’

以上のように、自由与格の解釈に関して、RA と IA にはある一定の傾向が観察される。ただし、RA であっても、(99) のように非意図的使役主の解釈が排除されない場合も稀にあるということは、RA と IA の間に統語構造や項構造のレベルで形式に基づく明確な差が存在しない可能性もある。

それでは、この現象は一体どのように説明されるべきであろうか。ここで注目したいのは、非意図的使役主の解釈が可能となる IA では、不可逆的な状態変化、つまり回復不可能な状態変化が問題になっているということである。例えば、(100a) のように花瓶が粉々に割れるとき、花瓶はもちろんもう元の状態には戻らない。(100b) のように帆が引きちぎれる場合にも同様のことが言える。

(100) a. Die Vase zerbrach dem Hans.

the.NOM vase broke the.DAT Hans

b. Dem Mann ist das Segel zerrissen.

the.DAT man is the sail torn

Schäfer (2008: 42)

さらに、以下のような非対格動詞においても、自由与格の非意図的使役主読みが許されるが、ここでも、元に戻すことのできない状態変化が描写されている。すなわち、トランプカードの家が崩壊したり、風船が破裂したりする場合に、対象物を前の状態に回復させることは不可能である。

(101) a. Das Kartenhaus zerfiel ihm.

the.NOM house of cards fell (apart) him.DAT

b. Ihm ist der Ballon zerplatzt.

him.DAT is the.NOM balloon burst

Schäfer (2008: 43)

また、大矢 (2008: 119) が提示しているように、特定の RA 動詞 (以下 (102) に再掲) においては、例外的に自由与格の非意図的使役主読みが可能であるが、ここでも、取り返しのつかない変化が描写されていることが分かる。つまり、セーターの型崩れや変色が一度生じてしまったら、もう元の状態に戻すことができないと考えるのが一般的である。

(102) a. Der Pullover hat sich dem Hans versehentlich beim Waschen verzogen.

the pullover has REFL the-DAT Hans by mistake in washing distorted

‘Hans unintentionally caused the pullover to go out of shape in washing.’

b. Der Pullover hat sich ihm versehentlich verfärbt.

the pullover has REFL him-DAT by mistake changed color

‘He unintentionally caused the pullover to change color.’

また、筆者のインフォーマント調査でも、(103) のような特定の RA については、自由与格の非意図的使役主読みが可能であるという結果が得られた。これらの RA も、砂糖がコーヒーに溶けるとか木材が変形するというような、元の状態を回復することができない事態を描写している。

- (103) a. **Mir hat sich der Zucker versehentlich im Kaffee aufgelöst.**
 me-DAT has REFL the-NOM sugar by mistake in the coffee dissolved
 ‘I unintentionally caused the sugar to dissolve in the coffee.’
- b. **Ihm hat sich das Holz versehentlich verformt.**
 him-DAT has REFL the-NOM wood by mistake deformed
 ‘He unintentionally caused the wood to deform.’

それに対して、非意図的使役主読みが排除される (104) のような RA では、可逆的な、回復可能な状態変化が表されている。例えば、ドアが開くとき、ドアは容易に閉じた状態に戻すことができる。また、食事が冷めても、温め直すことが可能であるし、目覚まし時計の設定が変わっても、容易に元に戻すことができる。気候変動が生じても、それは一時的な変化に過ぎず、錐が曲がっても、少し力を加えれば正常な状態に戻すことが可能である。

- (104) a. **Der Maria öffnete sich die Tür.**
 the-DAT Maria opened REFL the door
 ‘The door opened and Maria was affected by this.’
 *‘Maria unintentionally caused the door to open.’
- b. **Das Essen kühlte sich ihm ab.**
 the meal cooled REFL him-DAT down
 ‘The food cooled down and he was affected by this.’
 *‘He unintentionally caused the food to cool down.’
- c. **Mir hat sich der Wecker verstellt.**
 me-DAT has REFL the alarm-clock shifted
 ‘The alarm clock shifted and I was affected by this.’
 *‘I unintentionally caused the alarm clock to shift.’
- d. **Der Menschheit verändert sich das Klima.**
 the-DAT mankind changed REFL the climate
 ‘The climate changed and the mankind was affected by this.’
 *‘The mankind unintentionally caused the climate to change.’
- e. **Mir hat sich der Bohrer verkantet / verbogen.**
 me-DAT has REFL the borer canted / bended
 ‘The borer canted / bended and I was affected by this.’
 *‘I unintentionally caused the borer to cant / bend.’

Schäfer (2008: 45)

このように、容易に回復可能な状態変化が問題となっているときに、自由与格の非意図的使役主読みがブロックされるということは、すなわち、「もう取り返しのつかないことをしてしまった」という含意がなくては、「それを（意図せずとも）自ら引き起こした」という解釈を与えにくいということではないだろうか。つまり、(104a) のようにドアが開く場合には、単にまた閉めれば済む話なので、「マリアが意図せずにドアを開けてしまった」と言うのはあまりにも大袈裟である。また、(104b) のように食事が冷めるときにも、また加熱すればよいので、「彼が食事を意図せず冷ましてしまった」などと解釈するのは、奇妙であると思われる。その他の例についても同様である。したがって、この自由与格の解釈の差は、結局のところ、IA と RA の「対象物の本質的变化」という観点における意味的な違いから付随的に生じていると言えるのではないだろうか。5.2 で指摘した通り、この「対象物の本質的变化」という意味的属性は、「状態変化の（不）可逆性」という意味内容と結び付きやすい。すなわち、対象物が本質的な変化を被るときには、その変化は不可逆的であるのが普通である。反対に、対象物が本質的な変化を被らないときには、その変化は可逆的であることが多い。ただし、このふたつの属性のカバーする領域はぴったりと一致するわけではなく、なかには状態変化が不可逆的であるにもかかわらず、対象物の本質的变化を表さない RA の例も存在していた。(102) に挙げた *sich verziehen* ‘distort’ や *sich verfärben* ‘change color’ は、このような特殊な RA の用法とみなすことができる。つまり、セーターが型崩れしたり変色したりするときには、その状態はもう元に戻せないが、セーターとして着用することは依然として可能であるため、対象物の本質は保持されていると想定できる。また、(103) に示した *sich auflösen* ‘dissolve’ や *sich verformen* ‘deform’ のような RA についても同様である。すなわち、砂糖のような物質が液体に溶解しても、砂糖であることに変わりはなく、湿気などを含んで歪みが生じた木材も、建築資材として用いることが依然として可能であると考えられる。

最後に、本節の議論をもう一度整理しよう。まず、ドイツ語の反使役動詞の形式の選択に関わる意味的属性は、「対象物の本質的变化」と考えられる。また、自由与格の解釈において非意図的使役主読みの認可を決定する意味的属性は「状態変化の不可逆性」と推測される。そして、このふたつの属性が意味的に密接に結びついているために、RA と IA で自由与格の解釈の違いが生じ、さらにこれらの属性がカバーする領域が完全に一致しないために、RA でありながら非意図的使役主の解釈を許す動詞が観察されることが考えられる。

- (105) a. Die Vase zerbrach dem Hans.
 the vase broke the.DAT Hans
- b. Die Tür öffnete sich der Maria.
 the door opened REFL the.DAT Maria
- c. Der Pullover verzog sich dem Hans beim Waschen.
 the pullover distorted REFL the.DAT Hans in washing

具体的には、(105a) の *zerbrechen* ‘break’ のような IA は、「対象物の本質的変化」と「状態変化の不可逆性」のいずれも含意し、自由与格に非意図的使役主解釈を与えることが可能である。それに対して、(105b) の *sich öffnen* ‘open’ のような通常の RA は、「対象物の本質的変化」と「状態変化の不可逆性」を含意せず、自由与格が出現する際に、非意図的使役主解釈が得られない。ただし、(105c) の *sich verziehen* ‘distort’ のような RA の例は、「対象物の本質的変化」を含意しないという点では通常の RA と等しいが、「状態変化の不可逆性」を含意するという観点では IA と等しいという特徴を示す。それゆえ、(105c) の自由与格に非意図的使役主解釈を与えることが可能になると考えられる。この関係を表にまとめると、(106) の通りである。

(106)		fundamental change of state	irreversible change of state	unintentional causer reading
IA	<i>zerbrechen</i>	+	+	+
RA	<i>sich öffnen</i>	-	-	-
RA	<i>sich verziehen</i>	-	+	+

このように、自由与格の解釈の問題も、「対象物の本質的変化」という一般化と矛盾せずに説明することが可能であると思われる。

5.4. 結語

本章では、ドイツ語の反使役動詞である RA と IA は意味的な観点から区別されるという立場から、「対象物の本質的变化」という一般化を提案した。すなわち、IA によって描写される状態変化は、対象物に本質的な変化（物理的な存在あるいは本来的な機能の変化）が生じることを含意するのに対し、RA によって描写される状態変化は、そのような変化を含意しないという考えである。この一般化に基づいて、ドイツ語の反使役動詞をいくつかの代表的なグループに分類し、具体例を検討した。その結果、*zuklappen* ‘close with a snap’ や *zuknallen* ‘slam shut’ のように、音放出動詞からの派生形として分析される自動詞や、*trocknen* ‘dry’ や *säuern* ‘sour’ のように、完了の助動詞に *sein* ‘be’ と並んで *haben* ‘have’ を選択しうる自動詞の例に対しては、この一般化が妥当性を持たない可能性があるものの、その他の多くの反使役動詞の形態的実現に関しては、この一般化に基づく説明が可能であることが分かった。続いて、形容詞派生動詞、名詞派生動詞、接頭辞付き動詞という形態的観点におけるドイツ語反使役動詞の分布上の傾向や、自然条件が原因となると考えられる IA および RA の例をさらに比較検討した。最後に、先行研究で未解決となっていた RIA 動詞、および自由与格の解釈に対しても、上記の一般化によって説明が与えられることを示した。

第6章 ドイツ語反使役動詞の意味表示

第5章では、ドイツ語における RA と IA の形態的な違いを意味に基づくものと捉え、「対象物の本質的な変化」という観点から、RA と IA の表す事態の違いについて、具体例を参照しながら検討を行った。また、この意味的原理が、RIA 動詞や自由与格の解釈などの言語現象とも矛盾しないことを示した。以上の観察を踏まえ、本章では、ドイツ語の反使役動詞に理論的説明を与えることを試みたい。

まず、分析の手掛かりとして、Kaufmann (2003) と Koontz-Garboden (2009) の再帰化 (reflexivization) 分析を紹介する。その後で、日本語の反使役動詞との比較を行い、ドイツ語の RA と IA の意味表示を考察する。

6.1. 再帰動詞の分析

6.1.1. Kaufmann (2003) – 再帰における制御関係の逸脱

6.1.1.1. 他動詞と交替する再帰動詞の4つの解釈

Kaufmann (2003) は、ドイツ語の他動詞と交替する再帰動詞に、(1) から (4) のような4つの異なる解釈があると述べている。順に、直接再帰的読み (direkt-reflexive Lesart)、動作主的脱使役的読み (agentive dekausative Lesart)、非動作主的脱使役的読み (nicht-agentive dekausative Lesart)、モダル読み (modale Lesart) という解釈である。4番目の構文はしばしば中間構文 (Mediumkonstruktion) とも呼ばれている。

(1) *direkt-reflexive Lesart* ‘direct reflexive reading’

a. Daphne wäscht sich.

Daphne washes REFL

‘Daphne washes herself.’

b. Jannik zieht sich aus.

Jannik pulls REFL off

‘Jannik gets undressed.’

(2) *agentive decausative Lesart* ‘agentive decausative reading’

a. Der Hund bewegt sich.

the dog moves REFL

‘The dog moves.’

b. Die Demonstranten sammeln sich.

the demonstrators gather REFL

‘The demonstrators gather.’

(3) *nicht-agentive decausative Lesart* ‘non-agentive decausative reading’ (= RA)

a. Das Blatt bewegt sich.

the leaf moves REFL

‘The leaf moves.’

b. Der Boden senkt sich.

the ground sinks REFL

‘The ground sinks.’

(4) *modale Lesart* ‘modal reading’

a. Das Buch liest sich leicht.

the book reads REFL easily

‘The book reads easily.’

b. Diese Gläser trocknen sich schlecht ab.

these glasses dry REFL badly off

‘These glasses dry off badly.’

「脱使役」 (dekausativ) という概念は、本論文で用いている「反使役」 (antikausativ) と基本的には同義であるが、彼女は、(3) のように主語が意図性を持たず一方的に影響を被る物体を表す場合だけでなく、(2) のように主語が意図を持って行動する主体を表す場合にも、脱使役という用語を用いている。これまで本論文で観察してきた RA の表現は (3) にあたる。Kaufmann (2003) は、(1) から (4) の用法はすべて中動 (Medium) というカテゴリーに属するとし (cf. Kemmer 1993, Steinbach 2002)、このような解釈の違いが生じる理由を、意味論的な立場から統一的に説明しようと試みている。

彼女の分析では、上記のような再帰動詞においては、再帰代名詞 *sich* の出現によって、動作主項をシチュエーションの制御者 (Kontrollleur) として解釈することがブロックされると想定されている。そして、(1) から (4) の異なる読みが生じるのは、動詞の意味表示が項のソータルな素性と相互作用することから説明されるという。以下、Kaufmann (2003) の論述を詳しく確認しよう。

6.1.1.2. 方法論的前提

Kaufmann (2003) は、論考の中で、3つの異なるレベルを設定している。1つ目は、動詞によって特徴づけられるシチュエーションないしその概念化のレベル、2つ目は、動詞の意味形式 (Semantische Form; SF) のレベル、3つ目は、項構造 (Argumentstruktur; AS) のレベルである。意味形式においては、シチュエーションの参加者の存在や参加者間の関係が示される。そして、項構造では、意味形式によって表示された参加者のうちで統語的に実現されるべきものが規定される。

さらに、Kaufmann (2003) は、Wunderlich (1997) の語彙分解文法 (Lexikalische Dekompositionsgrammatik) の枠組に基づいて、動詞の意味構造として分解構造 (Dekompositionsstruktur) を採用している。この構造においては、動作主的述語である活動述語 (Aktivitätsprädikate; P_{ACT}) と、非動作主的述語 (nicht-agentive Prädikate) が区別される。活動述語の第一項はふつう動作主項であるが、これは S-Kontrolleur と呼ばれる。S-Kontrolleur は、シチュエーションを制御する参加者である。つまり、動詞で表されたシチュエーションが成立するかどうか、あるいは、それがいつ成立するのか、そして、どれくらい長く持続するのかを規定するものである。Kaufmann (2003) の考えによれば、項構造は、事象構造 (Ereignisstruktur) の解釈に重要な役割を果たすという。項構造において最も高い位置を占める個体項は、シチュエーションの第一の参加者となる。第一の参加者とは、単に時間軸上最初に登場するということではなく、例えば、Croft (1991) の因果連鎖において、第一の構成員となるということである。能動形 (Aktivform) と中動形 (Mediumform) では、項構造上で最も高い位置を占める項の種類が異なり、能動形では動作主 (Agens) 項が、中動形では被動者 (Patiens) 項が、この位置に現れる。この項のポジションが S-Kontrolleur の解釈に関わるため、その結果として、意味的な違いが生じてくるという。

(5) *kausativ-reflexive Lesart 'causative reflexive reading'*

- | | | | | |
|-------------|----------------------|---------------------|--------|--------------|
| a. Dín-ete | ston | kalítero | ráfti. | Modern Greek |
| dress-3SG.M | by-the | best | tailor | |
| b. Mi | moor-ake. | | | Fula |
| 1SG.SBJ | do one's hair-PERF.M | | | |
| c. Pedro se | afeita en la | barberia. | | Spanish |
| Pedro REFL | shaved in DET | hairdresser's salon | | |

Kaufmann (2003: 141)

例えば、現代ギリシア語、フラ語（西アフリカ）、スペイン語などでは、(5) のような中動態や再帰構文によって、使役再帰的読み (kausativ-reflexive Lesart) が表される。²⁴ そして、この場合、活動の遂行や事態の成立を制御するのは、動作主ではなく被動者であると解釈される。つまり、動作主（仕立屋や理髪師）は何らかの活動を実行するものの、因果連鎖においては、被動者（洋服、髪、髭を整えてもらう人間）に支配されると考えられるという。

また、(5) の例ではボディーケアを表す述語が問題になっているが、これらの動詞は、同時に (1) の直接再帰的な解釈も許す。使役再帰的な読みと直接再帰的な読みのどちらが成立するのかは、コンテキスト (Kontext) によって決定される。例えば、*waschen* ‘wash’ という動詞は、(6) のような関係を示すという。

(6) SF: WASCH_{ACT} (x, y)

transitiv: S-Kontrolleur = x (Agens)

kausativ-reflexiv: S-Kontrolleur = y (Patiens), Kontext: x ≠ y

direkt-reflexiv: S-Kontrolleur = y (Patiens), Kontext: x = y

さて、直接再帰的な読みと同様に、*sich setzen* ‘sit down’ や *sich versammeln* ‘gather’ のような動作主的脱使役的な読みでも、被動者項が S-Kontrolleur となると想定されている。ただし、この読みでは、動作主の被動者に対する働きかけの様態は、意味的に指定されない。さらに、*sich senken* ‘sink’ のような非動作主的脱使役的読みでは、被動者が S-Kontrolleur として機能せず、また、動作主がシチュエーションの参与者とならない。そして、最後に、*sich leicht lesen* ‘read easily’ のようなモダルの用法では、状況指示的な読みではなく、総称の読みが現れる。フラ語の中動態を例に取れば、その具体的な意味表示は (7) のようになる。

²⁴ ドイツ語においてはこの読みを再帰構文で表すことができず、その代わりに *lassen* ‘let’ 構文を用いる必要がある。

(7) a. *direkt-reflexive Lesart* ‘direct reflexive reading’:

looto ‘wash oneself’

$\lambda y^{<+cntr>} \lambda s \{WASH_{ACT}(x_i, y^{pk}_i)\}(s)$

CNTR

b. *kausativ-reflexive Lesart* ‘causative reflexive reading’:

mooro ‘have one’s hair done’

$\lambda y^{<+cntr>} \lambda s \exists x \{DO\ HAIR_{ACT}(x, y^{pk})\}(s)$

CNTR

c. *nicht-agentive dekausative Lesart* ‘non-agentive decausative reading’:

maβbo ‘close’

$\lambda y^{<-cntr>} \lambda s \exists s' \exists x \{MANIP_{ACT}(x, y)\}(s') \& \{CLOSE(y)\}(s)$

CNTR

d. *modale Lesart* ‘modal reading’:

yaroto ‘be drinkable’

$\lambda y^{<-cntr>} GEN\ x, s \{DRINK_{ACT}(x, y)\}(s): POSSIBLE\ CNTR(x, s)$

CNTR

Kaufmann (2003: 143)

ここで、S-Kontrolleurとしての解釈に関わる項のポジションは、CNTRで示されている。<αcntr>は、その項が語彙的素性やソータルな素性に基づいて解釈可能であるか否かを表す。すなわち、<+cntr>は解釈可能、<-cntr>は解釈不可能であるという意味である。pkというのは、潜在的制御者(potentieller Kontrolleur)の略で、S-Kontrolleurとして解釈されうる項にこのインデックスが付けられる。モダル読みに現れるGenは、総称演算子(Generizitätsoperator)で、動作主項とシチュエーション項の両方を束縛する。

6.1.1.3. ドイツ語の再帰動詞の分析

Kaufmann (2003) は、フラ語の中動態と同じような解釈をドイツ語の再帰動詞も示すため、(7)の意味的分析がドイツ語にも適用可能であるという立場を取っている。そして、ドイツ語の再帰代名詞は、いずれの用法においても、動作主項をS-Kontrolleurとして解釈することをブロックする機能を持つとしている。

まず、*sich waschen* ‘wash oneself’のような直接再帰的読み(direkt-reflexive Lesart)の場合、規範的な制御者である主格項(動作主項)が、シチュエーションを制御する被動者として再解釈される。そして、この再解釈

においては、動作主と被動者の意味的な同一指示が前提とされるため、再帰代名詞が主題的な機能を失い、単に意味的な再帰性を示す役割しか果たさなくなるという。

(8) *direkt-reflexive Lesart* ‘direct reflexive reading’

sich waschen: _____ $\lambda y \lambda s \{WASH_{ACT}(x_i, y^{pk}_i)\}(s)$
 +hr -hr
 -lr +lr
 REFL

このような直接再帰読みの再分析を、Kaufmann (2003) は、(8) のように表示している。ここには [+hr] と [+lr] という素性が現れているが、これは項構造上の位置の相対的な序列を示すものである。つまり、[+hr] は、「より高い役割が存在する / しない」という意味であり、[+lr] は、「より低い役割が存在する / しない」という意味である。(8) の表示から読み取れるように、*x* 項（動作主項）は、再帰代名詞の出現により、**S-Kontrollleur** となる資格を失い、その代わりに、項構造上で最も高い位置を占める *y* 項（被動者項）が **S-Kontrollleur** として機能することになる。

次に、*sich setzen* ‘sit down’ や *sich versammeln* ‘gather’ のような動作主的脱使役的読み (agentive dekausative Lesart) の再帰動詞は、本来的には、*setzen* ‘set’ や *versammeln* ‘gather’ のような使役的な事象構造に基づくと考えられる。ただし、再帰代名詞の出現によって、この使役構造が非使役的で動作主的な事象へと再分析されると、Kaufmann (2003) は説明している。このような再分析が必要となる根拠として、彼女は (9) のような例を挙げている。(9b) では、再帰代名詞 *sich* が強調の *selbst* ‘oneself’ とともに実現され、(9c) では、*seine Bücher* ‘his books’ という NP と並置されているが、この場合、「自分自身に働きかける」という真の再帰的解釈が成り立ちにくいという。

(9) a. Das Kind versteckte sich im Badezimmer.

the child hid REFL in-the bathroom

b. ??Das Kind versteckte sich selbst im Badezimmer.

the child hid REFL oneself in-the bathroom

c. ??Das Kind versteckte sich und seine Bücher unter dem Bett.

the child hid REFL and his books under the bed

また、(10) のように、他動詞で特徴づけられる行為と動作主的脱使役的な再帰動詞で特徴づけられる行為の間に差があればあるほど、再帰代名詞 *sich* を強調の *selbst* や他の NP と並置したときに、文の不適合性が上がるということが観察されるという。

- (10) a. [?]Er stellte sich und seine Mannschaft an der Seitenlinie auf.
 he stood REFL and his teammates on the sideline up
- b. [?]Jeden Morgen bewegte er sich und seine Hunde, bevor er zur Arbeit ging.
 every morning moved he REFL and his dogs before he to-the work went
- c. ^{??}Das Kind legte die Kleider auf den Stuhl und sich (selbst) ins Bett.
 the child laid the dresses on the chair and REFL oneself into-the bed
- d. [§]Der Mann hängte erst die Bilder und dann sich (selbst) auf.
 the man hung first the pictures and then REFL oneself up

そこで、Kaufmann (2003) は、動作主的脱使役的読みの再帰動詞を、(11) のように意味上の自動詞として再分析することを提案している。

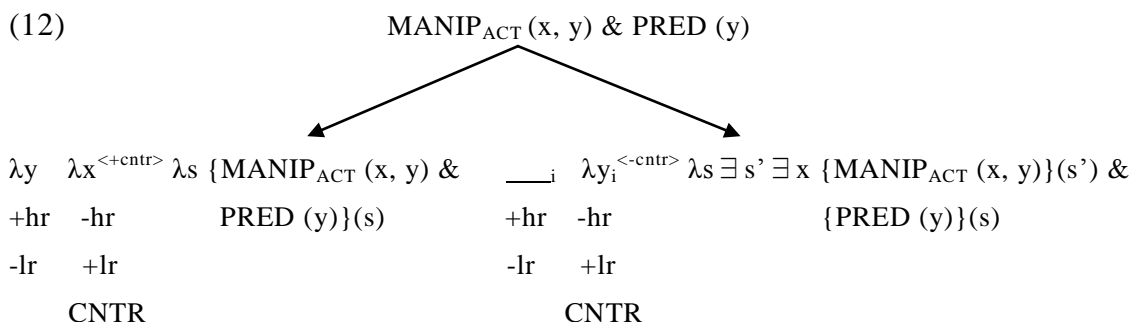
(11) *Reanalyse von reflexiven Verben mit agentiver dekausativer Lesart*

'reanalysis of reflexive verbs with agentive decausative reading'

_____	λy	λs	{MANIP _{ACT} (x _i , y) & PRED (y ^{pk_i)}}	(s)
+hr	-hr			
-lr	+lr			
			REFL	
→ _____	λy	λs	{PRED (y ^{pk_i)}}	(s)
+hr	-hr			
-lr	+lr			
			REFL	

ここでは、2 項の活動述語 (MANIP_{ACT} & PRED) が、1 項の非動作主的述語 (PRED) へと転換しているが、それにもかかわらず、この非動作主的述語の唯一の項 *y* が、S-Konstrolleur として解釈される。つまり、述語としては非動作主的であるものの、その項が、事象を制御する主体として捉えられるという。このような意味において、制御関係に逸脱が生じていると、Kaufmann (2003) は述べている。そして、再帰代名詞は、もはや意味的な同一指示のコード化ではなく、この逸脱した制御関係を指し示す働きをしているという。

さらに、Kaufmann (2003) は、*sich senken* ‘sink’ のような非動作主的脱使役的読み (nicht-agentive dekausative Lesart)、すなわち RA の解釈を受ける例の場合、他動詞と再帰動詞が共通して基盤とする意味形式を設定し、そこから異なるふたつの語彙記載項目を出現させるという分析を行っている。

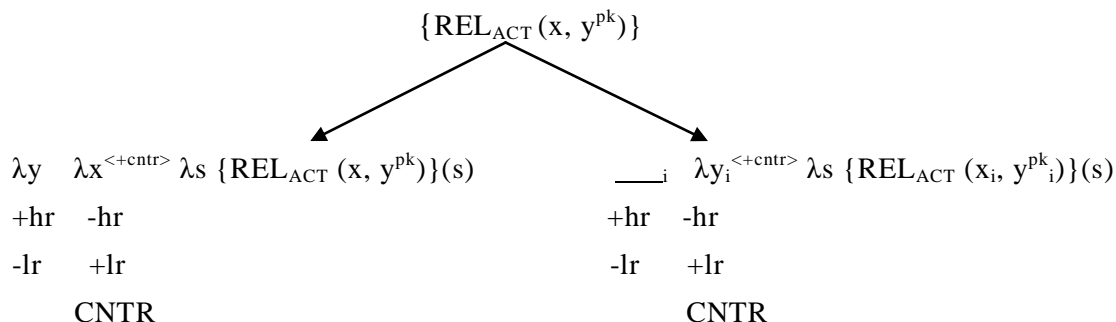


左側に示された他動詞の項目では、主題項 (thematisches Argument) である x と y が両方とも項構造に現れるが、右側に示された再帰動詞の項目では、動作主項 x がブロックされ、項構造に現れない。これは、意味形式で x より深く埋め込まれている被動者項 y が、項構造において [-hr] の位置に実現されるためである。つまり、動作主ではなく被動者の項がシチュエーションの第一の参与者として解釈され、その結果として、動作主の項構造上の実現が妨げられる。このような逸脱した制御関係が成立する理由を、Kaufmann (2003) は、再帰代名詞の出現に求めている。すなわち、再帰化はここで動作主とは別の項を規範的な制御者として実現し、項構造上の最も高いポジションと関連付ける働きをすると想定されている。

ところで、(12) では、項構造上最も高いポジションが CNTR で示されているが、再帰動詞の項目では、この項に <-cntr> のインデックスが付加されている。つまり、被動者項 y は、S-Kontroleur として解釈不可能であると言えることができる。さらに、この y は、同一指示を受けたふたつの項のポジションとも関連付けられている。したがって、被動者項 y には、ふたつの索性 (-hr: 第一の参与者であり因果連鎖の主要部、-lr: 最後の参与者であり因果連鎖の最後の構成員) が付与されることになる。

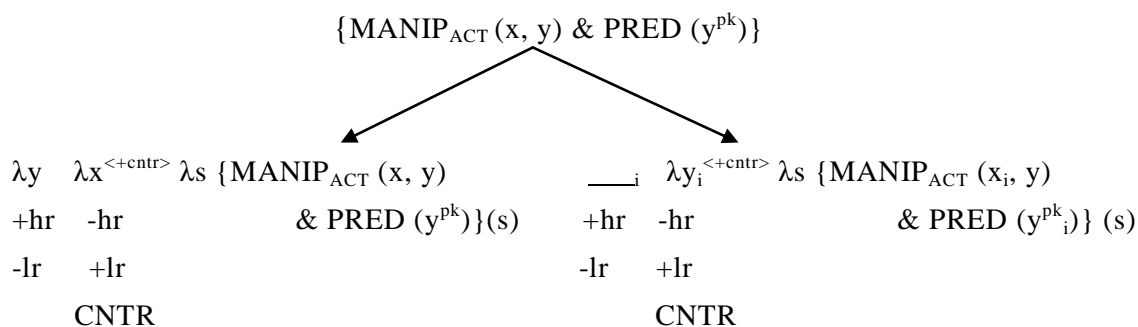
ここで、Kaufmann (2003) は、(12) の派生の枠組によって、先述のふたつの動作主的な再帰構文の解釈も扱うことができると述べている。具体的には、直接再帰的な読み (direkt-reflexive Lesart) は、(13) のように表示される。

(13) *direkt-reflexive Lesart* ‘direct reflexive reading’ :



また、動作主的脱使役的な読み (*agentive dekausative Lesart*) の表示は、(14) のようになるという。

(14) *agentive dekausative Lesart* ‘agentive dekausative reading’ :



上記の (13) と (14) の表示において、再帰代名詞は、規範的な制御者を項構造に投射し、それを独立した **S-Kontrollleur** として解釈することを妨げるという働きをしている。つまり、非主題的な再帰代名詞の機能とは、派生構造が逸脱した制御関係を持つことを示すという点にあると、**Kaufmann (2003)** は述べている。

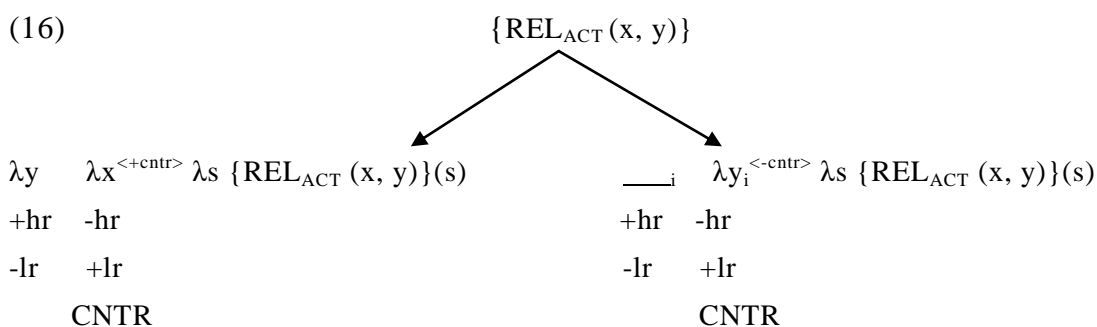
最後に、モダル読み (*modale Lesart*) を示す中間構文を簡単に確認しておきたい。**Kaufmann (2003)** は、(15) のような図式で、*Dieses Buch liest sich leicht* ‘This book reads easily’ の例を説明している。この解釈においては、上述の 3 つの再帰動詞の解釈とは異なり、シチュエーションの変項 *s* と動作主項 *x* が **Gen** で束縛される。

(15) *Medialkonstruktion 'middle construction'*

liest sich leicht:

$\text{---}_i \lambda y_i^{<-cntr>} \text{Gen } x, s \quad [\{ \text{READ}_{\text{ACT}}(x, y) \}(s): \text{EASY}(\text{DO}_{\text{ACT}}(x, s))]$
 +hr -hr
 -lr +lr
 CNTR

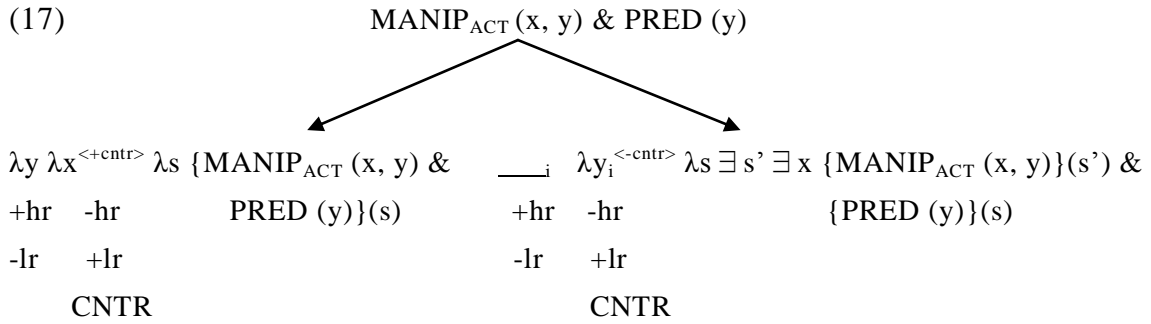
また、一般的な派生のスキーマで、(15) の中間構文に現れる再帰動詞を表示するならば、(16) のようになる。



以上確認した通り、Kaufmann (2003) は中動というカテゴリーに属すると考えられる再帰動詞を使役他動詞からの派生形として捉え、統一的な派生のスキーマで説明しようと試みている。そして、この枠組みにおいて、再帰代名詞は一貫して逸脱した制御関係を指し示すとされ、再帰動詞の用法間の解釈の違いは、動詞の意味と項のソータルな素性に従って生じると想定されている。

6.1.1.4. 反使役の解釈における再帰代名詞の機能

ここで、もう一度 Kaufmann (2003) の非動作主的脱使役読み (*nicht-agentive dekausative Lesart*)、すなわち反使役の再帰動詞 (RA) の分析を振り返り、この解釈が得られるときの再帰代名詞の機能を確認しておきたい。以下に (12) の意味構造を再掲する。



Kaufmann (2003) は、ここで再帰代名詞 *sich* にふたつの機能があると仮定していた。1つ目は、動作主項 x を項構造上ブロックする機能である。2つ目は、被動者項 y をシチュエーションの第一の参加者に格上げし、もうひとつの項のポジションと同一指示によって関連付けるという機能である。このような方法で、彼女は y 項の持つ因果連鎖上の二重性（第一の参加者であり最後の参加者でもあるということ）を適切に捉えているように思われる。

また、 y 項には $<-cntr>$ というインデックスが付加されていることから、この項は当然 **S-Kontrollleur** になり得ないことになる。つまり、因果連鎖においては第一の参加者であるけれども、シチュエーションを制御しその成立を決定する能力は持たないとされている。これは、反使役動詞に現れる y 項が変化を被る対象であることを考慮すれば、自然な想定であると言えるだろう。

6.1.2. Koontz-Garboden (2009) の再帰化分析

引き続き Koontz-Garboden (2009) による反使役動詞の意味的分析を取り上げる。彼は、再帰接辞 (*reflexive clitic*) 等の特別な形態の付加によって反使役動詞が派生される (18b) のような **RA** の例を、反使役化 (*anti-causatization*) と呼び、この形態的派生の背後にある意味的操作について考察している。

(18) Spanish

- a. *romper*
‘cause to become broken’
- b. *romperse*
‘become broken’

このタイプの動詞は、Levin and Rappaport Hovav (1995) が外的使役の状態変化動詞 (*externally caused change of state verbs*) と呼んでいるものである (cf. 3.2)。Koontz-Garboden (2009) は、主にスペイン語の例を取り上げ分析しているが、この言語においては、具体的には (19) から (21) のような使役交替が観察される。(19b) から (21b) は、それぞれ使役に対応する反使役の表現であるが、反使役の意味と再帰の形態が結び付いているという点において、ドイツ語の RA と類似している。

(19) a. Juan rompió el vaso.

Juan broke the cup

‘Juan broke the cup.’

b. El vaso se rompió.

the cup REFL broke

‘The cup broke.’

(20) a. Juana abrió la puerta.

Juana opened the door

‘Juana opened the door.’

b. La puerta se abrió.

the door REFL opened

‘The door opened.’

(21) a. Kim quemó el papel.

Kim burned the paper

‘Kim burned the paper.’

b. El papel se quemó.

the paper REFL burned

‘The paper burned.’

さて、外的使役の状態変化動詞の多くに特徴的であるように、(19a) から (21a) の使役動詞においても、状態変化が生じる際の様態の指定が存在しない。つまり、状態変化の使役主として、(22a) のような動作主 *Juan* だけでなく、(22b) のような道具 *el hacha* ‘the axe’、(22c) のような自然現象 *la huracán* ‘the hurricane’、(22d) のような使役的状态 *el peso de los libros* ‘the weight of the books’、および、(23) のような使役的事象 *la explosion* ‘the explosion’ が現れうるという。

(22) a. Juan rompió la mesa.

Juan broke the table

‘Juan broke the table.’

b. El hacha rompió la mesa.

the axe broke the table

‘The axe broke the table.’

c. El huracán rompió la mesa.

the hurricane broke the table

‘The hurricane broke the table.’

d. El peso de los libros rompió la mesa.

the weight of the books broke the table

‘The weight of the books broke the table.’

(23) La explosion rompió ventanillas de automobiles

the explosion broke windows of automobiles

y las ventanas de edificios vecinos.

and the windows of buildings adjacent

‘The explosion broke the windows of automobiles and the windows of adjacent buildings.’

したがって、交替する使役動詞の場合、使役主の主題役割が不完全指定 (underspecify) されていると言うことができる。そこで、Koontz-Garboden (2009) は、*romper* ‘cause to become broken’ のような使役動詞の語彙意味表示として、(24) の分解構造を設定し、EFFECTOR というラベルによって、動作主、道具、自然現象などを包括する一般化された主題役割を表すことを提案している (cf. Van Valin and Wilkins 1996)。

(24) [[romper] =

$$\lambda x \lambda y \lambda s \lambda e [\exists v [\text{CAUSE} (v, e) \wedge \text{EFFECTOR} (v, y) \wedge \text{BECOME} (e, s) \wedge \text{THEME} (s, x) \wedge \text{not-whole} (s)]]$$

この分解構造によって示されるのは、参与者 y が関与する事象 (eventuality; v) によって、ある状態変化が引き起こされ、その際に、参与者 x が完全でない状態 (state; s) へと移行するということであり、この出来事 (event; e) の表示として、*romper* が用いられるということである。ここで、Koontz-Garboden (2009) は、(24) のような使役動詞にある操作を適用することで、対応する反使役動詞の構造を派生させることができると主張している。その操作とは、再帰化 (reflexivization) と呼ばれるもので、具体的には (25)

のように定式化される。

(25) Reflexivization operator

$$\lambda \mathfrak{R} \lambda x [\mathfrak{R} (x, x)]$$

再帰化とは、簡単に言えば、ふたつの項を同一化するという操作である (cf. Chierchia 2004: 29)。英語の再帰代名詞 *himself* に関する議論では、再帰構文の唯一の項が自分自身に対して動作主的に働きかけるという関係が再帰化として捉えられることがあるが、それとは異なり、Koontz-Garboden (2009) の想定する再帰化は、動作主性を前提としないことに注意しておきたい。つまり、(25) では、 x 項が動作主であるか否かについて指定されていない。また、この再帰化の標識として、スペイン語の再帰接辞 *se* を以下のように定義することができる。彼は述べている。

$$(26) \llbracket se \rrbracket = \lambda \mathfrak{R} \lambda x [\mathfrak{R} (x, x)]$$

さて、この関数を (24) の使役動詞 *romper* ‘cause to become broken’ の表示に適用すると、(27) のようになる。

$$(27) \llbracket se \rrbracket (\llbracket romper \rrbracket)$$

$$\begin{aligned} &= \lambda \mathfrak{R} \lambda x [\mathfrak{R} (x, x)] (\lambda x \lambda y \lambda s \lambda e [\exists v [\text{CAUSE} (v, e) \wedge \text{EFFECTOR} (v, y) \wedge \\ &\quad \text{BECOME} (e, s) \wedge \text{THEME} (s, x) \wedge \text{not-whole} (s)]]]) \\ &= \lambda x [\lambda x \lambda y \lambda s \lambda e [\exists v [\text{CAUSE} (v, e) \wedge \text{EFFECTOR} (v, y) \wedge \\ &\quad \text{BECOME} (e, s) \wedge \text{THEME} (s, x) \wedge \text{not-whole} (s)]]] (x, x)] \\ &= \lambda x \lambda s \lambda e [\exists v [\text{CAUSE} (v, e) \wedge \text{EFFECTOR} (v, x) \wedge \\ &\quad \text{BECOME} (e, s) \wedge \text{THEME} (s, x) \wedge \text{not-whole} (s)]] \end{aligned}$$

すなわち、反使役動詞 *romperse* ‘become broken’ では、THEME の参与者 x が EFFECTOR の参与者としても解釈される。言い換えれば、変化を被る個体と変化を引き起こす個体が同一化されるということである。Koontz-Garboden (2009) は、このように再帰化という操作によって、使役動詞から反使役動詞を意味的に派生させるというアプローチを提案している。

$$(28) \llbracket romperse \rrbracket =$$

$$\lambda x \lambda s \lambda e [\exists v [\text{CAUSE} (v, e) \wedge \text{EFFECTOR} (v, x) \wedge \text{BECOME} (e, s) \wedge \text{THEME} (s, x) \wedge \text{not-whole} (s)]]$$

ところで、(28) の反使役動詞の語彙意味表示には、CAUSE が存在している。反使役動詞では、動作主が明示されることがないにもかかわらず、その意味構造に CAUSE が含まれているということは、一見矛盾しているようにも思われるが、Koontz-Garboden (2009) は、EFFECTOR という不完全指定の使役主の主題役割を想定することによって、このパラドックスを解決している。つまり、使役動詞 *break* や *romper* においては、状態変化の使役主が動作主に限定されないため、そこから派生された反使役動詞 *break* や *romperse* においても、動作主の含意がないことが正当化されるという考えである。

もちろん、外的使役の状態変化動詞のすべてが *break* のように不完全指定の使役主項を持つわけではない。例えば、*assassinate* のような使役動詞では、(29) のように、使役主が動作主であることが必須であり、自然現象や使役的事象などは主語として容認されない。そして、このとき、(30) のように、使役動詞から反使役動詞を派生させることができない。

- (29) a. Kim assassinated the senator.
 b. *The explosion assassinated the senator.
 c. *The hurricane assassinated the senator.
 d. *Age assassinated the senator.

(30) *The senator assassinated.

スペイン語においても、*asesinar* ‘assassinate’ タイプの動詞では、(31a) のように使役主項の主題役割が動作主に限定されており、(31b) の *el hacha* ‘the axe’ のような道具や、(31c) の *el bombardeo* ‘the bombing’ のような使役的事象は、主語にならない。

- (31) a. Kim asesinó a la senadora.
 Kim assassinated to the senator
 ‘Kim assassinated the senator.’
 b. *El hacha asesinó a la senadora.
 the axe assassinated to the senator
 ‘*The axe assassinated the senator.’
 c. *El bombardeo asesinó a la senadora.
 the bombing assassinated to the senator
 ‘*The bombing assassinated the senator.’

また、(32b) のように、このタイプの動詞には、反使役化の派生が適用できない。

(32) a. Los terroristas asesinaron al senador.

the terrorists assassinated the senator

‘The terrorists assassinated the senator.’

b. *El senador se asesinó (por sí solo).

the senator REFL assassinated (by self only).

‘*The senator assassinated / was assassinated by herself’

同様に、主語に動作主を要求する *cortar* ‘cut’ も、(33b) のように反使役化されない。

(33) a. El panadero cortó el pan.

the baker cut the bread

‘The baker cut the bread.’

b. *El pan se cortó (por sí solo).

the bread REFL cut (by self only)

‘*The bread cut / was cut by itself’

上の (32b) や (33b) の非文法的な例文では、*por sí solo* ‘by itself’ という句が現れているが、これはスペイン語において反使役の解釈が成り立つ場合のみ共起しうるものだという。実際に、使役動詞 *asesinar* ‘assassinate’ や *cortar* ‘cut’ は、(34) のように再帰標識の *se* と相容れないわけではないが、このときに可能な解釈は、反使役ではなく、「自分自身に働きかける」という直接再帰の解釈であると Koontz-Garboden (2009) は説明している。

(34) a. El senador se asesinó.

the senator REFL killed

‘The senator killed herself.’

b. Kim se cortó.

Kim REFL cut

‘Kim cut himself.’

Koontz-Garboden (2009) は、このような動作主のみを主語に容認する使役動詞の語彙的な意味は、(35) のように表示されるとしている。(34) の *romper*

のような交替する使役動詞とは異なり、ここでは、EFFECTOR ではなく AGENT が使役主に指定されている。

$$(35) \llbracket asesinar \rrbracket = \lambda x \lambda y \lambda s \lambda e [\exists v [\text{CAUSE}(v, e) \wedge \text{AGENT}(v, y) \wedge \text{BECOME}(e, s) \wedge \text{THEME}(s, x) \wedge \text{not-alive}(s)]]]$$

したがって、このタイプの使役動詞に再帰化の操作を適用すると、(36) のように、 x 項が AGENT でもあり THEME でもあるという意味構造が生じる。これによって、上述の「自分自身に働きかける」という直接再帰の解釈が成立することが捉えられる。

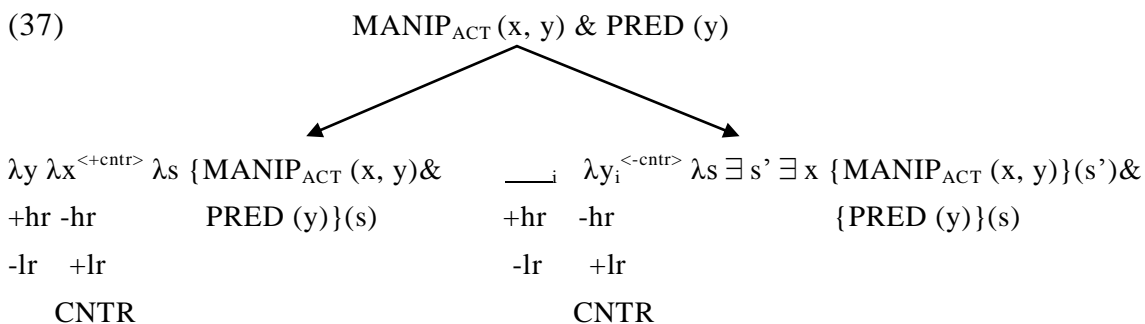
$$(36) \llbracket se \rrbracket (\llbracket asesinar \rrbracket) \\ = \lambda \mathfrak{R} \lambda x [\mathfrak{R}(x, x)] (\lambda x \lambda y \lambda s \lambda e [\exists v [\text{CAUSE}(v, e) \wedge \text{AGENT}(v, y) \wedge \text{BECOME}(e, s) \wedge \text{THEME}(s, x) \wedge \text{not-alive}(s)]]]) \\ = \lambda x [\lambda x \lambda y \lambda s \lambda e [\exists v [\text{CAUSE}(v, e) \wedge \text{AGENT}(v, y) \wedge \text{BECOME}(e, s) \wedge \text{THEME}(s, x) \wedge \text{not-alive}(s)]]](x, x)] \\ = \lambda x \lambda s \lambda e [\exists v [\text{CAUSE}(v, e) \wedge \text{AGENT}(v, x) \wedge \text{BECOME}(e, s) \wedge \text{THEME}(s, x) \wedge \text{not-alive}(s)]]]$$

6.1.3. *sich* による再帰化

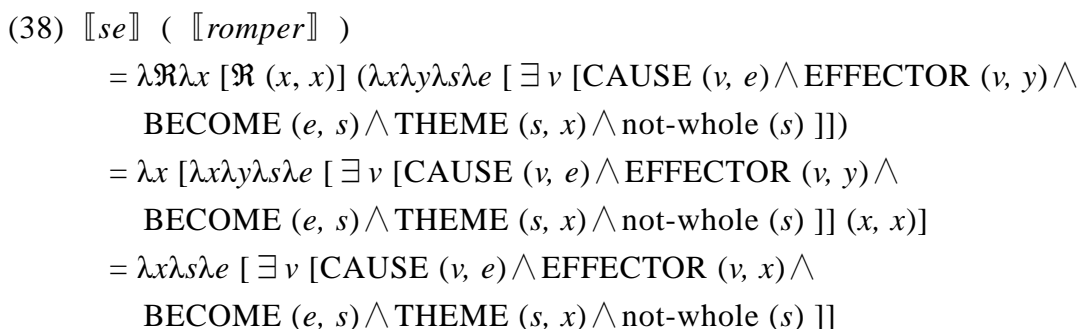
前節で観察した通り、Koontz-Garboden (2009) は、不完全指定の使役主である EFFECTOR を意味構造に持つ使役動詞に再帰化という操作を適用することで、反使役を派生させるという分析を行っている。彼が念頭に置いているのは、主にスペイン語の使役交替であるが、この分析においては、6.1.1 で見た Kaufmann (2003) のドイツ語再帰構文の分析と一致する部分が多々見出される。

まず第一に、再帰接辞や再帰代名詞などの再帰標識が使役主項の実現をブロックする機能を持つという点である。Kaufmann (2003) は、ドイツ語の再帰代名詞 *sich* が制御関係に逸脱が生じていることを示す働きをすると主張し、*sich* の出現によって、規範的な制御者である動作主ではなく、被動者の項がシチュエーションの第一の参与者と解釈されると述べていた。同時に、被動者項はもうひとつの項のポジションと同一指示を受けるため、「被動者項が因果連鎖において第一の参与者でもあり最後の参与者でもある」という二重性を持つことが説明されていた。さらに、Kaufmann (2003) は、(37) の

ように、被動者項に <-cntr> というインデックスを付加することによって、この項が S-Kontrolleur になり得ないことを捉えようとしていた。つまり、因果連鎖においては第一の参与者であるけれども、シチュエーションを制御しその成立を決定する動作主としての能力は持たないということになる。



一方の Koontz-Garboden (2009) は、再帰標識の機能を、 $\lambda \mathfrak{R} \lambda x [\mathfrak{R}(x, x)]$ のように定義し、この関数を使役動詞に適用することによって、使役主項と被動者項が同一指示を受けるという関係性を捉えようとしていた。また、交替する使役動詞に現れる使役主は動作主に限定されないことから、不完全指定の EFFECTOR という主題役割を設定し、派生の操作を受けた反使役動詞においても動作主の含意がないことを説明しようとしていた。



したがって、依拠する方法論の違いはあるとはいえ、上述のふたつの分析においては、再帰標識に以下の機能が付与されていることがわかる。

- (39) 再帰標識の機能
- a. 被動者項に使役主項と同一指示を与える
 - b. 使役主項の実現をブロックする

本論文でも、このような再帰化 (reflexivization) の操作に基づいて、ドイツ語の RA が対応する使役動詞から派生されるという考えを採用したい (cf. Aoki 2010, 2011)。もちろん、すべての外的使役の状態変化動詞がこの操作によって RA に転換できるというわけではなく、Koontz-Garboden (2009) の指摘通り、使役主の主題役割を動作主に制限しないもの、すなわち、彼の術語では、EFFECTOR を語彙意味表示に含むもののみが、この派生の対象となると考えられる。例えば、他動詞 *spalten* ‘split’ は、(40) のように使役主に動作主 *der Junge* ‘the boy’ だけでなく、自然現象 *der Blitz* ‘the lightning’ も容認する。

(40) a. *Der Junge spaltet den Baumstamm.*

the boy splits the trunk

‘The boy splits the trunk.’

b. *Der Blitz spaltet den Baumstamm.*

the lightning splits the trunk

‘The lightning splits the trunk.’

それゆえ、Koontz-Garboden (2009) の表記に基づけば、この動詞は (41) のような EFFECTOR を使役主とする語彙的な意味を持つことになる。

(41) $\llbracket \textit{spalten} \rrbracket =$

$$\lambda x \lambda y \lambda s \lambda e [\exists v [\text{CAUSE}(v, e) \wedge \text{EFFECTOR}(v, y) \wedge \text{BECOME}(e, s) \wedge \text{THEME}(s, x) \wedge \textit{split}(s)]]]$$

したがって、この他動詞に *sich* の再帰化の操作を適用すれば、(42) のように、対応する RA が派生されると考えられる。

(42) $\llbracket \textit{sich} \rrbracket$ ($\llbracket \textit{spalten} \rrbracket$)

$$= \lambda \mathfrak{R} \lambda x [\mathfrak{R}(x, x)] (\lambda x \lambda y \lambda s \lambda e [\exists v [\text{CAUSE}(v, e) \wedge \text{EFFECTOR}(v, y) \wedge \text{BECOME}(e, s) \wedge \text{THEME}(s, x) \wedge \textit{split}(s)]]])$$

$$= \lambda x [\lambda x \lambda y \lambda s \lambda e [\exists v [\text{CAUSE}(v, e) \wedge \text{EFFECTOR}(v, y) \wedge \text{BECOME}(e, s) \wedge \text{THEME}(s, x) \wedge \textit{split}(s)]]](x, x)]$$

$$= \lambda x \lambda s \lambda e [\exists v [\text{CAUSE}(v, e) \wedge \text{EFFECTOR}(v, x) \wedge \text{BECOME}(e, s) \wedge \text{THEME}(s, x) \wedge \textit{split}(s)]]]$$

そして実際に、動詞 *spalten* は (43) のような RA として用いることができる。

(43) Der Baumstamm spaltet sich.

the trunk splits REFL

‘The trunk splits.’

それに対して、同じ外的使役の状態変化動詞であっても、*schneiden* ‘cut’ のような他動詞は、使役主の主題役割に *der Junge* ‘the boy’ のような動作主のみを容認し、*der Blitz* ‘the lightning’ のような自然現象を主語に取ることができない。なぜなら、この動詞には、刃物等の道具が使用されるという含意があり、当然ながら、その道具を用いる動作主の存在が意味上不可欠であるためである。

(44) a. Der Junge schneidet den Baumstamm.

the boy cuts the trunk

‘The boy cuts the trunk.’

b. *Der Blitz schneidet den Baumstamm.

the lightning cuts the trunk

*‘The lightning cuts the trunk.’

すなわち、Koontz-Garboden (2009) の表記では、他動詞 *schneiden* は意味構造上 AGENT を含む (45) のような表示を持つと考えられる。

(45) $\llbracket \textit{schneiden} \rrbracket =$

$\lambda x \lambda y \lambda s \lambda e [\exists v [\text{CAUSE} (v, e) \wedge \text{AGENT} (v, y) \wedge \text{BECOME} (e, s) \wedge \text{THEME} (s, x) \wedge \text{cut} (s)]]$

そこで、再帰化の操作を適用すると、AGENT と THEME が同一指示を受ける (46) のような直接再帰の解釈が生じる。つまり、動作主が自分自身を切って傷つけるという解釈である。

$$\begin{aligned}
(46) \quad & \llbracket sich \rrbracket \left(\llbracket schneiden \rrbracket \right) \\
& = \lambda \mathfrak{R} \lambda x [\mathfrak{R} (x, x)] (\lambda x \lambda y \lambda s \lambda e [\exists v [\text{CAUSE} (v, e) \wedge \text{AGENT} (v, y) \wedge \\
& \quad \text{BECOME} (e, s) \wedge \text{THEME} (s, x) \wedge \text{cut} (s)]]) \\
& = \lambda x [\lambda x \lambda y \lambda s \lambda e [\exists v [\text{CAUSE} (v, e) \wedge \text{AGENT} (v, y) \wedge \\
& \quad \text{BECOME} (e, s) \wedge \text{THEME} (s, x) \wedge \text{cut} (s)]](x, x)] \\
& = \lambda x \lambda s \lambda e [\exists v [\text{CAUSE} (v, e) \wedge \text{AGENT} (v, x) \wedge \\
& \quad \text{BECOME} (e, s) \wedge \text{THEME} (s, x) \wedge \text{cut} (s)]]
\end{aligned}$$

このように、*sich schneiden* は、反使役ではなく直接再帰として解釈されるため、(47a) のような RA は成り立たないが (47b) のような再帰構文は成り立つことが説明される。

(47) a. *Der Baumstamm schneidet sich.

the trunk cuts REFL

*‘The trunk cuts.’

b. Der Mann schneidet sich.

the man cuts himself

‘The man cuts himself.’

6.1.4. 使役主の不完全指定と対象物の同一性

前節では Koontz-Garboden (2009) の再帰化分析に基づいて、ドイツ語の RA も他動詞からの派生形として説明されうることを示した。ただし、Koontz-Garboden (2009) では特に言及されていないが、ドイツ語の反使役には、RA だけでなく、IA のパターンも確認される。再帰化の操作が EFFECTOR を使役主とする外的使役の状態変化動詞に例外なく適用されると仮定すれば、例えば、*heilen* ‘cure’ のような他動詞からも RA が派生されるはずである。なぜなら、他動詞 *heilen* は、(48) のように、動作主 *der Arzt* ‘the doctor’ だけでなく、道具 *Penizillin* ‘penicillin’ や抽象名詞 *die Zeit* ‘time’ も主語に容認し、意味構造において、不完全指定の EFFECTOR を含んでいると考えられるためである。

(48) a. Der Arzt heilt die Entzündung mit Penizillin.

the doctor cures the inflammation with penicillin

‘The doctor cures the inflammation with penicillin.’

b. Penizillin heilt die Entzündung.

penicillin cures the inflammation

‘Penicillin cures the inflammation.’

c. Die Zeit heilt alle Wunden.

the time cures all wounds

‘Time cures all wounds.’

しかし、予想に反して、この種の他動詞に再帰化の操作を適用し RA を派生させることはできず、実際には (49) のような IA の形態が現れる。

(49) {Die Entzündung / die Wunde} heilt.

the inflammation the wound cures

‘The inflammation / the wound cures.’

このように、RA と IA の間には、使役主の主題役割に関して違いを見出すことができない (cf. 4.2)。さらに、以下のような動詞のペアを比較すると、この点がより明らかとなるだろう。(50a) は RA の *sich biegen* ‘bend’ の例であり、(50b) は IA の *brechen* ‘break’ の例である。前者は「枝が（雪の重みで）たわむ」という事態を、後者は「枝が（雪の重みで）折れる」という事態を表す。²⁵

(50) a. Der Zweig biegt sich (unter der Schneelast). RA

the branch bends REFL under the load of snow

‘The branch bends under the load of snow.’

b. Der Zweig bricht (unter der Schneelast). IA

the branch breaks under the load of snow

‘The branch breaks under the load of snow.’

これらの反使役動詞に対応する使役動詞 *biegen* ‘bend’ と *brechen* ‘break’ は、いずれも、(51) のような動作主 *das Kind* ‘the child’ だけでなく、(52) のような使役的状态を表す *die Schneelast* ‘the load of snow’ も主語に取ることができる。

²⁵ この動詞のペアに関しては、5.3.1.1 も参照のこと。

(51) a. Das Kind biegt den Zweig.

the child bends the branch

‘The child bends the branch.’

b. Das Kind bricht den Zweig.

the child breaks the branch

‘The child breaks the branch.’

(52) a. Die Schneelast biegt den Zweig.

the load of snow bends the branch

‘The load of snow bends the branch.’

b. Die Schneelast bricht den Zweig.

the load of snow breaks the branch

‘The load of snow breaks the branch.’

つまり、いずれの使役動詞の場合も、その使役主は不完全指定の EFFECTOR であると考えられる。それでは、なぜ *biegen* は RA としての派生を受け、*brechen* はそれを受けないという違いが生じるのであろうか。ここで、第 5 章の議論を想起されたい。本論文では、ドイツ語の RA と IA の意味的特性を以下のように設定することを提案していた。

(53) a. ドイツ語の IA は対象物の本質的变化(対象物の物理的な存在の喪失、あるいは本来的な機能の喪失)を表す。

b. ドイツ語の RA は、対象物の本質的变化を表さない。

言い換えれば、RA では、対象物が状態変化を経てもその同一性 (identity) を保持するのに対し、IA では、対象物が状態変化の後でその同一性を失うことが含意される。つまり、先の (50) を例に取れば、枝がたわむ (*sich biegen*) ときには、枝の属性に本質的な変化が生じず、たわんだ枝も依然として枝として認識される。一方、枝が折れる (*brechen*) ときには、一度木から離脱した枝はもう枝としての本性を維持していないと捉えられる。同様に、(49) の *heilen* ‘cure’ という IA で表される事態においても、対象物の同一性が保持されない。というのも、*heilen* という状態変化が生じるとき、その対象物である炎症や傷は消えてなくなることが含意されるためである。

さて、Koontz-Garboden (2009) の再帰化の操作をドイツ語の再帰代名詞 *sich* にも応用するならば、(54) のようになるが、この操作を適用して生じる RA の *sich biegen* ‘bend’ では、(55) に示した通り、EFFECTOR と THEME の主題役割を同一の対象物が兼ねることになる。また Kaufmann (2003) のア

アプローチでも、RA においては、再帰代名詞の出現によって、使役主項（因果連鎖上の第一の参与者）と被動者項（因果連鎖上の最後の参与者）が同一指示で結ばれると分析されていた。

(54) $[[sich]] = \lambda \mathfrak{R} \lambda x [\mathfrak{R} (x, x)]$

(55) $[[sich]] ([[biegen]])$

$= \lambda \mathfrak{R} \lambda x [\mathfrak{R} (x, x)] (\lambda x \lambda y \lambda s \lambda e [\exists v [\text{CAUSE} (v, e) \wedge \text{EFFECTOR} (v, y) \wedge \text{BECOME} (e, s) \wedge \text{THEME} (s, x) \wedge \text{curve} (s)]])$

$= \lambda x [\lambda x \lambda y \lambda s \lambda e [\exists v [\text{CAUSE} (v, e) \wedge \text{EFFECTOR} (v, y) \wedge \text{BECOME} (e, s) \wedge \text{THEME} (s, x) \wedge \text{curve} (s)]] (x, x)]$

$= \lambda x \lambda s \lambda e [\exists v [\text{CAUSE} (v, e) \wedge \text{EFFECTOR} (v, x) \wedge \text{BECOME} (e, s) \wedge \text{THEME} (s, x) \wedge \text{curve} (s)]]$

したがって、再帰化による反使役化とは、状態変化が生じる前 (EFFECTOR) と生じた後 (THEME) を同一指示で結ぶ操作であると言える。そして、そのような操作を経て生じた RA では、当然ながら、状態変化の前後における対象物の同一性が意味的に保証されなくてはならない。そのような理由から、RA においては、(53a) の「対象物の非本質的变化」という意味的特徴が現れるのだと考えられる。一方、IA において再帰化の操作を適用することができないのは、意味的に対象物の同一性が保証されないためであると言える。それゆえ、IA は別のプロセスを経て派生されると考えなくてはならない。

6.2. 日本語の反使役動詞との比較

前節では、ドイツ語の RA が、再帰化の操作によって他動詞から派生されるという分析を示した。また、同じ分析が、ドイツ語の IA には適用できないことを論じた。そこで本節では、ドイツ語の IA の派生のプロセスを考察する。その考察に当たり、日本語の反使役動詞を分析の手掛かりとしたい。²⁶ まず、6.2.1 で、日本語の使役交替にどのような形態的なパターンがあるかを確認する。そして、そのうちで、「反使役化」と呼ばれる *-e* 接尾辞と *-ar* 接尾辞の付加の現象を取り上げ、続く 6.2.2 で、その意味的特徴を詳しく観察する。そして、6.2.3 において、ドイツ語と日本語の反使役動詞の比較を試みる。最後に、6.2.4 において、ドイツ語の反使役動詞を語彙的アスペクトの観点から特徴づける可能性について考察する。

6.2.1. 日本語の使役交替の類型と反使役化

第 1 章でも触れたように、日本語の使役交替では、共通する動詞語幹への接尾辞の付加によって、使役形と反使役形が区別される。日本語の使役交替の全体像を概観すると、形態上、3つのパターンを設定することができる (奥津 1967, 井上 1976)。1つ目は、(56) の「反使役化」というもので、先行研究では、しばしば「自動化」とも呼ばれている。この類型においては、使役動詞が基本形となり、反使役動詞が *-e* や *-ar* という接尾辞を伴って、使役動詞から派生されると考えられている。例えば、(56a) では、*yabur* ‘tear (tr.)’ という使役動詞に *-e* という反使役形態素が付加され、*yabur-e* ‘tear (intr.)’ という反使役動詞が作られると、先行研究では説明されている。このタイプの交替は、1.2 で言及した Haspelmath (1987, 1993) の分類では、「反使役的な交替」 (anticausative alternation) と名付けられていたものである。

²⁶ 本節の内容は、2009年8月の第37回日本独文学会語学ゼミナールにおける研究発表と、*Mapping zwischen Syntax, Prosodie und Informationsstruktur – Akten des 37. Linguisten-Seminars, Kyoto 2009* に寄稿した論文 *Dekausativ und Anti-Kausativ im Deutschen und Japanischen – Eine lexikalisch-semantische Analyse von Kausativ-Inchoativ-Alternationen* (Aoki 2011) および、日本独文学会の学会誌 *Neue Beiträge zur Germanistik* に寄稿した論文 *Reflexive Inchoativa im Deutschen und ar-Inchoativa im Japanischen – Das Anti-Kausativ in lexikalisch-semantischer Hinsicht* – (Aoki 2010) に基づいている。

(56) 反使役化

CAUS	→	ANTICAUS
a. <i>yabur-u</i> ‘tear’ (tr.)		<i>yabur-e-ru</i> ‘tear’ (intr.)
b. <i>ag-e-ru</i> ‘raise’		<i>ag-ar-u</i> ‘rise’

2つ目のパターンは「使役化」である。つまり、(56)の反使役化とは反対に、反使役が基本となり、接尾辞 *-as*, *-os*, *-e* の付加によって、使役が派生されるパターンである。Haspelmath (1987, 1993) の研究では「使役的な交替」(causative alternation) と呼ばれていたものに対応する。

(57) 使役化

CAUS	←	ANTICAUS
a. <i>kawak-as-u</i> ‘dry’ (tr.)		<i>kawak-u</i> ‘dry’ (intr.)
b. <i>horob-os-u</i> ‘ruin’ (tr.)		<i>horob-u</i> ‘ruin’ (intr.)
c. <i>ak-e-ru</i> ‘open’ (tr.)		<i>ak-u</i> ‘open’ (intr.)

最後に、3つ目のパターンとして、「両極化」が挙げられる。これは、共通語幹から使役と反使役が同時に派生されるもの、および、同形の動詞が使役としても反使役としても用いられるものである。Haspelmath (1987, 1993) が「方向づけられていない交替」(non-directed alternation) と名付けていたグループに相当する。

(58) 両極化

CAUS		ANTICAUS
a. <i>noko-s-u</i> ‘leave’		<i>noko-r-u</i> ‘remain’
b. <i>yogo-s-u</i> ‘dirty’ (tr.)		<i>yogo-re-ru</i> ‘dirty’ (intr.)
c. <i>hirak-u</i> ‘open’ (tr.)		<i>hirak-u</i> ‘open’ (intr.)

このように、日本語の使役交替の現象には、多くの種類の接尾辞が現れ、その類型は、ドイツ語の使役交替よりも多様であるが、本節ではこのうちで(56)の反使役化に注目し、以下で詳しく分析することにした。

まず、注意しておきたいのは、(56b)の *ag-e-ru* / *ag-ar-u* のタイプの動詞について、単純に形態だけを問題にすれば、使役と反使役の両方に派生接辞が付加されているように見えるという点である。実際に、Haspelmath (1987, 1993) は、(59)のような同タイプの動詞を、「反使役的な交替」ではなく「方向づけられていない交替」に分類していた (cf. 1.2)。

(64) のように、*e-A* はこの句と問題なく適合するが、*ar-A* はこの句と適合しないという。

- (64) a. *Kami-ga katte-ni yabur-e-ta.* *e-A*
 paper-NOM by itself tear-ANTIC-PAST
- b. **Katte-ni hako-ni hon-ga tum-at-ta.* *ar-A*
 by itself box-LOC book-NOM fill-ANTIC-PAST

以上のような観察に基づいて、影山 (1996) は、英語の反使役動詞全般と日本語の *e-A* に共通する (65a) の再帰化の派生の操作を仮定している。さらに、日本語の *ar-A* には、(65b) の脱他動詞化の操作を仮定している。

(65) a. reflexivization
 [x=y CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]] (Japanese *e-A*, English)

b. detransitivization
 [x CONTROL [y BECOME [y BE AT-z]]] (Japanese *ar-A*)
 ↓
 ∅

この (65b) の派生は、3.1.2.1 で見た Levin and Rappaport Hovav (1995) の脱他動詞化 (detransitivization) とほぼ一致する。つまり、使役主 *x* が語彙的に束縛され、項構造への投射が妨げられる結果、反使役形が派生されるというものである。

ただし、Matsumoto (2000) では、この影山 (1996) の主張が成り立たないことが指摘されている。まず、「英語の反使役動詞は日本語の *ar-A* に意味的に対応しない」という影山 (1996: 184) の主張に反して、実際には、(66) のように、英語の反使役表現に対応する日本語の *ar-A* が数多く見出される。

(66) *atum-ar-u* ‘gather’, *kaw-ar-u* ‘change’, *maz-ar-u* ‘mix’, *sim-ar-u* ‘close’,
tam-ar-u ‘accumulate’, *tunag-ar-u* ‘connect’, *hirom-ar-u* ‘spread’, *hirog-ar-u*
 ‘widen’, *hukam-ar-u* ‘deepen’, *sebam-ar-u* ‘narrow’

また、*katte-ni* ‘by itself’ 句は *ar-A* となじまないという影山 (1996: 189) の観察も疑わしいと Matsumoto (2000) は述べている。例えば、(67) においては、この副詞句が全く問題なく *ar-A* と共起することが分かる。

- (67) a. *Nemohamonai uwasa-ga katte-ni hirom-ar-u.*
 groundless rumor-NOM by itself spread-ANTIC-PRES
- b. *Doa-ga katte-ni sim-ar-u.*
 door-NOM by itself close-ANTIC-PRES
- c. *Kami-ga katte-ni marum-ar-u.*
 paper-NOM by itself roll-ANTIC-PRES

したがって、影山 (1996) の想定する (65) の派生の枠組は、日本語の *e-A* と *ar-A* の説明としては、説得力を欠いていると考えられる。

続いて、杉岡 (2002) の分析を検討する。彼女は、日本語の形容詞派生の *ar-A* を取り上げ、その派生について考察している。その際に彼女が依拠しているのは、先述の影山 (1996) の枠組であり、基本的には *e-A* を (65a) のような再帰化によって説明し、*ar-A* を (65b) のような脱他動詞化によって説明するという立場を取っているが、*ar-A* のある特定のグループに関しては、脱他動詞化ではなく、再帰化の操作によって説明するのが適切であると述べている。彼女が通常の *ar-A* とみなしている動詞群を *ar-A*₁、特殊な *ar-A* とみなしている動詞群を *ar-A*₂ と表記すれば、杉岡 (2002) の主張は、以下のようにまとめられる。

- (68) a. *ar-A*₁ : detransitivization
 b. *ar-A*₂ : reflexivization

杉岡 (2002: 104-107) は、*ar-A*₁ の例として (69) のような動詞を挙げ、*ar-A*₂ の例として (70) のような動詞を挙げている。そして、これらの動詞の間の違いは、状態変化の使役主を含意するか否かであると述べている。

- (69) a. *Karada-ga atatam-at-ta.* *ar-A*₁
 body-NOM warm-ANTIC-PAST
 ‘The body warmed up.’
- b. *Ryookoku-no mizo-ga hukam-at-ta.*
 both countries-GEN gulf-NOM deepen-ANTIC-PAST
 ‘The gulf between the two countries deepened.’
- c. *Kigyoo-no kyoo-sooryoku-ga yowam-at-ta.*
 enterprise-GEN competitiveness-NOM weaken-ANTIC-PAST
 ‘The competitiveness of the enterprise weakened.’

- (70) a. Kaze-ga yowam-at-ta. ar-A₂
 wind-NOM weaken-ANTIC-PAST
 ‘The wind weakened.’
- b. Yami-ga hukam-at-ta.
 darkness-NOM deepen-ANTIC-PAST
 ‘The darkness deepened.’
- c. Taihuu-no amaasi-ga tuyom-at-ta.
 typhoon-GEN beat-NOM strengthen-ANTIC-PAST
 ‘The beat of the typhoon strengthened.’

つまり、(69) の *ar-A₁* は、動作主であれ自然現象であれ、何らかの使役主の存在を前提としていると考えられるが、(70) の *ar-A₂* には、そのような外的な使役主を全く想定できないという。さらに、杉岡 (2002: 106-107) は、*ar-A₁* と *ar-A₂* の間の意味的な違いが、*te-iru* 構文におけるアスペクト解釈の違いとして現れると述べ、(71) と (72) のような例を示している。

- (71) Karada-ga atatam-at-te-iru. ar-A₁
 body-NOM warm-ANTIC-TE-IRU
 ‘The body is already warm.’ (resultant state)
- (72) Kaze-ga yowam-at-te-iru. ar-A₂
 wind-NOM weaken-ANTIC-TE-IRU
 ‘The wind is already weak.’ (resultant state) or
 ‘The wind is gradually becoming weaker.’ (progress of change of state)

(71) は *ar-A₁* を用いた *te-iru* 構文であるが、この文は、「体がすでに暖まった状態に達している」という結果状態として解釈されるという。つまり、有界的な完了的解釈である。それに対して、(72) の *ar-A₂* を用いた *te-iru* 構文では、「風がすでに弱まった状態に至っている」という結果状態の解釈だけでなく、「風が次第に弱まってきている」という状態変化の進行の解釈も可能であるという。すなわち、*ar-A₂* は *te-iru* 構文で有界的解釈のみならず、非有界的な進行的解釈も許すと、杉岡 (2002: 107) では述べられている。

以上の観察から、杉岡 (2002: 106) は、*ar-A*₁ に対して (73) のような脱他動詞化の派生を想定している。ここでは、使役事象の *x CONTROL* がブロックされ、項構造への投射が妨げられる結果、achievement 型の意味構造が生じている。そして、このような achievement 型の意味構造に基づくために、*ar-A*₁ は *te-iru* 構文において結果状態の解釈のみを容認すると想定されている。³⁰

(73) *ar-A*₁: detransitivization
[x CONTROL [y BECOME [y BE at-([+DEG] State)]]]
 ↓
 ∅

また、杉岡 (2002: 109) は、*ar-A*₂ に対しては、上記の脱他動詞化ではなく、使役主 *x* と状態変化の対象 *y* を意味構造上で同一化する (74) の再帰化の派生を仮定することが適切であると主張している。ここでは、(73) とは異なり、*y CONTROL* の部分がブロックされない。したがって、この意味構造は、使役事象を伴った accomplishment 型として捉えられるという。そして、このような意味構造に基づくことから、*ar-A*₂ の *te-iru* 構文が有界的解釈だけでなく非有界的解釈も許すことが根拠づけられるという。

(74) *ar-A*₂: reflexivization
 [y CONTROL [y BECOME [y BE at-([+DEG] State)]]]

6.2.3. 日本語とドイツ語の反使役動詞

前節で概観した杉岡 (2002) の研究は、日本語の *ar-A* に脱他動詞化の分析だけでなく、再帰化の分析の可能性も示唆しているという点で、非常に重要であると思われる。ただし、彼女の想定する *ar-A*₁ と *ar-A*₂ の使役主に関する違いは、必ずしも自明であるとは言い切れない可能性がある。

先述の通り、杉岡 (2002: 107) は、*ar-A*₂ の例として、(70) の「風が弱まった」や「闇が深まった」や「台風の雨脚が強まった」のような文を挙げており、この場合には、外的な使役主が意味的に含意されないと説明していた。しかし、「(温度の上昇によって) 風が弱まった」や、「(冬至が近づき) 夜の

³⁰ (73) や (74) の LSR には、結果状態に [+Deg(ree)] という素性が付いているが、これは杉岡 (2002: 106) によれば、挿入される形容詞が段階性を持つことを示すものである。

闇が深まった」や、「(前線の接近にともなって) 台風の雨脚が強まった」のような句が付加できることから分かるように、*ar-A₂* に分類されている例にも、自然現象や使役的事象などの使役主を想定することは不可能ではないと思われる。また、*te-iru* 構文の解釈における *ar-A₁* と *ar-A₂* の差異も、筆者には明確に感じ取ることができない。例えば、(75) の「企業の競争力が弱まっている」や「オーブンの温度が上がっている」のような *ar-A₁* の *te-iru* 構文には、いずれも背景に何らかの使役主が存在するはずであるが、杉岡 (2002) の主張に反して、結果状態の解釈だけでなく、状態変化の進行の解釈も許されるように思われる。

(75) a. Kigyoo-no kyoosooroku-ga yowam-at-te-iru. (cf. 69c)

enterprise-GEN competitiveness-NOM weaken-ANTIC-TE-IRU

‘The competitiveness of the enterprise {is already weak / is becoming weaker}.’

b. Oobun-no ondo-ga ag-at-te-iru.

oven-GEN temperature-NOM increase-ANTIC-TE-IRU

‘The temperature of the oven {is already high / is becoming higher}.’

したがって、*ar-A₁* と *ar-A₂* の細分化は有効ではなく、*ar-A* は全般的に、*te-iru* 構文において、有界的解釈のみならず非有界的解釈も容認するのではないかと推測される。そして、もしこの仮定が正しければ、日本語の *ar-A* は全て (74) のような *accomplishment* 型の意味構造を持ち、使役主 *x* と状態変化の対象 *y* の同一指示という再帰化の操作によって派生されると考えることができるだろう。

この想定を裏付けるように、杉岡 (2002) の提示している日本語の (69) と (70) の *ar-A* の例文をドイツ語に翻訳すると、(76) のように、反使役動詞としてすべて RA が用いられることが分かる。

(76) a. Der Körper erwärmte sich.

the body warmed REFL

‘The body warmed up.’

b. Der Riss zwischen den beiden Ländern vertiefte sich.

the split between the both countries deepened REFL

‘The split between the two countries deepened.’

c. Die Konkurrenzfähigkeit des Unternehmens verminderte sich.

the competitiveness of-the enterprise weakened REFL

‘The competitiveness of the enterprise weakened.’

- d. Der Wind legte sich.
 the wind abated REFL
 ‘The wind abated.’
- e. Die Finsternis vertiefte sich.
 the darkness deepened REFL
 ‘The darkness deepened.’
- f. Der Schauer des Taifuns verstärkte sich.
 the shower of-the typhoon strengthened REFL
 ‘The shower of the typhoon strengthened.’

これは決して単なる偶然の一致ではなく、他にも、日本語の *ar-A* 動詞に意味的に対応するドイツ語の *RA* 動詞を数多く指摘することができる。

- (77) *kaw-ar-u / sich ändern* ‘change’, *hirog-ar-u / sich verbreiten* ‘widen’,
sebam-ar-u / sich verengen ‘narrow’, *ag-ar-u / sich erhöhen* ‘rise’, *sag-ar-u /*
sich senken ‘sink’, *hukam-ar-u / sich vertiefen* ‘deepen’, *atum-ar-u / sich*
sammeln ‘gather’, *maz-ar-u / sich mischen* ‘mix’, *usum-ar-u / sich verdünnen*
 ‘dilute’, *sim-ar-u / sich schließen* ‘close’, *husag-ar-u / sich schließen* ‘close’,
tunag-ar-u / sich verknüpfen ‘connect’, *karam-ar-u / sich verflechten*
 ‘intertwine’, *kurum-ar-u / sich hüllen* ‘wrap’, *tum-ar-u / sich füllen* ‘fill’,
kasan-ar-u / sich decken ‘coincide’, *tam-ar-u / sich häufen* ‘pile up’,
katam-ar-u / sich verhärten ‘harden’, *som-ar-u / sich färben* ‘change color’,
marum-ar-u / sich ballen ‘gather’, *tuyom-ar-u / sich verstärken* ‘strengthen’,
yowam-ar-u / sich vermindern ‘diminish’, *mag-ar-u / sich biegen* ‘bend’,
atatam-ar-u / sich erwärmen ‘warm up’, *sizum-ar-u / sich beruhigen* ‘calm
 down’

よって、6.1.3 でドイツ語の *RA* が再帰化の派生として説明されることを示したが、これと同じ分析が、日本語の *ar-A* にも適用可能であると考えられる。

さらに、日本語のもうひとつの反使役化の形態である *e-A* は、ドイツ語の *IA* と意味的な対応を見せる。例えば (78a) の *e-A* の *war-e-ru* ‘break’ をドイツ語に翻訳すると、(78b) のように *IA* の *zerbrechen* ‘break’ が用いられる。

- (78) a. Sara-ga war-e-ru. e-A
 dish-NOM break-ANTIC-PRES
- b. Der Teller zerbricht. IA
 the dish breaks

さらに、(78) だけでなく、他にも、日本語の *e-A* と意味的に対応するドイツ語の *IA* の例を挙げるができる。

- (79) *war-e-ru* / *zerbrechen* ‘break’, *or-e-ru* / *brechen* ‘break’, *kudak-e-ru* / *zerbrechen* ‘smash’, *mog-e-ru* / *abbrechen* ‘break off’, *yak-e-ru* / *verbrennen* ‘burn’, *tor-e-ru* / *ausreißen* ‘pull apart’, *yabur-e-ru* / *zerreißen* ‘tear’, *sak-e-ru* / *reißen* ‘tear’, *tigir-e-ru* / *abreißen* ‘tear off’, *kak-e-ru* / *splittern* ‘splinter’, *hag-e-ru* / *abblättern* ‘flake off’

このような対応関係を考慮に入れば、日本語の *e-A* とドイツ語の *IA* は、同じ派生のプロセスを経ると想定するのが自然であろう。ここで、日本語の *e-A* の *te-iru* 構文における解釈について考えてみると、先述の *ar-A* の場合とは異なり、結果状態の意味が強く現れ、状態変化の進行の意味がふつう成り立たないことが分かる。例えば (80a) の「皿が割れている」という *e-A* の文は、一義的に「皿が割れた状態に至っている」と解釈され、特殊な文脈を与えない限り「皿が今割れるという状態変化を被っているところである」とは解釈されない。(80b) から (80g) についても同様である。³¹

- (80) a. Sara-ga war-e-te-iru.
 dish-NOM break-ANTIC-TE-IRU
 ‘The dish is broken.’
- b. Eda-ga or-e-te-iru.
 branch-NOM break-ANTIC-TE-IRU
 ‘The branch is broken off.’
- c. Imo-ga yak-e-te-iru.
 potato-NOM bake-ANTIC-TE-IRU
 ‘The potato is baked.’

³¹ ただし、(80c) に示した「芋が焼けている」の例では、「芋が焼き上がっている」という結果状態の読みのほうが強く現れるが、他の *e-A* の場合と異なり、「芋が今焼けてつある」という状態変化の進行の解釈も排除されないと思われる。このタイプの動詞をどのように扱うべきかについては、今後の課題としたい。

- d. *Kami-ga yabur-e-te-iru.*
 paper-NOM tear-ANTIC-TE-IRU
 ‘The paper is torn.’
- e. *Tosoo-ga hag-e-te-iru.*
 paint-NOM flake-ANTIC-TE-IRU
 ‘The paint is flaked off.’
- f. *Sode-ga tigur-e-te-iru.*
 sleeve-NOM tear off-ANTIC-TE-IRU
 ‘The sleeve is torn off.’
- g. *Koppu-ga kudak-e-te-iru.*
 cup-NOM smash-ANTIC-TE-IRU
 ‘The cup is smashed.’

つまり、杉岡 (2002) の論述に依拠すれば、日本語の *e-A* は、脱他動詞化のプロセスによって使役事象がブロックされた **achievement** 型の意味構造を持つと想定される。

これまでの議論を要約すると、(81) の通りである。ドイツ語の **RA** は日本語の *ar-A* と、ドイツ語の **IA** は日本語の *e-A* とそれぞれ意味的な対応関係を示すと考えられる。そして、日本語の *te-iru* 構文におけるアスペクト解釈を観察した結果、*ar-A* では、有界的解釈（結果状態の読み）も非有界的解釈（状態変化の進行の読み）も可能であるのに対して、*e-A* では、非有界的解釈が成り立ち難く、有界的解釈が自然であることが分かった。つまり、杉岡 (2002) の分析を敷衍すれば、日本語の *ar-A* は再帰化によって派生された **accomplishment** 型の意味構造を持ち、*e-A* は脱他動詞化によって派生された **achievement** 型の意味構造を持つことになる。そして、日本語とドイツ語の対応関係に基づけば、ドイツ語の **RA** は、6.1.3 の分析通り、(82) のような再帰化 (**reflexivization**) によって説明されるのに対し、**IA** は、(83) のような脱他動詞化 (**detransitivization**) のプロセスを経ることが示唆される。

(81)

German	Japanese	Aspectual interpretation in the <i>te-iru</i> construction	Derivation
RA	<i>ar-A</i>	telic / atelic	reflexivization (accomplishment)
IA	<i>e-A</i>	telic	detransitivization (achievement)

(82) reflexivization

[y CAUSE [y BECOME [y BE at-State]]]

(83) detransitivization

[x CAUSE [y BECOME [y BE at-State]]]

↓

∅

したがって、日本語の *ar-A* と *e-A* については、結局のところ、影山 (1996) が仮定していた (65) の派生とは正反対の関係を想定するのが妥当であると言っていることができるだろう。つまり、影山 (1996) は、*ar-A* を脱他動詞化として捉え、*e-A* を再帰化として捉えるという立場を取っていたが、*te-iru* 構文のAspect解釈やドイツ語との対応関係を考慮に入れれば、*ar-A* を再帰化によって、*e-A* を脱他動詞化によって説明するのがよいと考えられる。

6.2.4. 反使役動詞の意味構造と完了形のAspect解釈

前節で見たように、日本語の *ar-A* は、ドイツ語の RA と意味的な対応関係を示す (cf. (84b), (85b))。また、日本語の *e-A* は、ドイツ語の IA と意味的に対応する (cf. (86b), (87b))。

(84) a. Hanako-ga doa-o sim-e-ru.

Hanako-NOM door-ACC close-CAUS-PRES

b. Doa-ga sim-ar-u.

door-NOM close-ANTIC-PRES

ar-A

(85) a. Maria schließt die Tür.

Maria closes the door

b. Die Tür schließt sich.

the door closes REFL

RA

- (86) a. Taroo-ga sara-o war-u.
 Taro-NOM dish-ACC break-PRES
- b. Sara-ga war-e-ru. e-A
 dish-NOM break-ANTIC-PRES
- (87) a. Hans zerbricht den Teller.
 Hans breaks the dish
- b. Der Teller zerbricht. IA
 the dish breaks

このような観察から、前節では、ドイツ語の反使役動詞に対して、(88) と (89) の派生プロセスを想定することを提案した。

(88) RA: reflexivization

[y CAUSE [y BECOME [y BE at-State]]]

(89) IA: detransitivization

[x CAUSE [y BECOME [y BE at-State]]]

↓
 ∅

このような派生の違いに基づけば、ドイツ語の RA と IA の間に「対象物の本質的变化」という観点で意味的な差が現れる理由を説明することができるだろう。6.1.4 で論じたように、ドイツ語の RA に適用される再帰化 (reflexivization) とは、状態変化の前と後の対象物を同一指示で結ぶ操作であると考えられる。そして、この操作によって他動詞から派生される RA においては、状態変化の前後における対象物の同一性が保証されなくてはならない。それゆえ、対象物に本質的な変化が生じないという RA の意味的特徴が現れるのだと推測される。一方、IA には、対応する他動詞の使役主をブロックする脱他動詞化 (detransitivization) の操作が適用されることが考えられる。そして、このような派生を経ているために、IA の例では、対象物の同一性が維持されず、物理的存在ないし本来的機能という観点で対象物に本質的な変化が生じるという意味が表されるのだとすることができる。

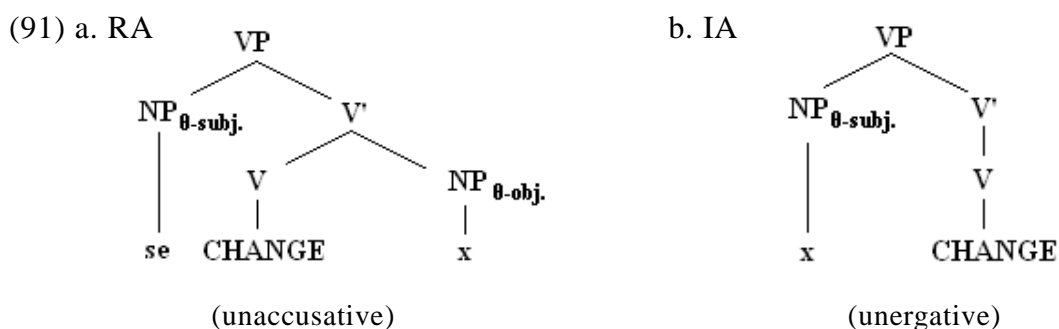
さて、日本語の *te-iru* 構文における解釈を検討した際に、再帰化の派生を受ける *ar-A* は、有界的解釈も非有界的解釈も容認するため、その意味構造は使役事象を伴う accomplishment タイプとして捉えられると述べた (cf. (90a))。また、脱他動詞化の派生を受ける *e-A* は、*ar-A* とは異なり、有界的

解釈のみを許すため、その意味構造は、使役事象がブロックされた achievement タイプとして分析されると主張した (cf. (90b))。

- (90) a. Doa-ga sim-at-te-iru. ar-A
 door-NOM close-ANTIC-TE-IRU
 ‘The door is already closed.’ (resultant state: telic)
 ‘The door is closing.’ (progress of change of state: atelic)
- b. Sara-ga war-e-te-iru. e-A
 dish-NOM break-ANTIC-TE-IRU
 ‘The dish is already broken.’ (resultant state: telic)

これに類するアスペクト解釈の違いがドイツ語の RA と IA にも確認できれば、(88) - (89) の想定に対する更なる根拠になるはずである。そこで、論考を結ぶにあたり、ドイツ語の反使役動詞をアスペクトの観点から観察することにした。

本論文では、4.1.1 において、Schäfer (2008) によるドイツ語の語彙的アスペクトの分析を紹介した。彼は、ドイツ語に限らず、いくつかのヨーロッパ言語でも、反使役動詞に RA と IA の区別が観察されると述べていた。また、イタリア語やフランス語の反使役動詞においては、その形式の選択にアスペクト的な意味が深く関与している可能性があることを指摘していた (cf. Labelle 1992, Folli 2002)。例えば、Labelle (1992) のフランス語反使役動詞の研究では、完了時制において、RA が助動詞 *être* ‘be’ と結び付き、IA が *avoir* ‘have’ と結び付くことから、(91) のような異なる統語構造が RA と IA にそれぞれ想定されていた。³²



³² 後述するように、フランス語の反使役動詞における完了の助動詞選択は、ドイツ語とは正反対の関係を示す。つまりドイツ語では、再帰代名詞 *sich* を伴う RA が *haben* 型の助動詞 *haben* と結び付き、再帰代名詞を伴わない IA が *sein* 型の助動詞 *sein* と結び付く。

Labelle (1992) は、このような異なる統語構造から、フランス語の RA と IA におけるアスペクト的解釈の違いが生じると主張していた。つまり、非対格型の統語構造を持つとされるフランス語の RA は、結果状態に焦点を当てる傾向があるのに対し、非能格型の統語構造を持つとされる IA は、プロセスに焦点を当てる傾向があるという。例として、Labelle (1992) は、動詞 *durcir* ‘harden’ と *cuire* ‘cook’ を挙げていた。これらの動詞は、通常 IA として用いられるが、文脈によっては RA の形態を取ることがあるという。そして、(92) や (94) のように、*for X adverbial* が文中に現れる場合には、再帰接辞 *se* は絶対に付加されないが、(93) や (95) のように、最終状態に焦点を置く *in X adverbial* が現れる場合には、*se* が付加されうることであった。

- (92) a. Le ciment a durci pendant 3 heures. IA
the cement has hardened during 3 hours
- b. *²Le ciment s’est durci pendant 3 heures. RA
the cement REFL is hardened during 3 hours
‘The cement has hardened for 3 hours.’ (atelic)
- (93) a. Les joints de caoutchouc durcissaient en quelques années. IA
the joints of caoutchouc hardened in few years
- b. Les joints de caoutchouc se durcissaient en quelques années. RA
the joints of caoutchouc REFL hardened in few years
‘The rubber joints were hardening in a few years.’ (telic)
- (94) a. Le poulet a cuit pendant 3 heures. IA
the chicken has cooked for 3 hours
- b. *Le poulet s’est cuit pendant 3 heures. RA
the chicken REFL is cooked for 3 hours
‘The chicken cooked for 3 hours.’ (atelic)
- (95) a. Le poulet a cuit en très exactement 30 minutes. IA
the chicken has cooked in very exactly 30 minutes
- b. ³Le poulet s’est cuit en très exactement 30 minutes. RA
the chicken REFL is cooked in very exactly 30 minutes
‘The chicken cooked / got cooked in exactly 30 minutes. (telic)

つまり、フランス語の完了時制（および過去時制）³³ において、動詞 *durcir* ‘harden’ や *cuire* ‘cook’ が用いられる際に、IA は非有界的解釈も有界的解釈も容認するが、RA は非有界的解釈を容認せず、有界的解釈のみを許すと言うことができる。

これに対して、Schäfer (2008 : 36 - 37) は、ドイツ語の反使役動詞では形態とアスペクト解釈の間に明確な関連が観察されないと述べ、以下のような例を示していた。

- (96) a. Das Wasser kühlte sich eine Stunde lang ab. RA
 the water cooled REFL one hour long down
- b. Das Wasser kühlte eine Stunde lang ab. IA
 the water cooled one hour long down
 ‘The water cooled down for an hour.’ (atelic)
- (97) a. Das Wasser kühlte sich in einer Stunde ab. RA
 the water cooled REFL in one hour down
- b. Das Wasser kühlte in einer Stunde ab. IA
 the water cooled in one hour down
 ‘The water cooled down in one hour.’ (telic)

動詞 *abkühlen* ‘cool’ は、RA と IA の両方の形態を取りうる RIA 動詞であるが、(96) のように *for X adverbial* が文中に現れる場合にも、(97) のように *in X adverbial* が文中に現れる場合にも、RA と IA の間に容認度の差が見られないという。

ここで、確かに Schäfer (2008) の (96) - (97) の観察は正しいと言うことができるが、ひとつ注意しておきたいのは、上記の例文では、全て動詞 *abkühlen* の過去時制が問題となっているということである。つまり、ドイツ語の過去時制においては、Schäfer (2008) が言うように、ドイツ語の RA と IA をアスペクト的な観点から明確に区別することが難しいが、完了時制においてはそれが可能であるように思われる。例えば、動詞 *abkühlen* を (98) のように現在完了形で用いると、RA は *for X adverbial* と結び付くが、IA は *for X adverbial* と結び付かないことが分かる。(cf. (96))

³³ 上の Labelle (1992) の例文では、(92), (94), (95) に行為の完了を表す複合過去形 (*passé composé*) が用いられ、(93) に過去の状態や継続を表す半過去形 (*imparfait*) が用いられている。

- (98) a. Der Motor hat sich eine Minute lang abgekühlt. RA
 the motor has REFL one minute long cooled-down
 ‘The motor cooled down for one minute.’ (atelic)
- b. *[?]Der Motor ist eine Minute lang abgekühlt. IA
 the motor is one minute long cooled-down
 *[?]‘The motor cooled down for one mitute.’ (atelic)

また、*in X adverbial* の共起可能性については、過去形と現在完了形で違いが観察されない。すなわち、(99) のような現在完了形で動詞 *abkühlen* を用いたときにも、RA と IA はそれぞれ *in X adverbial* と結び付く。(cf. (97))

- (99) a. Der Motor hat sich in einer Minute abgekühlt. RA
 the motor has REFL in one minute cooled-down
 ‘The motor cooled down in one minute.’ (telic)
- b. Der Motor ist in einer Minute abgekühlt. IA
 the motor is in one minute cooled-down
 ‘The motor cooled down in one minute.’ (telic)

言い換えれば、RA の現在完了形は、完結点を表す句 (*in einer Minute* ‘in one minute’) も、期間を表す句 (*eine Minute lang* ‘for one minute’) も、問題なく容認し、事象の有界的解釈と非有界解釈の両方を得ることができる。一方、IA の現在完了形は、完結点を表す句 (*in einer Minute* ‘in one minute’) とは適合するが、期間を表す句 (*eine Minute lang* ‘for one minute’) とは共起しにくい。つまり、IA の場合、非有界的なプロセスの読みを現在完了形によって引き出すのが困難であると言うことができる。ところで、この振る舞いは、先ほど見たフランス語の (92) - (95) の例とよく似ている。フランス語の完了時制は、IA が助動詞 *avoir* ‘have’ と結び付き、RA が助動詞 *être* ‘be’ と結び付くという点で、ドイツ語とは正反対の関係を示すが、非有界的解釈を得にくいフランス語の (92b) と (94b) の RA でも、ドイツ語の (98b) の IA でも、be 型の完了の助動詞が現れていることが分かる。

ここで、ドイツ語の *abkühlen* ‘cool’ のような RIA 動詞は、他動詞に再帰化の操作を適用して RA を派生させることも、脱他動詞化の操作を適用して IA を派生させることも可能な動詞であると考えれば、(98b) の IA で非有界的な解釈が排除される理由を説明することができるのではないだろうか。つまり、ドイツ語の IA は、(100b) のような使役事象がブロックされた achievement タイプの意味構造に基づくため、現在完了形によって状態変化

の完結に焦点を当てることはできるが、状態変化のプロセスに焦点を当てることは難しいのではないかと推測される。

(100) a. reflexivization:

[y CAUSE [y BECOME [y BE at-State]]]

b. detransitivization:

[x CAUSE [y BECOME [y BE at-State]]]

↓

∅

さらに、ドイツ語では、*abkühlen* のような RIA 動詞だけでなく、真の IA においても、現在完了形で非有界的な解釈が排除されると考えられる。例えば、瞬時的な状態変化を表す *zerbrechen* ‘break’ の現在完了形は、時点を表す句 (*vor zwei Stunden* ‘two hours ago’ や *um sechs Uhr* ‘at six o’clock’) の出現を許すが、期間を表す句 (*zwei Stunden* ‘for two hours’ や *den ganzen Tag* ‘all day long’) は決して容認しない。つまり、(101a) の「皿が 2 時間前に / 6 時に割れた」という有界的な解釈は可能であるが、(101b) の「皿が 2 時間 / 1 日中割れていた」という非有界的な解釈は許されない。(102) の *einstrürzen* ‘collapse’ や、(103) の *umknicken* ‘snap’ の例も同様である。

(101) a. Der Teller ist { vor zwei Stunden / um sechs Uhr } zerbrochen.

the dish is before two hours at six o’clock broken

‘The dish broke two hours ago / at six o’clock.’ (telic)

b. Der Teller ist { *zwei Stunden / *den ganzen Tag } zerbrochen.

the dish is two hours the all day broken

*‘The dish broke for two hours / all day long.’ (atelic)

(102) a. Das Haus ist { vor zwei Stunden / um sechs Uhr } eingestürzt.

the house is before two hours at six o’clock collapsed

‘The house collapsed two hours ago / at six o’clock.’ (telic)

b. Das Haus ist { *zwei Stunden / *den ganzen Tag } eingestürzt.

the house is two hours the all day collapsed

*‘The house collapsed for two hours / all day long.’ (atelic)

- (103) a. Das Streichholz ist {vor zwei Stunden / um sechs Uhr} umgeknickt.
 the matchstick is before two hours at six o'clock snapped
 'The matchstick snapped two hours ago / at six o'clock.' (telic)
- b. Das Streichholz ist {*zwei Stunden / *den ganzen Tag} umgeknickt.
 the matchstick is two hours the all day snapped
 *'The matchstick snapped for two hours / all day long.' (atelic)

また、ある程度の時間幅をもって進行する状態変化を表す *verbrennen* 'burn' のような IA の現在完了形でも、上の *zerbrechen* の例と同様に、時点を表す句のみが許され、期間を表す句が生起しない。すなわち、(104a) のように「その建物が2年前に / その日に燃えた」と言うことはできるが、(104b) のように「その建物が2時間 / 1日中燃えていた」という解釈は成り立たない。(105) の *schmelzen* 'melt' や (106) の *austrocknen* 'dry up' の例も同様である。

- (104) a. Das Gebäude ist {vor zwei Jahren / an diesem Tag} verbrannt.
 the building is before two years on this day burned
 'The building burnt two years ago / on this day.' (telic)
- b. Das Gebäude ist {*zwei Stunden / *den ganzen Tag} verbrannt.
 the building is two hours the all day burned
 *'The building burnt for two hours / all day long.' (atelic)
- (105) a. Der Schnee ist {vor zwei Wochen / an diesem Tag} geschmolzen.
 the snow is before two weeks on this day melted
 'The snow melted two weeks ago / on this day.' (telic)
- b. Der Schnee ist {*²zwei Stunden / *²den ganzen Tag} geschmolzen.
 the snow is two hours the all day melted
 *²'The snow melted for two hours / all day long.' (atelic)
- (106) a. Die Quelle ist {vor zwei Wochen / an diesem Tag} ausgetrocknet.
 the spring is before two weeks on this day dried up
 'The spring dried up two weeks ago / on this day.' (telic)
- b. Die Quelle ist {*zwei Stunden / *den ganzen Tag} ausgetrocknet.
 the spring is two hours the all day dried up
 *'The spring dried up for two hours / all day long.' (atelic)

このようなアスペクト解釈の違いによって、(100) の想定が補強されるように思われる。つまり、日本語の *e-A* が *te-iru* 構文で非有界的解釈を得られないのと同様に、ドイツ語の IA もまた、脱他動詞化 (detransitivization) によ

る **achievement** 型の意味構造に基づくため、現在完了形によって状態変化のプロセスの部分に焦点を当てることができないと結論付けられる。

6.3. 結語

本章では、まず 6.1 で、**Kaufmann (2003)** と **Koontz-Garboden (2009)** によるドイツ語とスペイン語の再帰化 (**reflexivization**) 分析を紹介した。そして、再帰化を、被動者項に使役主項と同一指示を与えることで、使役主項の実現をブロックする操作であると規定した。さらに、この操作により、ドイツ語の **RA** が他動詞からの派生形として分析されることを示した。また、ドイツ語のもうひとつの反使役の形態である **IA** は、**Levin & Rappaport Hovav (1995)** が提案する脱他動詞化 (**detransitivization**) の操作によって、他動詞から派生されると 6.2 で主張した。脱他動詞化とは、使役主項を語彙的に束縛することで、項構造への投射を妨げるという操作である。このような異なる派生のプロセスを想定することによって、第 5 章で取り上げた **RA** と **IA** の意味的な相違や、ドイツ語の反使役と対応する日本語表現のアスペクト的特性が、矛盾なく説明されることを示した。

第7章 結論

7.1. 反使役研究の意義

本論文では、「反使役」(anticausative) をテーマとして、ドイツ語を軸にその意味的特徴を探り、多岐にわたる例文を検討した。言語研究において、受動や使役のような概念が長年注目を受け詳しく調査されてきたこととは対照的に、反使役の意味論・統語論は、比較的歴史が浅く、未だに研究し尽くされているとは言い難いのが現状であろう。それゆえ、反使役が謎に満ちた言語現象として捉えられることも間々あるように思われる。しかし、本論文のなかで言及してきたように、反使役という概念は、再帰性、非対格性、動詞の語彙的アスペクトのような言語学の主要なトピックとも深く関わるものであり、また、ドイツ語においては、自由与格の解釈とも密接に関連していると考えられる。したがって、反使役の意味や機能を追究することによって、ドイツ語学の分野はもとより、言語学一般に対しても、貢献できることがまだまだたくさん残されているのではないかと思われる。

本論考は、このような目標のもと、ドイツ語の反使役動詞の振る舞いを、**RA** と **IA** というふたつの形態的グループに分け、比較検討してきた。もちろん、これで分析として十分であるとは当然ながら言うことができないが、少なくとも、いくつかの新しい論点を提供することが出来たのではないかと思われる。

まず1つ目に、ドイツ語の反使役動詞の形態的な違いが意味的に動機づけられることを示した点が挙げられる。先行研究では、**RA** と **IA** が、レキシコン上の分布においてある一定の傾向を示すことが指摘されていたが、この分布の傾向を意味と結び付けた研究は、筆者の知り得る限り、それほど多くは存在しない。そして2つ目に、ドイツ語の反使役動詞が、語彙的アスペクトの観点において、日本語の *ar-A* や *e-A* と類似した振る舞いを見せることを指摘した点である。このような系統の全く異なる言語間においても、比類しうる動詞グループが確認されるという本論文の主張が正しいとすれば、反使役の範疇が個別言語ごとに大幅に異なるのではなく、ある程度普遍的な特徴を示す可能性があると考えられるだろう。

7.2. 各章のまとめ

以下、本論文の議論を章ごとに要約する。まず、第1章では、反使役の定義について述べ、研究の具体的な対象を示した。また、しばしば反使役と同義として用いられる「起動」(inchoative)についても、説明を行った。

第2章では、ドイツ語の反使役動詞が再帰代名詞 *sich* を伴って実現される RA と、単独で実現される IA のふたつに分けられることを議論の前提とし、このふたつの動詞グループが形態的観点からどのように特徴づけられるかを、主に Schäfer (2008) の研究を参照しながら概観した。また、その際に、完了の助動詞選択の現象や、RA と IA の両用法を備えた特殊な RIA 動詞の存在にも言及した。

第3章では、ドイツ語に限らず、諸言語の反使役動詞を意味的に分析する際に、先行研究において、ふたつの理論的方向性が示されていることを指摘した。1つ目は、派生的アプローチと呼ばれるもので、これは Dowty (1979) に代表される使役化説と、Levin and Rappaport Hovav (1995) や Reinhart (2002) に代表される反使役化説にさらに区別することができる。2つ目は、非派生的アプローチと呼ばれるもので、本論文ではその代表的な研究として Alexiadou et al. (2006) を取り上げ、その主張を詳しく検討した。彼女らの研究は、通言語的な反使役の意味構造を追究しているという点で非常に魅力的であるが、一方で、方法論的な要請として、内的使役 (internally caused) の非対格動詞に対しても CAUS が含まれる使役的構造を想定しなければならないため、そのような点において、説得力を欠く可能性があることを述べた。

第4章では、ドイツ語の反使役動詞の意味的な特性について考察した。先行研究では、ドイツ語の RA と IA の間にどのような意味的相違が認められるのかが議論されており、その際に、動詞の語彙的アスペクトや自由与格の解釈、特定の前置詞句・副詞句の認可の問題がしばしば取り上げられてきた。とりわけ、自由与格の分析に基づき、ドイツ語の反使役動詞の形態的な違いを使役主の観点から意味的に動機づけるというアプローチが有力な説とみなされてきた。このような使役主アプローチに対する反論として、Schäfer (2008) と大矢 (2008) の考察を取り上げ検討した。

第5章では、ドイツ語の RA と IA の間には意味的な相違が想定できるという立場から、「対象物の本質的变化」という一般化を提案した。すなわち、IA によって描写される状態変化は、対象物に本質的な変化（物理的な存在あるいは本来的な機能の変化）が生じることを含意するのに対し、RA によって描写される状態変化は、そのような変化を含意しないという考えである。この一般化の妥当性を探るために、ドイツ語の反使役動詞をいくつかの意味

的グループに分け、個別に検討した。その結果、音放出動詞からの派生形として分析される自動詞や、完了の助動詞として *sein* ‘be’ だけでなく *haben* ‘have’ も選択しうる自動詞の例に対しては、「対象物の本質的変化」の一般化が適切でない可能性があるものの、その他の多くの反使役動詞の形態的実現に関しては、この一般化に基づく説明が可能であることが判明した。また、形容詞派生動詞、名詞派生動詞、接頭辞付き動詞という形態的観点におけるドイツ語反使役動詞の分布上の傾向や、先行研究で未解決となっていた RIA 動詞および自由与格の解釈に対しても、上記の一般化が有効であることを示した。

第 6 章では、「対象物の本質的な変化」という意味的原理を理論的に動機づけることを目標とし、ドイツ語の RA と IA に異なる語彙意味表示を設定すべきであるという主張を行った。まず、Kaufmann (2003) と Koontz-Garboden (2009) による再帰動詞の分析を検討し、再帰化 (reflexivization) を、被動者項に使役主項と同一指示を与えることで使役主項の実現をブロックする操作として定式化した。そして、この操作を適用することで、ドイツ語の RA が使役構造からの派生形として分析されることを論じた。また、ドイツ語の IA には、第 3 章でも言及した Levin & Rappaport Hovav (1995) の脱他動詞化 (detransitivization) の操作を適用するのが妥当であるという考えを述べた。この操作は、使役主項を語彙的に束縛することで、項構造への投射を妨げるものとして規定される。このような異なる語彙意味表示をドイツ語の RA と IA に設定することにより、第 5 章で観察した RA と IA の間の意味的相違が矛盾なく説明されることを示した。また、ドイツ語の RA と IA に意味的に対応する日本語表現として、接尾辞 *-ar* を伴う反使役動詞と、接尾辞 *-e* を伴う反使役動詞を取り上げた。これらの動詞が *te-iru* 構文において示す有界性の解釈が、ドイツ語では現在完了形において同様に観察されることから、上記の想定が裏付けられることを最後に指摘した。

7.3. 今後の課題と展望

結びとして、本論文では論じることができなかつたいくつかの項目を補足し、今後の研究の展望を述べておきたい。

まず、第 2 章で、ドイツ語の反使役動詞は大部分が再帰動詞として実現され、自動詞は比較的少ないことを観察した。これに対して、ドイツ語と系統の近いオランダ語では、反使役動詞が自動詞の形態を取ることが圧倒的に多く、ごくわずかな例にのみ再帰代名詞が出現するということがあった。さら

に、第4章と第6章で見たように、イタリア語、フランス語、スペイン語のようなロマンス系の言語では、RAとして実現される語彙が圧倒的に多いように思われる。例えば、スペイン語では、*romper* ‘cause to become broken’ のような動詞も反使役化され、*romperse* ‘become broken’ というRAが派生されることが、Koontz-Garboden (2009) の論考で示されていた。このように、反使役動詞の形態的実現に関して大きな差が言語間で確認されるのは、それぞれの言語の文法において再帰代名詞および再帰接辞が果たす機能の違いを反映しているように思われる。それでは、果たして、本論文で提案した再帰化の操作は、ドイツ語のみに有効であると考えられるべきであろうか。あるいは、他の言語のRAに対しても説得力を持つのであろうか。現時点においては、これに対する有効な回答を示すことができないが、今後、この問いに答えるべく、他言語の再帰の種類を調査し、その上でドイツ語の再帰動詞の意味を問い直すことが必要となるように思われる。

また、上記の論点とも関連するが、使役交替の実現のパターンには、本論文で取り上げた使役から反使役への派生（反使役化）以外にも、反使役から使役への派生（使役化）や、使役と反使役の双方向的派生も確認される。例えば、第6章で取り上げた日本語の使役交替もこの3つのパターンを示すとされている（奥津1967, 井上1976）。したがって、反使役というカテゴリーをより厳密に規定するためには、反使役化の派生だけでなく、他の派生のパターンも視野に入れ、使役交替の全体像を明らかにしなくてはならないだろう。³⁴

もうひとつ、未解決のまま残されているのは、本論文で提案した「対象物の本質的変化」という意味的な一般化が、独立した原理として確立されるのかという問いである。第5章において、この一般化がドイツ語のRAとIAの形態的実現を説明するのに相応しいことを示したが、同時に、第6章においては、RAとIAに異なる語彙意味表示を付与すべきであるという主張を行った。さらに、この意味表示から、RAとIAの間の語彙的アスペクトの相違が読み取れることにも言及した。したがって、「対象物の本質的変化」という意味的特徴は、語彙的アスペクトの意味から生じる含意である可能性

³⁴ 最近の類型論研究では、Nichols et al. (2004) が、世界の80の言語において基本的な18動詞の形態的な実現を調査し、派生の傾向を捉えようとしている。彼女らの調査では、この80の言語が4つの主要なタイプ (transitivizing, detransitivizing, neutral, indeterminate languages) に分類されることが報告されている。日本語はtransitivizing languageに分類されるが、このタイプに属する言語は多く、地理的な広がりも観察されるという。また、多くのインド・ヨーロッパ語族は、detransitivizing languageとして特徴づけられるが、このタイプに属する言語の数は、比較的限られているという。このような類型論的視点も、今後の研究を進めるうえで、大変興味深いものであると思われる。

も否定できない。

この点に関しては、本論文においては踏み込んだ議論をすることができなかったが、第5章で指摘した「対象物の本質的变化」の一般化が説得力を持たないと考えられるいくつかの例は、音放出動詞からの派生形や、完了の助動詞として *sein* ‘be’ と並んで *haben* ‘have’ を選択しうる動詞であることから、上記の一般化とアスペクトの意味との密接な関連が示唆されるように思われる。また、第6章で論じたように、ドイツ語反使役動詞のアスペクト解釈は、時制（現在時制、過去時制、完了時制）によっても変わりうる。したがって、今後は、ドイツ語のテンス・アスペクトの理論化を研究の課題とし、その取り組みのなかで反使役動詞を再分析することを目指していきたいと考えている。

参考文献

- Abraham, Werner (1986), Unaccusatives in German. In: *Groninger Arbeiten zur germanistischen Linguistik* 28. 1-72.
- Abraham, Werner (1987), Was hat sich in „Damit hat sich’s“? In: Center de recherche en linguistique germanistique Nice (ed.) *Das Passiv im Deutschen (Akten des Kolloquiums über das Passiv im Deutschen, Nizza 1986)*. 51-71. Tübingen: Niemeyer.
- Abraham, Werner (1994), Ergativa sind Perfektiva. In: *Zeitschrift für Sprachwissenschaft* 12. 157-184.
- Abraham, Werner (1995), Diathesis: the middle, particularly in West Germanic. What does Reflexivization have to do with Valency Reduction? In: Abraham, Werner / Givón, Talmy / Thompson, Sandra (eds.) *Discourse grammar and typology*. 1-48. Amsterdam: J. Benjamins.
- Adger, David (2004), *Core syntax. A minimalist approach*. Oxford: Oxford University Press.
- Ágel, Vilmos (1997), Reflexiv-Passiv, das (im Deutschen) keines ist. Überlegungen zu Reflexivität, Medialität, Passiv und Subjekt. In: Dürscheid, Christa / Ramers, Karl Heinz / Schwarz, Monika (hrsg.) *Sprache im Fokus. Festschrift für Heinz Vater zum 65. Geburtstag*. 147-187. Tübingen: Niemeyer.
- Alexiadou, Artemis / Anagnostopoulou, Elena / Everaert, Martin (eds.) (2004), *The Unaccusativity Puzzle. Explorations of the Syntax-Lexicon Interface*. (Oxford Studies in Theoretical Linguistics.) New York: Oxford University Press.
- Alexiadou, Artemis / Elena Anagnostopoulou (2004), Voice morphology in the causative-inchoative alternation: Evidence for a non-unified structural analysis of unaccusatives. In: Alexiadou, A. / Anagnostopoulou, E. / Everaert, M. (eds.) *The Unaccusativity Puzzle*. 114-136.
- Alexiadou, Artemis / Anagnostopoulou, Elena / Schäfer, Florian (2006), The Properties of anticausatives crosslinguistically. In: Frascarelli, Mara (ed.) *Phases of Interpretation*. (Studies in Generative Grammar 91.) Berlin: Mouton de Gruyter. 187-211.
- Alexiadou, Artemis (2010), On the morphosyntax of (anti-)causative verbs. In: Rappaport Hovav, M. / Doron, E. / Sichel, I. (eds.) *Syntax, Lexical Semantics and Event Structure*. (Oxford Studies in Theoretical Linguistics.) New York:

- Oxford University Press. 177-203.
- 青木葉子 (2005), 『ドイツ語における自動詞と再帰動詞の意味体系』東京大学大学院総合文化研究科修士論文.
- Aoki, Yoko (2005), Semantische Kontinuität der reflexiven Verben – anhand der kausativ-inchoativen Alternationen im Deutschen. In: ドイツ文法理論研究会 (編) *Energeia* 30. 13-34.
- Aoki, Yoko (2007), Kausativ-Inchoative Alternation und Transitivität im Deutschen. In: Japanische Gesellschaft für Germanistik (hrsg.) *Neue Beiträge zur Germanistik, Band 6 / Heft 3*. 101-116.
- Aoki, Yoko (2010), Reflexive Inchoativa im Deutschen und *ar*-Inchoativa im Japanischen – Das Antikausativ in lexikalisch-semantischer Hinsicht – In: Japanische Gesellschaft für Germanistik (hrsg.) *Neue Beiträge zur Germanistik, Band 9 / Heft 1*. 57-72.
- Aoki, Yoko (2011), Dekausativ und Anti-Kausativ im Deutschen und Japanischen – Eine lexikalisch-semantische Analyse von Kausativ-Inchoativ-Alternationen. In: Japanische Gesellschaft für Germanistik (hrsg.) *Mapping zwischen Syntax, Prosodie und Informationsstruktur – Akten des 37. Linguisten-Seminars, Kyoto 2009*. 121-133.
- Bierwisch, Manfred (1996), *Fragen zum Beispiel*. In: G. Harras & M. Bierwisch (hrsg.) *Wenn die Semantik arbeitet*. 361-378. Niemeyer.
- Bußmann, Hadumod (hrsg.) (2002), *Lexikon der Sprachwissenschaft*. Stuttgart: Alfred Kröner Verlag.
- Chierchia, Gennaro (1989), A semantics for unaccusatives and its syntactic consequences. Ms. Cornell University.
- Chierchia, Gennaro (2004), A semantics for unaccusatives and its syntactic consequences. In: Alexiadou, A. / Anagnostopoulou, E. / Everaert, M. (eds.) *The Unaccusativity Puzzle*. 22-59.
- Dowty, David R. (1979), *Word Meaning and Montague Grammar*. Dordrecht: Reidel.
- Dowty, David R. (1991), Thematic proto-roles and argument selection. In: *Language* 67. 547-619.
- Embick, David (2004), Unaccusative syntax and verbal alternations. In: Alexiadou, A. / Anagnostopoulou, E. / Everaert, M. (eds.) *The Unaccusativity Puzzle*. 137-158.
- Fagan, Sarah (1992), *The syntax and semantics of middle constructions: A study with special reference to German*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Folli, Raffaella (2002), *Constructing telicity in English and Italian*. Ph.D. dissertation. University of Oxford.
- Fujinawa, Yasuhiro (2008), Valenzalternation bei infinitiver Komplementation und damit vergleichbare Phänomene. In: *Posener Beiträge zur Germanistik. Band 18*. 101-116.
- Haider, Hubert (1985), Von *sein* oder nicht *sein*: Zur Grammatik des Pronomens *sich*. In: Abraham, Werner (hrsg.) *Erklärende Syntax des Deutschen*. 223-254. Tübingen: Narr.
- Härtl, Holden (2003), Conceptual and grammatical characteristics of argument alternations: the case of decausative verbs. In: *Linguistics 41*. 883-916.
- Haspelmath, Martin (1987), *Transitivity alternations of the anticausative type*. Institut für Sprachwissenschaft, Universität zu Köln (*Arbeitspapier Nr.5*).
- Haspelmath, Martin (1993), More on the typology of inchoative / causative verb alternations. In: Comrie, Bernard / Polinsky, Maria (eds.) *Causatives and Transitivity*. 87-120. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.
- Helbig, Gerhard (2004), Zum 'Reflexiv-Passiv' und zum 'Medio-Passiv' im Deutschen. In: *Deutsch als Fremdsprache 41 (1)*. 19-27.
- 井上和子 (1976), 『変形文法と日本語』大修館.
- Jacobsen, Wesley M. (1991), *The transitive structure of events in Japanese*. Kuroshio Publishers.
- 影山太郎 (1996), 『動詞意味論』くろしお出版.
- Kallulli, Dalina (2006), A unified analysis of passives, anticausatives and reflexives. In: Bonami, O. / Cabredo Hofherr, P. (eds.) *Empirical Issues in Syntax and Semantics 6*. 201-225.
- Kaufmann, Ingrid (2003), Reflexive Verben im Deutschen. In: Gunkel, Lutz / Müller, Gereon / Zifonun, Gisela (hrsg.) *Arbeiten zur Reflexivierung*. 135-155. Tübingen: Niemeyer.
- Kaufmann, Ingrid (2004), *Medium und Reflexiv – Eine Studie zur Verbsemantik*. Tübingen: Niemeyer.
- Kemmer, Suzanne (1993), *The Middle Voice*. Amsterdam: John Benjamins.
- Koontz-Garboden, Andrew (2009), Anticausativization. In: *Natural Language and Linguistic Theory 27*. 77-138.
- Kratzer, Angelika (1995), Stage-level and individual-level predicates. In: G. Carlson / F.J. Pelletier (eds.) *The generic book*. 125-175. Chicago IL: Chicago University Press.
- Labelle, Marie (1992), Change of state and valency. In: *Journal of Linguistics 28*.

- 375-414.
- Lakoff, George (1970), *Irregularities in syntax*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Levin, Beth (1993), *English Verb Classes and Alternations*. Chicago / London: University of Chicago Press.
- Levin, Beth / Rappaport Hovav, Malka (1995), *Unaccusativity: At the syntax-lexical semantics interface*. MIT Press.
- Löbner, Sebastian (2003), *Semantik. Eine Einführung*. Berlin: Walter de Gruyter.
- Matsumoto, Yo (2000), Causative alternation in English and Japanese: A closer look. In: *English Linguistics 17*. 160-192.
- McIntyre, Andrew (2006), The interpretation of German datives and English *have*. In: D. Hole / A. Meinunger / W. Abraham (eds.) *Datives and other cases*. 185-211. Amsterdam: John Benjamins.
- Nedjalkov, Vladimir P. / G. G. Sil'nickij (1969), Tipologija morfoložičeskogo I leksičeskogo kauzativov. In: A. A. Xolodovič (ed) *Tipologija kauzativnyx konstrukcij. Morfoložičeskij kauzativ*. Leningrad: Nauka. (English translation: Nedyalkov, Vladimir P. / G. G. Silnitsky (1973), The typology of morphological and lexical causatives. In: F. Kiefer (ed.) *Trends in Soviet theoretical linguistics*. 1-32. Dordrecht: Reidel.)
- Nichols, Johanna / Peterson, David A. / Barnes Jonathan (2004), Transitivity and detransitivizing languages. In: *Linguistic typology 8*. 149-211.
- 西尾寅弥 (1954), 「動詞の派生について - 自他交替の型による」 In: 須賀一好 / 早津恵美子 (編) (1995), 『動詞の自他』 41-56. ひつじ書房.
- Ogawa, Akio (1997), Reflexivierung im Deutschen und Verbsuffigierung im Japanischen. In: Dürscheid, Christa / Ramers, Karl Heinz / Schwarz, Monika (hrsg.) *Sprache im Fokus. Festschrift für Heinz Vater zum 65. Geburtstag*. 291-305. Tübingen: Niemeyer.
- 奥津敬一郎 (1967), 「自動化・他動化および両極化転形」 In: 須賀一好 / 早津恵美子 (編) (1995), 『動詞の自他』 57-81. ひつじ書房.
- 大矢俊明 (1997), 「ドイツ語における使役交替の非対格性」 In: 筑波大学現代言語学研究会 (編) 『ヴォイスに関する比較言語学的研究』 67-95. 三修社.
- 大矢俊明 (2008), 『ドイツ語再帰構文の対照言語学的研究』 ひつじ書房.
- Perlmutter, David M. (1978), Impersonal passives and the Unaccusative Hypothesis. In: *Proceedings of the 4th Annual Meeting of the Berkley*

- Linguistics Society*. 157-189. UC Berkeley.
- Pylkkänen, Liina (2008), *Introducing arguments*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Rappaport Hovav, Malka / Levin, Beth (2011), Lexicon uniformity and the causative alternation. Ms.
- Reinhart, Tanya (2002), The theta system – An overview. In: *Theoretical Linguistics* 28. 229-290.
- Reinhart, Tanya / Siloni, Tal (2004), Against the unaccusative analysis of reflexives. In: Alexiadou, A. / Anagnostopoulou, E. / Everaert, M. (eds.) *The Unaccusativity Puzzle*. 159-180.
- Schäfer, Florian (2007), Middles as voiced anticausatives. In: *Proceedings of NELS 37*.
- Schäfer, Florian (2008), *The Syntax of (Anti-)Causatives – External Arguments in Change-of-state Contexts*. (Linguistik Aktuell / Linguistics today 126.) Amsterdam: John Benjamins.
- Smith, Carlota (1970), Jespersen's 'Move and Change' class and causative verbs in English. In: M. A. Jazayery / E. C. Polomé / W. Winter (eds.) *Linguistic and literary studies in honor of Archibald A. Hill. Vol.2: Descriptive linguistics*. 101-109. The Hague: Mouton de Gruyter.
- Steinbach, Markus (2002), *Middle Voice: A comparative study in the syntax-semantics interface of German*. Amsterdam: John Benjamins.
- Steinbach, Markus (2004), Unaccusatives and anticausatives in German. In: Alexiadou, A. / Anagnostopoulou, E. / Everaert, M. (eds.) *The Unaccusativity Puzzle*. 181-206.
- 須賀一好 (2000), 「日本語動詞の自他対応における意味と形態の相関」 In: 丸田忠雄 / 須賀一好 (編) 『日英語の自他の交替』 111-131. ひつじ書房.
- 杉岡洋子 (2002), 「形容詞から派生する動詞の自他交替をめぐって」 In: 伊藤たかね (編) 『シリーズ言語科学 - 1 文法理論: レキシコンと統語』 91-116. 東京大学出版会.
- 寺村秀夫 (1982), 『日本語のシンタクスと意味 I』 くろしお出版.
- Van Valin, Robert D. (1990), Semantic parameters of split intransitivity. In: *Language* 66.
- Van Valin, Robert D. / Wilkins, D. P. (1996), The case for 'effector': Case roles, agents and agency revised. In: M. Shibatani / S. A. Thompson (eds.) *Grammatical constructions*. 174-189. Oxford: Oxford University Press.
- Vendler, Zeno (1967), *Linguistics in Philosophy*, Ithaca, New York: Cornell University Press.

- Welke, Klaus (1997), Eine funktionalgrammatische Betrachtung zum Reflexivum: Das Reflexivum als Metapher. In: *Deutsche Sprache* 25. 209-231.
- Wunderlich, Dieter (1993), Diathesen. In: J. Jacobs, A. von Stechow, W. Sternefeld & T. Vennemann (hrsg.) *Syntax: Ein internationales Handbuch zeitgenössischer Forschung, 1. Halbhand.* 730-747. de Gruyter.
- Wunderlich, Dieter (1997), Cause and the structure of verbs. In: *Linguistic Inquiry* 28. 27-68.

巻末資料: ドイツ語反使役動詞リスト

第5章 5.1節で、ドイツ語反使役動詞 (IA および RA) を意味的に下位分類したが、この分類に従って、以下に個々の動詞の意味と具体例をすべて記載する。その際に用いたのは、Duden の *Deutsches Universalwörterbuch* である。動詞の意味的下位分類に振られている数字 (例: (1a) 破壊) は、第5章 5.1節に示した数字と対応している。

1. IA

(1a) 破壊 (19 例)

abbrechen ‘break off’

- a. sich brechend lösen, durch einen Bruch entzweigen
- b. der Henkel, das Stuhlbein brach ab; der Absatz ist [mir] abgebrochen; der Bleistift (die Spitze des Bleistifts) ist abgebrochen

ausreißen ‘tear out’

- a. sich aus etw. gewaltsam lösen, von etw. abreißen
- b. der Ärmel, Henkel ist ausgerissen

brechen ‘break’

- a. (von etw. Hartem, Sprödem) durch Druck, durch Anwendung von Gewalt in [zwei] Stücke zerfallen, durchbrechen
- b. die Äste brachen unter der Schneelast; das Leder beginnt zu b. (wird rissig); die Feder ist gebrochen

durchbrechen ‘break in the middle’

- a. in zwei Teile brechen
- b. das Brett ist [in der Mitte] durchgebrochen

durchreißen ‘tear in half’

- a. durch Reißen geteilt werden
- b. der Faden ist durchgerissen

einknicken ‘snap’

- a. einen Knick bekommen; mit einem Knick zusammensinken
- b. die Halme sind im Wind eingeknickt

einreißen ‘break down’

- a. einen Riss bekommen; brüchig werden
- b. der Stoff reißt überall ein

einstürzen ‘collapse’

- a. zusammenstürzen, in sich zusammenbrechen
- b. das Haus ist eingestürzt

entzweibrechen ‘shatter’

- a. auseinanderbrechend entzweigen
- b. das Porzellan brach entzwei

losbrechen ‘break off’

- a. sich plötzlich von etw. lösen; abbrechen

niederbrechen ‘break down’

- a. einstürzen, herunterbrechen
- b. das Dach ist niedergebrochen

reißen ‘tear’

- a. entzwei-, auseinandergehen, abreißen
- b. der Faden, das Seil kann r.; mir ist das Schuhband gerissen

umbrechen ‘break down’

- a. herunterbrechen, um-, niederfallen
- b. die Baumkronen sind unter der Schneelast umgebrochen

umknicken ‘snap’

- a. zur Seite knicken
- b. das Streichholz ist beim Anreißen umgeknickt

zerbrechen ‘break into pieces’

- a. [splitternd] entzweigen, entzweibrechen
- b. der Teller fiel auf die Erde und zerbrach; das Bündnis, die Freundschaft ist endgültig zerbrochen; sie ist an ihrem Kummer zerbrochen (geh.; ist daran seelisch zugrunde gegangen)

zerbröckeln ‘crumble’

- a. sich in kleine Stückchen, Bröckchen auflösen, bröckelnd zerfallen
- b. die Mauer, das Gestein ist nach und nach zerbröckelt; das Reich zerbröckelte (fiel auseinander)

zerkrümeln ‘crumble’

- a. in Krumen, Krümel zerfallen
- b. das Gebäck ist beim Versand zerkrümelt

zerreißen ‘tear apart’

- a. (einem Zug od. Druck nicht standhaltend) mit einem Ruck (in [zwei] Teile) auseinandergehen
- b. der Faden, das Seil zerriss [in zwei Stücke]

zersplittern 'shatter'

- a. (durch einen Hieb, Stoß, Sturz o. Ä.) in Splitter zerfallen; sich in Splitter auflösen
- b. bei dem Aufprall zersplitterte die Windschutzscheibe

(1b) その他の瞬間的状态変化 (6例)

ersticken 'suffocate',

- a. durch Mangel an Luft, Sauerstoff sterben
- b. sie wäre fast an dem Bissen erstickt

umschlagen 'capsize'

- a. (in seiner ganzen Länge od. Breite) plötzlich auf die Seite schlagen, umkippen, umstürzen
- b. das Boot, der Kran ist plötzlich umgeschlagen

umstürzen 'overturn'

- a. zu Boden, zur Seite stürzen
- b. der Kran, die Mauer ist umgestürzt

verstopfen 'choke up'

- a. undurchlässig, unpassierbar werden
- b. wirf den Abfall nicht in die Toilette, sie verstopft sonst

zuklappen 'close with a snap'

- a. sich mit klappendem Geräusch schließen
- b. der Deckel ist zugeklappt

zuknallen 'slam shut'

- a. geräuschvoll ins Schloss fallen; sich schließen
- b. bei dem Luftzug knallte das Fenster zu

(2a) 乾燥 (5例)

ausdörren 'dry up'

- a. [durch anhaltende Hitze, Wärmezufuhr] völlig trocken werden
- b. Wiesen und Felder sind ausgedörnt

austrocknen 'desiccate'

- a. völlig trocken werden
- b. der Fluss, das Brot, die Haut trocknet aus

dörren 'dehydrate'

- a. dürr, trocken werden, dorren
- b. der Stockfisch dörnt an der Luft

trocknen 'dry'

- a. trocken werden, nach u. nach seine Feuchtigkeit, Nässe verlieren <ist/(auch:) hat>
- b. die Wäsche trocknet an der Luft, auf der Leine, im Wind; die aufgehängten Netze sind schon/haben schon getrocknet

verbrennen 'sear'

- a. unter der sengenden Sonne verdorren, völlig ausdorren
- b. die Vegetation, das Land ist von der glühenden Hitze völlig verbrannt

(2b) 焼失、炭化 (6例)

ausbrennen 'burn out'

- a. im Innern durch Feuer völlig zerstört werden
- b. die Wohnung, das Gebäude, das Schiff brannte völlig aus

niederbrennen 'burn down'

- a. herunterbrennen
- b. die Kerze ist niedergebrannt

verbrennen 'burn' [1]

- a. vom Feuer verzehrt, durch Feuer vernichtet, zerstört werden
- b. die Dokumente sind [zu Asche] verbrannt; die Passagiere verbrannten in den Flammen (kamen in den Flammen um)

verbrennen 'burn' [2]

- a. durch zu starke Hitzeeinwirkung verderben, unbrauchbar, ungenießbar werden; verkohlen
- b. der Kuchen ist [im Ofen] verbrannt

verkochen 'boil to a pulp'

- a. zu einer breiartigen Masse kochen
- b. die Äpfel sind [zu Mus] verkocht; das Gemüse, das Fleisch ist total verkocht

verkohlen 'char'

- a. durch Verbrennen zu einer kohleähnlichen Substanz werden
- b. das Holz ist verkohlt; die Opfer des Unfalls waren bis zur Unkenntlichkeit verkohlt

zerkochen 'cook to a pulp'

- a. durch zu langes Kochen ganz zerfallen, breiig werden
- b. das Gemüse zerkocht auf dem Herd; die Kartoffeln waren total, zu Brei zerkocht

(2c) 解凍、融合 (4 例)

schmelzen 'melt'

- a. unter dem Einfluss von Wärme flüssig werden, zergehen
- b. der Schnee ist [in/an der Sonne] geschmolzen

tauen 'thaw'

- a. (von Gefrorenem) durch den Einfluss von Wärme schmelzen, weich werden
- b. der Schnee ist [von den Dächern] getaut

verschmelzen 'merge'

- a. durch Schmelzen u. Zusammenfließen zu einer Einheit werden
- b. Wachs und Honig verschmelzen [miteinander]; die beiden Parteien verschmolzen 1922; Musik und Bewegung verschmolzen zu einem Ganzen.

zerschmelzen 'melt'

- a. vollständig schmelzen
- b. die Schokolade zerschmilzt

(2d) 凍結 (1 例)

einfrieren 'freeze' [1]

- a. durch Frosteinwirkung unbenutzbar, unbrauchbar werden
- b. die Wasserleitung ist eingefroren

einfrieren 'freeze' [2]

- a. festfrieren, zu Eis werden
- b. das Wasser in der Leitung friert ein

(2e) 蒸発 (3 例)

verdampfen 'vaporize'

- a. von einem flüssigen in einen gasförmigen Aggregatzustand übergehen; sich (bei Siedetemperatur) in Dampf verwandeln
- b. das Wasser ist verdampft

verdunsten 'evaporate'

- a. allmählich in einen gasförmigen Aggregatzustand, bes. von Wasser in Wasserdampf, übergehen
- b. das Wasser im Topf ist fast völlig verdunstet

verkochen 'boil away'

- a. [zu lange] kochen u. dabei verdampfen
- b. das ganze Wasser ist verkocht

(2f) 他の物体、物質への変化 (5 例)

denaturieren 'denature'

- a. sich (in seiner Struktur) verändern, wandeln; ausflocken

gelatinieren 'gelatinize'

- a. zu Gelatine erstarren
- b. die Lösung ist [zum Gel] gelatiniert

sintern 'sinter'

- a. (Technik) durch Einwirkung von Hitze [u. Druck] oberflächlich schmelzen, zusammen- wachsen u. sich verfestigen
- b. das Erz sintert und bildet Blöcke

verbrennen 'burn'

- a. (Chemie) von bestimmten Stoffen chemisch umgesetzt werden, sich umwandeln
- b. Kohlehydrate verbrennen im Körper zu Kohlensäure und Wasser

versteinern 'fossilize'

- a. (Paläont.) (von Organismen) zu Stein werden
- b. Die Pflanzen sind versteinert

(2g) 腐敗、発酵、カビ (4 例)

beschlagen 'mold'

- a. anfangen, Schimmel anzusetzen; einen Pilzbelag bekommen
- b. die Wurst ist schon etwas beschlagen

säuern 'sour'

- a. durch Gärung sauer werden <ist/hat>
- b. der Kohl säuert schon

umschlagen 'turn sour'

- a. sich plötzlich, unvermittelt verkehren, stark ändern
- b. der Wein ist umgeschlagen (ist trüb geworden u. hat einen schlechten Geruch u. Geschmack angenommen)

verderben 'decay'

- a. (bes. von Lebensmitteln) durch längeres Aufbewahrtwerden schlecht, unbrauchbar werden
- b. das Fleisch, die Wurst ist verdorben; ohne ein Konservierungsmittel würde die Hautcreme viel zu schnell v.

(2h) 治癒 (2 例)

ausheilen 'heal up'

- a. (von Krankheiten) in einem Heilungsprozess wieder verschwinden
- b. ihre Tuberkulose ist vollständig ausgeheilt

heilen 'heal'

- a. gesund werden
- b. die Wunde heilt [schnell, komplikationslos, ohne Narbenbildung]; der Muskelriss ist geheilt

(2i) 衰弱、疲労、痴呆、病的变化 (5 例)

ermüden 'fatigue'

- a. müde, matt, schläfrig werden
- b. die Augen ermüden beim Autofahren zuerst; der Boden war ermüdet

erschlaffen 'slacken',

- a. schlaff, kraftlos, matt werden
- b. seine Arme erschlafften; die Truppe ist moralisch erschlaft

verdummen 'become stultified'

- a. geistig stumpf werden
- b. bei dieser Tätigkeit verdummt man allmählich

verkrüppeln 'cripple'

- a. krüppelig werden
- b. die Bäume verkrüppeln und sterben ab

verweichlichen 'render effeminate'

- a. seine körperliche Widerstandskraft verlieren
- b. durch seine Lebensweise verweichlicht er immer mehr

(2j) 軟化、硬化 (2 例)

erhärten 'harden'

- a. hart werden
- b. Beton erhärtet an der Luft

erweichen 'soften'

- a. weich werden
- b. der Asphalt ist in der Sonne erweicht

(2k) 汚染 (2 例)

verdrecken 'get dirty'

- a. verschmutzen
- b. das Haus verdreckt immer mehr

verrußen 'soot'

- a. rußig werden, von Ruß bedeckt, durch Ruß verstopft o. Ä. Werden
- b. der Bahnhof war von Kohlenstaub verrußt

(2l) 粗暴化、墮落 (2 例)

pervertieren 'pervert'

- a. sich in etw. Negatives verkehren, verfälscht werden
- b. das politische System pervertierte zur Diktatur

verrohen 'brutalize'

- a. roh, brutal werden
- b. ihre Empfindungen waren verroht

(2m) 磨滅 (3 例)

zerfasern 'fray out'

- a. sich in einzelne Fasern auflösen; ausfransen
- b. der Stoff, das Papier ist an den Rändern zerfasert

zerfransen 'fray'

- a. völlig ausfransen
- b. die Decke zerfranst immer mehr.

zerschleifen 'wear out'

- a. verschleifen
- b. bei dem Jungen zerschleifen die Hosen immer sehr schnell

(2n) 濃縮 (1 例)

eindicken 'condense'

- a. dick[er], zähflüssig werden
- b. die Farbe ist [allmählich] eingedickt; eingedickter Sirup

(2o) 熟成 (1 例)

reifen 'ripen'

- a. reif werden
- b. das Obst, Getreide reift dieses Jahr später; die Tomaten reifen an der, ohne Sonne

2. RA

(3a) 大きさ、長さ、高さ、深さ、広がり、距離 (14 例)

ausdehnen 'expand' [1]

- a. an Umfang, Volumen zunehmen
- b. Metall, Wasser, Gas dehnt sich bei Erwärmung aus

ausdehnen 'expand' [2]

- a. sich ausbreiten, verbreiten; räumliche Ausdehnung gewinnen
- b. das Schlechtwettergebiet dehnt sich [rasch über das Land] aus

ausweiten 'expand' [1]

- a. ein wenig zu weit werden, sich zu sehr dehnen
- b. das Gummiband weitet sich schnell aus

ausweiten 'expand' [2]

- a. sich erweitern; größer, umfangreicher werden
- b. die Unruhen drohten sich zu einer Revolution auszuweiten

dehnen 'expand'

- a. unter Zug länger, breiter werden
- b. der Stoff dehnt sich

erweitern 'extend'

- a. weiter, größer werden
- b. der Tunnel erweitert sich zum Ausgang hin; die Pupillen, die Gefäße erweitern sich

längen 'lengthen'

- a. länger werden
- b. das Gummiband hat sich gelängt

nähern 'near'

- a. sich näher auf jmdn., etw. zubewegen; näher herankommen
- b. Schritte näherten sich; die Temperatur nähert sich dem Gefrierpunkt

verbreiten 'spread'

- a. sich ausbreiten, in Umlauf kommen u. vielen bekannt werden
- b. die Nachricht verbreitete sich schnell, wie ein Lauffeuer, in der ganzen Stadt

verengen 'narrow'

- a. enger werden
- b. seine Pupillen verengten sich (zogen sich zusammen, wurden kleiner)

vergrößern 'enlarge'

- a. mengen-, zahlen- od. gradmäßig größer werden, zunehmen
- b. die Zahl der Mitarbeiter hat sich vergrößert; damit vergrößert sich die Wahrscheinlichkeit, dass sie geht

verkleinern 'make / get smaller'

- a. an Ausdehnung, Umfang kleiner werden
- b. die Stellfläche hat sich verkleinert

verkürzen 'shorten'

- a. kürzer werden
- b. die Schatten hatten sich verkürzt

verlängern 'lengthen'

- a. länger werden
- b. die Kolonne verlängerte sich

vertiefen 'deepen'

- a. tiefer werden
- b. die Falten im Gesicht haben sich vertieft; die Kluft zwischen ihnen vertiefte sich immer mehr

weiten 'widen'

- a. weiter werden, sich dehnen
- b. die Schuhe weiten sich noch; die Pupillen weiten sich im Dunkeln

(3b) 数量、速度、値の増減 (25 例)

abbauen 'reduce'

- a. allmählich verschwinden, sich auflösen
- b. die Vorurteile bauen sich immer stärker ab

beschleunigen 'accelerate'

- a. schneller werden
- b. durch die Aufregung beschleunigt sich der Puls

entwerten 'devalue'

- a. (selten) an Wert verlieren
- b. das Geld entwertete sich.

erhöhen 'increase'

- a. wachsen, steigen; stärker werden
- b. die Kosten erhöhen sich ständig; die Zahl der Opfer hat sich auf 34 erhöht

ermäßigen 'abate'

- a. niedriger, geringer werden
- b. mit der Sammelkarte ermäßigt sich der Fahrpreis um 10 %

häufen 'accumulate'

- a. bedeutend zunehmen; zahlreicher, mehr werden
- b. die Abfälle, die Geschenke häufen sich; die Beweise häufen sich

heben 'lift'

- a. in seiner Wirkung, Entfaltung gefördert, begünstigt werden; sich steigern, verbessern
- b. der Handel hat sich in letzter Zeit sehr gehoben; seine Stimmung hob sich zusehends

kumulieren 'cumulate'

- a. (bildungsspr., Fachspr.) anhäufen; ansammeln [u. steigern, verstärken]
- b. mit der Zeit können sich diese Schadstoffe im menschlichen Körper k.

mehren 'increase'

- a. [immer] mehr, zahlreicher werden
- b. die Klagen mehrten sich; die Unruhen mehrten sich

mindern 'lessen'

- a. [immer] weniger werden; sich verringern
- b. die Anziehungskraft der Organisation mindert sich mit der Zeit

reduzieren 'reduce'

- a. sich abschwächen; schwächer, geringer werden, (in Wert, Ausmaß od. Zahl) zurückgehen
- b. die Zahl der Unfälle hat sich reduziert

steigern 'increase'

- a. zunehmen, stärker werden, sich intensivieren
- b. die Erregung steigerte sich; seine Leistungen haben sich gesteigert (verbessert); die Schmerzen steigerten (verschlimmerten) sich mehr und mehr

summieren 'mount up'

- a. mit der Zeit immer mehr werden, anwachsen, indem etw. zu etw. Vorhandenem hinzukommt, u. sich dabei in bestimmter Weise auswirken
- b. die Ausgaben summieren sich

verdoppeln 'double'

- a. doppelt so groß werden
- b. der Wasserverbrauch, die Geburtenrate hat sich verdoppelt

verdreifachen 'triple'

- a. dreimal so groß werden
- b. der Verbrauch hat sich verdreifacht

verhundertfachen 'increase a hundredfold'

- a. hundertmal so groß werden
- b. der Umsatz hat sich verhundertfacht

verkleinern 'reduce'

- a. mengen-, zahlen-, gradmäßig kleiner werden, sich vermindern, verringern
- b. sein Vermögen verkleinert sich; ihr Freundeskreis hat sich verkleinert

verknappen 'run short'

- a. knapp werden
- b. die Ressourcen verknappen sich immer weiter; wegen der schlechten Weizenernte verknappt sich das Angebot [an Nudeln]

verlangsamen 'decelerate'

- a. langsam[er] werden
- b. das Tempo, das Wachstum, die Entwicklung verlangsamt sich

vermehrten 'increase'

- a. an Menge, Anzahl, Gewicht, Ausdehnung, Intensitätsgrad o. Ä. größer werden
- b. die Zahl der Unfälle vermehrt sich jedes Jahr

vermindern 'lessen'

- a. sich verringern
- b. ihr Einfluss vermindert sich

verringern 'decrease'

- a. kleiner, geringer werden
- b. die Kosten, die Aussichten auf Besserung haben sich verringert

verteuern 'increase in price'

- a. teurer werden
- b. die Lebensmittel haben sich [weiter, um durchschnittlich 3 %] verteuert; das Leben verteuert sich.

vervielfachen 'multiply'

- a. sich um ein Vielfaches vermehren, vergrößern; stark zunehmen
- b. die Zahl der Bewerberinnen hat sich vervielfacht

vervielfältigen 'multiply'

- a. sich vermehren, zahlenmäßig vergrößern; zunehmen
- b. die Anforderungen hatten sich vervielfältigt

(3c) 温度 (2 例)

erhitzen 'heat'

- a. heiß werden
- b. das Öl hat sich erhitzt

erwärmen 'warm up'

- a. warm werden
- b. die Luft, die See erwärmt sich langsam

(3d) 強度、濃度、密度 (11 例)

bestärken 'strengthen'

- a. intensiver, stärker werden
- b. die Gewissheit bestärkte sich in ihm, dass ...; in mir bestärkte sich der Vorsatz, bald zu fliehen

festigen 'consolidate'

- a. fester, stärker werden; sich stabilisieren
- b. jmds. Gesundheit festigt sich wieder; die Beziehungen zwischen den beiden Ländern haben sich gefestigt

intensivieren 'intensify'

- a. intensiver werden, sich verstärken
- b. das Gefühl hat sich sogar noch intensiviert

lichten 'thin out'

- a. weniger dicht werden
- b. der Wald lichtet sich

konsolidieren 'consolidate'

- a. sich in seinem Bestand festigen
- b. die Wirtschaft hat sich konsolidiert

potenzieren 'potentiate'

- a. stärker werden, sich erhöhen, sich steigern
- b. dadurch potenziert sich die Wirkung der Droge

stabilisieren 'stabilize'

- a. stabil, beständig, sicher werden
- b. die Beziehungen zu den Alliierten stabilisierten sich

verdichten 'condense'

- a. zunehmend dichter werden
- b. der Nebel, die Dunkelheit verdichtet sich; ein Verdacht, ein Eindruck, ein Gerücht verdichtet (verstärkt, konkretisiert) sich [zur Gewissheit]

verfestigen ‘solidify’

- a. fester werden
- b. der Lack hatte sich verfestigt; diese Eindrücke verfestigen sich

verstärken ‘strengthen’

- a. stärker, intensiver werden
- b. der Lärm, der Sturm hat sich verstärkt; ihr Einfluss verstärkt sich; meine Zweifel, die Schmerzen haben sich erheblich verstärkt

vertiefen ‘intensify’

- a. stärker, intensiver werden
- b. sein Hass vertieft sich; die Spannungen vertieften sich

(3e) 緊張、弛緩 (5 例)

beruhigen ‘calm down’

- a. ruhig werden, sich besänftigen, zur Ruhe kommen
- b. die politische Lage beruhigt (entspannt) sich

entspannen ‘relax’ [1]

- a. von einer Anspannung frei werden, sich glätten
- b. ihr Gesicht entspannte sich; seine Züge entspannten sich

entspannen ‘relax’ [2]

- a. die gefährliche, unangenehme Spannung verlieren, sich beruhigen
- b. die Lage hat sich weitgehend entspannt

glätten ‘smooth down’

- a. glatt werden
- b. nach dem Sturm beginnt das Meer sich zu g.; ihre Stirn glättete sich wieder; die Wogen der Erregung haben sich geglättet

lockern ‘loosen

- a. in seiner Anspannung, seinem Druck o. Ä. nachlassen
- b. die Starrheit ihrer Glieder, der Druck ihrer Finger, ihr Griff lockerte sich

mildern ‘abate’

- a. maßvoller werden; geringer werden
- b. ihr Zorn milderte sich

(3f) 明度、色 (8 例)

entfärben ‘decolorize’

- a. die Farbe verlieren
- b. das Laub hat sich entfärbt; sein Gesicht entfärbte sich (wurde blass)

erhellen 'brighten'

- a. hell werden, sich aufheitern
- b. der Himmel erhellt sich; sein Gesicht erhellte sich (wurde heiter)

erleuchten 'light'

- a. zu leuchten beginnen; hell werden
- b. Paris erleuchtete sich; ihr Gesicht erleuchtete sich von innen

röten 'redden'

- a. rot werden, eine rote Färbung annehmen
- b. das Wasser rötete sich vom Blut des harpunierten Fisches; der Himmel rötete sich; ihre Haut begann sich zu r.

verdunkeln 'darken'

- a. (durch etw. Bedeckendes) zunehmend dunkler, dunkel, finster werden
- b. der Himmel verdunkelte sich; ihre Mienen, ihre Gesichter verdunkelten sich

verdüstern 'dim'

- a. düster werden; sich verdunkeln
- b. der Himmel verdüsterte sich; (geh. :) seine Miene, sein Gesicht hat sich verdüstert

verfärben 'change color'

- a. eine andere Farbe annehmen
- b. im Herbst verfärbt sich das Laub; die Wäsche hat sich verfärbt; sein Gesicht verfärbte sich vor Ärger

verfinstern 'darken'

- a. finster werden
- b. der Himmel hatte sich verfinstert; ihr Gesicht verfinsterte sich

(3g) 時間、期日の延長 (7例)

ausdehnen 'extend'

- a. (sehr lange) dauern
- b. die Besprechung, Sitzung dehnte sich bis nach Mitternacht, über viele Stunden, über Gebühr lange aus

dehnen 'extend'

- a. sich in die Länge ziehen; dauern
- b. das Gespräch dehnte sich

hinausziehen 'draw out'

- a. sich in die Länge ziehen
- b. der Prozess zieht sich hinaus

verlängern 'extend'

- a. länger gültig bleiben als eigentlich vorgesehen
- b. der Vertrag verlängert sich automatisch um ein Jahr

verschieben 'delay'

- a. auf einen späteren Zeitpunkt verlegt werden, zu einem späteren Zeitpunkt stattfinden
- b. die Abreise hat sich verschoben; der Beginn der Vorstellung verschiebt sich um einige Minuten

vertagen 'adjourn'

- a. eine Sitzung o. Ä. ergebnislos abbrechen u. eine weitere Sitzung zu einem späteren Zeitpunkt ansetzen
- b. das Gericht vertagte sich [auf nächsten Freitag]

verzögern 'delay'

- a. später eintreten, geschehen als erwartet od. vorgesehen
- b. die Fertigstellung des Manuskriptes verzögerte sich; seine Ankunft hat sich [um zwei Stunden] verzögert

(3h) 性質 (18 例)

beleben 'vitalize' [1]

- a. lebhafter werden; Schwung bekommen
- b. sein Gesicht belebt sich, seine Augen beleben sich; der Markt, die Konjunktur belebt sich

beleben 'vitalize' [2]

- a. lebendig werden, mit Leben erfüllt werden
- b. im Frühling, wenn sich die Natur [wieder] belebt

bereinigen 'clean up'

- a. sich klären, in Ordnung kommen
- b. manche Missverständnisse bereinigen sich von selbst

bessern 'better'

- a. besser werden
- b. das Wetter bessert sich; seine Gesundheit hat gebessert; ihr Zustand besserte sich zusehends

erneuern 'renew'

- a. [von innen heraus] neu werden, neue Kraft gewinnen
- b. Körperzellen erneuern sich immer wieder

klären 'clear up'

- a. klar werden
- b. das Wasser klärt sich

komplizieren 'complicate'

- a. kompliziert werden, sich schwierig gestalten
- b. die politische Lage kompliziert sich immer mehr

normalisieren 'normalize'

- a. wieder normal werden; wieder in einen allgemein üblichen Zustand zurückkehren
- b. die Verhältnisse in der Stadt haben sich normalisiert

optimieren 'optimize'

- a. sich optimal gestalten
- b. die Kosten haben sich optimiert

sanieren 'clean up'

- a. seine finanziellen, wirtschaftlichen Schwierigkeiten überwinden, wieder rentabel werden
- b. die Firma, der Bauunternehmer hat sich [durch Verkäufe] weitgehend saniert

verbessern 'improve'

- a. besser werden
- b. die Verhältnisse haben sich entscheidend verbessert

verfeinern 'refine'

- a. besser, exakter werden
- b. die Sitten, Umgangsformen verfeinern sich

verklären 'idealize'

- a. schöner, besser erscheinen
- b. die Vergangenheit verklärt sich in der Erinnerung

verschärfen 'intensify'

- a. schärfer, heftiger, größer, stärker werden; sich steigern, verstärken
- b. die politischen Spannungen verschärfen sich immer mehr; die Lage hat sich verschärft (ist schwieriger geworden, hat sich zugespitzt)

verschlechtern 'worsen'

- a. [noch] schlechter werden
- b. die Lage, das Klima, ihr Gesundheitszustand hat sich plötzlich verschlechtert

verschlimmern 'worsen'

- a. [noch] schlimmer werden
- b. ihr Zustand, das Übel, meine Lage verschlimmerte sich

verstetigen ‘stabilize’

- a. stetig werden
- b. das wirtschaftliche Wachstum hat sich verstetigt

vervollständigen ‘complete’

- a. vollständig[er] werden
- b. die Bibliothek hat sich vervollständigt

zuspitzen ‘intensify’

- a. ernster, schlimmer, schwieriger werden, sich verschärfen
- b. die Krise spitzt sich [bedrohlich, gefährlich] zu

(3i) 伝染、伝播、発展 (7 例)

entfalten ‘develop’

- a. sich [voll] entwickeln
- b. sein Talent kann sich hier nicht voll e.

entwickeln ‘develop’

- a. allmählich unter bestimmten Bedingungen zu etw. anderem, Neuem werden
- b. Japan hat sich zu einer Industriemacht entwickelt

mitteilen ‘transfer’

- a. sich auf jmdn., etw. übertragen
- b. die Stimmung teilte sich uns allen mit

übertragen ‘transfer’ [1]

- a. jmdn. befallen
- b. die Krankheit überträgt sich nur auf anfällige Personen

übertragen ‘transfer’ [2]

- a. auf jmdn. einwirken u. ihn dadurch in der gleichen Weise beeinflussen
- b. ihre Nervosität, Stimmung übertrug sich auf die Kinder

umkehren ‘go into reverse’

- a. sich ins Gegenteil verkehren
- b. die Entwicklung, die Tendenz, der Trend hat sich umgekehrt

vererben ‘inherit’

- a. (von Eigenschaften, Anlagen o. Ä.) sich auf die Nachkommen übertragen
- b. diese Krankheit hat sich [vom Vater auf den Sohn] vererbt

weiterentwickeln ‘develop further’

- a. sich fortentwickeln
- b. das Spezialgebiet hat sich zu einer eigenständigen Disziplin weiterentwickelt

(3j) 構造化 (6 例)

formieren 'form' [1]

- a. sich in einer bestimmten Ordnung aufstellen; sich ordnen
- b. der Festzug formierte sich

formieren 'form' [2]

- a. sich zusammenschließen; sich nach einem bestimmten Plan organisieren
- b. neue Verbände formierten sich

gliedern 'structure'

- a. in verschiedene, unterscheidbare, aber zusammenhängende Teile untergliedert sein
- b. die Lehre von der Politik gliedert sich in drei Gebiete; mein Referat gliedert sich wie folgt: ...

organisieren 'organize'

- a. zu systematischem Aufbau gelangen
- b. der Widerstand organisiert sich

regeln 'adjust'

- a. nach bestimmten Regeln in einer bestimmten Ordnung vor sich gehen; geordnet ablaufen
- b. das Zusammenwirken regelt sich exakt nach Plan; die Sache hat sich [von selbst] geregelt (ist geklärt, hat sich erledigt)

reimen 'rhyme'

- a. einen Reim bilden
- b. die beiden Wörter reimen sich; »Hut« reimt sich auf »Mut«

strukturieren 'structure'

- a. sich gliedern, mit einer bestimmten Struktur versehen sein
- b. die Gesellschaft strukturiert sich durch solche Gruppen

(3k) 出現、成就 (13 例)

ausdrücken 'express'

- a. in etw. sichtbar, offenbar werden, in Erscheinung treten
- b. in ihren Worten drückte sich ihre Dankbarkeit, ihre Freude aus

ausprägen 'take shape'

- a. sich in etw. ausdrücken, zeigen, offenbar werden
- b. ihr Erstaunen hat sich in ihrem Gesicht ausgeprägt

äußern 'express'

- a. in bestimmter Weise in Erscheinung treten
- b. die Krankheit äußert sich in, durch Schüttelfrost

aussprechen 'utter'

- a. (seltener) sich zeigen, zum Ausdruck kommen
- b. in ihren Gesichtern spricht sich Angst aus

bilden 'form'

- a. durch Wachstum, Entwicklung entstehen, hervorkommen
- b. Knospen, Kristalle b. sich; in der Partei haben sich verschiedene Gruppierungen gebildet

darbieten 'present'

- a. sich zeigen, sich darstellen; sichtbar, erkennbar werden
- b. eine herrliche Aussicht bot sich uns dar

entschleiern 'unveil'

- a. als etw. bisher Verborgenes sichtbar werden
- b. nur langsam entschleierte sich der ungeheure Betrug

erfüllen 'fulfill'

- a. Wirklichkeit werden; eintreffen
- b. mein Wunsch, seine Prophezeiung hat sich erfüllt

gestalten 'develop'

- a. sich in einer bestimmten Art entwickeln; werden
- b. der Aufstieg gestaltete sich schwieriger als gedacht

herausschälen 'crystallize' [1]

- a. allmählich deutlich, erkennbar werden
- b. langsam schälte sich das wahre Tatmotiv heraus

herausschälen 'crystallize' [2]

- a. sich im Verlauf von etw. deutlich als jmd., etw. erweisen
- b. dieses Problem schälte sich in der Diskussion als dringlichstes heraus

manifestieren 'manifest'

- a. sich als etw. Bestimmtes offenbaren, sich zu erkennen geben, sichtbar werden
- b. hierin manifestieren sich bestimmte Widersprüche

markieren 'mark'

- a. sich abzeichnen, hervortreten
- b. die Körperformen markierten sich in dem Kleid besonders stark

verwirklichen 'realize'

- a. realisieren
- b. ihre Träume, Hoffnungen haben sich nie verwirklicht

(31) 差異、区分 (2 例)

differenzieren 'diversify'

- a. (von etw. Einfachem, Ungegliedertem) sich zu einer komplizierten Struktur fortentwickeln, entfalten
- b. die Bereiche der Technik differenzieren sich immer stärker

unterscheiden 'differ'

- a. im Hinblick auf bestimmte Merkmale, Eigenschaften o. Ä. anders sein als eine andere Person od. Sache
- b. in diesem Punkt u. sich die beiden Parteien überhaupt nicht

(3m) 均衡 (2 例)

ausgleichen 'compensate' [1]

- a. (von Unterschiedlichem, Gegensätzlichem) sich aufheben
- b. die Unterschiede zwischen den beiden Gruppen glichen sich wieder aus; Einnahmen und Ausgaben gleichen sich aus

ausgleichen 'compensate' [2]

- a. (von Gegensätzen o. Ä.) sich mildern, nivellieren
- b. die Spannungen glichen sich allmählich wieder aus

ergänzen 'add'

- a. durch Schließen entstandener Lücken wieder vollständig werden
- b. der Vorstand ergänzt sich durch Zuwahl

(3n) 論理概念 (8 例)

beschränken 'restrict'

- a. sich erstrecken, gültig sein
- b. diese Regelung beschränkt sich auf die Rentnerinnen u. Rentner

bestätigen 'confirm'

- a. sich als zutreffend, richtig erweisen
- b. die Nachricht, der Verdacht, das Gerücht hat sich bestätigt

bestimmen 'define'

- a. von etw. entscheidend beeinflusst werden
- b. die Investitionen bestimmen sich nach der Konjunkturlage

erhärten 'confirm'

- a. durch etw. untermauert, bekräftigt werden
- b. meine These hat sich erhärtet

enträtseln 'solve'

- a. als etw. Rätselhaftes verstanden, durchschaut werden
- b. langsam beginnt sich das Geheimnis zu e.

herausstellen 'turn out'

- a. sich [als etw. Bestimmtes] erweisen
- b. in den Verhandlungen hat sich ihre Unschuld herausgestellt; ihre Angaben stellten sich als falsch heraus

klären 'clear'

- a. klar werden; sich herausstellen, wie etw., was bisher nicht klar, deutlich war, ist
- b. die strittigen Fragen haben sich geklärt

symbolisieren 'symbolize'

- a. sich symbolisch darstellen

(4a) 開閉 (3 例)

entfalten 'unfold'

- a. sich öffnen, sich auseinanderfalten
- b. die Blüte, der Fallschirm entfaltetete sich

öffnen 'open' [1]

- a. geöffnet werden
- b. das Fenster öffnete sich durch den Luftzug; ihre Lippen öffneten sich zu einem Lächel

öffnen 'open' [2]

- a. sich entfalten, sich auseinanderfalten
- b. die Blüten öffnen sich; der Fallschirm hat sich nicht geöffnet

schließen 'close'

- a. in einen geschlossenen Zustand gelangen
- b. die Tür schloss sich

(4b) 形状の変化 (33 例)

ballen 'ball'

- a. sich zusammenpressen, -schieben [sodass eine runde od. klumpige Form entsteht]
- b. der Schnee ballt sich zu Klumpen

biegen 'bend'

- a. gebogen werden, eine gebogene Form annehmen, sich krümmen
- b. die Bäume bogen sich im Wind

brechen 'refract'

- a. auf etw. auftreffen u. in eine andere Richtung abgelenkt od. zurückgetrieben werden
- b. Brandung bricht sich an den Felsen; der Schall bricht sich am Gewölbe

deformieren 'deform'

- a. in eine andere als die eigentliche Form geraten, verformt werden

einbiegen 'dent'

- a. in seinem mittleren Teil gebogen werden, sich durch Biegen krümmen
- b. das Brett hat sich eingebogen

falten 'wrinkle'

- a. aus sich heraus Falten bilden, sich in Falten legen
- b. die Haut faltet sich

kräuseln 'curl'

- a. eine leicht krause Form annehmen, zeigen
- b. sein Haar kräuselt sich leicht; die See kräuselt sich im Wind; der Rauch kräuselt sich über den Dächern

krausen 'wrinkle'

- a. sich furchen, sich in Falten legen
- b. seine Stirn krauste (runzelte) sich

kreuzen 'cross'

- a. überqueren, in seinem Verlauf schneiden
- b. die Linien kreuzen sich

kringeln 'curl'

- a. sich zu einem Kringel, zu Kringeln formen
- b. die Hobelspäne kringeln sich

locken 'curl'

- a. sich in Locken legen; in Locken fallen
- b. sein Haar lockte sich ein wenig im Nacken

ringeln 'twine'

- a. sich zu einem Ringel, zu Ringeln formen; die Form von Ringeln annehmen
- b. Locken ringeln sich um ihren Kopf

rollen 'roll'

- a. (von flach daliegenden Stücken aus Papier, Textilfaser o. Ä. sich von den Rändern u. Ecken her hochbiegen, einrollen; uneben werden
- b. das Bild hat sich gerollt

runden 'curve'

- a. rund werden
- b. die Backen runden sich

runzeln 'wrinkle'

- a. Runzeln bekommen
- b. die Haut runzelt sich

schlingen 'loop'

- a. sich um etw. herumschlingen, winden
- b. Efeu schlingt sich um den Baumstamm

stapeln 'accumulate'

- a. sich in großer Menge zu Stapeln aufhäufen
- b. in der Ecke stapelten sich die Akten

sträuben 'bristle'

- a. (von Fell, Gefieder o. Ä.) sich aufrichten
- b. das Fell, das Gefieder sträubt sich; der Katze sträubt sich das Fell; vor Angst sträubten sich ihr die Haare

türmen 'pile up'

- a. sich auftürmen
- b. auf dem Schreibtisch türmen sich die Akten [zu Bergen]

umbilden 'reshape'

- a. sich in seiner Form od. Zusammensetzung [ver]ändern
- b. die Laubblätter bilden sich teilweise zu Ranken um

umlegen 'go down'

- a. umknicken; niedergedrückt werden
- b. das Getreide hat sich umgelegt

verbiegen 'bend'

- a. durch Sichbiegen aus der Form geraten [u. dadurch unbrauchbar, unansehnlich werden]
- b. die Lenkstange hat sich bei dem Sturz verbogen

verdicken 'thicken'

- a. dick, dicker werden
- b. die Hornhaut verdickt sich

verfilzen 'felt'

- a. sich unentwirrbar ineinander verwickeln

verfützen 'tangle'

- a. in einen verfützten Zustand geraten
- b. ihre Haare haben sich beim Liegen verfützt

verflechten 'intertwine'

- a. sich eng verbinden
- b. Fantasie und Wirklichkeit verflochten sich immer mehr

verformen 'deform'

- a. in eine andere als die eigentliche Form geraten
- b. das Holz hat sich durch die Nässe verformt

verknotten 'knot'

- a. sich (unbeabsichtigt) zu einem Knoten schlingen
- b. die Schnürsenkel haben sich verknottet

verwickeln 'tangle'

- a. sich derart ineinanderschlingen, durcheinandergeraten, dass die Fäden, Schnüre o. Ä. nur mit Mühe zu entwirren sind
- b. die Wolle, die Schnur, die Kordel hat sich verwickelt

verwirren 'tangle'

- a. durch Ineinanderverschlingen o. Ä. in Unordnung geraten
- b. sein Haar, das Garn hatte sich verwirrt

verwischen 'blur'

- a. undeutlich, unklar werden; verschwimmen
- b. die Konturen verwischten sich; die sozialen Unterschiede haben sich verwischt

verziehen 'go out of square' [1]

- a. die Form, Fasson geringfügig ändern
- b. die Türen, Fensterrahmen haben sich verzogen; Kunststoffgehäuse können sich v.

verziehen 'distort' [2]

- a. die ursprüngliche Form verlieren; länger, weiter usw. werden
- b. der Pullover hat sich beim Waschen verzogen

wellen 'wave'

- a. [unerwünschte] wellenförmige Erhebungen bilden, bekommen, wellige Form annehmen
- b. das Papier, das Furnier, der Teppich wellt sich

(4c) 結合、集合 (9 例)

einigen 'unite'

- a. sich einig werden; zu einer Übereinstimmung, Einigung kommen

fügen 'insert'

- a. in etw. passend eingefügt sein; sich einfügen
- b. das Brett fügt sich genau in die entsprechende Lücke

mischen 'mix'

- a. sich mit etw. vermischen
- b. Wasser mischt sich nicht mit Öl; Ekel und Verzweiflung mischten sich

rekrutieren 'recruit'

- a. (in Bezug auf die Angehörigen, Mitglieder einer bestimmten Gruppe, Organisation o. Ä.) aus einem bestimmten Bereich herkommen, sich zusammensetzen, ergänzen
- b. das junge Ensemble rekrutiert sich zum großen Teil aus Laien

sammeln 'gather'

- a. zusammenfließen, -strömen; sich ansammeln
- b. Lichtstrahlen sammeln sich im Brennglas; in der Mulde sammelt sich das Regenwasser

scharen 'troop together'

- a. sich (in einer Schar) zusammenfinden; sich versammeln
- b. die Klasse scharte sich um den Lehrer

verketteten 'chain up'

- a. sich verbinden, fest zusammenfügen
- b. die Moleküle haben sich verkettet; dabei verketteten sich mehrere unglückliche Umstände

zusammenballen 'agglomerate'

- a. sich zu einer festen, einheitlichen Masse ballen
- b. dunkle Wolken ballten sich am Himmel zusammen

zusammenfügen 'assemble'

- a. sich zu einer Einheit, einem Ganzen verbinden
- b. die Bauteile fügen sich nahtlos zusammen

(4d) 分裂、分解、分散、溶解 (9 例)

abbauen 'decompose'

- a. in niedrige Bauelemente zerfallen (Chem. Biol.)
- b. der Stoff baut sich nur langsam ab

auflösen 'dissolve' [1]

a. sich zerteilen

b. der Zucker hat sich aufgelöst; die Wolke löste sich auf; das Traumbild löste sich auf

auflösen 'dissolve' [2]

a. nicht länger bestehen

b. die alten Ordnungen lösten sich auf; der Verein löste sich bald wieder auf; die Menschen- massen hatten sich aufgelöst (zerstreut, verteilt)

auflösen 'dissolve' [3]

a. sich aufklären

b. das Missverständnis wird sich a.

spalten 'split' [1]

a. sich teilen, [zer]trennen

b. ihre Haare, Fingernägel spalten sich; das Mauerwerk hat sich gespalten

spalten 'split' [2]

a. die Einheit verlieren, aufgeben; sich teilen, trennen

b. die Partei, seine Anhängerschaft hat sich gespalten

teilen 'split'

a. nach verschiedenen Richtungen auseinandergehen

b. hier teilen sich unsere Ansichten

verteilen 'scatter'

a. auseinandergehen u. sich an verschiedene Plätze begeben

b. die Polizei verteilte sich über den ganzen Platz

zerspalten 'split'

a. sich vollständig spalten

b. die Partei hatte sich in zwei Lager zerspalten

zerteilen 'dissipate'

a. auseinandergehen, sich auflösen

b. der Nebel zerteilte sich

zersetzen 'decompose'

a. in verschiedene Bestandteile zerfallen, sich auflösen

b. die pflanzlichen Abfälle zersetzen sich bei der Kompostierung

zerstreuen 'scatter'

a. auseinandergehen; sich verlaufen

b. die Menge hat sich [wieder] zerstreut

(4e) 分離 (6 例)

auflösen 'unwind'

- a. sich nicht in einer bestimmten Form halten; aufgehen
- b. die Schleife löst sich immer wieder auf

aushaken 'unhook'

- a. sich aus der Verhakung lösen
- b. der Verschluss hatte sich ausgehakt

aushängen 'unhook'

- a. sich aus der Haltevorrichtung lösen
- b. der Fensterladen, die Kette hat sich ausgehängt

entblättern 'defoliate'

- a. die Blätter abwerfen, verlieren

entwirren 'unravel'

- a. seine Unklarheit, Schwierigkeit verlieren u. sich auflösen lassen
- b. die Lage entwirrte sich

schälen 'peel off'

- a. (von der Haut) die oberste, abgestorbene Schicht in Fetzen, in kleinen Stücken abstoßen
- b. ihre Nase schält sich

(4f) 化学的变化 (2 例)

herauskristallisieren 'crystallize out'

- a. sich bei chemischen Prozessen in Form von Kristallen absondern
- b. diese Kristalle haben sich bei der Destillation der Lösung herauskristallisiert

verflüchtigen 'evaporate'

- a. (bes. Chemie) in gasförmigen Zustand übergehen
- b. Alkohol verflüchtigt sich leicht

(4g) 内容物、人口の増減 (6 例)

beleben 'populate'

- a. sich mit Leben, Lebewesen füllen; bevölkert werden
- b. die Straßen beleben sich

bevölkern 'populate'

- a. sich mit [vielen] Menschen füllen
- b. die fruchtbarsten Teile des Landes bevölkerten sich zuerst; das Stadion bevölkerte sich allmählich

entleeren 'empty'

- a. leer werden
- b. das Becken entleerte sich nur langsam

entvölkern 'depopulate'

- a. seine Bevölkerung verlieren, menschenleer werden

füllen 'fill'

- a. (von einem Raum, einem Gefäß o. Ä.) voll werden
- b. das Theater füllte sich bis auf den letzten Sitz; die Badewanne füllt sich langsam; ihre Augen füllten sich mit Träne

leeren 'empty'

- a. leer werden
- b. der Saal, das Haus leerte sich langsam (die Besucher verließen den Saal, das Haus)

(4h) 表情、筋肉の変化 (7例)

kontrahieren 'contract'

- a. (Biol., Med.) (von Muskeln, Muskelfasern) sich zusammenziehen
die Bauchmuskulatur kontrahiert sich

spannen 'tense'

- a. straff, fest werden
- b. seine Muskeln spannten sich; ihr Gesicht, ihre Züge spannten sich (sie bekam einen wachsamem, konzentrierten Gesichtsausdruck)

straffen 'tighten'

- a. straff werden
- b. die Leinen strafften sich; ihre Züge strafften sich wieder

verklären 'clear'

- a. einen beseligten, glücklichen Ausdruck erhalten
- b. sein Gesicht, sein Blick verklärte sich

verkrampfen 'cramp'

- a. sich wie im Krampf, krampfartig zusammenziehen
- b. die Muskeln verkrampten sich; seine Finger hatten sich verkrampt

verzerren 'distort'

- a. sich in entstellender Weise verziehen
- b. sein Gesicht verzerrte sich vor Wut zur grässlichen Fratze

verziehen 'distort'

- a. seine normale, übliche Form in bestimmter Weise verändern
- b. sein Gesicht verzog sich schmerzlich, zu einer Grimasse

(4i) スイッチの切り替え (3 例)

auslösen 'trigger'

- a. in Gang kommen
- b. die Alarmanlage löst sich automatisch aus

ausschalten 'turn off'

- a. durch einen Schalter in bestimmter Weise außer Betrieb gesetzt werden
- b. die Maschine schaltet sich von selbst, automatisch aus

einschalten 'turn on'

- a. durch eine automatische Schaltung in Betrieb gesetzt werden
- b. die Alarmanlage schaltet sich sofort ein

(4j) 雲霧 (4 例)

beziehen 'cloud'

- a. sich bewölken
- b. der Himmel hat sich [mit schwarzen Wolken] bezogen

umwölken 'cloud over'

- a. sich von allen Seiten bewölken
- b. der Himmel umwölkte sich; sein Blick umwölkte (verdüsterte) sich

umziehen 'cloud'

- a. sich bewölken
- b. der Himmel hat sich umzogen

verschleiern 'veil, fog'

- a. mit einem Schleier verhüllen
- b. der Himmel verschleierte (bedeckte) sich

(4k) 変身、変化 (3 例)

verändern 'change'

- a. anders werden, sich ändern
- b. seine Miene veränderte sich schlagartig

verwandeln 'change'

- a. zu jmd., etw. anderem werden
- b. Das kleine Mädchen hat sich inzwischen in eine junge Dame verwandelt; während der Regenzeit verwandeln sich die Bäche zu reißenden Strömen

wandeln 'change'

- a. sich [grundlegend] verändern; eine andere Form, Gestalt o. Ä. bekommen; in seinem Wesen, Verhalten o. Ä. anders werden
- b. dein Leben hat sich gewandelt; die Verhältnisse haben sich seitdem sehr gewandelt; die Zeit, das Bewusstsein der Menschen, die Mode hat sich gewandelt; Meinungen, Anschauungen, Ideale wandeln sich im Laufe der Zeit; die Bedeutung des Wortes hat sich im Laufe der Sprachgeschichte gewandelt

(41) 不調 (2 例)

verstimmen 'go out of tune'

- a. aufhören, richtig gestimmt zu sein
- b. das Klavier hat sich verstimmt

verwirren 'tangle'

- a. in einen Zustand der Unordnung, Verwirrung o. Ä. geraten
- b. seine Sinne hatten sich verwirrt

(5) 位置变化 (14 例)

bewegen 'move'

- a. seine Lage verändern; nicht in einer bestimmten Position, an einer bestimmten Stelle o. Ä. Verharren
- b. die Blätter, die Fahnen bewegen sich im Wind

drehen 'spin'

- a. sich im Kreis [teilweise] um seine Achse bewegen
- b. die Räder, Zeiger, Walzen drehen sich; das Karussell dreht sich im Kreise

heben 'lift'

- a. in die Höhe gehen, nach oben bewegt werden; hochgehen
- b. die Schranke hebt sich langsam; der Vorhang hob sich immer wieder unter dem tosenden Beifall

neigen 'incline' [1]

- a. sich aus der senkrechten od. waagerechten in eine schräge Lage bringen; sich schräg legen

- b. die Waagschale neigt sich (sinkt) [nach unten]

neigen 'incline' [2]

- a. sich aus der senkrechten od. waagerechten Lage [leicht] nach unten beugen, biegen, senken

- b. die Zweige neigten sich unter der Last

rühren 'stir'

- a. ein Glied des Körpers, sich ein wenig bewegen
- b. kein Lüftchen rührte sich (es war windstill)

regen 'stir'

- a. sich leicht, ein wenig bewegen; sich rühren
- b. nichts, kein Lüftchen, kein Blatt regte sich

senken 'decline' [1]

- a. abwärts-, nach unten bewegt werden
- b. die Schranke senkt sich; der Vorhang senkte sich während des rauschenden Finales; das Boot hob und senkte sich in der Dünung

senken 'decline' [2]

- a. abwärts-, nach unten sinken; herabsinken
- b. die Äste senkten sich unter der Last des Schnees

senken 'decline' [3]

- a. allmählich niedriger werden, in die Tiefe gehen, absinken
- b. der Wasserspiegel hat sich [kaum merklich, deutlich] gesenkt

setzen 'settle'

- a. (in etw.) nach unten sinken
- b. die Lösung setzt (klärt) sich; der Kaffee muss sich erst s. (der Kaffeegrund muss sich nach dem Brühen erst am Boden sammeln); das Erdreich setzt (senkt) sich

verlagern 'relocate, move'

- a. sich von einer Stelle an eine andere bewegen
- b. das Hoch verlagert sich nach Norden

verschieben 'shift'

- a. an eine andere Stelle, einen anderen Standort, in eine andere Lage geschoben werden, geraten
- b. der Teppich verschiebt sich immer wieder; ihr Kopftuch hatte sich verschoben (war verrutscht)

wälzen 'roll' [1]

- a. sich [auf dem Boden o. Ä. liegend] mit einer Drehung des Körpers, mit einer Abfolge von Drehungen um die eigene Achse fortbewegen od. in eine andere Lage bringen
- b. eine Lawine wälzt sich zu Tal; eine große Menschenmenge wälzte sich (schob sich langsam) durch die Straßen

wälzen 'roll' [2]

- a. sich (auf dem Boden o. Ä. liegend) hin u. her drehen, hin u. her werfen

zurückbewegen 'move back'

- a. sich wieder an den Ausgangspunkt, in Richtung auf die Ausgangslage bewegen
- b. die Tachonadel bewegt sich [auf null] zurück

zurückdrehen 'roll back'

- a. sich rückwärtsdrehen
- b. die Räder drehen sich zurück

zurückschieben 'slide back'

- a. sich nach hinten schieben
- b. der Sitz hat sich ein ganzes Stück zurückgeschoben